

# 磐越自動車道関係発掘調査報告書

ほそ  
細  
いけ  
池  
てら  
寺  
みち  
道  
うえ  
上  
れき  
遺跡

1994

新潟県教育委員会  
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

太平洋側のいわき市と日本海側の新潟市を結ぶ磐越自動車道いわき～新潟線は、現在、完成に向けて着々と工事が進められております。全線が完成すると常磐・東北・北陸自動車道との連結が可能となり、地域社会の発展に大いに貢献するものと思われます。

新潟県教育委員会は、昭和59年以来磐越自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の調査を実施してまいりました。本書はこの道路の建設に伴って実施した「細池・寺道上遺路」の調査結果をまとめた報告書であります。

細池・寺道上遺路は奈良・平安時代、中世の遺跡で、発掘調査の結果、県内でも数少ない中世の水田跡が発見され、阿賀野川流域の開発史や新潟県の農業史を考える上で重要な資料となるものと思われます。

この調査結果を新潟県の古代・中世史研究の資料として、広く活用いただければ幸いです。

最後に、本調査に多大な御協力と御援助を賜りました新津市教育委員会をはじめ日本道路公団新潟建設局、日本道路公団新潟工事事務所には厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

新潟県教育委員会

教育長 本間 栄三郎

## 例　　言

1. 本報告書は新潟県新津市大字飯柳字細池ほかに所在する細池遺跡、同市大字東金沢字寺道上ほかに所在する寺道上遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は磐越自動車道の建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。
2. 発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となり、平成3年度・平成4年度に実施した。なお、平成4年度の発掘調査については、新潟県教育委員会が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、調査事業団と略す）に調査を委託した。
3. 整理および報告書作成にかかる作業は平成4年度に実施し、調査事業団職員および調査事業団作業員がこれにあたった。
4. 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて新潟県教育委員会が保管・管理している。遺物の註記号は細池遺跡を「ホソ」、寺道上遺跡を「テラミチ」として出土地点・層位等を併記した。
5. 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。作成した図面のうち既成の地図を使用したものについては、それぞれにその出典を記した。
6. 各遺跡における遺物番号は通し番号とし、挿図と写真図版の番号は一致している。
7. 岩石および土器に含まれる鉱物等については、新潟県立教育センター地学研究室の河内一男氏にご教示を賜った。
8. 引用文献は著者および発行年を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。ただし図章については、( )で示して文末にまとめた。
9. 本書の記述は小池義人（調査事業団専門員）、須藤高志（同専門員）、荒川隆史（同専門員）、塙路真澄（同嘱託）、木村康裕（同専門員）がこれにあたった。分担は第II章4が木村、第III章4が小池・須藤・荒川、第IV章が荒川、第V章が須藤・小池、第VI章・第VII章4が塙路、第IX章2が荒川、それ以外については小池である。このほか、花粉等の自然遺物の分析については、バリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。また、山本幸俊（現新潟県立文書館）、高橋知之（調査事業団専門員）の協力を得た。本書の編集は小池義人（調査事業団専門員）が担当した。
10. 発掘調査から本書の作成にいたるまで、下記の方々から多大なご教示・助言を賜った。厚く御礼申し上げる。（教称略、五十音順）

坂井秀弥・五泉市教育委員会・水原博物館・高橋学・中山誠二・新津土地改良区・羽茂町  
町史編纂委員会・真柄慎平・渡邊朋和

## 目 次

第 I 章 序 説	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制と整理作業	2
A. 調査体制	2
B. 整理作業および報告	3
第 II 章 遺跡の環境	4
1. 位置と地理的環境	4
2. 細池遺跡・寺道上遺跡周辺の旧景観	6
3. 周辺の遺跡	8
4. 歴史的環境	8
第 III 章 細池遺跡	12
1. 第一次調査	12
2. 第二次調査	12
A. 調査の方法	12
B. 調査の経過	14
3. 層序	15
4. 遺構各説	16
A. 奈良・平安時代	16
B. 中世	20
C. 近世以降	30
第 IV 章 細池遺跡の遺物	32
1. 奈良・平安時代の土器	32

a ) SK704出土土器	34
b ) SX705出土土器	35
c ) SK707出土土器	35
d ) SX808出土土器	35
e ) その他の遺構・包含層の出土土器	35
2. 中世・近世の陶器・磁器	38
3. 土 製 品	38
4. 石 製 品	38
5. 金属製品	39
6. 銭 貨	39
7. そ の 他	39
 第 V 章 寺道上遺跡A地点	40
1. 第一次調査	40
2. 第二次調査	40
A. 調査の方法	40
B. 調査の経過	41
3. 層 序	42
4. 遺構各説	44
 第 VI 章 寺道上遺跡A地点の遺物	51
1. 奈良・平安時代の土器	51
a ) SX55出土土器	51
b ) その他の遺構・包含層出土遺物	52
2. 中世陶器	55
3. 土 製 品	55
4. 石 製 品	55
5. 金属製品	55

第 VII 章 寺道上遺跡B地点 .....	56
1. 第二次調査.....	56
A. 調査の方法.....	56
B. 調査の経過.....	56
2. 層 序.....	57
3. 遺 構.....	58
4. 遺 物.....	58
A. 奈良・平安時代の土器.....	59
B. 中世陶器・磁器.....	60
C. 土 製 品.....	60
D. 石 製 品.....	60
第 VIII 章 自然科学分析.....	62
第 IX 章 ま と め .....	84
1. 中世の凹地遺構と溝について.....	84
2. 出土遺物について.....	89
附 章 新津市東部阿賀野川左岸の旧景観について.....	91
要 約 .....	101
引用・参考文献 .....	102

## 挿 図 目 次

第1図 新津丘陵周辺の地形.....	5
第2図 周辺の旧地割.....	7
第3図 位置と周辺の遺跡.....	9
第4図 細池遺跡第一次調査位置図.....	12
第5図 細池遺跡グリッド設定図.....	13

第6図	細池遺跡土層柱状図	15
第7図	H区・G区の奈良・平安時代の遺構	17
第8図	SB715平面図	19
第9図	遺物の器種分類	33
第10図	寺道上遺跡第一次調査位置図	40
第11図	寺道上遺跡A地点グリッド設定図	41
第12図	寺道上遺跡A地点調査風景	42
第13図	寺道上遺跡A地点土層柱状図	43
第14図	寺道上遺跡B地点グリッド設定図	56
第15図	寺道上遺跡B地点層序	57
第16図	1地点～3地点の土層断面図および試料採取位置	63
第17図	4地点・5地点・7地点の土層断面図および試料採取位置	64
第18図	9地点～11地点の土層断面図および試料採取位置	65
第19図	各地点の主要珪藻化石群集	73
第20図	各地点の花粉化石群集	75
第21図	各地点の植物珪酸体組成	78
第22図	新津市東部阿賀野川左岸の地形と水系	92
第23図	「新津町外ニヶ村開田耕地整理組合現景図」部分位置図	94
第24図	東金沢（1）	95
第25図	東金沢（2）	96
第26図	古田	97
第27図	鮎川	98
第28図	満願寺	99
第29図	七日町	100

## 表 目 次

第1表	細池遺跡調査の経過	14
第2表	分析試料の一覧	65

第3表 硅藻化石の生態性	67
第4表 硅藻分析結果	70
第5表 花粉分析結果	74
第6表 植物珪酸体分析結果	77
第7表 細胞遺跡凹地遺構A類一覧	85
第8表 細胞遺跡凹地遺構B類・C類一覧	86
第9表 寺道上遺跡凹地遺構A類一覧	97
別表1 細胞遺跡出土土器観察表	105
別表2 寺道上遺跡A地点出土土器観察表	109
別表3 寺道上遺跡B地点出土土器観察表	114

## 図版目次

### 図面

- 図版1 周辺の旧地形図
- 図版2 細胞遺跡全体図(1) J区・C区・B区
- 図版3 細胞遺跡全体図(2) H区・G区・I区・A区
- 図版4 細胞遺跡全体図(3) E区・F区・D区
- 図版5 寺道上遺跡A地点全体図
- 図版6 細胞遺跡・寺道上遺跡調査範囲図
- 図版7 細胞遺跡遺構個別実測図1 SX004
- 図版8 細胞遺跡遺構実測図1
- 図版9 細胞遺跡遺構個別実測図2 SX002 SX001 SX006 SX005 SD009 ·  
SD010
- 図版10 細胞遺跡遺構実測図2
- 図版11 細胞遺跡遺構個別実測図3 SX003 SX304b
- 図版12 細胞遺跡遺構実測図3
- 図版13 細胞遺跡遺構個別実測図4 SX307
- 図版14 細胞遺跡遺構実測図4

- 図版15 細胞遺跡遺構個別実測図5 SX304a SX305 SX306
- 図版16 細胞遺跡遺構実測図5
- 図版17 細胞遺跡遺構個別実測図6 SK808 SD805・SD802 SD804 SD801
- 図版18 細胞遺跡遺構実測図6
- 図版19 細胞遺跡遺構個別実測図7 SK704 SK707 SK708 SK714 SD710  
SK709 SD701・SD713 SX706 SX705
- 図版20 細胞遺跡遺構実測図7
- 図版21 細胞遺跡遺構個別実測図8 SD717・SD716 SX911 SX910 SX917・  
SD905 SD908
- 図版22 細胞遺跡遺構実測図8
- 図版23 細胞遺跡遺構個別実測図9 SX902 SX903 SX912 SX913
- 図版24 細胞遺跡遺構実測図9
- 図版25 細胞遺跡遺構個別実測図10 SD104 SX103 SX107 SX102 SX101  
SD105
- 図版26 細胞遺跡遺構実測図10
- 図版27 細胞遺跡遺構個別実測図11 SD501 SX502 SX504・SD503 SX511  
SX512 SD506・SX505 SX508
- 図版28 細胞遺跡遺構実測図11
- 図版29 細胞遺跡遺構個別実測図12 SD604 SD607・SD608・SD609 SX617・  
SX616 SX615 SX614
- 図版30 細胞遺跡遺構実測図12
- 図版31 細胞遺跡遺構個別実測図13 SD602・SD601 SX622
- 図版32 細胞遺跡遺構実測図13
- 図版33 細胞遺跡遺構個別実測図14 SD403・SD402b・SD402 SD405・SD404
- 図版34 細胞遺跡遺構実測図14
- 図版35 寺道上遺跡A地点遺構個別実測図1 SD52 SD51 SD44 SX58  
SD40・SX46 SX43
- 図版36 寺道上遺跡A地点遺構実測図1

- 図版37 寺道点遺跡A地点遺構個別実測図2 SD56・SD38 SD35・SD35b  
SD52・SX42 SD40・SD44
- 図版38 寺道遺跡A地点遺構実測図2
- 図版39 寺道上遺跡A地点遺構個別実測図3 SX53 SX3 SX4
- 図版40 寺道上遺跡A地点遺構実測図3
- 図版41 寺道上遺跡A地点遺構個別実測図4 SD34・SX54・SD35
- 図版42 寺道上遺跡A地点遺構実測図4
- 図版43 寺道上遺跡A地点遺構個別実測図5 SX8・SX8b SD10・SD10b
- 図版44 寺道上遺跡A地点遺構実測図5
- 図版45 寺道上遺跡A地点遺構個別実測図6 SX13・SX13b SX15b・SX15
- 図版46 寺道上遺跡A地点遺構実測図6
- 図版47 寺道上遺跡A地点遺構個別実測図7 SX16・SD19 SD20・SX17・SD26・  
SD21 SX18
- 図版48 寺道上遺跡A地点遺構実測図7
- 図版49 寺道上遺跡B地点遺構個別実測図1 SK1 SX2 SK5
- 図版50 寺道上遺跡B地点遺構実測図1
- 図版51 細池遺跡出土遺物実測図1
- 図版52 細池遺跡出土遺物実測図2
- 図版53 細池遺跡出土遺物実測図3
- 図版54 細池遺跡出土遺物実測図4
- 図版55 細池遺跡出土遺物実測図5
- 図版56 細池遺跡出土遺物実測図6
- 図版57 細池遺跡出土遺物実測図7
- 図版58 寺道上遺跡A地点出土遺物実測図1
- 図版59 寺道上遺跡A地点出土遺物実測図2
- 図版60 寺道上遺跡A地点出土遺物実測図3
- 図版61 寺道上遺跡A地点出土遺物実測図4
- 図版62 寺道上遺跡B地点出土遺物実測図1
- 図版63 寺道上遺跡B地点出土遺物実測図2

## 写 真

図版64 細池遺跡東方の景観

図版65 細池遺跡・寺道上遺跡遠景 細池遺跡I区全景 細池遺跡J区全景

図版66 細池遺跡・寺道上遺跡周辺の航空写真

### 細池遺跡

図版67 J区 SX004完掘 SX003完掘 SX002完掘

図版68 J区 SX006完掘 SX005完掘 SX001完掘

図版69 J区 1. SX307北東隅 2. SD012 3. SX006土層断面

4. SX005土層断面 5. SD016 6. SX001土層断面

7. SD009・SD010土層断面 8. J区作業風景

図版70 C区 C区全景 SX306・SX305完掘 SX304a・SX304b完掘

図版71 C区 SX304a完掘 31~33・D~E付近 SX307完掘

図版72 H区 H区全景 H区全景 SK808遺物出土状況

図版73 H区 1. SK808遺物出土状況 2. SK808遺構確認状況

3. SK808土層断面 4. 旧流路土層断面 5. SK809遺物出土状況

6. SD804土層断面 7. SD805・SD802土層断面 8. SD801土層

断面

図版74 G区 G区全景 B~C・19~22付近 SK708完掘

図版75 G区 SB715完掘 SX706土層断面 SX705

図版76 G区 1. SK708完掘 2. SK708土層断面 3. SK704完掘

4. SK704土層断面 5. SK707完掘 6. SK707土層断面

7. SK709完掘 8. SK709土層断面

図版77 G区 1. SK714土層断面 2. SD713完掘 3. SD701・SD713土層断面

4. SD711完掘 5. SD710完掘 6. SD710土層断面 7. SD712

完掘 8. SD717・SD716完掘

図版78 I区 I区全景 SX911完掘 SX911土層断面

図版79 I区 SX902完掘 SX902土層断面 SX902土層断面

- 図版80 I区 SX903完掘 SX903土層断面 SX903土層断面
- 図版81 I区 SX912完掘 SX912土層断面 SX913完掘
- 図版82 I区 SX913土層断面 SX913土層断面 SD907完掘
- 図版83 I区 SD905・SD906完掘 C～E・15～18付近 SX902錢貨出土状況
- 図版84 A区 A区全景 SD105土層断面 SX103土層断面
- 図版85 A区 SX103南端・SD104 SX107土層断面 SX102完掘
- 図版86 A区 SX102南端 SX101完掘 SX101土層断面
- 図版87 E区 E区全景 D～E・9～10付近 B～D・9～10付近
- 図版88 E区 土層 SD501土層断面 SX502土層断面
- 図版89 E区 SX502土層断面 SX504土層断面 SX505完掘
- 図版90 F区 F区全景 D～E・5～8付近 D～E・5～8付近
- 図版91 F区 7E付近 SX616・SX617完掘 SX617・SX616土層断面
- 図版92 F区 SX615完掘 C～D・8付近 SX622完掘
- 図版93 D区 D区全景 D区全景 土層

#### 寺道上遺跡A地点

- 図版94 南区全景 北区全景 SD40完掘
- 図版95 平成4年度調査区域全景 SX58完掘 SX43完掘
- 図版96 SX53完掘 SD40土層断面 SD35・SD35b土層断面
- 図版97 SX3・SX6完掘 SX4完掘 SX8・SX8b完掘
- 図版98 SD5完掘 SX13・SX13b完掘 SX15・SX15b完掘
- 図版99 SX16完掘 SX17完掘 SX18完掘

#### 寺道上遺跡B地点

- 図版100 遺跡全景 土層 SK1遺物出土状況
- 図版101 1. SK1完掘 2. 遺物出土状況 3. SX2完掘 4. SX2土層断面  
5. SK5・SK4・SK3完掘 6. SK3完掘 7. SK5完掘 8. SK5  
土層断面
- 図版102～108 細泡遺跡出土遺物
- 図版109～112 寺道上遺跡A地点出土遺物
- 図版113・114 寺道上遺跡B地点出土遺物

圖版115 珊藻化石

圖版116 花粉化石

圖版117 植物硅酸體（1）

圖版118 植物硅酸體（2）

## 第Ⅰ章 序 説

## 1. 調査に至る経緯

磐越自動車道は福島県いわき市を起点として常磐自動車道から分岐し、郡山市で東北縦貫自動車道と連結、さらに会津若松市を経て新潟市で北陸自動車道と結ばれる総延長212kmの高速道路である。細池遺跡・寺道上遺跡にかかる区間（新潟市～東蒲原郡津川町）は昭和60年2月13日に施工命令が出され、法線内の遺跡分布調査・試掘調査等に関する協議が本格化したものである。

磐越自動車道の建設に伴う新潟市内の実質的な発掘調査は平成2年度に始まり、平成4年度に終了した。新潟市内の遺跡は、北から上浦遺跡（平成2・3・4年度調査）・江内遺跡（平成4年度調査）・沖ノ羽遺跡（平成3・4年度調査）・寺道上遺跡・細池遺跡（平成3・4年度調査）の計5遺跡であり、いずれも阿賀野川左岸の沖積地に位置している。これらの遺跡で実施した発掘調査面積は総計99,000m<sup>2</sup>に及ぶ。

新潟県教育委員会（以下、県教委）は日本道路公団新潟建設局（以下、公団）の依頼を受け、昭和62年4月に新潟市～北蒲原郡安田町間の埋蔵文化財分布調査を実施した。これにより、この区間に金屋集落付近（細池遺跡）・寺道上遺跡ほか計17か所の埋蔵文化財包蔵地が存在することを確認し、同年5月この結果を公団へ通知している。さらに、県教委は平成2年10月に第一次調査を行い、金屋集落付近・寺道上遺跡は平安時代の集落跡および耕作地の性格が認められるとした。この結果により金屋集落付近を細池遺跡と改称して、翌年3月文化庁長官あてに遺跡発見の通知をしている。なお、寺道上遺跡は2地点に分散することから、南方をA地点、北方をB地点と呼称することとした。

一方、県教委は細池遺跡の34,800m<sup>2</sup>、寺道上遺跡の22,400m<sup>2</sup>について本調査が必要である旨公団に伝達し、調査工程の協議を重ねた。磐越自動車道の工事工程や県教委の体制等を検討した結果、2遺跡を合一した調査体制をとり平成3年度および4年度に調査を実施することとした。2遺跡とも工事工程との関連から遺跡全体を連続して調査することはできず、遺跡を道路・用排水路などで地区割りして、平成3年度は先行盛土工事部分の調査を優先させる方法をとった。ただし、寺道上遺跡B地点については、平成4年度のみの調査とした。なお、遺跡を横断している農道部分などの調査については、種刈り後に調査を行うこととして耕作者の利便に考慮した。

## 2. 調査体制と整理作業

発掘調査は新潟県教育委員会が主体となり、下記の体制で実施した。細池・寺道上の2遺跡が位置的に近接し、ほぼ同一時期の遺跡であることや協議経過が重複することなどから、同一の体制で調査・整理作業を行った。ただし、調査は職員を2班に編成して実施した。なお、遺物や遺構の遺存が不良と認められる箇所については、調査の中止または調査面積の削減をしている。

### A. 調査体制

#### [第一次調査]

調査期間 平成2年10月1日～10月18日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）

#### [第二次調査 平成3年度]

調査期間 平成3年4月15日～12月7日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）

管 理 総 括 大嶋 圭己（新潟県教育庁文化行政課長）

管 理 吉倉 長幸（〃 課長補佐）

庶 務 藤田 守彦（〃 主事）

調 査 調査指導 横山 勝栄（〃 埋蔵文化財第一係長）

本間 信昭（〃 第二係長）

調査担当 小池 義人（〃 文化財専門員）

調査職員 山本 幸俊（〃 文化財主事）

須藤 高志（〃 文化財専門員）

高橋 知之（〃 〃 ）

佐藤 恒（〃 頼託）

高橋 三郎（〃 〃 ）平成3・10退職

なお、調査分担については、細池遺跡のA区・D区・E区・F区・G区・H区が小池・高橋知之・高橋三郎であり、細池遺跡B区・C区、寺道上遺跡は山本・須藤・佐藤である。

#### [第二次調査 平成4年度]

調査期間 平成4年4月8日～8月7日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管 理 藍原 直木（専務理事・事務局長）

渡辺 耕吉（総務課長）

茂田井信彦（調査課長）

庶 務 藤田 守彦（総務課主事）

調査指導 戸根与八郎（調査課埋蔵文化財第一係長）

調査担当 小池 義人（〃 専門員）

調査職員 須藤 高志（〃 〃）

横田 浩（〃 〃）

荒川 隆史（〃 〃）

塩路 真澄（〃 痴託）

なお、調査分担については、細池遺跡I区が須藤・横田・荒川であり、細池遺跡J区は小池・須藤・横田・荒川・塩路である。また、寺道上遺跡は小池・塩路である。

#### B. 整理作業および報告

出土遺物の水洗作業は、調査現場で発掘調査と並行して実施した。その後の本格的な整理作業は、平成4年8月から（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団曾和分室において、平成5年3月まで実施した。遺物の復元、実測、写真撮影、図版作成等、主要な作業は小池を中心とした調査事業団職員、調査事業団作業員がこれにあたったが、この間に県教育庁文化行政課職員および調査事業団職員から教示や協力を得た。

期間 平成4年8月17日～平成5年3月31日

主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

整理・報告 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

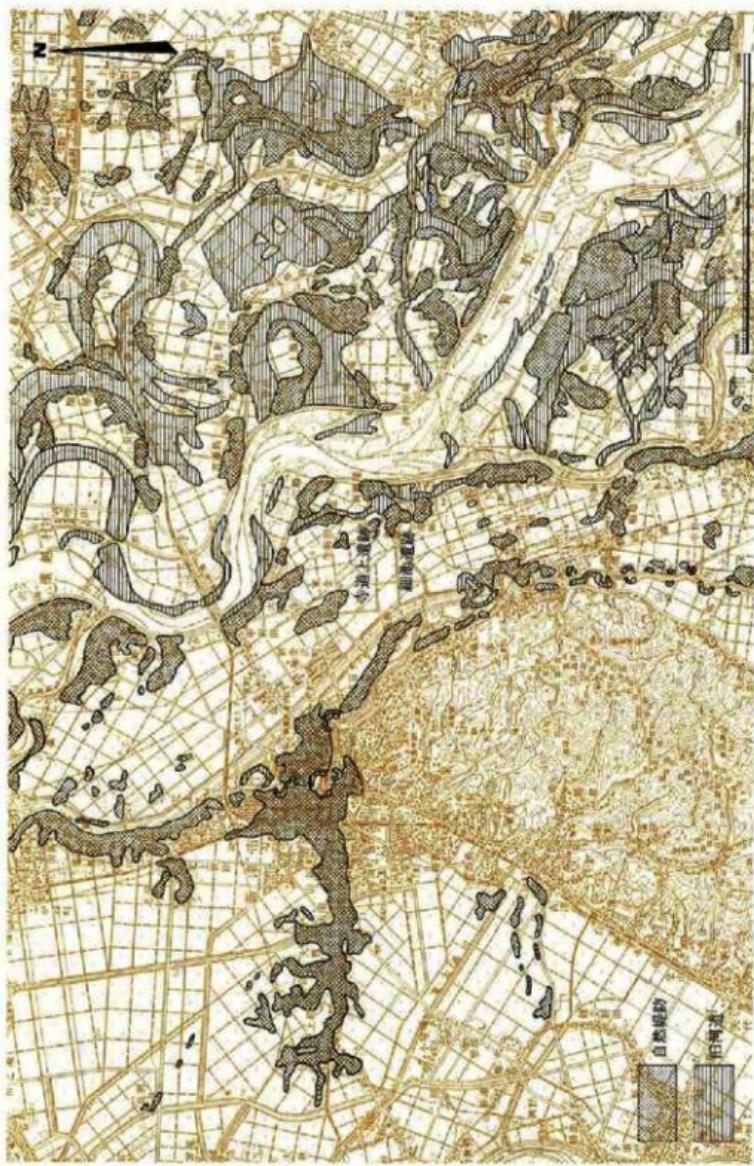
## 第II章 遺跡の環境

### 1. 位置と地理的環境（第1図）

新津市周辺の地形は、阿賀野川・早出川流域、新津丘陵および護摩堂山地、信濃川・中ノロ川流域の3地域に区分される。細池遺跡と寺道上遺跡は、阿賀野川左岸に位置し、標高は7.7~8.9mである。細池遺跡中心部は阿賀野川と早出川の合流地点から西方に約1.2kmを測る。阿賀野川左岸は緩やかな扇状地を示し、北に向かって徐々に標高を下げており、寺道上遺跡から約3.5km北方の新津市沖ノ羽遺跡では標高4.0~5.8mとなる。一方、阿賀野川右岸および阿賀野川と早出川間は旧流路と自然堤防が対照的な地形をなしている。このため、1966・67年の水害（いわゆる「羽越災害」）では僅かな地形差を反映して、旧流路が長期間にわたって湛水している〔鈴木1975〕。阿賀野川は、享保年間には新潟港で信濃川に合流し、さらに加治川が阿賀野川に合流していたため、各河川の流域は度々水害に見舞われた。しかし、新発田藩が享保15年に松ヶ崎（新潟市松浜）掘削工事に着手して、阿賀野川は日本海に直接注ぐことになった。このことに加え、自然堤防上に位置する集落に新田名を付した地名が多いことから、現地形が形成されたのは比較的新しい時期と考えられている。

新津丘陵北端から小阿賀野川間には、起伏の極めて小さい微高地が断続的に存在しており、この微高地上に、広い範囲をもつ遺跡の存在することが明らかになってきた〔渡邊1991〕。これらはかつて阿賀野川が形成した自然堤防であり、阿賀野川が西から東へ流路を変化させてきた結果と推測されている〔鈴木1975〕。新津丘陵東縁を流れる能代川も、川幅が小さいため洪水を繰り返してきたが、太平洋戦争後に河川改修工事がなされ、その際に蛇行していた流路が取り残されている。

新津丘陵は、金比羅山北部を境に護摩堂山地と区分されるが、新津丘陵南西の金津地区を金津丘陵と称することがある。新津丘陵は標高100m以下であり、新津の近代産業を代表する石油鉱場は、新津丘陵東部に集中している。一方、護摩堂山地は標高200m前後を測り、前者が泥岩を主体とするのに対し、護摩堂山地は砂岩・頁岩・火成岩を主体としている〔鈴木1975〕。信濃川・中ノロ川流域の沖積地は、そのほとんどが標高5m以下であり、白根市周辺では軟弱地盤を形成する堆積物が100~160mにも達する〔新潟県1986〕。この地域は、近世初期まで泡沼が多数分布していたが、河川自体の埋積作用に加えて、近世以降の新田開発・治水事業によって漸次消滅していく。例えば、小須戸町矢代田西方に存在した鎌倉潟は17世紀後半に、白根市街東方に存在した白蓮潟は18世紀後半に干拓された。また、白根市庄瀬の馬場屋敷遺跡では13世紀末から14世紀初頭の建物跡が水田面下1.5mにて埋もれていた〔川上1983〕。白根郷と称され



第1図 新津丘陵周辺の地形

「国土地理院発行地図」  
1:50,000 平成元年

るこの地域は、土地改良事業によって全国有数の穀倉地帯に変貌している。

## 2. 細池遺跡・寺道上遺跡周辺の旧景観（第2図、第22図、図版1）

新津丘陵東側の沖積地は、現況は一面の水田地帯であるが、この景観は、大正末年～昭和20年代に行われた耕地整理事業によって形成されたものである。この耕地整理以前の状況については、以下の資料によって詳細に知ることができる。

- ①「新津町外二ヶ村開田耕地整理組合現景図」大正11年頃作成（新津土地改良区所蔵）
- ②「新津町東部耕地整理組合現景図」（新津土地改良区所蔵）昭和15年頃作成
- ③「新開村大字金屋図」明治25年6月調整（新津市金屋、小島善夫氏所蔵）
- ④大日本帝国陸地測量部「二万五千分一地形図村松近傍四号（共十二面）新潟十四号新津ノ一」明治44年測図

②図は図名がないため、ここでは①図にならって上記の図名を使用しておく。①・②は製作時期が明記されていないが、耕地整理事業の経緯や関係する他の図面から上記の時期に作成されたものと考えられる。①図・②図の縮尺は1/1,800、③図の縮尺は1/600である。①図と③図が重複する箇所は図の表記がほぼ一致しているため、①図および②図は③図等の更正図を編集したものと思われる。なお、①図は新津市における新津丘陵東方の沖積地を広域にわたって表記している大図面である。

耕地整理事業以前は、「第2図・周辺の旧地割」で示すように周辺は畑地が大部分を占めており、畑地では主に桑を栽培していたと聞いている。一方、水田の状況は一様ではなく、遺跡の西方では一定の方向性をもって編み目状に広がっている。これらの水田は、畑地一枚一枚を取り囲むように作られており、新津では「堀田」と呼称してきたものである。この景観は、畑地を主に考えれば「島畑」と言い換えることができるものである。上記の図ではこのほかに、畑地が大部分を占める地域や方形区画の水田が連続する地域などが複雑に展開する状況が表現されている。

「堀田」あるいは「掘上げ田」は排水不良な低湿地に見られるもので、水田の一部を掘りその土で隣接する水田を高くする開発の手法であるが〔藤岡1985〕、新津の「堀田」は微高地を水田化するためのものであり、通常の「堀田」とは逆の効果を期待する手法である。

これら土地利用の相違は、用排水の整備状況に左右される面があるものの、基本的にその地域における微地形を反映するものと考えている。すなわち、低地は方形区画の水田に、微高地は畑地に、微高地周縁は「堀田」と畑地が混在する、という形でそれぞれ土地利用がなされているようである。すなわち、細池遺跡・寺道上遺跡は微高地上、または微高地の縁辺に位置しているものと理解される。このことは①図・②図における等高線に表れている（第22図）。

現在、阿賀野川・新津丘陵間の用水は能代川、早出川、阿賀野川から揚水しているが、耕地



第2図 周辺の旧地割 新津町外二ヶ村開田新地整理組合現形図  
同組合作成 1:1,800 大正十一年

整理以前は五泉・村松方面からびる下条江を除いて能代川の水流に頼っていた。能代川からの揚水は、宝永5年に大江および大野江が、宝永6年には御判田江用水が開削され、それぞれ能代川から分水されている[中瀬原郡役所1915~1918]。大江は浦江に分水され、飯柳から東金沢を経て北西方向に向かい、新津の水田地帯を貢流する。また、御判田江用水は飯柳・柄目木東方の水田を灌漑している(第22図)。この地域の開発は、これらの用水が掘削されて後、本格化したものであろう。なお、これらは形を変えて新津の幹線水路として機能している。耕地整理や河川改修が進んで景観が大きく変貌した現在、文頭にあげた資料には小河川や用水路、農道などが詳細に記録されており、新津の旧景観を知る上で貴重な資料である。

### 3. 周辺の遺跡（第3図）

丘陵と沖積地に大きく2分される新津市域は、遺跡の分布状況においても両地形の間で明瞭な相違が認められる。

縄文時代の遺跡は、丘陵や丘陵周縁の台地に比較的密に分布している。沖積地上の結遺跡で縄文土器1片の出土があるが、「他所からの流入と考えられる」と報告されており[川上1989]、沖積地においては縄文時代の生活址は確認されていない。また、弥生時代は八幡山遺跡で環濠集落が検出されているが遺跡数は少なく、沖積地上に遺跡は見つかっていない。

古墳時代中期になると、沖ノ羽遺跡のように沖積地上の微高地に立地する遺跡が現れ[新潟県埋蔵文化財調査事業団1993]、奈良・平安時代には生活址が微高地上に拡大してゆく。近年、川口集落西方の大規模な開発や磐越自動車道の建設に伴う調査により、沖積地にも広大な範囲をもつ奈良・平安時代の遺跡の存在が明らかになってきている[北村1991、渡邊1991]。一方、生産遺跡は丘陵上にあり、丘陵西部では金津地区に製鉄遺跡群が、丘陵東側では須恵器窯跡群が分布する。製鉄遺跡群は7遺跡9地点にわたり、8世紀~9世紀にかけての精練炉や多数の木炭窯が検出されている[渡邊1991]。須恵器窯は、最近の新津市史編纂事業などによって、さらに数か所の存在が明らかになっている。

中世の遺物包含地は新津市内で15か所確認されているが、いづれも断片的な資料にとどまっている。また、城館跡は8か所を数えるが、遺構を確認しているものは新津城跡、程島館、金津城の3か所にすぎない。「八幡山城跡」は1987年に県教育委員会が実施した確認調査によって古墳であることがほぼ確定している。

### 4. 歴史的環境

古代において、新津市域は蒲原郡に属していた。当時の郡域は、北限が阿賀野川、南限が見附市付近であったと考えられる。北陸地方は、古く「越」と呼ばれており、7世紀後半(690年



新津丘陵周辺地域における古代・中世の主要道路

1. 長沼遺跡	(奈良・平安、中世)	14. 中野遺跡	(奈良・平安)	26. 古津松越入遺跡	(奈良・平安)
2. 結道跡	(奈良)	15. 北堀遺跡	(奈良・平安)	27. 大入遺跡	(奈良・平安)
3. 上前遺跡	(奈良・平安、中世)	16. 斧戸遺跡	(古墳、奈良・平安、中世)	28. 金津松越入遺跡	(奈良・平安)
4. 口町平遺跡	(奈良・平安、中世)	17. 雷辛遺跡	(奈良・平安)	29. 田村巨遺跡	(奈良・平安)
5. 江内遺跡	(中世)	18. 黒瀬ブクノ遺跡	(奈良・平安)	30. 田村巨遺跡	(奈良・平安)
6. 内ノ羽遺跡	(古墳、奈良・平安、中世)	19. 七木松原跡	(奈良・平安)	31. 田村A遺跡	(奈良・平安)
7. 西沼遺跡	(奈良・平安)	20. 鶴谷窪跡	(奈良・平安)	32. 西江城遺跡	(奈良・平安)
8. 小戸下原遺跡	(奈良・平安)	21. 川木窪跡	(奈良・平安)	33. 寺道上遺跡	(奈良・平安、中世)
9. 沙虫遺跡	(中世)	22. 大坪遺跡	(奈良・平安)	34. 須庭遺跡	(奈良・平安、中世)
10. 前津城跡	(中世)	23. 東丸城跡	(中世)	35. 山崎宮跡	(奈良)
11. 下野ノ本跡	(奈良・平安、中世)	24. 八幡山遺跡	-	36. 金津城跡	(中世)
12. 朝島城跡	(中世)	古津八幡山古墳	(古墳・平安)		
13. 枇杷門遺跡	(奈良・平安)	25. 古津和越田遺跡	(奈良・平安)		

第3図 位置と周辺の遺跡 国土地理院発行地形図「新津」

1:50,000 平成元年

項）には、「越」が三分割され、蒲原郡は、頬城・古志・魚沼とともに越中国に属した。なお、沼垂・磐船の2郡は越後国に属し、阿賀野川が国境となっていた。その後、大宝2年（702）に越中国4郡が越後国に編入され、和銅5年（712）に至り、後世の越後国の領域が定まつたのである。これらは、渟足橋・磐舟櫛設置とともに、大和政権の東北経営の中で位置づけられる。近年、三王山古墳（三条市）・古津八幡山古墳（新津市）など、古墳の発見が相次いでいるが、このことは、4・5世紀の段階で大和政権の影響が蒲原郡に及んでいたこと、三条市から新津市にかけての丘陵沿いに一定の政治勢力が存在していたことをうかがわせるものである〔甘粕・荒木1989、甘粕・川村1992〕。

10世紀に成立した『倭名類聚抄』によれば、蒲原郡には「日置・桜井・勇礼・青海・小伏」の5郡が存在していた。これらの所在地については諸説一致をみていないが、おおよそ日置郷は新津市周辺、桜井郷は弥彦村周辺、勇礼郷は三条市井東、青海郷は加茂市周辺、小伏郷は三条市上保内布施谷に比定される。また、延長5年（927）成立の『延喜式』神名帳には、蒲原郡の式内社として、「青海（2座）、宇都良波志、伊久礼、櫻田、小布施、伊加良志、伊夜比古、長瀬、中山、旦飯野、船江、土生田」の12社13座が記されている。伊夜比古神社が弥彦村の弥彦神社であることは諸説一致をみているが、他については郷と同様に一致をみていない。旦飯野神社は新津市朝日説と北蒲原郡笛神村説があるが、古津八幡山古墳やそれに先立つ弥生時代の高地性集落の発見で、優れた歴史的環境を有する新津市周辺に日置郷、さらに旦飯野神社が存在した可能性があるという〔木村1988〕。県内では、頬城地方が早くから開けていた地域であることが知られているが、『六国史』に記されている神位を有する神は頬城郡の居多神、大神神、蒲原郡の弥彦神の三社のみであること〔山田1981〕や、古墳を初めとする遺跡の分布を考えると、頬城郡とともに蒲原郡の開発の度合いが他郡よりも進んでいたことや政治勢力の存在をうかがうことができよう。

「新津」の史料上の初見は、『吾妻鏡』建仁元年（1202）3月4日条の「城四郎長茂井伴頬新津四郎已下、於吉野奥被誅畢」という記事である。新津四郎については不明な点が多いが、後に新津氏が金津保新津西方の地頭職を得ていていることから、金津保と関係のあった武士と思われる。中世において、新津市域は金津保の保城であった。保の成立は、他の諸保と同様、11世紀後半から12世紀の院政期と考えられる。城氏は、11世紀半ばに羽田國から越後国に南下し、阿賀野川以北に勢力を拡大していた。12世紀末の治承・寿永の内乱に際し、平氏とともに滅亡するまで、越後最大の在地領主として、国衙から独立する存在であった。新津四郎が城長茂の伴頬（従者）とされていることから、城氏の勢力が阿賀野川以南の金津保まで及んでいたことが考えられる。一方、時代は下がるが、応永18年（1411）8月19日の居多神社社領注文〔『新潟県史』資料編4-2121, 1983〕によれば、金津保に含まれていたと思われる木津（横越村木津付近）・金沢西（新津市金沢付近）が国衙の在庁官人たちの所領（在庁名）として記されている。これらのこととは、金津保が在地領主である城氏と国衙の在庁官人層との競合の地としての性格を

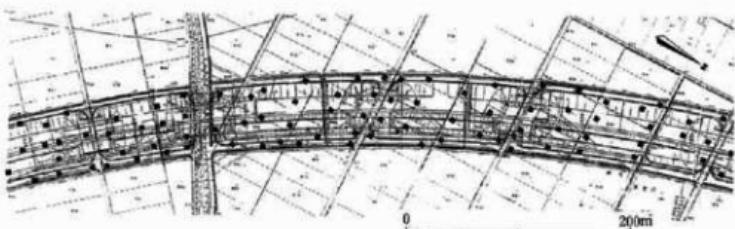
有する所であったことをうかがわせる。金津保の地頭として最初に確認できるのは、鎌倉初期に地頭職を得た金津（平賀）資義である。その後、資義の2人の子供に木津東方・新津西方が分割譲与された。鎌倉後期には、北条氏一門の越後守護名越時家が、また、鎌倉幕府滅亡後の建武4年（1337）段階では、駿河・遠江守護今川氏の一族が地頭職を得ていた。15世紀末から16世紀初めに作成された「蒲原郡段錢帳」によれば、金津保は約328町もの広大な田地を有し、その大半は守護上杉氏直臣の長尾・飯沼氏等の所領や守護の御料所であった〔『新潟県史』資料編補遺-4450, 1986〕。鎌倉以来、金津保を領有していたのは平賀氏一族であったが、鎌倉・室町を通して守護勢力の圧迫を受け、決して安定した領有ではなかったようである。その後、同氏さらにその一族は戦国大名上杉氏の家臣としての道を歩む。

新津市域の古代・中世の歴史を見ていくと、信濃川・阿賀野川の河口付近にあったとされる蒲原津と両河川で結ばれていることに注目しなければならない。蒲原津は交通の要衝であり、「延喜式」において国津的な性格をもって記され、当初の越後国府の系譜を引くものであったと推定されている。両河川に挟まれた新津市域は、河川交通の要衝として位置づけられよう。『中蒲原郡誌』によれば、細泡遺跡の所在する大字金屋については不明であるが、大字飯柳の開発は慶長期という。また、大字東金沢を含む旧阿賀浦村については、元和元年（1615）開発され、上興野・下興野・中興野・四ツ興野に分かれ、その後、上金沢・下金沢・大安寺・中新田と改称したという。新潟平野には戦国・織豊期に開発された伝承をもつ村は多く、「興野」「郷屋」の地名は天正から慶長に成立した村につけられた〔金子達1986〕。また、新發田藩二代溝口宣勝の代（慶長15年～寛永4年）に左近島（信濃川と阿賀野川に挟まれた新津地方）の築堤や慶長9年（1604）の新津堰の再建などの治水土木工事が行われている〔小村1983〕。これらのことから、16世紀末から17世紀にいたる近世初期に開発が進み、これ以後、現在の景観が形成されたものと考えられる。おそらく、古代・中世の新潟平野は潟湖や湿地など未開拓地が広大に存在し、河川と潟湖の世界ともいべき景観を呈していた〔田村1988〕。遺跡の分布をみると、生産遺跡（製鉄遺跡・須恵器窯跡）は丘陵上にあるが、生活址は丘陵裾や沖積地上の微高地に拡大していることが分かる。このことは、古代以来の開発とも関連があろうが、細泡遺跡・寺道上遺跡を含めた沖積地の遺跡の調査は、河川と潟湖の世界の微高地に居住した人々の生活を考える上で多くの示唆を与えてくれるであろう。

## 第III章 細池遺跡

### 1. 第一次調査（第4図）

第一次調査は、県教育委員会が平成2年10月1日から10月18日の間に、寺道上遺跡を併せて実施した。この時点では細池遺跡・寺道上遺跡の範囲が不明であったため、新津市大字飯柳および東金沢地内の磐越自動車道法線内を対象に $5 \times 2$ m程度のトレンチを計173基設定し、遺物・遺構の有無、土層堆積状況を確認した。この調査で土師器・須恵器片が出土し、溝・ピットが多数検出されたため、細池遺跡・寺道上遺跡は平安時代の水田跡および集落跡の性格をもつものと考えられた。また、細池遺跡の第二次調査範囲をセンター杭No.823付近からNo.828+60m付近の34,800m<sup>2</sup>とした。



第4図 細池遺跡第一次調査位置図

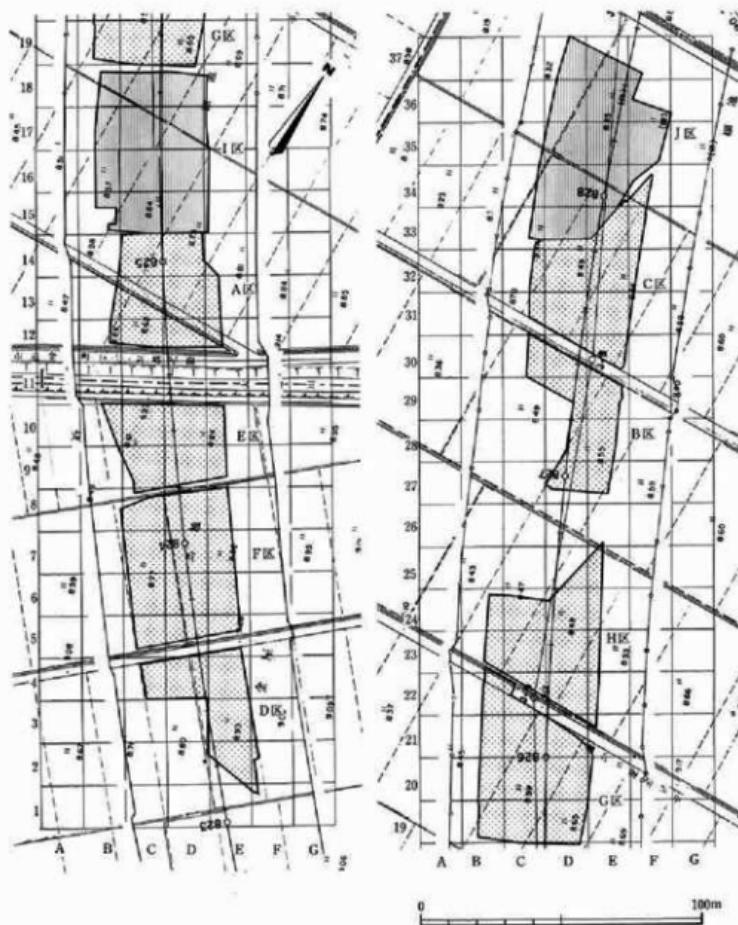
日本道路公团新潟建設局新潟工事事務所作成  
1:500 昭和63年測図

### 2. 第二次調査

#### A. 調査の方法

本遺跡は阿賀野川左岸の水田地帯に位置しており、5条の用排水路と4本の農道が調査区域内を横断している。これらの機能を停止して調査を実施することが不可能なため、用排水路と農道で調査区を区切り、9調査区を設定した。各調査区はおおむね着手順にA～Iの調査区名を付した。工事工程の関係から先行盛土区域を優先して調査を実施したため、各調査区のアルファベットの順序は規則的に並んではない。

グリッドの設定（第5図）調査の合理性を考慮し、磐越自動車道のセンター杭を用いて、これをグリッドの基準線とする方法をとった。磐越自動車道のセンター杭No.825とNo.826を結



小グリッド呼称

5	10	15	20	25
4				
3				
2				
1	6	11	16	21

15m

0

第5図 細池遺跡グリッド設定図

日本道路公团新潟建設局新潟工事事務所作成  
1:500 昭和63年測図

ぶ方向を基準線としてNo.826を起点に15mの方眼を組み、これを大グリッドとした。このため、グリッドの長軸方向は真北から34度7分西偏している。大グリッドは長軸方向を算数字、短軸方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。大グリッドはさらに3m四方に分割して1~25の小グリッドとし、5D-2のように表記した。

**排水方法** 遺跡は沖積地に位置し、周囲で水田が耕作されているため、掘り下げると地下水が湧出する状況であった。また、降雨によって調査区が湛水する事がないように排水施設は必要不可欠なものであった。平成3年度はおおむね暗渠で、平成4年度はすべて土側溝で対応した。暗渠・土側溝は調査区の周囲をめぐるように敷設し、集水枠を設けて常時100ボルトの電動ポンプで排水した。常時排水を可能にするため、調査区の脇に電線を架設または敷設した。暗渠は幅約50cm、深さ1~1.2mの溝をバック・ホーで掘削し、底面にドレン・ホースをいれた後、砕石を充填した。土側溝は空堀状の溝であり、排水方法は暗渠と基本的にかわらないが溝の崩壊を防止するために法面をつけ、暗渠より上端幅の広いV字形の溝とした。なお、暗渠・土側溝以外にも調査区の状況に応じて適宜小さな溝を掘った。

#### B. 調査の経過（第1表）

発掘調査は平成3年4月15日～同年12月7日、平成4年4月8日～8月7日の間、2年度にわたって実施した。調査着手当初は、暗渠の設計について充分な配慮を欠いていたため、その深度が不足し暗渠が有効に機能しない状況も度々であった。このため、平成3年度前半の調査については作業の遅滞が生じている。平成3年度最終の調査区であるH区は11月28日に実質の調査を終えているが、11月後半は豪雨による雨の中の作業であった。なお、両年度とも遺構や遺物の遺存が不良な箇所については、調査の中止あるいは調査面積の削減をしている。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平成3年度			A区						
			B区						
			C区						
			D区						
				E区					
				F区					
					G区				
					H区				
平成4年度		I区			J区				

第1表 細泡遺跡発掘調査の経過

## 3. 層序（第6図、図版88・93）

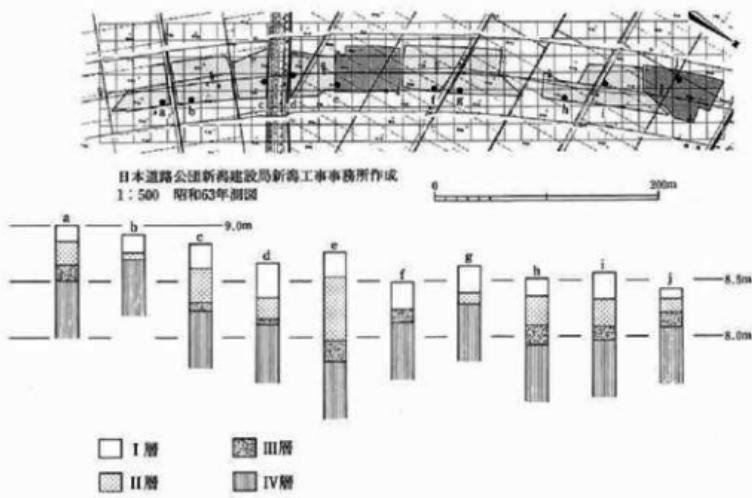
細池遺跡の調査範囲は南北（便宜的に阿賀野川下流方向を北とする。）560m、東西約40mで、標高8.9~8.4mを測り、南から北へごく緩く傾斜している。現地表に大きな起伏はなく、おおむね平坦である。基本層序は明確に分離されるI~IV層であり、特に細分を要しない（第6図）。各調査区で土層の厚み・色調などに変化があるものの、I~IV層は調査区全域にはば共通して堆積している。

I層 現水田耕作土の灰色粘土である。

II層 鉄分の沈着が濃く認められる暗褐色土で遺物を含んでいない。平均的な厚さは約30cmである。堆積した時期が明らかではないが、洪水等による一時的な堆積物の可能性が考えられる。

III層 顆粒状のマンガン結核を多く含み、マンガン・鉄分の沈着が濃く認められる、黒褐色の土層である。平均的な厚さは10cm~15cmである。奈良・平安時代、中世の遺物包含層である。ただし、中世の遺物はごく少量で、土層の細分も不可能である。検出された遺構のはほとんどは、このIII層を切り込んで構築されており、一部の遺構はIII層上面で遺構の平面形を把握できる。

IV層 黄灰色を呈するシルト、または粘土質シルトであり、調査区によって粒度の違いが大



きい。1m前後の厚さがあり、この上面を最終的な遺構確認面とした。IV層は漸移的に、植物遺体を含む灰色粘土に変化してゆく。

#### 4. 遺構各説

第一次調査の結果は、細池遺跡に奈良・平安時代の集落跡および水田跡の性格が認められるとしており、第二次調査では水田と断定できないものの、3種の凹地遺構が計35基検出されている。しかし、遺構の時期については中世と奈良・平安時代のものが混在している。ほぼすべての遺構には、その覆土に土師器片・須恵器片等が少量含まれるが、これらは遺構の年代と必ずしも一致するものではない。遺構と、奈良・平安時代の遺物包含層であるIII層との関係については、多くの遺構がIII層を切り込んで造作されていると認められる。このような層位関係にある遺構は、S X902の銭貨とS D701の青磁片から考へておおむね中世の年代を与えられる。そのうえ、II層が遺物をほとんど含んでいないため、これらの遺構の下限時期を明確にできない。出土遺物の大半を占めるのは奈良・平安時代のものであるが、該期の遺構は少なく中世の凹地遺構・溝が主体となる。ここでは平安時代の遺構を最初にまとめ、次に中世の各遺構を順次説明する。なお、遺構の種類にかかわらず、北から記述することとする。また、同一の遺構であっても複数の調査区にまたがるものは複数の遺構番号を付す場合がある。

##### A 奈良・平安時代

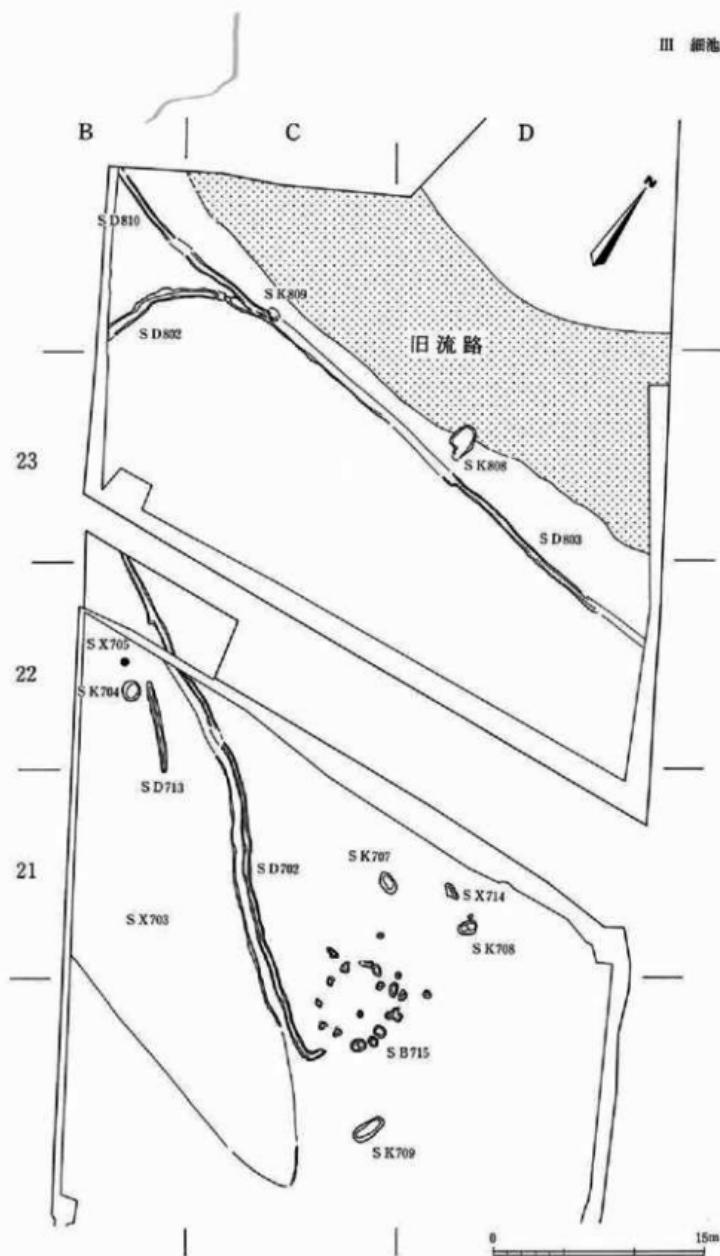
奈良・平安時代の遺構はG区・H区にまとまりがあり、溝によって区画されたひとつの生活居住域を形成している(第7図)。G区・H区の内容は建物跡1棟、炉跡2基(S K808・S K708)、土坑5基、貼り床状遺構1基、溝5条である。このほかの調査区は該期の遺構が散在するのみである。S D810・S D803と平行する旧流路も同時期に存在したものと思われ、生活居住域が流路に規制されながらも密接な関係をもっていたことが窺われる。なお、旧流路は出土遺物が須恵器1点のみであり、形成から埋没までの時期経過が明らかではない。

##### S X321 (図版14)

C区32D-3にある焼土跡である。径約1mの焼土跡を中心に径約5mの範囲に焼土粒と炭化粒が散っていた。十分な記録がなされていないため、詳細は不明である。このグリッドでは遺物が多数出土しており、これに伴う可能性が高い。遺構の上面はS X307に切られる。

##### S D810・S D803 (図版18)

H区の旧流路の南側にあり、これにはほぼ平行する溝である。幅40cm前後、深さ10~20cmを測る。底面の標高は7.90m前後である。S D805に切られる部分は南側縁辺のみが残存する。S D



第7図 H区・G区の奈良・平安時代の遺構

S 805・S D 806・S D 804に切られる。

S K 809 (図版18、73-5)

H区24C 6にある長径80cm、短径50cm、深さ10~14cmの土坑である。上面で土師器壺1個体が出土した。覆土には多量の炭化物と焼土粒を含む。S D 805に切られる。

S K 808 (図版17、18、72、73-1~3)

H区23D 8にある不整形の土坑である。長径2.4m、短径1.5mを測り、底面は南から北へ緩く傾斜している。遺構検出時には双円形の焼土跡とみられたが、遺構北側はIV層を主とする土層に覆われていることが解り、遺構の平面形が拡大した。これは人為的な遺構の被覆と理解できる。このため遺構の覆土は上下2層に分かれ、上層はIV層を主とする黄灰色土、下層は焼土・炭化物を多く含む土層となっている。遺構南側の周縁は熱を受け、硬化している。南端をS D 805に切られる。土師器壺・鍋が各1個体出土しており、この他の個体はない。出土遺物が煮沸形態のみであること、また遺構周縁が被熱していることから、塵芥穴ではなく炉の一形態と考えられる。

S D 802 (図版17、18)

北端はS D 810と、南端はS D 801と接する弧状の溝である。24C 2で一部途切れる。S D 810・S D 803と覆土は同一であり、規模も大きく変わらない。

S D 702 (図版20、74)

G区北西隅から中央にある幅30~50cm、深さ10~15cmの溝である。底面の標高は8.0m前後を測る。覆土はIII層と近似し、分離できない。規模、底面の標高からみて、S D 802と同一か、機能を共通する溝と考えられる。

S X 705 (図版19、20、75)

G区22B 18に位置する土器集中地点である。完形の土師器壺が4個体まとめて出土しており、土器を意識的に一括投棄したものとみられる。土器の下部に土坑は存在しない。位置的にはS X 705の範囲内にあるが、この土器集中地点を分離してS X 705とする。

S K 704 (図版20、76-3・4)

G区22B 17にある長径1.5m、短径1.0m、深さ35cmの土坑である。覆土には多量の焼土が混入しており、土師器片が多く出土している。遺物の出土状況にめだった偏りは認められない。S X 703との切りあいは不明である。

S D 713 (図版19、20、77-2・3)

S K 704に近接し、その東側にある、長さ6.5m、最大幅50cmの溝である。深さは北端部で35cm、そのほかは20cmを測る。S X 703の覆土に覆われる。

S X 703 (図版20、74)

堅穴住居跡における貼り床のように、固く踏み締められた範囲をS X 703とした。北はS X 705付近から、南はS X 706の南側に及ぶ広範囲の遺構であるが、G区北東隅ではその範囲が明確で

はない。北東側の縁辺にはS X702と平行する数cmの立ち上がりを有する。覆土はIII層と分離でききず、土師器・須恵器の細片を多量に含んでいる。

S K707 (図版19、20、76-5・6)

G区21C-23にある土坑である。長径1.5m、短径1.0m、深さ30cmを測る。覆土には少量の焼土粒・炭化粒を含む。

S X714 (図版19、20、77-1)

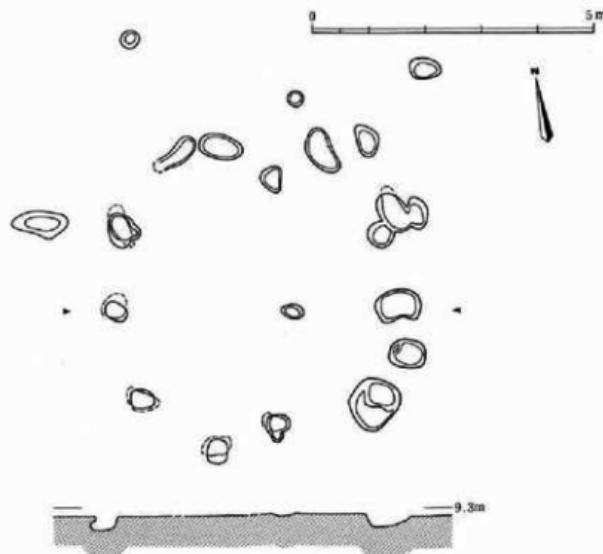
G区21D-8にある不整形の小土坑である。東半は試掘坑に上面を切られている。覆土の上層には焼土粒を少量含んでいる。

S K708 (図版19、20、76-1・2)

G区21C-23にある楕円形の土坑である。長径1.4m、短径0.9m、深さ30cmを測る。内部東半を掘りくぼめられ、この底面には焼土粒・炭化粒が密に堆積している。また、東壁に接して柱状の礫が立てられ、赤化していた。礫は支脚の機能をもつものと理解する。

S B715 (第8図、図版20、75)

G区中央に位置する、総計20基の柱穴からなる建物跡である。環状をなす15基の柱穴のうち、6基が袋状に抉られているが、その形状に規則性を見いだせない。柱穴の径は最大で90cm、深さは最大で25cmを測る。環状の柱穴群北側には、東西一対の柱穴が付随する。



第8図 S B715平面図 (1 : 100)

S K709 (図版19、20、76-7・8)

S B715南方の20C22にある長椭円形の土坑である。長径2.2m、短径1.0m、深さ20cmを測る。

S D908 (図版21、22、83)

I区北部東縁にある、南北方向にのびる溝である。幅40~60cm、深さ10~20cmを測る。底面の標高は7.94m前後である。S D906に切られる。両側には径20~70cm、底面の標高が8.2m前後を測るビットが8基存在する。このビット群は覆土がS D908のそれと近似しており、同時期のものである可能性が高い。

S D907・S D914 (図版22、24、82)

S D907はS D906に直角に接し、南方へ弧を描いてのびる溝である。幅20~60cm、深さ10~20cmを測る。底面の標高は8.02~8.05mである。S D904はS X903の南東隅に接する溝であるがS X903に切られられており、これに付随するものではない。S D907とS D904は同一の溝と考えられる。覆土はいずれもIII層に近似する。

S D106・S D507 (図版26、28)

A区南東隅からE区南西隅にのびる幅25cm程度の溝である。底面の標高は8.01~8.05mである。

S D620・S D621・S D401 (図版32、92)

S D620はF区南部に位置する東西方向の溝である。D区北東隅にあるS D401はこれと同一の溝である。5D-24から西方に分岐する部分をS D621とする。覆土はIII層に近似し、土師器・須恵器の細片を多く含んでいる。底面の標高はS D620が8.15~8.25m、S D621が8.20~8.27mを測り、それぞれ西に向けて緩く傾斜している。

S X410 (図版34)

D区4E-22にある径25cm、深さ25cmのビットである。土師器甕が1個体出土している。

## B 中世

遺構の主体をなすのは中世の凹地遺構と溝であり、これらは奈良・平安時代の遺物包含層であるIII層を切り込み、II層に覆われている。遺構の年代を決定する資料は少なく、S X902の銭貨およびS X701の青磁片から考えておおむね中世としておく。しかし、中世の渡来銭は近世初期まで流通しており〔鈴木1993〕、遺構の年代は近世初期まで降る可能性もある。

中世の遺構は調査区全域に密に分布しており、凹地遺構35基、溝約40条を数える。凹地遺構はJ区・C区、I区・A区・E区に分布のまとまりがあり、明らかな凹地遺構間の重複は認められない。このため、凹地遺構の造作には大きな時期差があるとは考えられない。以下、凹地遺構を概観した後に、各遺構を順次説明することとする。

凹地遺構は下記のように3種が認められる。

### A類 周溝を伴う不定形の凹地遺構

この種の遺構は、その構造を以下のように3分される。遺構の外周を取り巻く周溝、周溝の内側または壁に付帯する凹凸の著しい面(以下、凹凸面と略す)、周溝の底面よりわずかにレベルの高いほぼ平坦な中央の面(以下、中央平坦面と略す)の3つの部分である。中央平坦面は完全に平坦ではなく、拳大程度のくぼみが散見されるが、凹凸面とは明瞭に区別される。また、周溝は壁面と距離をおいてめぐらすものも見られる。凹凸面は遺構実測図においてその範囲を一点破線で示した。平面形・規模は一定せず、最大のものは399m<sup>2</sup>をこえる。この種の遺構は、遺構間が小溝で連結されるか、小溝を付属することを基本形態とするようである。覆土中に土師器片・須恵器片が少量含まれるが、これらはIII層あるいは奈良・平安時代の遺構に含まれていたものと考えられる。凹地遺構A類はC区・J区に集中しており、E区・F区にも散見される。

### B類 溝状の凹地遺構

断面が浅い皿状を呈する溝状の遺構である。A地区・E地区・I地区に集中して検出されているものである。覆土の状況は、黒褐色土単層であるものと下層にIV層土を堆積させて上下2層となるものに二分される。また、底面の状況も、ほぼ平坦となるもの、凹凸の著しいものの2形態がある。なお、端部に溝を付属する例があり、A類の凹地遺構と同様に取水を意図した遺構であると類推される。この種の遺構は、かつて新津で「堀田」と呼ばれていた水田に形態がよく類似している(第II章2参照)。覆土中に土師器片・須恵器片が少量含まれるが、S X902で北宋の銭貨が出土したのを見るように、土師器片・須恵器片はこの種の遺構と同時期のものではなく、基本土層のIII層からの紛れ込みと考えられる。

### C類 方形の凹地遺構

平面形態が方形であるが、覆土・底面の状況等はB類の凹地遺構によく類似しており、B類の凹地遺構と同様に、覆土・底面の状況はそれぞれ2つのタイプに区分される。遺構の性格はB類の凹地遺構と基本的に共通するものと考えられる。この種の遺構は3基検出されているのみである。覆土中の遺物については、上記の遺構と同様に、この種の遺構の年代を決定する資料とはなりえないと考える。

#### S X004 (図版7、8、67)

S X004はJ区北部に位置し、東西に長く広がるA類の凹地遺構である。北側の周溝は一部途切れるものの直線的で、その延長上にS D013が続く。E35では、南側の周溝から北に向けて小溝が2条延びる。凹凸面は東端部に僅かにみられるのみである。中央平坦面の標高は7.94~7.97m、周溝底面の標高は7.88~7.95mを測る。調査区域内の遺構面積は399m<sup>2</sup>である。

#### S D013 (図版8)

S X004とS X003を結ぶ幅50cmの溝である。底面の標高は7.92m前後である。

S D015 (図版8)

掘り込みの明瞭な、断面U字形の溝であり、輪郭不明瞭なS X004の周溝とは明らかに異なり、別の遺構である。深さ約10cm、最大幅55cmを測る。

S X003 (図版11、12、67)

S X003はJ区東部に位置し、南北に長いA類の凹地遺構である。周溝は東南隅で不明瞭となるが、中央平坦面との境界が周溝のように表れている。中央平坦面の標高は7.97~8.0m、周溝底面の標高は7.86~7.93mを測る。遺構の面積は145m<sup>2</sup>である。

S D012 (図版12、69-2)

S X003とS X002を連結する溝である。底面の標高は7.95m。最大幅は105cmである。

S X002・S X002b (図版9、10、67)

J区中央に位置するA類の凹地遺構である。周溝は東縁で2重となり、北縁では幅が大きく広がる。周溝底面の標高は7.87~7.95m、中央平坦面の標高は7.95~8.0mである。遺構の面積は308m<sup>2</sup>を測る。また、東南隅には深さ25cmの平面形椭円の土坑があり、これをS X002bと呼ぶことにする。深さ2~8cmの凹凸面がこれを取り囲んでいる。

S X007 (図版12)

S X007は北東隅の一部が検出されたもので、周溝を確認していないが、A類の凹地遺構と考えられる。遺構底面の標高は7.90m前後である。

S D014 (図版12)

S X007とS X003を結ぶ最大幅70cmの溝である。底面の標高は7.90mを測る。

S D303 (図版12)

C区北隅にある最大幅1.7mの溝である。S X007の周溝である可能性がある。底面の標高は7.94~7.98mである。

S X006 (図版9、10、68)

S X008の西側、D35・D34にあるA類の凹地遺構である。東側の周溝はS X002の周溝に並行している。周溝底面の標高は7.84~7.88m、中央平坦面は7.96~8.00mを測る。調査区域内の遺構面積は75m<sup>2</sup>である。

S X001 (図版9、10、68)

J区南側に位置するA類の凹地遺構である。周溝は北西隅と南東隅にみられるのみであるが、広い凹凸面が周溝状に巡る。遺構の中央を擾乱され、南側中央は第一次調査のトレンチに掘られ、さらに南東隅は暗渠に切られる。南東隅の周溝底面の標高は7.92m、凹凸面の標高は7.9~7.98m、中央平坦面の標高は7.95~8.00mを測る。推定面積は204m<sup>2</sup>である。

S D016 (図版10、69-5)

S X001とS X005を結ぶ、幅約20cmの小溝である。底面の標高は7.92mである。

## S X005 (図版9、10、68)

S X001の西方に位置するA類の凹地遺構である。周溝底面の標高は7.85~7.9m、中央平坦面の標高は7.96~8.0mを測る。

## S D010 (図版9、10、69-7)

S X001の北東隅とS X304 b西縁に接する幅0.6~1.3m、深さ10cm前後の溝である。底面の標高は7.97~8.04mである。

## S D009・S D302 (図版9、10、69-7)

S X001の北東隅からS X304 b・S X304 aに接する東西方向の溝である。S D301に接する点は瘤状にふくらむ。幅0.3~1.1m、深さ10~20cm、底面の標高は7.86~7.93mである。

## S D301 (図版16、71)

C区中央東縁にあり、S X304 aを横断する溝である。幅60cm前後、深さ10cm前後、底面の標高は7.87~7.90mである。

## S X304 a・S X304 b (図版11、12、15、16、70)

C区の北東部とJ区の一部に位置するA類の凹地遺構である。中央の括れ部で区切り、便宜的に東半を304 a、西半を304 bとする。S D301・S D302・S D009・S D010が接するが、覆土に大きな相違はない。S X304 a周溝の底面は標高7.96~8.04m、中央平坦面は標高7.98~8.05mを測る。S X304 b底面は標高7.93~7.99mを測る。遺構の面積は151m<sup>2</sup>である。

## S X305 (図版15、16、70、71)

C区中央にあり、東西方向に長いA類の凹地遺構である。周溝が中央を横断して結ばれており、遺構を2分している。東半南縁辺の周溝はもっともレベルが低く、底面の標高は7.83~7.90mを測る。また、東半は周溝内部の凹凸面が明瞭である。西半は周溝内側がほとんど平坦面で占められる。西半北縁辺・南縁辺の周溝底面は7.92~7.98m、西半西縁辺は7.87~7.93mである。中央平坦面のレベルは、東半・西半ともに7.99~8.06mである。遺構の面積は390m<sup>2</sup>を測る。南端の周溝は西方へ屈曲しており、S X306に結ばれる可能性がある。

## S X307 (図版13、14、71)

C区西侧からJ地区の一部に位置するA類の凹地遺構である。西端の一部は擾乱されている。南縁の周溝内部と東縁の周溝に接して土坑がある。前者は長径4.0m、底面の標高7.67m、後者は径約1.2m、底面の標高7.80mである。周溝は南縁辺がもっともレベルが低く、7.86~7.93m、その他は7.91~7.98mである。中央平坦面の標高は7.95~8.06mを測る。凹凸面は北西の一部にしか見られない。遺構の面積は203m<sup>2</sup>である。

## S X306 (図版15、16、70)

S X305とS X307の間隙にあるA類の凹地遺構である。縁辺のラインはS X305・S X307の縁辺に相似する。中央の不整三角形の部分は掘り込みを受けておらず、この部分をめぐる周溝と縁辺の周溝が連結している。凹凸面は東半北側の周溝に付随して見られる。周溝底面の標高

は東半で7.87~7.93m、西半で7.93~7.99mである。中央平坦面の標高は7.99~8.08mである。C区からのびるS D309はII層を掘り込んでいる時期の異なる溝である。遺構の面積は125m<sup>2</sup>である。

S X308 (図版14、70)

S X307の南側にあるA類の凹地遺構である。農道を挟んだ南側のB区にも遺構の一部が確認されていたが、遺構密度の薄いB区の調査を先行していたため、これを搅乱と誤認していた。S X305と同様に周溝が中央を横断し、北縁の周溝が一部2重にめぐるようである。周溝底面の標高は7.88~7.95m、中央平坦面は標高7.96~8.02mである。遺構の面積は62m<sup>2</sup>である。

S D807 (図版18、72)

H区の東部にある東西方向の溝である。幅0.8~1.2m、深さ20~30cmであるが、東端は壁高を減じながら、旧流路に接する。

S D805・S D806 (図版17、18、72)

旧流路に平行する溝である。S X808付近で屈曲しているため、便宜的に屈曲部の東側をS D806、西側をS D805とする。幅1.0~1.7m、深さ20~45cmである。S D806の底面南側は一段深く小溝状をなす。

S D804 (図版17、18、72)

S D805からほぼ直角に南へのびる溝である。覆土はS D805のそれとよく似ている。幅1.5m前後、深さ約40cmである。

S D801・S D711 (図版3、18、72、77-4)

同一の溝と考えられる。共に断面形は台形である。幅はH区で0.9~1.5m、G区では1m前後である。深さは最大で28cm、底面の標高は7.88~7.99mである。

S D712 (図版3、77-7)

G区の東縁にあり、S D710のテラス部に接する溝である。幅約50cm、深さは10~20cmである。底面の凹凸が著しい。底面の標高は7.99~8.08mである。

S D710 (図版19、20、77-5・6)

G区の東部にある南北方向の溝であり、幅約1m、深さ約30cmを測る。東端南側には浅いテラス状の面が付属する。また、西縁辺中央に接して径70cmのピットがある。南端をS X706またはS D701に切られる。

S D701・S D905 (図版19~22、74、77-3、83)

G区を貫き、I区の東縁にのびる延長83mの溝である。底面の傾斜はきわめて緩く、I区で標高7.80m前後、G区北西隅で7.70m前後である。幅0.7~1.3m、深さ30~40cmである。縁辺に接して計6本のピットが穿たれている。主な出土遺物は土器片・須恵器片であるが、青磁片が底面直上で1点出土しており、遺構の年代は中世に降る。S X706との切りあいは認められない。

## S X706 (図版19、20、75)

G区西側中央にあるB類の凹地遺構である。S D701と接する北東隅は掘り広げられており、S X706内の水量を調節する施設と思われる。底面は凹凸が著しく、標高は7.67～7.88mである。覆土は2層に大別され、下層上面のレベルは縁辺部を除いてほぼ水平であり、標高は7.89～7.94mを測る。覆土下層はIV層を主とする黄灰色土、上層は黒褐色土である。西端は耕地整理前の「堀田」に擾乱されており、この「堀田」は第II章2に記した耕地整理組合現景図にあるものであろう。

## S D716・S D717 (図版21、22、77-8)

G区東部にある2条の畝間状の小溝である。東側をS D716とする。最大幅60cm、深さは最大で7cmを測る。

## S X911 (図版21、22、78)

I区北東隅に位置する。全体を把握できないが、A類の凹地遺構である。周溝の屈曲部はS D910と小溝で結ばれている。中央平坦面の標高は8.08～8.12m、周溝底面の標高は8.01～8.05mを測る。検出された遺構の面積は29m<sup>2</sup>である。

## S D910 (図版21、22、78)

S X911に隣接する「く」の字状の溝である。幅50～160cm、深さ18cmを測る。底面の標高は8.00～8.10mである。

## S D909 (図版22)

S D911・S D910の南側にあり、「コ」の字状部分と「L」字状部分からなる溝である。幅40～60cm、深さ5cm程度である。底面の標高は8.23～8.32mである。

## S D916 (図版3)

I区北西隅に位置する長さ4.6m、幅50cm、深さ10cm前後を測る溝である。底面の標高は8.08m前後である。

## S X917 (図版21、22、83)

S D905に重複する不整形の凹地遺構である。平面形は整っていないが、凹地遺構のB類として考える。S D905の覆土上に造作されている。両縁辺は明確な壁面を持たず、なだらかに傾斜している。延長22.8m、最大幅4.8m、検出された面積は55m<sup>2</sup>を測る。底面の標高は8.00～8.10mである。

## S D906 (図版22、83)

S D908・S D907と直交し、S X917に接する溝である。幅80～120cm、深さ12cmを測る。底面の標高は7.94m前後である。底面は凹凸が著しい。S X917と覆土に差異はなく、切りあいは認められなかった。

## S D904・S D901 (図版24、79)

I区東南に位置し、S X902の両縁辺に接する溝である。S X902との切りあいは不明である。

幅45cm前後、底面の標高は8.09~8.15mである。

S X902 (図版23~26、79、83)

I区南東隅にあるB類の凹地遺構である。S X103の延長上にあり、同一の遺構とも考えられるが、状況が異なる。覆土は上下2層に大別され、下層はIV層を主体とする暗褐色土、上層は黒褐色土が堆積する。底面は凹凸が著しく標高7.85~8.01mを測る。なお、下層中から錢貨6点が付着して出土した。検出された遺構の面積は73m<sup>2</sup>、最大幅は5.1mである。

S X903 (図版23、24、80)

I区中央南部に位置するC類の凹地遺構である。長径9.8m、短径8.1mを測る。覆土は2層に大別され、上層は黒褐色土、下層はIV層を主体とする明灰褐色土からなる。底面は凹凸が著しく、標高7.80~7.94mである。面積は81m<sup>2</sup>を測る。

S X912 (図版23、24、81)

I区南西部にあるB類の凹地遺構である。最大幅は5.3m、遺構の面積は37m<sup>2</sup>を測る。覆土下層はIV層を主とする。底面は細かなくぼみがまばらに見られるが、S X902・S X903に比較して凹凸は少ない。底面の標高は7.88~7.99mである。

S X913 (図版23、24、81、82)

I区南西隅に接するB類の凹地遺構である。西縁辺は擾乱されているが、底面付近でわずかに遺構の範囲を確認することができる。また、北端は排水溝に切られる。最大幅は5.8m、遺構の面積は86m<sup>2</sup>である。底面は凹凸が少なく、標高は7.89~8.94mである。

S X103 (図版25、26、84)

S X902の延長上にあり、A区の南北を貫くB類の凹地遺構である。覆土は黒褐色土の単層であり、底面の標高は7.88~7.93mを測る。最大幅は5.4m。検出された遺構の面積は158m<sup>2</sup>である。

S D104 (図版25、26、85)

S X103の南端東側に接する最大幅76cmの溝である。底面に2か所浅いくぼみが見られる。底面の標高はS X103のそれより7cmほど高く、7.98m前後である。

S X107 (図版25、26、84、85)

A区北部の中央にあるB類の凹地遺構である。最大幅は5.5mである。底面は標高7.93~7.85mを測り、両縁辺を除いてほぼ水平で平坦である。覆土は黒褐色土の単層である。遺構の面積は80m<sup>2</sup>である。

S X101 (図版25、26、86)

A区北西隅にあるB類の凹地遺構である。西側はIV層上面が西に向けて下降しており、III層の堆積も薄く、西側の壁は確認されなかった。東側縁辺の内側に5cm程度の段差があり、S X103・S X107・S X102に比して底面の凹凸が大きい。底面の標高は7.93~7.97mである。覆土は上下2層に分けられ、上層は黒褐色土、下層はIV層ブロックを主体とする明灰褐色土である。

遺構の推定面積は95m<sup>2</sup>である。

S X102 (図版25、26、85、86)

S X107の南側にあるB類の凹地遺構である。最大幅は4.8m、深さ5cm程度である。覆土は黒褐色土の単層、底面はほぼ水平平坦で標高7.96m前後を測る。遺構の面積は49m<sup>2</sup>である。なお、南端に幅20cmの小溝を付属する。この小溝はS X102より約2cm底面の標高が高い。

S D105・S D503 (図版25~28、84、87)

A区・E区を貫く南北方向の溝である。幅2.1m~3.7mを測る。東側が深く、西側が浅く平坦であり、西縁に幅30cm程度の浅い溝が伴う。しかし、E区では断面形が一定せず、南端部では両縁辺にテラスが作り出される。A区13D23には掘り残された段状の部分がある。底面の標高は南から北に緩く傾斜しており、A区の北端では7.72m、E区の南東隅では7.85mとなる。A区南縁の土層断面には幅が広く現れており、試掘坑の付近で東に分歧するものと推測される。

S X509 (図版28、87)

E区東部にあるA類の凹地遺構である。周溝とわずかに凹凸のみられる面が検出されたが、遺構の大部分は調査区域外に存在している。周溝底面の標高は8.18~8.22m、試掘坑東側の中央平坦面の標高は8.25~8.30mを測る。

S X510 (図版28、87)

S X509の南側に位置するA類の凹地遺構である。北側・西側の縁辺はS X509と平行する関係にある。梢円形の部分は掘り込みを受けておらず、遺構外の部分である。これをめぐる周溝が西縁辺の周溝につながる。周溝底面の標高は8.18~22m、中央平坦面の標高は8.25~8.31mである。遺構の面積は推定166m<sup>2</sup>である。

S D501 (図版27、28、88)

S X502と連結する幅1.1~1.2mの溝である。S X502との切りあいは認められない。底面の標高は7.98m前後である。

S X502 (図版27、28、88、89)

E区中央にあるB類の凹地遺構である。覆土は、北端部でS D501の影響を受ける部分があるほかは上下2層に大別され、下層上面の標高は8.14m前後である。遺構底面は、北部で西から東へ緩やかに傾斜するが、そのほかはほぼ平坦で標高8.01~8.05mである。遺構の面積は46m<sup>2</sup>である。

S X504 (図版27、28、89)

S D503に重複して造作されているB類の凹地遺構である。南端で接するS X511と機能を同一にするものと思われるが、S D503に重なる部分をS X504としておく。覆土は上下2層に分けられる。底面の標高は7.97~8.05mである。遺構の推定面積は43m<sup>2</sup>である。

S X511 (図版27、28、30、87)

西端はS X504に接し、F区北縁中央にのびるB類の凹地遺構である。S D602内のくぼみが

遺構の中央にまでのびており、両者は不可分の関係にあると思われる。覆土は上下2層に大別される。下層上面の標高は8.1~8.2mである。遺構の面積は47m<sup>2</sup>である。

S X512 (図版27, 28)

E区北端中央に位置するC類の凹地遺構である。試掘坑に大きく切られる。覆土は黒褐色土の単層である。底面の標高は8.06前後mを測り、ほぼ平坦で水平である。

S D513 (図版27, 28)

S X505の北東隅から北に断続している、最大幅35cmの溝である。

S X505 (図版27, 28, 89)

E区東部に位置するC類の凹地遺構である。南北の最大径9.1m、東西の最大径は6.1mである。覆土は上下2層に分けられ、下層上面の標高は8.04~8.08mを測り、ほぼ水平平坦である。遺構底面は凹凸が著しく、標高は7.91~8.02mである。S X506との切りあい関係は認められない。遺構の面積は、S D506と重複する部分を含めて、54m<sup>2</sup>である。

S D506 (図版27, 28, 89)

S X505の北西隅に接する幅0.8~1.2m、深さ10~20cmの溝である。底面は凹凸が著しいが、S X505とはほぼ同じレベルにある。

S X508 (図版27, 28, 87)

E区南東隅にある凹地遺構である。平面形態はL字状で他とは異質であるが、B類に含めておく。覆土は黒褐色土の単層である。底面はほぼ平坦で、その標高は8.06m前後である。

S D601・S D601b (図版30~32, 90, 91)

F区の東部を貫き、緩やかな弧を描いている溝である。8E-3から南方に分岐する部分をS D601bとする。S D601の底面には起伏がありレベルは一定しないが、7.97~8.21mを測る。S D601bの底面標高もほぼ同レベルで、北から南にむけてわずかに下降している。7D-7付近の土層観察ではS D602に覆土を掘り込まれている。幅は最大2.7mである。

S D603 (図版30, 90)

E区東縁北部からS D601に連結する溝である。最大幅88cm、底面の標高は8.25m前後である。

S D604 (図版29, 30, 90)

S D603の南側にあり、S D601を横切る溝である。覆土はS D601に切られる。底面は東から西に傾斜しており、東端では標高8.15m、西端では8.02mである。最大幅は90cmを測る。

S D611 (図版30)

S D601bおよびS D602に接する最大幅95cmの溝である。

S D602・S D602b (図版30~32, 90)

F区北縁中央からE区東縁南部にある溝である。中央部ではS D602に平行して浅い溝が付帯しており、これをS D602bとする。両者に切りあい関係は認められない。両者はS D601の覆

土を切って掘り込まれる。S D601 bと接する点から南側は、底面が南から北へ下降し、標高8.12~7.92mである。一方、その北側は底面が北から南に傾斜しており、標高7.91~7.85mを測る。S D602 bの底面は南から北に下降しており、標高は8.14~8.07である。S D602は最大幅2.6mである。

## S D605 (図版30, 91)

F区東縁中央にあり、S D601・S D602に接する溝である。底面の標高は8.12m前後である。

## S D606 (図版30, 91)

S D605の南側に位置する溝である。底面の標高はS D605とほぼ同一である。

## S D612・S D610 (図版30, 92)

S D602とS X615を結ぶ溝である。中央に島状の部分があるが、溝内部の高まりであり、造構の外部ではない。両者とも底面の標高は7.9m前後である。

## S D609・S D608・S D607 (図版29, 30, 91)

S D601またはS D602とS X615を結ぶ3条の溝である。S D608をS D607・S D609が切り込んでおり、数回にわたって溝の修復がなされたものと思われる。S D607がS X615に向かって、S D609がS D602に向かってわずかに傾斜している。底面の標高はS D607が8.00~8.17m、S D608が8.15m前後、S D609が8.01~8.09mである。S D607の南側には深さ約20cmのビットが2基あり、これらの溝に付随する施設と想定される。

## S X616 (図版29, 30, 91)

F区北部西側、S X617の東縁に接する造構である。掘り込みが浅く、ようやく東縁辺の周溝が認められるにすぎない。S X617との切り合い関係は明らかではない。周溝底面の標高8.20m前後である。

## S X617 (図版29, 30, 91)

S X616の西側に位置するB類の凹地造構である。覆土は明瞭な上下2層に分かれ。底面および下層上面は平坦であり、標高は前者が8.10m、後者が8.18~8.20mである。

## S X613 (図版30, 92)

S D612・S D610の西側にある小規模なA類の凹地造構である。周溝底面の標高は8.12~8.16m、中央平坦面の標高は8.21~8.28mである。造構の面積は14m<sup>2</sup>である。

## S X615・S X615 b (図版29, 30, 92)

E区中央に位置する長径14.4mの長方形の造構である。掘り込みの深い主要部の周囲には、北側の縁辺を除いて浅い帯状の段がめぐっており、これをS X615 bとする。主要部のみで88m<sup>3</sup>、帯状部を含めると127m<sup>3</sup>となる。主要部は単純計算すれば、70m<sup>3</sup>の容量を有する。底面の標高は7.60m、帯状部の底面標高は8.05~8.10mである。主要部はS D602あるいはS D601に流れる水量の調整池の機能をもつものと推測する。帯状部は、主要部とは使用方法を別にする施設と思われる。

#### S X614 (図版30、92)

S X615の北西隅に接するA類の凹地遺構である。中央の半円形の部分は掘り込みを受けておらず、遺構の外である。周溝底面の標高は北側で8.00m前後、南側で8.05m前後である。そのほかは小さい起伏があり、標高8.02~8.12mを測る。

#### S D618・S D619 (図版30、32、92)

S X615の南西隅に接し、6 C-19ではほぼ直角に折れる、最大幅1.8mの溝である。S X615に接する部分では、底面中央に小溝を掘り込んでいる。この小溝はS X615に向けて傾斜している。S D618の底面標高は8.05m前後、S D619は8.1m前後を測る。

#### S X622 (図版31、32、92)

F区南西部に位置するA類の凹地遺構である。北縁辺・南縁辺に副う周溝のはか、その内側に不明瞭ではあるが、浅い溝が2条認められる。遺構は全面にわたって凹凸が著しい。周溝底面の標高は北縁辺が8.10m前後である。西端を耕地整理前の「堀田」に切られる。

### C 近世以降

D区ではS D403の覆土からキセルの殴口が、S D406の覆土からは肥前系の鐵器が出土しており、これらの遺構が近世以降のものであることを示している。ただし、層位的には中世の遺構と同様にII層に覆われており、不可解な点が残る。F区南縁ではII層の堆積がなく、土層の連續性を確認できなかったため、土層観察によって識別されたII層は遺跡全体を通じた同一時期の堆積でないものかもしれない。S D404・S D405がS D403の覆土を切って掘り込まれているほかは、各遺構間に切りあい関係は明瞭に観察されず、D区の遺構の大半が近世を逃れないことと推察される。B区では5条の溝が検出されたが、現水田区画・現農道の方向とほぼ一致しているため、近代の用排水跡と思われる。以下、D区の遺構を簡略に説明する。

#### S D402・S D402b (図版32~34、93)

2段に掘り込まれたS D402は、南側が深さ約40cm、北側が深さ約20cmである。底面の標高は南側で8.2mを測る。S D402から分岐するS D402bはS D402南側より5cmほど深い。F区でS D619に接するものと思われる。

#### S D403 (図版33、34、93)

S D402・S D402bと平行する溝であり、4Dの試掘坑付近で幅を広げる。4E2で分岐する小溝はS X407と連結する。遺構確認面からの深さは約30cmを測る。底面は平坦で、その標高は8.1m前後である。F区南西隅に続くと思われるが、D区北西部に位置する耕地整理前の「堀田」に切られる。

#### S X407・S X408・S X409 (図版34、93)

近世の「堀田」遺構と考えられる。形態は凹地遺構B類に分類されるが、壁面が明瞭に立ち

上がっており、中世のそれとは異質な印象を受ける。覆土はともに黒灰色土の単層である。底面の標高はS X407が8.10m前後、S X409が8.15m前後である。S X409は浅い段を北側縁辺に付帯する。共に耕地整理事業前の「堀田」に切られる。

S D404・S D405 (図版33、34、93)

S D403の覆土を切って掘りこまれた溝である。覆土はS D402・S X409のそれと区分できない。S X409の南側、D区南東隅ではほぼ直角に分岐する。底面の標高は8.2～8.25mを測る。

## 第IV章 細池遺跡の遺物

今回の調査で出土した遺物の量は、深さ20cmのコンテナで約22箱と少ない。その大半が奈良・平安時代のもので、ほかに中世・近世のものがわずかに含まれる。遺物の多くは遺物包含層であるIII層出土のものである。そのため共伴関係を確認しうる一括遺物は少量にすぎない。土器については器形を復元し得るものを見出し、実測・記述し報告した。

主体をなす奈良・平安時代の遺物には須恵器・土師器がある。ほぼ9世紀後半に位置づけられるものである。土師器の出土量が須恵器を上回る。そのほか、時期不明の石製品や鉄製品がわずかに出土している。また、須恵器や珠洲焼の破片を研磨具・研削具に転用している例もみられる。ここではまず奈良・平安時代の遺物について述べた後、その他の時代について取り上げる。なお、巻末に土器観察表（別表1）を付し、出土地点・器種・種別・法量・胎土・色調などを記した。

### 1. 奈良・平安時代の土器

はじめに須恵器・土師器について各器種の概要を述べる。器種分類については、山三賀II遺跡における器種分類〔坂井1989a〕に従った。各器種で細分が可能なものについては、A・Bなどのアルファベットを使用する。同一器種のうち法量が異なるものには、I・II・IIIのローマ数字を用いる。なお、ここでは寺道上遺跡A・B地点出土土器を併せて器種分類を行うこととするが、第9図にはそれらの実測図を含めないのでおく。

#### 須恵器（第9図）

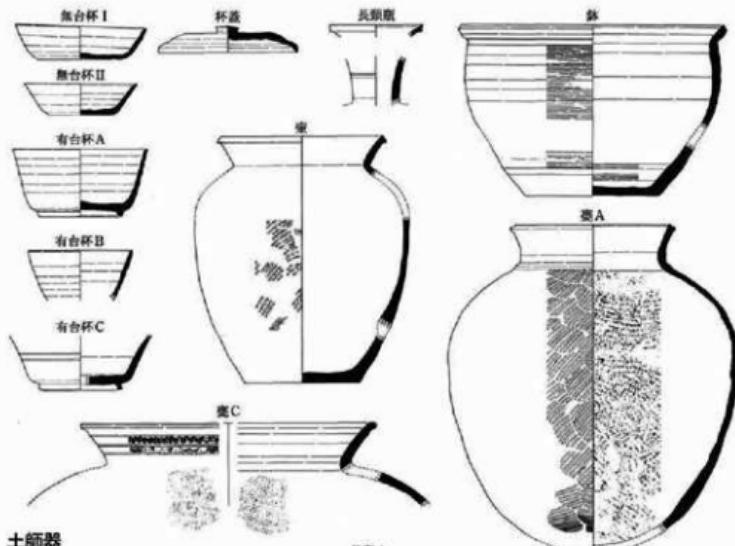
**無台杯** 高台の付かない杯。底部の切り離し技法は回転ヘラ切り（以下、ヘラ切り）で、糸切りによるものはない。法量の違いから口径14cm前後の無台杯I、口径12~13cmの無台杯IIに分類できる。器高はいずれも3~4cmである。

**有台杯** 高台の付く杯である。底部の切り離しはヘラ切りである。形態により3種類に細分できる。有台杯Aは、体部が薄く直線的で、口縁部が外反しない、身の深く大きいものである。口径13~14cm、器高6~7cm程度である。細池遺跡ではこの種の有台杯が多く出土している。有台杯Bは、有台杯Aより口径は小さいが、身の深いものである。口径11cm程度、器高4~5cmを測る。寺道上遺跡で多く出土している。有台杯Cは、体部外面に沈線をめぐらすものである。器形は有台杯Aに類似する。金属器を模倣したものと考えられる。本遺跡で1点だけ出土している。

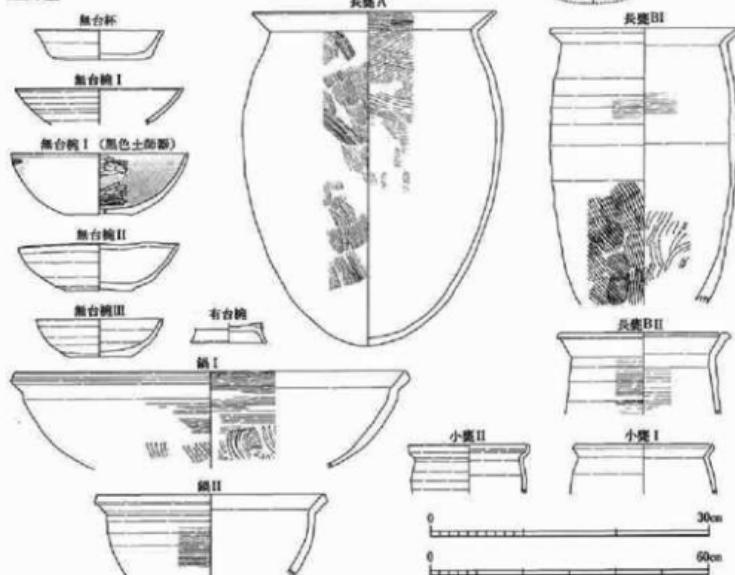
**杯蓋** 有台杯Aに伴うものはほかに、口径16cmの大形のものがある。

**折縁杯** 寺道上遺跡A地点の31にその可能性がある。底径が有台杯に比べ小さい。

## 須恵器



## 土師器



第9図 遺物の器種分類 (壺Cのみ1:12, その他1:6)

**壺** 強く外反する口縁部が特徴的である。体部はあまり張らず、底部は無台である。口径17cm、器高25cm程である。類例は少なく、地域色の濃いものと考えられる。

**長頸瓶** 頸部の細長い瓶。全形を知る資料は出土していない。

**小瓶** 口径5cm程度の小形の瓶。寺道上遺跡A地点で出土している。

**鉢** 口径26cmの小形のもの。

**甕** 形態により3種類に分類できる。甕Aは、短い口縁部に球形状の体部をもつもの。やや小形である。甕Bは、中形のもので、口縁が強く外反するもの。寺道上遺跡で出土している。甕Cは、口径50cmの大形のもので、口縁部外面に波状文を施す。

**窯道具** 寺道上遺跡A地点で出土。底部近くが穿孔されている。

#### 土師器（第9図）

**無台杯** 須恵器の杯を模倣したもの。身が低く、体部は底部と角度をもち直線的に立ち上がる。底部はヘラ切りである。

**無台椀** 高台が付かず、体部に丸みをもち、内面が滑らかに湾曲するもの。底部の切り離しは糸切りによる。法量により3形態に分類できる。無台椀Iは口径18cm前後のもので、身の浅いものと深いものがある。黒色土師器の無台椀もこの中に含まれる。無台椀IIは、口径16cmの中形のもの。無台椀IIIは、口径11~13cm、器高3~4cmの小形のもの。

**有台椀** 足の長い高台をもつ椀。底部より以上が出土していないため椀でない可能性が残る。

**長甕** 長胴の甕。製作技法の違いから2種類に分類できる。長甕Aは、体部全面にハケ目を施すもの。「く」の字状に屈曲する口縁部を有する。体部はふくらむ。底部は丸底である。長甕Bは体部にカキ目を施すもので、下半にタタキを施すものもある。口縁部は、端部をつまみ上げるものと、端部が肥厚し水平な面をもつものとがある。体部はふくらまない。口径20~25cmのもの（長甕B I）、口径16~19cmのもの（長甕B II）に分類できる。

**小甕** 長甕より器高が低い小形の甕。口径14~16cm（小甕I）と口径12~13（小甕II）とがある。ただし、小破片のため厳密には区分できない。

**鍋** 手法は長甕Bと同じで、口径35~39cm（鍋I）と口径24cm（鍋II）とがある。

**円筒状土製品** 寺道上遺跡A地点で出土している。

#### a) SK704 出土土器（図版51、102、103）

出土遺物はすべて土師器である。器種は無台椀・鍋がある。1~3は、すべて無台椀IIIで、同じ形態を呈す。底部は糸切り無調整、ほかはロクロナデである。口縁部内面が丸く肥厚し、外面にロクロナデによる凹凸がみられる。いずれも胎土は精良でよく似ている。1は焼成が硬質である。4は口径38cmの鍋Iである。口縁部は平らな面をもち、端部は丸く取まる。体部外面にカキ目、外面の屈曲部には強いロクロナデが施される。胎土や焼成が1~3と近似する。

## b) SK705 出土土器 (図版51、102)

出土遺物は土師器無台碗で、4個体が並んで出土した。無台碗II(5)と無台碗III(6~8)に分類される。口縁部内面が肥厚する点など、SK704出土無台碗と同じ形態をとる。いずれもロクロナデ・底部糸きりと思われるが、6・8は器面が摩滅しているため確認できない。7の底部は、強いロクロナデのため段を有する。胎土・焼成から5と7は胎土・焼成などの特徴が近似する。

## c) SK707 出土土器 (図版51、102、103)

土師器無台碗I(9)・鍋II(11)・長甕の底部(10)が出土している。9はロクロナデ・底部糸切りで、口縁部がやや外反する。胎土に海面骨針が混入する。10は外面に平行文タタキ目、内面に指頭圧痕状のくぼみが多数あり凹凸が著しい。11は口縁部をロクロナデ、体部内外面ともカキ目を施している。口縁端部は上方につまみ上げられている。また、体部外面には幅2mmの沈線が二条回る。

## d) SX808出土土器 (図版51、103、105+)

土師器鍋I(12)と長甕の底部(13)が出土している。12は体部内外面上半・口縁部内面にカキ目がみられ、体部下半はカキ目を施した後にタタキを加えている。外面は平行文タタキ目、内面には同心円文あて具痕が残る。他はロクロナデである。13は外面に平行文タタキ目、内面に同心円文あて具痕を残す。

## e) その他の遺構・包含層出土土器 (図版52~55)

前述した遺構以外の遺構出土土器と包含層出土土器について述べる。出土地点は観察表を参照されたい。

## 須恵器 (図版52~54、102、104~106)

無台杯(14~21・29) 14~21は無台杯IIである。底部はすべてヘラ切りで、糸切りのものはない。14~16は、底部外面と体部の境が丸く、口縁部はやや外反するものである。内面の境はくぼみ、底部側は厚く盛り上がる。焼成はやや軟質である。16は底部ヘラ切り後、中央に一方向ナデを加えている。また、条線状圧痕もみられる。17~21は、底部と体部の境が角張り、体部が直線的に立ち上がりものである。口縁部は外反しない。内面は底部に凹凸があり、体部との境は14などに比べ丸くない。器壁は薄く、焼成は硬質である。17は他のものより丸みがある。20の底部外面には条線状圧痕がみられる。29は口縁部が強くくびれ、端部は水平な面をもつものである。外面には自然釉がかかる。無台杯Iと考えられるが、小破片のため断定できない。また、口径が若干大きくなる可能性が残る。

**有台杯（22～28）** 22は有台杯Cで体部外面に沈線を二条めぐらす。底部外面と体部の境は角張り、体部はやや外反しながら立ち上がる。高台は内端接地で、内面側が強いロクロナデのためくぼむ。底部内面には、ロクロナデのあと一方向ナデを加える。23・24・27・28は有台杯Aである。器壁は薄く、体部は直線的に立ち上がる。23はロクロナデの凹凸が比較的大きい。高台は厚く、内傾して外端接地となっている。接地面はロクロナデで面取りされる。底部外面のヘラ切り痕は、ロクロナデにより丁寧に消されている。24の高台は薄く、内傾して外端接地となっている。28はやや浅めのものである。外面に自然釉がかかる。26は器壁がかなり薄く、小形のため有台杯Bと思われる。23、24、26、27は胎土に微細な白色粒子を多く含み、同じ窯跡群の製品であることを窺わせる。

**杯蓋（30～33）** 有台杯Aに伴うもの（30～32）と径16cmのやや大形のもの（33）がある。いずれも天井部にロクロケズリが施され、30以外はヘラ切り痕をとどめる。32は縁部が外面側に屈曲したのち端部となるもので、それ以外は縁部が屈曲しない。30は器壁が厚く、器形の亞みが強いものである。端部はやや内側に屈曲する。つまみ中央の突起は周縁より低い。外面全体に自然釉がかかる。31は天井部のロクロケズリが他より幅広い。端部の屈曲は緩い。つまみは小さく、中央の突起は周縁より高い。32・33は端部が小さく、内面側に明瞭に屈折する。33はロクロナデが丁寧で、縁部に自然釉がかかる。

**壺（34、35）** 両者ともほぼ同じ形態・手法を取る。広口で、口縁部が強く外反し、端部は外側下方に引き出される。34は体部外面に平行文タタキ目、そのほかはロクロナデで、内面にあて具痕はみられない。体部外面には、下端を除きオリーブ黒色の自然釉がかかる。35は体部上位に浅い沈線がまわる。外面のタタキ目は、ロクロナデにより消されている。体部内面下半には、下から上にナデを施す。外面には口縁部と肩部にのみ自然釉がかかる。これらの壺は、直口壺の系統を引くものと思われるが、口縁部形態が特異で類例が少ない。

**甕（36、42、43）** 36は短い口縁部をもつ甕Aである。口縁端部は平らに面取りされている。外面に平行文タタキ目、内面に格子目文あて具痕が残る。42は大型の甕Cで、43は42と同一個体の体部片である。口縁部は強く外反し、外面に波状文が施される。体部外面はタタキのあと筋状にナデを加えている。内面は上半に同心円文、下半に平行文のあて具痕を残す。

**鉢（37）** 短く開く口縁部をもち、端部は上方につまみ上げられる。口縁部は内外面ともロクロナデである。体部外面は下部に粗いナデ、その上方はカキ目である。体部内面は下部にカキ目、それ以外はロクロナデである。底部外面には明確な切り離しや調整痕はみられない。

**長頸瓶・長頸壺（38～41）** 38は長頸瓶の口縁部である。端部は上方につまみ上げられ、下方にも引き出される。39は長頸瓶の頸部で、外面中央に沈線が二条まわる。40は壺の体部で、外面にカキ目、内面にロクロナデを施す。41は長頸瓶の高台部で、端部が下方と外側につまみ出される。

**その他（44、45）** 44は器種不明の底部である。底部外周が直線的であることから円形を呈

さないものと考えられる。外面に平行文タタキ目、内面にハケ目がみられる。体部外面には切り離しや調整痕はみられない。45は外面に平行文タタキ目、内面に放射状のあて具痕を残す体部である。本遺跡で放射状のあて具痕を残すものは、この1個体のみである。

#### 土師器（図版54～56、102、103、105～107）

**無台杯（46～48）** 器形・手法が須恵器と同様で、底部をヘラ切りするものである。口縁部はやや外反し、底部と体部の境は角張る。46は内面のロクロナデが不良で起伏が残る。47は底部内面にロクロナデの凹凸が著しく、体部に丸みをもつ。48は底部内面と体部の境がくぼみ、その内側は厚く盛り上がっている。焼成は硬質である。

**無台碗（49～53、55～57）** ロクロナデ・底部糸切りのものである。無台碗I（49～53）とII（55～57）に分類される。49・50は、硬質で器壁が厚く色白な点で、他の無台碗と特徴を異なる。胎土・焼成が無台杯46に似ている。49はロクロナデが丁寧で、器面が滑らかである。50は体部外面底部付近にヘラケズリ、その上に強いナデを加えるため、凹凸が著しい。内面に浅い沈線が一条回る。51・52は、口縁部内面にふくらみを持ち、器壁が薄く、焼成が軟質である。SX704やSX705出土の無台碗と同じ色調・胎土を有する。53は口縁部が外反し開くものである。胎土に「海面骨針」を多量に含む。55は内外面に横方向のヘラミガキを加えるものである。外面にはロクロナデによる凹凸がみられる。胎土はSX704出土遺物に近似している。56・57は黒色土器である。身が深く、大形のものである。内面には黒色処理後、ヘラミガキが加えられる。両者は胎土・色調が似ている。56は口縁部が浅くくびれ、丸みを帯びるものである。内面と口縁部外面にミガキ痕を観察できる。57の体部外面上部には、幅5mm程のミガキが筋状に横走する。底部に切り離しの痕跡を観察できず、糸切り後ナデ消された可能性がある。

**長甕（58～63）** A類（63）とB I類（58～61）・B II類（62）がある。58は口縁部が強く外反し、端部は上方に軽くつまみ上げられる。内外面とも体部上半にカキ目がわずかにみられ、下半には明瞭なタタキ目とあて具痕が残る。底部は丸底であろう。59は口縁部は緩やかに外反し、端部は上方へつまみ上げられる。内面にカキ目が残る。60は摩滅が著しく、外面にわずかにカキ目が観察される。61・62は口縁部端が外側につまみ出され、肥厚し、平らな面をもつものである。このような口縁形態は類例がなく、この地域独特のものである可能性が高い。体部外面のカキ目は口縁部直下まで施される。62は器面調整が丁寧で、焼成は硬質である。内外面にカキ目が施される。63はSX410出土のもので、内外面にハケ目を施すものである。口縁部外面はヨコナデである。ハケ目の工具は内外面で異なる。内面ハケ目上に縱方向の指頭圧痕が観察される。これは外面ハケ目の際、内面を手で押えた痕跡と考えられる。

**小甕（64～68）** 64～66は小甕IIである。64は口縁部の屈曲が明瞭で、端部は丸く取まる。口縁部下はナデにより段状を呈す。65は口縁部が屈折して立ち上がり、端部内面が肥厚する。66は口縁部が緩く外反し、端部は上方につまみ上げられる。体部にロクロナデによる凹凸がみ

られる。67は小甕 Iである。口頸部は「く」の字状に外反し、端部は上方につまみ上げられる。体部は梢円形を呈するものと思われる。68は小甕の底部で、切り離しはヘラ切りによる。64~67は68のような平底の底部を有すると考えられる。

鍋 (69~71) 69は鍋IIで、体部が半円球を呈するものである。口頸部は「く」の字状に外反し、端部は面をもつ。体部外面と内面の一部にカキ目がみられる。70・71は鍋Iである。70は口縁部が丸く肥厚し、端部は上方につまみ上げられる。内外面にカキ目が施され、外面には一部ヘラケズリがなされる。器壁が薄く、焼成は硬質である。71は口縁部が短く屈折し、端部に平坦な面をもつ。体部外面は上半がカキ目、下半にタタキを施す。内面には一部ハケ目が残る。

## 2. 中世・近世の陶器・磁器 (図版56、107)

72は青磁碗で、内面に鶴花文が描かれる。73は白磁皿の底部である。底面はケズリ出しにより整形されている。内面に釉がかかること。74は素焼の鉢である。体部外面と底部にロクロケズリの痕跡が残る。内面はロクロナデを施す。75は陶器の摺鉢である。口縁部は肥厚して断面三角形状を呈し、外面に沈線二条、内面は突帯上側にV字状の沈線一条を施す。口縁部下に幅5mm程のヘラケズリを施す。櫛目は9本で、単位数は不明である。無釉で、堅く焼き締められる。

## 3. 土製品 (図版56、107)

転用研磨具・研削具 (76~79) 77は須恵器、76・78・79は珠洲焼の甕の胴部片であるが、器面が平滑で明瞭な擦痕を観察できる。76の周縁には整形時にできたと思われる工具の擦り切り痕がみられる。76は正・裏面に作業面をもつ。正面は全面使用され、断面がU字状の凹溝や擦痕が見られる。重量は66gである。77・78は正面と二側面に作業面をもつ。正面中央部に擦痕が走る。重量は77が112g、78が179gである。79は他に比べ小形で、正面と一側面に作業面をもつ。擦痕はあまり明瞭でない。重量は26gである。

円盤状土製品 (80) 須恵器甕の胴部片を丁寧に打ち欠き円盤状に整形したものである。擦痕やミガキ痕などは見られない。用途は不明である。長径3.9cm、短径3.8cmで、重量は28gを測る。

## 4. 石製品 (図版57、108)

81は加工痕のある礫である。左側面に素材切り出し時のものと思われる溝状の擦痕を二箇所残す。剖面以外の面は平滑で、右側面には平坦な面をもつ。しかし、明確な擦痕などは見られ

す、用途は不明である。石材は軽石で、長さ9.6 cm、幅7.3 cm、厚さ4.0 cm、重量173 gを測る。82は砥石である。上方が細く絞り込まれた直方体を呈し、正・裏面と両側面に作業面をもつ。正・裏面は作業により断面U字状にくぼんでいる。石材は安山岩で、残存長9.0 cm、幅8.2 cm、厚さ2.6 cm、重量354 gを測る。83は右側面に擦面をもつ石である。正・裏面に器面の荒れが見られ、左側面は一部を欠きくぼんでいる。砥石として使用されていた可能性が高い。石材は砂岩で、長さ10.8 cm、幅8.6 cm、厚さ3.8 cm、重量は403 gを測る。

#### 5. 金属製品（図版57、108）

84は鉄轍である。85は方形で板状のものである。上端部断面は三角形状に尖り、下部はやや折れ曲がっている。刃部は認められない。銹化が著しい。86はキセルの吸口で、銅製のものである。断面は円形で、羅字につながる部分から徐々に細くなる。中に竹と思われる木質部が残っている。

#### 6. 銭貨（図版57、108）

S X902 から銭貨 6 点が重なって出土している。銹化が著しく接着しているため、銭貨名を解読できるもの 2 点を図示する。87は嘉祐通宝（宋、初鑄1056年）、88は聖宋通宝（宋、初鑄1101年）である。

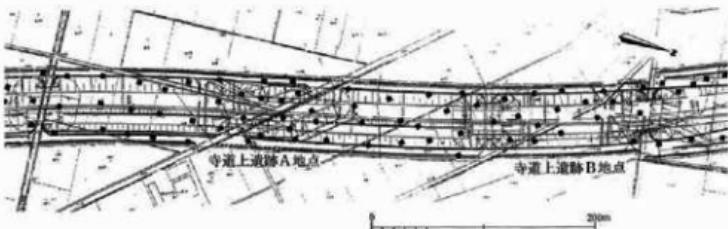
#### 7. その他

8 D-16において窯壁の破片と思われる土塊が出土している。また、調査区内に軽石が散在してみられた。擦痕等は観察されず、用途は不明である。

## 第V章 寺道上遺跡A地点

### 1. 第一次調査（第10図）

第一次調査は、県教育委員会が平成2年10月1日から10月18日の間に、細池遺跡を併せて実施した。新津市大字飯柳および大字東金沢地内の磐越自動車道法線内を対象に、5m×2mのトレンチを173基設定し、遺物・遺構の有無、土層堆積状況を確認した。土師器・須恵器片が出土し、溝やピットが多数確認され、寺道上遺跡は平安時代の水田跡および集落跡の性格をもつものと考えられた。この調査結果から、寺道上遺跡第二次調査範囲をセンター杭No.830+20m付近からNo.832+20付近の11,600m<sup>2</sup>（寺道上遺跡A地点）とNo.833+20m付近からNo.835+40m付近の10,800m<sup>2</sup>（寺道上遺跡B地点）とした。



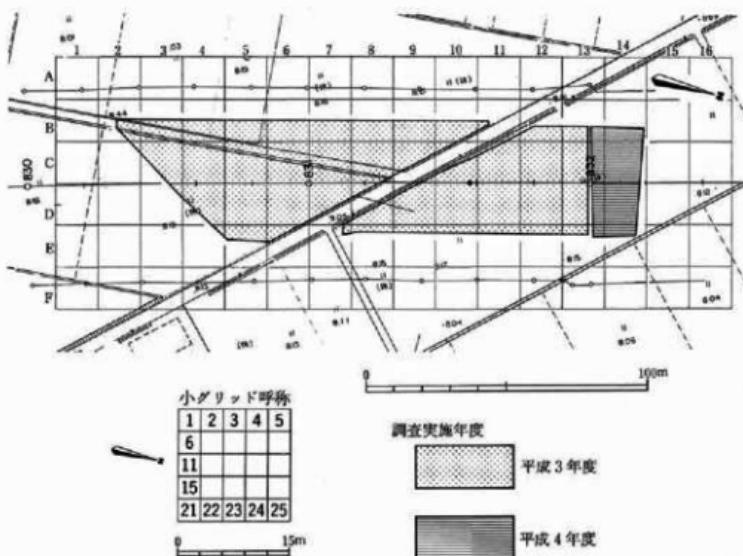
第10図 寺道上遺跡第一次調査位置図

### 2. 第二次調査

#### A. 調査の方法

寺道上遺跡A地点は細池遺跡の北方に位置しており、細池遺跡北端と寺道上遺跡A地点南端との距離は約150mである（図版6）。遺跡の大部分は先行盛土工事区域と重なっており、この部分を平成3年度に調査し、これ以外の区域を平成4年度の調査とした。調査範囲の中心には市道が横断しており、この部分は磐越自動車道の工事工程との調整がつかず、調査を実施していない。

グリッドの設定（第11図）磐越自動車道のセンター杭No.831とNo.832を結ぶ線を基準とし、センター杭No.831を起点に15mの方眼を組み、これを大グリッドとした。このため、グリ



第11図 寺道上遺跡A地点グリッド設定図

リッドの長軸方向は真北から14度35分19秒西偏している。大グリッドは長軸方向を南から算数数字、短軸方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。大グリッドはさらに3m四方に分割して1~25の小グリッドとし、8D~21のように表記した。

排水方法 調査においては、地下水の湧出と降水に対処するため、暗渠を敷設した。詳細は細池遺跡とほぼ同様であり、「第III章1A」に記述している。また、暗渠以外にも調査区域の状況に応じて適宜小さな溝を掘った。

#### B. 調査の経過

発掘調査は平成3年7月8日~同年12月7日、平成4年4月24日~同年5月28日の間、2年度にわたって実施した。便宜的に調査区域の中央を横断する市道で調査区を二分し、それぞれを北区、南区と呼称する。

第1年次は細池遺跡C区調査終了後に南区から着手した。重機による表土除去の後、7月15日に作業員を投入して遺物包含層の調査を始めた。着手当初は、暗渠の設計不備のため降雨の度に調査区が冠水し、作業が遅滞した。また、溝と凹地遺構が複雑に重複し遺構の分布密度が予想以上に高かったため、8月初旬には作業員を再募集した。排水が不十分な状況での作業のために、各遺構の平面形や切りあい関係を誤っている箇所も見られ、沖積地の遺跡調査における

る排水の重要性を再認識した。南区南端部分約600m<sup>2</sup>については、第2年次の調査予定であったが、遺構・遺物の分布が稀薄であると予想されたため、これを含めて調査を行った。なお、9月下旬には台風19号の強風を受けてプレハブの調査事務所が基礎杭から脱落して部材が大きく歪み、ガラス窓が一部損壊した。

10月9日、予定をかなり遅れて調査作業の主体を北区に移動した。10月末頃から雨天の日が多くなり、乾燥した状況で作業を行うことが次第に困難となった。さらに、北区を横断する幅3~4m、深さ1m前後の溝(S D40)を掘り進むうち、遺構底面が暗渠内のドレンホースより深度が下がり、雨水・湧水がこれに停滞した。このため、集水枠を深く設置し直し、排水ポンプを増やして排水に努力した。冷たい雨の中での作業も度々であったが、11月21日実質的な調査作業を終了し、12月7日に現場事務所を撤収した。

第2年次の調査は、第1年次調査区域の北側約970m<sup>2</sup>を対象に行った。第1年次には、この区域の表土除去および暗渠敷設を併せて行っていたが、砂泥が暗渠上面を覆って機能が停止していたので、調査はこれを掘り出す作業から始まった。調査は寺道上遺跡B地点と一部並行して行い、5月20日には実質的な調査を終了した。



第12図 寺道上遺跡A地点調査風景（左：北区、右：南区）

### 3. 層序（第13図）

寺道上遺跡A地点の調査範囲は南北190m、東西約40mにわたる。現地表の標高は7.6m、~8.2mを測り、南から北にごく緩く傾斜している。若干の起伏があるもののおおむね平坦である。基本層序は、明確に分離されるI~IV層であり、微妙な差異はあるものの細胞遺跡の基本層序と共通する。場所によって一部土層の欠落、厚み・色調の変化があるものの、I~IV層は調査区域の大部分で共通して堆積している。

I層 現水田耕作土の灰褐色粘土である。

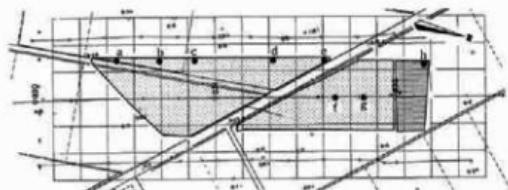
II層 鉄分の沈着がみられる灰褐色土あるいは暗褐色土で、色調に若干の変化がみられる。

土層の平均的な厚さは10cm~15cmである。遺物を含んでいないため、堆積した時期は明らかではないが、細泡遺跡のII層に対比される土層である。洪水等による一時的な堆積である可能性が考えられる。

III層 マンガン・鉄分の沈着が濃く認められる黒褐色土層である。厚さは10cm~25cm程度を測る。奈良・平安時代の遺物包含層である。中世の遺物はこの層には含まれておらず、すべてが造構覆土から出土している。検出された遺構のはとんどがこのIII層を切り込んで構築されており、III層上面で遺溝の平面形を把握できるものもある。

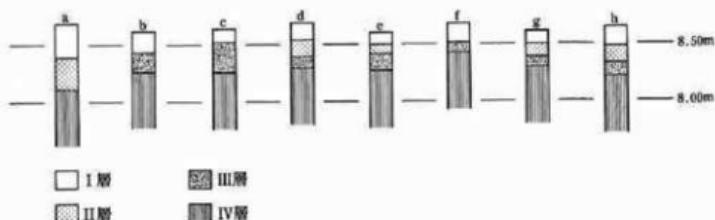
IV層 黄灰色を呈するシルト、または同色の粘土質シルトである。1m前後の厚さがあり、この上面を最終的な遺溝確認面とした。IV層上面は、南区南端を除いて標高8.3m前後で一定している。IV層の下位は漸移的に植物遺体を含む暗青灰色粘土に変化していく。

なお、南区南縁部では土層のあり方が上述の説明とは大きく異なっている。II層は南にむけて漸次粘土質化し、南端では厚さ約30cmを測る。III層は認められない。IV層は南にむけて徐々に黄灰色から青灰色に変化し、軟弱な粘土質の土層となる。造構はIV層が黄灰色から青灰色に変化する点付近で不明瞭となる。



日本道路公団新潟建設局新潟工事事務所作成  
1:500 昭和63年測図

100m



第13図 寺道上遺跡A地点土層柱状図

#### 4. 遺構各説

遺構の分布密度は高く、凹地遺構と溝が複雑に重複している。調査区南東部はIV層上面が緩やかに下降して粘土質化しているため、遺構は次第に収束し、北東部は遺構の密度が低くなっている。多くの遺構は、覆土から土師器片・須恵器片が少量出土するが、これらは遺構の年代と必ずしも一致しない。奈良・平安時代の包含層であるIII層と遺構との関係については、多くの遺構がIII層を切り込んで作成されており、そのうえSD38・SX42・SD44の覆土から土師器・須恵器の他に中世陶器の細片がそれぞれ1片含まれているため、遺構の年代はおおむね中世と考えられる。ただし、SX55およびSX53の周辺の土坑・ビットが奈良・平安時代の遺構とみられる。

凹地遺構は18基検出されており、これについては、第III章4でその分類と概略を述べているので、それにしたがって記述するが、寺道上遺跡A地点ではA類のみであり、B類・C類の凹地遺構を欠いている。なお、凹地遺構の構造については凹凸面と中央平坦面の識別に不明瞭なものが多く、これらについては周溝以外の面を「中央平坦面」と記述することにする。

以下、遺構の種類にかかわらず、北および東から順次説明してゆく。巻末の図版に土層断面図がないものについては、文中で簡略な説明を加えた。

##### SD52（図版35～38、95）

SD40に接して北西方向にのびる溝である。幅1.7～2.3m、深さ55～65cmを測る。底面の標高は7.15～7.30mで、SD40方向に緩く下降している。SD52はSD56によって「掘り直し」を受けており、12D以西では両者は完全に重複している。

##### SD56（図版37、38）

11D付近の一部を除いてSD52・SD38と重複し、その覆土中に掘り込まれた溝である。底面は、SD52のそれより10～15cm、SD38よりは約20cm高い。

##### SD51（図版35、36、38、95）

SD52とはほぼ平行し、その西側に位置する。幅約1.5m、深さ35～45mを測る。標高は7.32m前後である。12Dでは浅い溝でSD52と結ばれる。

##### SK59（図版5、95）

北区北端西部に位置するもので、検出した面積はわずかであるが、凹地遺構A類の可能性も考えられる。底面の標高は7.35～7.39mを測る。隣接するSD44とは明瞭な切りあい関係が認められない。

##### SD44（図版35～38、94、95）

SD52・SD51と平行して、SD40に接する溝である。また、SD40に接する点からSD40

に沿って東へのび、S D51に接する。幅1.1~1.5m、深さ34~54cmを測る。

S X58 (図版35、36、95)

北区北西隅に位置するA類の凹地遺構である。周溝の内側には凹凸の著しい面が付帯する。検出した面積は46m<sup>2</sup>である。周溝底面の標高は7.39~7.46m、中央平坦面の標高は7.46~7.52mを測る。

S X47 (図版36)

13Bに位置するA類の凹地遺構で、検出した面積は13m<sup>2</sup>である。周溝の底面は標高7.36~7.40m、中央平坦面は標高7.44~7.52mを測る。覆土は暗灰色の粘質土である。

S X50 (図版36、94)

13Bに位置するA類の凹地遺構で、検出した面積はわずかに4m<sup>2</sup>のみである。周溝の底面は標高7.39~7.40m、中央平坦面は標高7.42~7.48mを測る。覆土は暗灰色の粘質土である。

S X46 (図版35、36、94)

S D40の北縁に接するA類の凹地遺構で、面積は28m<sup>2</sup>である。周溝底面の標高は7.42~7.49m、中央平坦面の標高は7.46~7.53mを測る。S D40との切りあいを確認していないため、検出された範囲が遺構の全体であるのか、S D40と重複するのか明らかではない。覆土は暗灰色土である。

S D40 (図版35~38、94、96)

北区中央を東西方向に横断する溝である。上端幅2.7~4.1m、下端幅50~150cm、深さ92~110cmを測る。底面の標高は6.76~6.89mで、東から西に緩く下降している。覆土下層は黒色泥炭層であり、マンガン・鉄の結核を小粒状に含んでいる。覆土上層は鉄分の沈着が濃い。S D34・S D56に覆土が切られている。このほかの切りあい関係は不明である。

S X43 (図版35、36、94、95)

北区12Bに位置するA類の凹地遺構である。検出した面積は36m<sup>2</sup>、周溝底面の標高は7.40~7.48m、中央平坦面の標高は7.52~7.58mを測る。

S X42 (図版37、38)

S D52の東側に位置するA類の凹地遺構である。面積68m<sup>2</sup>、周溝底面の標高7.38~7.45m、中央平坦面の標高7.47~7.61mを測る。周溝は周壁から離れてめぐっている。覆土は暗灰色の粘質土である。S D41の覆土を切り、S D52に切られる。

S D41 (図版38)

11Eにある溝で、幅40~50cm、深さ26~27cm、底面の標高約7.50mを測る。覆土はIII層に近似した黒褐色土で、平安時代の溝の可能性がある。S X42に覆土を切られている。

S X55 (図版38)

北区東縁中央に位置する。調査当時はS X42、またはS D40の一部と認識していたために十分な記録がなされていないが、方形を呈する遺構の一角と考えられる。須恵器・土師器がまと

まって出土しており、住居跡の可能性がある。底面の標高は、7.48～7.52mを測る。

S D34 (図版38、40、41、94)

南北調査区間の農道に平行して、その北側にのびる溝である。幅90～150cm、深さ27～36cmを測る。底面の標高は7.52～7.59mである。S X53・S X47・S D40の覆土を切っている。

S D35・S D35b (図版37、38、40、94、96)

S D35は、北区南東隅からS D40に接してのびる溝である。北半では、この溝の両側に帯状の掘り込みがあり、この部分をS D35bとする。S D35は、幅90cm前後、深さ50～55cmを測る。底面の標高は7.26～7.38mで、S D40に向かって緩く下降している。S D35bの底面はS D35に平行する繊状の浅い溝が2条見られる。S D35bの面積は44m<sup>2</sup>、底面の標高は7.50～7.60mを測る。S D35と切りあい関係はなく、両造構は同一に機能していたものと考えられる。

S D38 (図版37、38)

S D35とはほぼ平行し、その東側に位置する溝である。北端はS D40と接し、南端は調査区域外にのびる。幅1.5～2.2m、深さ58～64cm、底面の標高は7.23～7.27mを測る。本造構の覆土中にS D56が掘り込まれている。

S K49 (図版40)

II C 16に位置する不整形の土坑である。断面形は袋状を呈し上端より下端が広い。底面は長径140cm、短径75cmで、深さ約17cmを測る。覆土には粒子の粗い炭化物が多量に含まれる。壁面および底面に被熱の痕跡は認められない。

S K48 (図版40)

S K49に隣接し、それと断面形および覆土がよく似た土坑である。底面は長径130cm、短径75cmで、深さ22cmを測る。

S X53 (図版39、40、96)

10C・10Dに位置するA類の凹地造構である。造構全周にテラス状の面が作り出されており、北側テラス内側には溝状の浅い掘り込みがめぐっている。底面中央は細長い島状に8cmほど高まっている。この島状部の標高は、7.35～7.42mを測る。面積は59m<sup>2</sup>である。覆土は暗灰色の粘質土であるが、底面直上付近には黒褐色土の堆積が見られる。S D34に覆土上面を切られるが、S D39との切りあい関係は認められない。

S D39 (図版40、96)

S X53東端とS D35bに接する溝である。断面はV字状を呈し、幅70～90cm、深さ29～35cmを測る。底面の標高7.51～7.60mである。

S X54 (図版41、42)

北区東縁南部に位置するA類の凹地造構である。検出された面積は67m<sup>2</sup>、底面の標高7.52～7.59mを測る。S D35と切りあい関係は不明である。

## S D 36 (図版42)

9 D 21～8 D 22にある南北方向の溝である。幅40～110cm、深さ約5cm、底面の標高は7.53m前後を測る。

## S D 37 (図版42)

8 D 22で S D 36から分岐する溝である。最大幅1.1m、深さ7～12cmであり、底面の標高は7.51m前後を測る。覆土は暗青灰色の粘質土である。

## S X 33 (図版42)

北区南東隅から南区北縁中央に位置する。遺構中央は調査区域外であるが、同一のA類の凹地遺構と考えられる。底面の標高は、7.44～7.55mである。

## S D 32 (図版42)

8 E - 4で S D 3 5から分岐し、5 D 13にのびる南北方向の溝である。南端はIV層が軟弱で東に下降しているため、輪郭が不明瞭となって途切れる。幅2.1～1.5m、深さ7～21cmを測る。底面は凹凸が著しい。

## S D 1 (図版40、42、44)

南北調査区間の市道にはば平行して、その南側にのびる溝である。東端は屈曲して S D 5と接する。幅50～110cm、深さ19～42cmを測る。底面の標高は7.45～7.62mで西にむけて緩く下降している。東端部で交差する S X 3・S X 4・S X 33との切りあいは不明である。

## S D 2 (図版44、46)

9 C 12で S D 1より分岐して 6 C 20にのびる溝である。南端は S D 10と接する。幅80～100cm、深さ20～38cm、底面の標高は7.48～7.55mを測る。

## S X 6 (図版40、97)

10 Bに位置し、S X 3と重複する。調査範囲内では周溝は確認できないが、S X 8・S X 8 bのように二重構造をもつA類の凹地遺構の一部と思われる。底面の標高は7.55～7.62mを測る。底面の凹凸は比較的少ない。覆土は上下2層に大別され、上層は暗灰色粘質土、下層はIV層の土粒を斑点状に含む黒褐色土である。

## S X 3 (図版39、40、97)

10 Bに位置するA類の凹地遺構である。底面中央は8～12cm低く掘り込まれている。S X 6と重複する西側部分には周溝はみられない。底面の標高は、東側が7.38～7.45m、西側が7.41～7.52m、周溝底面の標高は7.45～7.49mである。面積は22m<sup>2</sup>を測る。本遺溝と S X 6との切りあい関係は不明である。覆土は暗灰褐色の粘質土であり、下位は酸化鉄の沈着が濃い。

## S X 4 (図版39、40、97)

9 B・9 Cに位置するA類の凹地遺構で、S X 3とはば平行の位置関係にある。南側の周溝は壁から離れている。周溝底面の標高は7.42～7.55m、中央部の標高は7.55～7.62mを測る。

S D 1・S X 8・S X 8 bと重複するが、前後関係は明確でない。

#### S X 8・S X 8 b (図版43, 44, 97)

S X 8は南区北側に位置し、9 B～7 Dに長くのびるA類の凹地遺構である。面積は185m<sup>2</sup>である。周溝底面の標高は7.41～7.54m、中央平坦面の標高は7.52～7.58mを測る。S X 8の北側と西側に付帯する、相似形の浅い掘り込みをS X 8 bとする。この部分の面積は83m<sup>2</sup>である。底面の標高は7.64～7.77mを測る。重複するSD 5とは切りあい関係が認められない。これ以外の切りあい関係は不明である。

#### S D 5 (図版44, 46, 98)

8 B-15から5 D-12にのびる延長67mのL字状の溝である。幅0.9～2 m、深さ19～48cmで、底面の標高は7.16～7.39mを測る。8 C-3でS X 8と連結する小溝が付されている。

#### S K 57 (図版43, 44)

8 C-19に位置する不整形の土坑で、長径110cm、短径90cm、深さ16cmを測る。橙褐色の焼土を主とし、炭化物を粒状に混入する。

#### S D 10・S D 10 b (図版44, 46)

S D 10は8 B 18～5 D 11にのびる延長60mの溝である。底面の標高は7.22～7.84mで、北西にむけて下降している。幅は最大1.5m、深さは最大50cmである。7 C-13付近から北西の部分には両側に帯の状掘り込みがあり、これをS D 10 bとする。この部分の面積は81m<sup>2</sup>である。最大幅は約7 mを測り、検出された面積は、81m<sup>2</sup>である。深さ約5 cmのくぼみが織状に見られ、S D 35 bに近似する。また、底面の凹凸が著しい。S D 10との切り合い関係はみられない。覆土は黒褐色～黒灰色の粘質土で下位は酸化鉄の沈着が著しい。

#### S D 9 (図版44, 46)

7 C～8 Cにあり、S D 10とはほぼ平行にのびる溝である。両端はS D 11・S D 10 bと接する。幅40～90cm、深さ4～8 cm、底面の標高は7.67前後mを測る。底面は凹凸が著しく、S D 10 b・S D 11の底面より約40cm高い。西端では幅20～30cm、深さ約5 cmの弧状の小溝がS D 10 bと連結する。

#### S D 11 (図版46)

7 C～8 Cにあり、北端はS D 5に、南端はS D 10に接する。幅1～1.5m、深さ18～39cmを測る。底面の標高は7.42m前後で、S D 5・S D 10との切りあい関係は明確でない。

#### S X 13・S X 13 b (図版45, 46, 98)

S X 13は南区西縁中央に位置するA類の凹地遺構である。検出された面積は114m<sup>2</sup>、周溝底面の標高は7.44～7.49m、中央平坦面の標高は7.49～7.55mを測る。北側および東側の周溝に付帯する、相似形の浅い掘り込みをS X 13 bとする。S X 13 bは、面積11m<sup>2</sup>、底面の標高は7.69～7.76mを測る。覆土は酸化鉄の沈着が濃い暗褐色土である。なお、試掘坑西側の半円形の部分は掘り込みを受けていない。

## S D 7 (図版46)

7 Cに位置し、S X13とS D10 bとを結ぶ溝である。幅40cm前後、深さ約14cm、底面の標高は7.61m前後を測る。

## S D45 (図版46, 98)

S X13の弧状部頂点から、S X15・S X15 bを貫き、S X16の周溝に達する溝である。S D45は重複する遺構の覆土を切り込んでいる溝であり、それらとの関連性はない。

## S D28 (図版5, 46)

S D10とはほぼ平行し、その東側に位置する溝である。両端はS D5およびS D10に接する。幅0.5~1.0m、深さ10~26cm、標高7.36~7.42mを測る。

## S X15・S X15 b (図版45, 46, 98)

南区中央西部に位置するA類の凹地遺構である。S X15の北側に付帯する、相似形の浅い掘り込みをS X15 bとする。S X15は、長軸17.4m、短軸8.5m、面積129m<sup>2</sup>を測る。中央平坦面の標高は7.46~7.55m、周溝底面の標高は7.43~7.48mである。S X15 bは面積は35m<sup>2</sup>、標高は中央平坦面が7.71~7.77m、周溝底面が7.66~7.72mを測る。両縁辺に計6条の溝が見られるが、S X15・S X15 bとは時期が異なり、両遺構を貫いているものである。覆土は暗灰色の粘質土であり、底面直上付近はIV層土が斑点状に混入する。

## S D12 (図版46)

6 Cにあり、S X15とS D10を結ぶ溝である。幅80cm前後、深さ約25cmを測る。底面の標高は、7.54~7.58m、S X15の周溝底面より7cm高く、覆土はS X15と区分されない。

## S D60・S D60 b (図版46)

S D45とはほぼ平行してその南西側に走る溝である。重複するS X15・S X16・S X19とは時期が異なり、関連性はない。

## S X16 (図版47, 48, 99)

S X15の南側に位置するA類の凹地遺構である。北縁辺は、S X15の南縁辺とはほぼ平行の関係にある。南側はIV層に達していないため検出できず、全容を把握できない。周溝底面の標高は7.42~7.49m、中央平坦面の標高は7.50~7.56mを測る。覆土は暗灰褐色の粘質土である。

## S D14 (図版48)

S X16の北東隅とS D10を結ぶ溝である。幅50~90cm、深さ約8cm、底面の標高は7.65mを測る。S D10の底面との比高差は約30cm、S X16の周溝との比高差は20cm前後で、覆土はS X16と区分できない。

## S D21・26 (図版47, 48, 94, 99)

S X17の中央を平行して横断する溝である。両遺構とも同規模で、幅30~60cm、底面の標高7.35~7.42mを測る。S D26は、S X15の西端に交わる。

#### S D19 (図版48、99)

5 D - 6 から 5 B - 12 にのびる溝である。中央部は幅を広げ、溝内は 4 条に分かれる。東端は S D10 と接し、西端は S D20 に覆土を切られる。深さ 8~24cm、最大幅約 3m を測る。底面は凹凸が著しく、標高は 7.25~7.45m である。なお、S D19 に S X16 の周溝が含まれている可能性が考えられる。

#### S D25 (図版48、99)

S D19 と S X17 の間にのびる溝である。西端は S D19 と接し、東端は明確でない。幅 30~50cm、深さ 9~22cm、底面の標高は 7.42~7.53m を測る。S D21・S D26 と交わるが、両者との切りあい関係は不明である。

#### S D24 (図版48)

5 C - 21 で S D19 と交わり、緩やかに湾曲する溝である。幅 50~150cm、深さ 8~22cm、底面の標高 7.34~7.4m を測る。左右から L 字状の溝が 2 条分岐しているが、これらは輪郭が不明瞭である。

#### S D20 (図版47、48)

5 B - 12 から 4 C - 1 付近にのびる溝である。幅 1.3~1.5m、深さ 14~29cm を測る。底面の標高は 7.31~7.46m で、北西にむけて下降している。II 層および S D19・S X17 の覆土を掘り込んでおり、近代の溝と思われる。

#### S X17 (図版47、48、99)

S D19 の南側にある A 類の凹地造構である。東縁部の壁は確認できない。西側および南側の一部では周溝が二重にめぐる。標高は、周溝底面が 7.44~7.49m、中央平坦面が 7.51~7.58m を測る。西縁を S D20 に、中央を S D21・S D26 に切られる。覆土は暗灰色の粘質土である。なお、北西の頂部では、小溝が西方向にのびる。

#### S X18 (図版47、48、99)

4 B に位置する A 類の凹地造構で、検出された面積は 47m<sup>2</sup> である。北側部分の周溝は 2 重にめぐり、東側の周溝は、内部に細長い高まりを残している。周溝底面の標高は 7.40~7.47m、中央平坦面の標高は 7.48~7.55m を測る。東隅に短くのびる小溝が S X18 と S X17 を結ぶものと思われるが、S D20 に切られている。また、S D20 から直角に分岐する溝が S X18 の北縁部を切り込んでいる。覆土は周溝部底面付近が暗灰色粘質土、その他は灰褐色の粘質土である。

#### S D22 (図版48)

4 C に位置し、幅 40~50cm、深さ 7~18cm を測る溝である。底面の標高は 7.36~7.46m である。

## 第VI章 寺道上遺跡A地点の遺物

寺道上遺跡A地点の出土遺物総量はコンテナ14箱分で、調査面積に比べて相対的に少ない。土器は平安時代のものが大半を占め、わずかに中世陶器がみられる。その他に「器」ではない土製品や石製品が出土している。

遺物は包含層であるⅢ層からの出土が主で、一部は凹地遺構・溝などの遺構から出土している。遺構内の遺物は「第V章4」で述べたように、大半は遺構と同時期とは考えられない。このため、SX55を除く遺構の遺物は包含層出土土器とまとめてとりあげていくことにする。なお、石製品・金属製品を除く遺物については、巻末に詳細な観察一覧表（別表2）を付し、これに出土地点・種別・機種・法量等を記した。

奈良・平安時代の土器については、「第IV章1」で寺道上遺跡A地点・同遺跡B地点の土器を含めて器種分類しており、これにしたがって記述をすすめる。ただし、器形の全体が明らかでない一部の土器については分類を控えた。

### 1. 奈良・平安時代の土器

#### a) SX55出土土器（図版58、109～111）

SX55は、調査当時はひとつの遺構として認識されていなかったものであり、出土遺物を一括してとり上げることはやや厳密性を欠くと思われる。このため、ここでは11E-2グリッド以外で出土しているものを除外してSX55の出土遺物とした。

#### 須恵器

**無台杯（1・2）** 無台杯は2点とも無台杯IIに分類される。1は完形で出土している。体部内面はロクロナデの凹凸が明瞭であり、体部外面はその半ばにロクロナデによる緩いくぼみを残す。器面はなめらかで、水で濡らしてロクロナデをした際のヌタ状の構が残る。底部外面はヘラ切りで、条線状圧痕がみられる。底部内面は外周近くの器壁が厚く、中心部を隆起させる。2は口縁部に幅約8mmの色調の違いがあり、重ね焼きの痕跡が認められる。胎土は重量感のないものを使用している。底部外面にはわずかな条線状圧痕がみられる。

**有台杯（3）** 有台杯Bに属する。口縁は薄く外方に引き出され、その下端には浅い凹線がめぐる。底部にはナデによってシャープな後線がつくりだされる。高台はやや中心に寄り、外方へ張り出す。

#### 土師器

**無台椀（4～9）** 小形の無台椀III（4・5・6）、中形の無台椀II（7）、大形の無台椀I（8）、無台椀Iと推定されるもの（9）がある。4・5は体部下半がふくらみ、体部中位より

開く形態である。同一個体である可能性が高い。底面はヘラ切りで、円盤状に張り出している。6は体部が緩く湾曲しながら立上がる。これも底面は張り出しが、4・5のような明瞭な段をもたない。また、底面は糸切りである。7は大形で身の浅い椀である。体部下半が強く張り出し、口縁部が緩く歪んでいる。8は内面に丁寧なロクロナデを施される。9は底部糸切りの椀である。8とはほぼ同様な器形を示すと思われる。

長甕（10）長甕B Iに類する。口頸部はシャープなつくりで、口縁は上方へつまみあげられる。器壁は比較的厚く均一である。

小甕（11）底部のみの破片であるが小甕であろう。底部外面は糸切りである。底部外面周縁には細い半隆起線が1条めぐる。

鍋（12）大形製品で、鍋Iに分類される。口縁部は短く内湾気味にひらき、端部は上方へひきあげられる。体部は内外面にカキ目が施される。

b) その他の遺構・包含層出土遺物（図版58～62、109～112）

須恵器（図版58、59、110）

無台杯（13～20）16・18は無台杯Iに、他は無台杯IIに分類される。無台杯の底部切り離し技法はすべてヘラ切りである。13は体部に丸味をもち、底部から体部の境が不明瞭である。口縁部はわずかに外反し、接地面以外ロクロナデされる。底部内面の周縁は器壁が厚い。14は体部が丸みを帯び、口縁部はやや内湾気味で器壁は薄い。ロクロナデの凹凸が相対的に小さい。底部内面の周縁は器壁が厚い。15は底部が厚手であり、中央部付近でも6mm以上を測る。内外面共にロクロナデを丁寧に施されている。16は底部外面のヘラ切り痕が明瞭に見られる。底部から体部へ丸く立ち上がり、体部が直線的に開いた器形である。焼成は軟質である。17は底面が明瞭につくりだされ、体部外面にはロクロナデによる緩い段を持つ。18は体部が直線的に開き、器壁が薄くシャープなつくりである。19は体部が丸みを持って立上がり、口縁部が外反する。底面は中央付近のヘラ切り痕が明瞭である。体部下半から底部にかけての器壁が厚い。焼成は軟質である。20は身が浅く、底部は中央で持ち上がる。器面にはロクロナデの際のヌタ状の跡が見られる。底面には条線状圧痕が見られる。

有台杯（21～33）21は有台杯Bに、22～30は有台杯Aに分類される。31～33は全体の器形が不明である。有台杯底部の切り離し技法は無台杯と同じくヘラ切りのみである。21は口縁部を欠いているが、口径14cm、器高7cmほどと推定される。身が深く、底面には渦巻状のヘラ切り痕が明確に残り、底部外面周縁はロクロケズリをされている。高台は低く、接地面は狭くつくりだされている。22は高台の面取りがシャープではなく、貼りつけた粘土紐にあまり調整を加えていないようである。23・24は口径14.5cm前後、器高6.5cm前後の身の深い杯である。外面はロクロナデの凹凸が特に大きい。高台は低く、外端接地である。25は身の深い有台杯で高台は短く外側にふんばる。丁寧な調整である。高台の接地面に条線状圧痕が見られる。26も

身の深い有台杯と思われ、口縁部が外反し、その外面に沈線が1条施されている。底部外面周縁は面取りをされ、稜線がつくりだされる。ただし、それがナデによるものかケズリによるものかは不明である。27も高台の外周が面取りされ、鋭い稜線をもつ。高台は比較的幅広な断面方形の高台である。28は空気の混入による膨張部分が内面に見られる。器形が大きく歪んでいるために破片の接合が不自然になっている。また、体部下半外面は器面がはじけて剝落した小穴が密に見られる。高台は外端接地である。29は高台が外方へ張り出し、外端接地になる。高台は9mmと高く幅広で、接地面がロクロナデにより凹む。高台外面と底部の接合点は沈線状に凹んでいる。30は摩耗しているため不明瞭だが、高台の外周が面取りされている。高台は接地面の幅が狭く、外方へ張り出している。焼成は軟質で灰白色を呈する。

31は高台が著しく底部中央によっており、細長くつくりだされる。底部は内面中心が隆起する。折縁杯の可能性がある。32は高台部分のみ遺存する。その高さは2.2cmと高く、器壁は薄く、外方に張り出している。33は底部を欠いた破片であるが、有台杯と推測される。体部外面はロクロナデによる凹凸が明瞭で、内面はそれに比して平滑である。体部中央には浅く細い沈線が1条施されている。また、口縁は外面を肥厚させている。

**杯蓋（34-37）** 34は内面が摩耗しているため、硯として転用された可能性がある。ロクロナデによる凸部が磨滅しているため、その痕跡は螺旋状となる。しかし、墨痕は観察されない。その天井部外面はほぼ水平である。縁部は下方内側へ短く屈曲する。天井部外面はヘラ切りの後、ナデを施されている。つまみは中央にむけて凹むが、中心がわずかに尖る。35は器高は低く偏平で、器壁もごく薄い。縁部は小さく下方へ屈折する。36は天井部は広くロクロケズリし、その後ナデられている。つまみ中央は凹んでいる。37は天井部にロクロケズリが施される。

**小瓶（39）** 口縁部だけの破片である。口縁部は外反して、角張った短い口唇を持つ。内面に自然釉がかかる。

**長頸瓶（40）** 口縁部は屈曲して大きく開く。口唇は上方へ覗くひき上げられる。

**甕（41-43）** 41-43は中形の甕Bに分類される。41・42は口縁部の形態が類似しており、外端は下方へひき出される。43はそれが顕著ではない。42は外面のタタキ目が平行条線で、肩部に横位のカキ目が施される。内面のあて具痕は同心円文であるが、頸部付近ではナデによって消されている。器壁が薄く、精良なつくりである。これに比較して43の調整はやや粗雑である。外面は平行条線のタタキ目、内面のあて具痕は同心円文である。

**窯道具（38）** 焼台と思われる。体部は下半が張り、ほぼ垂直に立ち上がる。穿孔が2か所になされ、内径は約8mmである。その配置から、穿孔は4ヶ所と思われる。底部はヘラ切りである。新津丘陵の窯跡群に関連するものであろう。

#### 土師器

**無台杯（44）** 底部はヘラ切りで、体部は外面がロクロナデをされる。底部から体部にかけて丸みを持つ。内面は平滑である。

**無台椀 (45~50)** 小形の無台椀III (45・46)、中形の無台椀II (48~50)、大形の無台椀I (47) に分類できる。45は体部が直線的に広がり、底部は糸切りである。46は身が浅く、内面は丁寧にロクロナデをされている。焼成段階で歪んだものであろうが、きわだってシャープな調整がなされており、胎土も精良である。底面には「×」状のヘラ記号が付される。47は体部が丸味をもって広がり、内面は全面丁寧にロクロナデされている。口縁外面には浅い凹線がある。底面には1条の沈線が見られるが、「×」状のヘラ記号であろう。48は体部外面のロクロナデの凹凸が大きく、底部外周がロクロケズリされる。内面のロクロナデはやや稚である。底部は中央が薄く、底面は糸切りである。49は口縁が梢円形に歪んでいる。内面および外面口縁部にかけて黒色処理が施される。底面およびその周縁はロクロケズリされる。50も黒色処理椀で、体部・底部の一部のみ残存する。底部外面は不明瞭ながら糸切りの痕跡が認められる。

**小壺(51~53・56・57)** すべてロクロ成形によるものと考えられ、小壺Iに分類される。51~53は外面と口縁部内面にススが付着している。51は口縁部が強く屈曲して立上がる。52は口縁部のつくりはシャープだが、焼成が軟質である。石英が多量に含まれている。53は内外面ともに丁寧にロクロナデをされている。焼成は硬質である。56は径6cmを測る底部である。左右非対象の成形がなされる。底部外面に厚くススが付着する。57は全体に器壁が薄手で丁寧に整形されている。底部外面は糸切りである。

**長壺 (54・55・58~62)** 口径16cm以上の大形品で、長壺B Iと長壺B IIに分類される。長壺B Iには58~61、長壺B IIには54・55・62が相当する。54は口頭部が短く屈曲し、体部が大きく膨らむ。体部外面にはカキ目が施される。55は厚手で均一な器壁を有する。口頭部の屈曲は緩く、口縁部端面が幅広である。58は口縁端部を丸く収める。器面が摩耗しているが、外面にわずかなカキ目が認められる。体部の膨らみはごく小さい。焼成は軟質である。59は器壁が厚く、体部が丸みをもって大きく膨らむ。口縁部端面は広い面を持つ。60は体部の丸みが弱く、口縁端部はつまみあげられる。体部外面にはカキ目が施されている。61は口頭部は強く屈曲し、端部は上方へ強く引きあげられる。体部外面にカキ目が見られる。62は口縁外端が横に引き出される特異な例である。内面のカキ目は目が粗い。

**鍋 (63~66)** 63~65は鍋Iに分類される。63は口径が36cm程と推定される。口縁部は肥厚し、端面が丸くなる。外面は体部上位がカキ目を施されるが、下位は斜め方向のナデまたはケズリである。64は口縁部が直線的で、端面は幅広である。粘土帶の貼り付けによって口縁の厚みを増しているようである。65は大形品で口径は約44cmを測る。口縁端部の調整は鋭さを欠き、水平に整えられていない。礫の混入が多く、焼成も悪い。66は鍋または瓶の把手部分であろう。ほぼ円柱状に成形されている。側面には指頭痕が、端面には平行の叩打具痕が残る。

**その他の土師器 (67)** 鉢形の形態をなすものと考えられ、底部から体部に大きく開く。器壁はかなり厚手である。

### 2. 中世陶器（図版61、112）

珠洲焼（68・69） 68は片口鉢で、焼成は軟質、器壁は薄手である。内面には10本単位の櫛目がみられる。二次的に被熱しているためか、灰褐色を呈する。69は甕の頸部片である。くびれ部分は凹線が見られ、棒状工具により曲げられたものと考えられる。

### 3. 土製品（図版61、112）

円筒状土製品（70～73） 奈良・平安時代の土師器であるが、定型的な煮沸形態・供膳形態の器ではなく、底部のある「器」と区分するため土製品として扱う。このような土製品は、北蒲原郡聖籠町の山三賀II遺跡で出土しているが[板井1989a]、それとは形状が明らかに異なるものが存在する。70は胴部破片のみであるが、71・72と共に通する粗雑な整形であり、底部を持たないものと推測する。また、破片の上下関係は不明である。外面には、不明瞭だがタタキ目がわずかに認められる。内面は横方向のナデが施される。71は下端部付近しか遺存せず、全体の器形が不明である。底部から体部に直線的にひらく。体部外面には縦方向の稜線が認められ、叩打具によって多面体に形成されているものとみられる。体部内面は粘土帶の痕跡をそのまま残す。72は底部のみ遺存するもので、器壁が厚く、端面が肥厚する。外面ともにめだった調整は見られない。73は平坦な面を下端と仮定して作図したが、破片の上下関係と傾きは不明である。下端は平滑に整えられており、方形に開けられた窓の一辺であることも想定される。外面に幾段平行のタタキ目が見られる。

球状土製品（74） ほぼ半分が欠落しているため、球状とは断定できない。鍋などの把手端部であることも考えられる。表面には指頭痕がみられる

転用研磨具・研削具（75） 須恵器甕の体部破片を利用したものである。内面・外面および割れ面のひとつが使用されている。剖面の摩耗は歯間に偏る。

### 4. 石製品（図版61、112）

砥石（76・77） 76は直方体を呈し、正面・裏面に作業面をもつ。正面・両側面・両端部には整形時の剥離痕や擦痕がみられる。石材は頁岩で重量は272gである。76は仕上砥であろう。直方体を呈し、正面・裏面・両側面に作業面をもつ。石材は泥岩で、重量は22gである。

### 5. 金属製品（図版61、112）

用途不明の製品一点のみである（78）。断面形がほぼ円形でU字型に曲げられている。断面径は約3mmである。

## 第VII章 寺道上遺跡B地点

### 1. 第二次調査

第一次調査については、第V章1で寺道上遺跡A地点と併せて記述しているので、ここではこれを省略し、第二次調査の成果についてのみ報告する。

#### A. 調査の方法

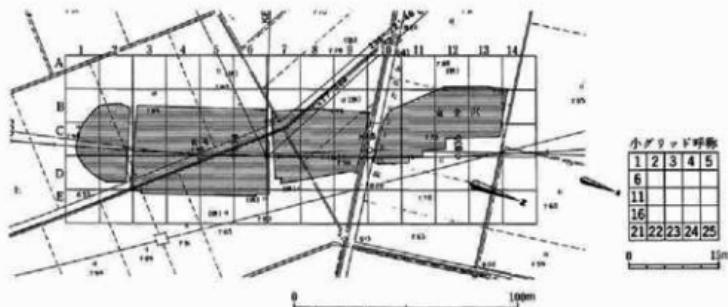
寺道上遺跡B地点は寺道上遺跡A地点の北方に位置しており、A地点北端とB地点南端との距離は約130mである。当初の調査計画は、先行盛土工事区域を優先させる予定であったが、遺構・遺物の分布が稀薄であり、予定を変更して南から北へ向けて順次調査を実施した。

**グリッドの設定（第14図）** 磐越自動車道のセンター杭N0.834とN0.835を結ぶ線を基準とし、センター杭N0.834を起点に15mの方眼を組み、これを大グリッドとした。このため、グリッドの長軸方向は真北から21度13分西偏している。大グリッドは長軸方向を南から算数字、短軸方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。大グリッドはさらに3m四方に分割して1~25の小グリッドとし、3D-19のように表記した。

**排水方法** 調査においては、地下水の湧出と降水に対処するため、土側溝を掘削した。土側溝の設計、排水方法については第III章1Aに記述している。また、土側溝以外にも調査区域の状況に応じて適宜小さな溝を掘った。

#### B. 調査の経過

発掘調査は平成4年4月8日から同年6月30日の間に実施し、寺道上遺跡A地点の調査を一



第14図 寺道上遺跡B地点グリッド設定図

時並行させた。6月10日から調査区上空で送電線架け替え工事が行われたが、調査を一時的に中断したのみで大きな支障はなかった。

調査区域が水田地帯の中央に位置しているため、調査事務所の施設整備に苦労したが、細池遺跡・寺道上遺跡A地点調査の便宜を考慮し、細池遺跡I地区南側の県営農道から寺道上遺跡B地点まで、延長850mの簡易水道と電線を新設して自動車道法線西縁に敷設した。さらに、各調査地点で状況に応じて、適宜水道と電線を分岐させた。

天候は比較的晴天の日が多く、調査区域は土壤が乾燥して硬化しがちで、土側溝に集めた湧水を散布することもあった。

## 2. 層序（第15図）

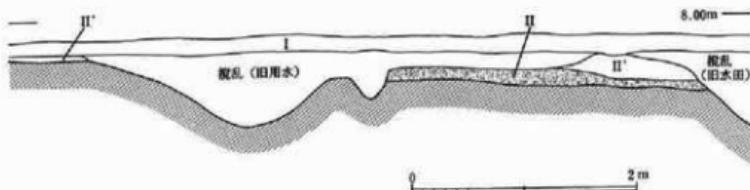
寺道上遺跡B地点の調査範囲は南北約190m、東西約40mにわたる。現地表の標高は8.0~7.7mを測り、南から北にごく緩く傾斜している。基本層序は明確に分離されるI~III層であるが、調査区域の南半は擾乱されているためこれを確認できない。

I層 現水田耕作土の灰褐色粘土である。

II'層 基本的にはII層の土壤であるが、近代・現代の水田耕作によって擾拌されている土層である。灰色粘土が少量縞状に混入する。

II層 奈良・平安時代の遺物包含層であり、細池遺跡・寺道上遺跡のIII層に相当する。中世の遺物を含む可能性もあるが、中世の遺物は遺構内および擾乱層で出土しており明確ではない。顆粒状のマンガン結核を多く含み、マンガン・鉄分の沈着が濃く認められる。II層の厚さは10cm前後である。検出された遺構のすべては、II層を切り込んで構築されている。

III層 黄灰色を呈するシルト、または同色の粘土質シルトであり、細池遺跡・寺道上遺跡のIV層に相当する。この上面を遺構確認面とした。III層は漸移的に植物遺体を含む灰色粘土・または青灰色粘土に変化していく。



第15図 寺道上遺跡B地点層序 (B12-23~C12-3)

### 3. 遺構

調査区域北半、南半東縁は近代の水田によりに深く擾乱され、これと平行または、直交する用水跡が南半の区域を縱断している。このため、検出された遺構は少なく、土坑4基、環状の溝1条、ピット1基である。遺構ではないが、10B・11B、13BではIII層上面が10cm程度レンズ状に窪んでおり、ここに土師器・須恵器の細片が密に分布していた。遺構はいずれもII層を切り込んでいる。以下、遺構の種類にかかわらず、北から記述する。

#### S K 1 (図版49、50、100、101-1)

中心が11C 12に位置する長径2.8mの土坑である。上面は2条の用水路跡に切られる。覆土の中位では疊16点と珠洲焼片口鉢1個体が出土している。覆土は粘土質の灰褐色土である。

#### S X 2 (図版49、50、101-3、4)

9 C にあるU字状の溝である。北半は近代の水田および土側溝に切られる。幅約1m、深さ20~30cmである。覆土は2層に別れ、下層はIII層の土がブロック状に混入する。溝の中心側は掘削の痕跡が見られない。

#### S K 3 (図版50、101-5、6)

9 B 22に位置する長径95cm、短径90cm、深さ14cmを測る土坑である。

#### S K 4 (図版50、101-5)

9 B 22に位置する長径78cm、短径68cm、深さ16cmを測る土坑である。

#### S K 5 (図版49、50、101-5~8)

9 B 16に位置する径約85cmの不整円形の土坑である。深さは最大で67cmを測る。覆土中の珠洲焼破片はすべてが同一個体である。

#### ピット6

8 C 6に位置する長径60cm、深さ約20cmのピットである。

### 4. 遺物

寺道上遺跡B地点は、調査区域の大半が擾乱部分に占められているために出土遺物がコンテナ5箱分と少ない。ほとんどのものが包含層出土遺物である。遺構内からの出土は少量である。土器が主体であり、この他にごく少量の土製品・石製品が出土している。遺物の時期は奈良・平安時代を中心で、中世以降のものも若干ある。器種分類は第IV章1に従っている。以下これにしたがって時代別・器種別にとりあげていくことにする。出土土器の大半は細片であり、完形に近い良好な資料は珠洲焼の片口鉢1点のみである。

## A. 奈良・平安時代の土器

### 須恵器（図版62、113、114）

**無台杯（1～6）** 口縁部を欠くものが3点あるが、いずれも無台杯Ⅱに該当すると思われる。底部切り離し技法は回転ヘラ切りである。1は底部がやや厚く、体部から口縁部に直線的に立ちあがる。2は胎土精良な製品である。体部半ばにロクロ成形時の緩いくぼみをもつ。また、ロクロナデによるヌタ状の縞が見られる。3の底部外面はほぼ水平である。4は底部がヘラ切りの跡が渦巻文状に明瞭にみられる。5は底部が中央に向かい緩やかに立ちあがる。体部外面のロクロナデの凹凸が大きい。胎土は精良である。6は全体に薄手で、底部から体部に広く開く形状をしている。体部外面のロクロナデの凹凸が大きい。2と同様にロクロナデによるヌタ状の縞が見られる。

**有台杯（7～11）** すべて有台杯Aに該当すると思われる。7は底部付近のみの小片である。成形・調整ともにやや雑である。高台は外端接地で、高台内側はややはみ出す。8は高台が外端接地で、その接地面はロクロナデによりわずかに凹んでいる。底部外面はヘラ切りである。9は底部を欠くが、深身の有台杯である。内外面ともにロクロナデの凹凸が大きく、薄手である。10は口縁下部外面が厚く膨らむ。11は口縁が外方へひき出されている。内外面ともロクロナデの凹凸が目立つ。

**杯蓋（12）** 口径約16cmの杯蓋である。縁部は強く屈曲して、下方へ折れる。天井部外面はロクロケズリされる。

**壺蓋（13）** 口径は約12cmと推定される。無台杯にも見えるが、無台杯にしては身が浅いこと、天井部にロクロケズリが見られることから壺蓋とした。

**瓶（14）** 底径は約7cmである。底面にはヘラ切り痕が残り、高台は外端接地であり、接地面はロクロナデにより小さくくぼむ。

**短頸壺（15）** 体部下半および底部の小片である。器壁が厚く、高台が外方へ強くふんばる。体部は内外面ともにロクロナデされており、高台は内端接地、中央がわずかにくぼむ。また、体部の割面が滑らかに摩耗しており、研磨具として二次利用されている。

### 土師器（図版62、113）

**無台碗（16・17）** いずれも口縁部を欠くが、17は無台碗Iと推定される。16は体部・底部下半のみの破片である。底部外面は糸切りされる。体部外面はロクロナデの凹凸が大きい。17はいわゆる黒色土師器である。底部外面はロクロケズリされ、「×」状のヘラ記号が施される。体部外面はロクロナデであるが、底部周縁のみロクロケズリされる。内面は底部から放射状のヘラミガキがなされ、黒色処理が施されている。

**長甕（20）** 口径約23cmで、長甕BⅠに該当する。口頸部がくの字状に屈曲し、体部の膨らみは弱い。口縁端面は幅広く、外端は横にひき出される。器壁は厚手である。

**小甕 (19)** 19は法量から小甕 I と推定される。口縁部はくの字状に強く屈曲し、口縁端部は明瞭な面をもたない。

**その他の土師器 (18)** 底部のみの破片であり、径が14cmと大きく器形は不明である。底面には砂粒が少量認められる。内面には粗いカキ目状の調整が施される。

**b) 中世陶器・磁器 (図版62、63、114)**

**珠洲焼 (21、23~26)** 瓢・壺・片口鉢が出土しているが、その点数は少なく、26の片口鉢以外良好な資料はあまりない。21は甕の口縁部破片で、比較的短い口縁部がたち上がる。くびれ部には凹線がめぐり、丸棒状器の押圧がなされていると見られる。口縁端面はナデによりほぼ平坦になる。23はSK5出土の壺で、肩部と胴部下半のみ遺存する。外面は条線状のタタキ目が施され、内面は押圧具によるくぼみが明瞭である。胴部の推定径は約32cmで、標準的な中形品である。24は片口鉢で、直線的に開く器形で、口縁端部が水平な面をもつ。片口の一部がわずかに残る。全体にシャープな作りである。内外面の横ナデは丁寧である。胎土は精良で、海綿骨針、石灰質白色粒子を含む。内面の櫛目は12本を数える。25も片口鉢で、体部のみの破片である。内外面の横ナデがやや雑である。内面の櫛目は密で、12本である。26はSK1から出土した遺存状態の良好な片口鉢である。器形は直線的に開き、口縁端部がやや外傾する。底部は板目状の圧痕が重複している。底部下縁は器体を持ち上げる際の指頭痕が残る。器体内面は櫛目が9本を単位として、不規則に施される。成形・調整は粗雑で、器体外面に凹凸をなすロクロヒダが著しい。焼成もあまく、褐灰色を呈する。胎土中に多量の海綿骨針、石灰質白色粒子が含まれる。

**青磁碗 (22)** 体部のみ遺存する舶載青磁の小破片である。外面は無紋、内面は劃花紋が施され、外面には施釉前のロクロ痕がみられる。

**c) 土製品 (図版62、63、113、114)**

**転用研磨具・研削具 (15~27)** 15は短頸壺の体部剖面を利用したもので、平滑に摩耗している。27は須恵器甕の胴部を利用したもので、外面中央と剖面を使用している。剖面の摩耗はその縁辺に偏る。

**円盤状陶製品 (30)** 白磁碗の底部を利用したものである。高台の外周にそって打ち欠きを加えている。釉は乳濁色を呈し、全面にかかる。高台疊付から内側斜行部分に砂粒が付着する。高台外面には褐色の線が1条めぐっている。

**d) 石製品 (図版63、114)**

**砥石 (28~29)** 28は直方体を呈し、下端に向かい広がる形態である。正・裏・両側面に作業面をもつ。上端は折損し、下端の面には2条の傷痕がみられる。石材は凝灰岩で重量は255g

である。29は直方体で、下端にひろがる。正・両側面に作業面をもち、上端・下端を欠く。また、裏面側は平坦に削落して厚みを減じている。右側面に縦位の傷痕と、それに直交する横位の傷痕がある。石材は頁岩で、重量は34gである。

磨石(31) 素材は頁岩で、円礫をそのまま利用したものである。割面を除く全面に擦痕が見られるが、特に下端の擦痕が著しい。重量は547g。

## 第VIII章 自然科学分析

### はじめに

細胞遺跡が位置する新潟平野の地形・地質の概略は、新潟古砂丘グループ（1974）や齊藤・坂井（1988）を参考にすると次の通りである。新潟平野は、信濃川や阿賀野川が日本海へ流入する河口付近を中心に形成された沖積平野で、平野の東縁部と西縁部には魚沼層群相当層で構成される丘陵が連なる。これらの丘陵の中で新津丘陵は、新潟平野の中央部に突出しており、この丘陵を境として新潟平野は北東部と南西部に分けられるとしている。平野北東部は、阿賀野川をはじめ加治川・胎内川などの河川が流れ、これらの河川が平野に出る部分には扇状地が発達するとされる。一方、平野南西部は信濃川が貫流しており、扇状地の発達が悪く、平坦な沖積地からなるとされる。本遺跡は新津丘陵の東麓、阿賀野川左岸の自然堤防からその後背湿地へ下る斜面部に位置しており、高速道路の建設工事に伴って発掘調査が行われた。その結果、本遺跡では、平安時代の遺物包含層やそれを削る用途不明の方形の溝状遺構などが検出された。

そこで、今回遺跡周辺の水域環境の変遷と遺構内部の水域状態、遺跡周辺の古環境変遷や稲作の消長、遺構が水田に関連する遺構であるか、以上3点について珪藻分析・花粉分析・イネ属同定・植物珪酸体分析を用いて検討することを試みた。

### 1. 層序と試料

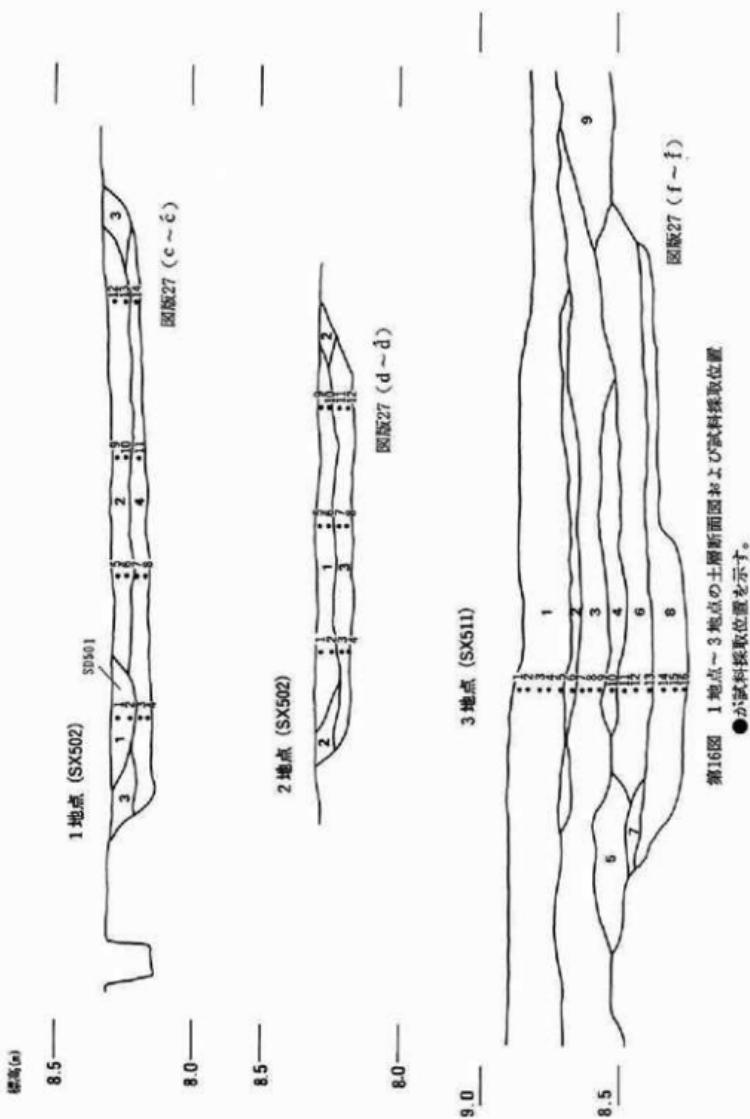
調査を実施するにあたり1地点～11地点を設定した。この内、5地点と9地点が基本層序で、他の地点が遺構覆土である。

細胞遺跡で検出された凹地遺構などは、III層・IV層を削って構築され、II層により被覆される。この遺構埋積物は、黒褐色～暗褐色を呈するシルトを主体とした堆積物からなり、場所によりIV層が混じる。なお、IV層が地山、III層が平安時代遺物包含層、I層が現耕作土である。試料は、各地点から層位試料として採取された。第16図～第18図に試料採取地点の土層断面および試料採取位置を、第2表に分析試料の一覧表を示す。

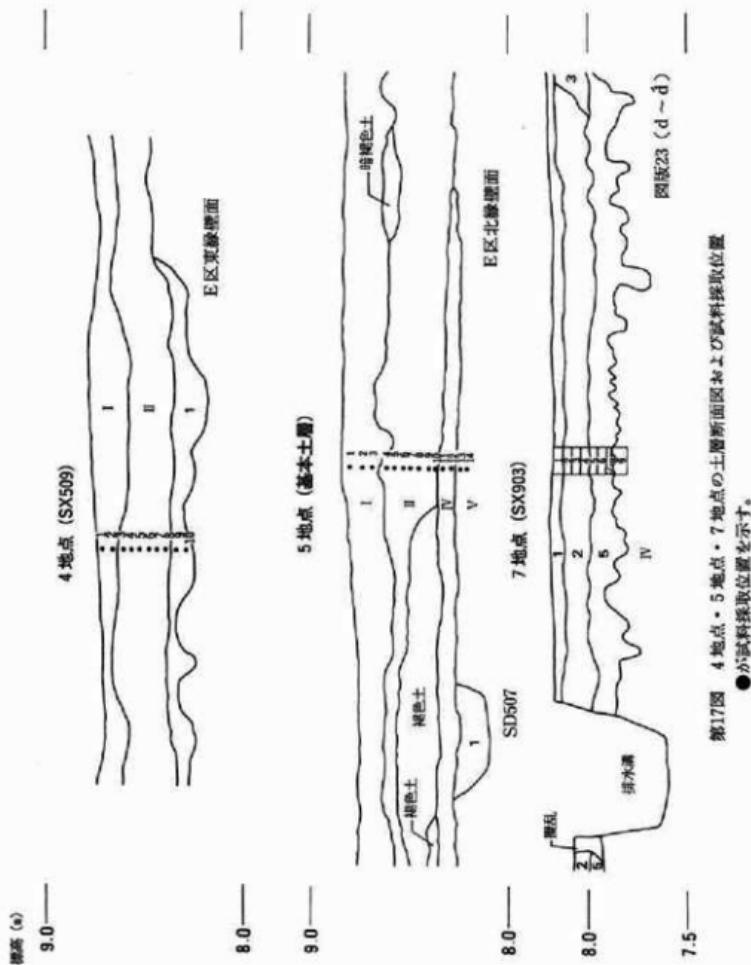
### 2. 分析方法

#### (1) 硅藻分析

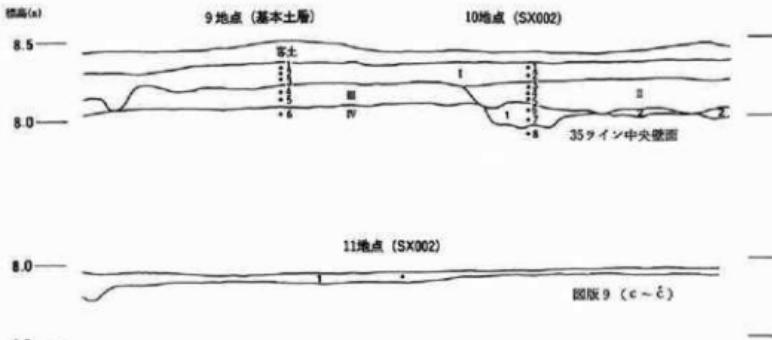
試料を湿重で約7g秤量し、過酸化水素水( $H_2O_2$ )、塩酸(HCl)の順に化学処理し、試料の



第16図 1地点～3地点の土層断面図および試料採取位置  
●が試料採取位置を示す。



第17図 4地点・5地点・7地点の土層断面図および試料採取位置  
●が試料採取位置を示す。



第18図 9地点～11地点の土層断面図および試料採取位置

●が試料採取位置を示す。

地点名	遺構名	遺構の形態	層序	試料番号	時代性	土質等	分析項目			
							珪花粉	イソギンチャク	植物種別	孢子
1地点 SX502	凹地遺構B類		I	1	平安時代以降	黒褐色砂混じり粘土	○	○	○	○
			I	2		黒褐色シルト質粘土	○	○	○	○
			II	3		灰青褐色粘土質シルト	○	○	○	○
			II	4		黒褐色砂混じり粘土	○	○	○	○
			II	5		暗灰褐色砂混じり粘土	○	○	○	○
			II	6		暗灰褐色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
			II	7		黒褐色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
			II	8		オリーブ色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
			III	9		オリーブ色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
			III	10		黒褐色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
			IV	11		オリーブ色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
			IV	12		黒褐色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
			IV	13		黒褐色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
			IV	14		黒褐色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
2地点 SX502	凹地遺構B類		I	9	平安時代以降	オリーブ色砂混じり粘土質粘土	○			
			I	10		黒褐色砂混じり粘土	○			
3地点 SX501	凹地遺構B類		I	1	現耕作土	オリーブ色粘土質シルト	○			
			II	7		灰青褐色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
4地点 SX509	凹地遺構A類 周辺部		II	8		暗灰褐色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
			I	9	平安時代以降	オリーブ色混じり粘土	○	○	○	○
			II	10		黒褐色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
5地点 基本土層			I	1	現耕作土	黄褐色粘土質シルト	○	○	○	○
			II	2		にふい黃褐色シルト	○	○	○	○
			II	5		黒褐色砂混じりシルト	○	○	○	○
			II	9		黒褐色砂混じりシルト	○	○	○	○
			III	11	平安時代遺物包合層	灰青褐色粘土質シルト	○	○	○	○
			IV	12	地山	灰青褐色粘土質シルト	○	○	○	○
			IV	13		灰青褐色粘土質シルト	○	○	○	○
			IV	14		灰青褐色粘土質シルト	○	○	○	○
			II	1		暗灰褐色砂混じりシルト	○	○	○	○
			II	2	平安時代以降	暗灰砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
			II	3		暗灰色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
			II	5		暗灰色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
			II	7		暗灰色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
7地点 SX993	凹地遺構B類		II	1		暗灰褐色砂混じりシルト	○	○	○	○
			II	2	平安時代以降	暗灰砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
9地点 基本土層			II	3	現耕作土	暗灰色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
			II	4	平安時代遺物包合層	にふい黃褐色砂混じり粘土質シルト	○	○	○	○
10地点 SX992	凹地遺構A類 周辺部		II	5	地山	暗灰褐色粘土質シルト	○	○	○	○
			II	6		黒褐色シルト	○	○	○	○
11地点 SX992	凹地遺構A類 中央平坦部		II	7	平安時代以降	黒褐色粘土質シルト	○	○	○	○
			II	8		灰青褐色粘土質シルト	○	○	○	○

第2表 分析試料の一覧

泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、顕微鏡法で砂分を除去した後、適当量計り取りカバーガラス上に滴下、乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入する。

検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上固定・計数した（なお、珪藻殻数の少ない試料はこの限りでない）。この際、破損のない完成殻と破損のある非完成殻とを区別して計数し、珪藻殻の保存度（完成殻数／総数×100）を求める。種の同定は、K. Krammer & Lange-Bertalot (1986・1988・1991)などを用いる。なお、珪藻の生態性の解説を第3表に示す。

各試料から産出した珪藻化石は、産出個体数で現し一覧表に示す。また、堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石が100個以上検出される試料について珪藻化石群集変遷図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、2%以上の出現率を示す分類群についてのみ表示する（図中の●印は、総数が100個体以上産出した試料うち1%以下の種を、○印は総数100個体未満の場合の産出を示す）。図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示する。また、産出した珪藻化石が現地性かあるいは他の場所から運搬堆積した異地性の化石であるか否かを判断する基準の一つとして、殻の破損していないものを完成殻、破損したものを非完成殻として表示する。

### (2) 花粉分析およびイネ属同定

花粉・胞子化石は、湿重約10gの試料についてKOH処理、重液分離（ZnBr<sub>2</sub>比重2.2）、HF処理、アセトトリル処理の順に物理・化学的な処理を施して、試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入し、プレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数を行う。また、検出されるイネ科花粉については、ノマルスキーマイクロ干涉装置を使用して表面微細構造を観察し、発芽孔周辺の肥厚状況・花粉粒径を考慮しながら、栽培植物とされるイネ属と他のイネ科に区分する。

結果は、同定・計数結果の一覧表と主要花粉化石群集の層位的変化として表示する。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・胞子が総数より不明花粉を除いた数を、それぞれ基数として百分率で算出している。図表中で複数の種類をハイフン（—）で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

### (3) 植物珪酸体分析

分析は、近藤・佐瀬(1986)の方法を参考にした<sup>a)</sup>。試料中の植物珪酸体は、過酸化水素水(H<sub>2</sub>O<sub>2</sub>)・塩酸(HCl)処理、超音波処理(70W, 250kHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(臭化亜鉛、比重2.3)の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入しプレパラートを作製す

る。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から生育していたイネ科植物について検討するために、植物珪酸体組成図を作成した。各種類(Taxa)の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。なお、検出個数が短細胞珪酸体で200個未満、機動細胞珪酸体で100個未満の試料は組成が歪曲する恐れがあるため、植物珪酸体組成を求めず、出現した種類を+で示すにとどめる。

\* 1:近藤・佐瀬(1986)の方法は、植物体に形成される植物珪酸体全てを同定の対象とし、種類毎の出現率から過去の植生や栽培植物の有無を推定するものである。特に栽培植物の有無に

種分濃度に対する区分		種分に対する適応性	生育環境(例)
海水生種	強海水種 (Polyhalobous)	種分濃度0.04~1ム以上に出現するもの	低緯度熱帯海域、塩水湖など
	真海水種 (Halobous)	海水生種、種分濃度0.6~30.0ム以下に出現するもの	一般海域 (ex大陸棚及び大陸棚以深の海城)
汽水生種	汽水生種: 中生海水種 (Mesohalobous)	汽水生種: 種分濃度30.0~0.5ム以下に出現するもの	河口・内湾・沿岸・塩水湖・潟など
	淡水生種:	淡水生種: 種分濃度0.5ム以下に出現するもの	一般淡水種 (ex湖沼・池・沼・河川・川・泥炭地・泉)
種分・pH・湿度に対する区分		種分・pH・湿度に対する適応性	
耐塩・好塩性種 (Halophiles)	小量の塩分がある方がよく生育するもの	高塩類群 (塩水湖上層・温泉・新作土塚)	
	少量・不適性種 (Indifferent)	少量の塩分があってもこれに耐えることができるもの	一般陸生種 (海岸・池・沼・河川・泥炭地など)
耐塩・嫌塩性種 (Halophobous)	小量の塩分にも耐えることができないもの	草原・湿地・沼沢地	
	低塩度から高濃度まで広く範囲の種分濃度に適応して出現するもの	一般淡水種	
pHに対する適応性	酸性性種 (Acidobiotic)	pH7.0以下に出現、特にpH5.5以下の酸性水域で最もよく生育するもの	草原・湿地・大河原 (酸性水域)
	好酸性種 (Acidophilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以下の中性水城で最もよく生育するもの	草原・湿地・沼沢地
pH・不定性種 (Indifferent)	pH7.0付近の中性水城で最もよく生育するもの	一般陸生 (ex草原・池・沼・河川)	
	好アルカリ性種 (Alkaliphilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以上の水城で最もよく生育するもの	アルカリ性水城 (少ない)
淡水に対する適応性	真淡水性種 (Limnohalotrophic)	淡水のみに出現するもの	淡水のみの多い沼・池沼
	好淡水性種 (Limnophilous)	淡水に特徴的であるが、淡水にも出現するもの	湖沼・池沼・流れの緩やかな川
海水に対する適応性	海水不定性種 (Indifferent)	淡水にも海水にも普通に出現するもの	河川・川・池沼・湖沼
	好海水性種 (Rheohalotrophic)	海水に特徴的であるが、淡水にも出現するもの	河川・川・小川・上流域
陸生性種	真淡水性種 (Rheobiontic)	淡水にのみ出現するもの	河川・川・流れの速い川・溪流・上流域
	好気性種 (Aerophilous)	好気性環境 (Aerial habitats) 水城以外の常に大気に露された特殊な環境に生育する藻類の一群で多少の耐性とさえあれば、土壌表面やコケの表面に生育可能特に、土壌中に生育する陸生藻類を土壌藻類といふ	・土壌表面や土壌に生えたコケに付着 ・木の根元や幹に生えたコケに付着 ・腐えた苔の表面やそれに生えたコケに付着 ・池の飛沫で飛ったコケや石垣・岩上のコケに付着 ・洞窟入口や内部の階段の当たる所に生えたコケに付着

注 種分に対する区分は、Lowe (1974)、pHと淡水に対する区分は、Hustedt (1937-38)による。

第3表 硅藻化石の生態性

ついて検討する場合には、短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体について注目する必要がある。これは、イネ科植物の各種類における植物珪酸体の組成および生産量が異なる（近藤、1983）ためである。例えば、イネ（イネ属）では短細胞珪酸体よりも機動細胞珪酸体の割合が高いが、コムギ（イチゴクナギ亞科オオムギ族）などでは機動細胞珪酸体がほとんど形成されないことが知られている。

### 3. 微化石の産状

#### (1) 硅藻化石

珪藻分析を行った26試料のうち、4試料からは100個体以上の珪藻化石が検出されたが、他の試料は極めて少ない（第4表、第19図）。

産出した珪藻化石は、少量の海水生種および海水～汽水生種を含むものの大半は淡水生種であり、35属・89種・18変種・種不明（属レベルまでしか同定できなかったもの）12の計119分類群である。以下、各地点毎に珪藻化石の産状について述べる。

##### • 1 地点

本地点では、試料番号2～5で比較的多くの珪藻化石が認められたが、それ以外の層準では極めて少ない。試料番号2～5の群集は、珪藻の3適応性（塩分・pH・流水）についてみると以下の傾向が認められる。まず、塩分濃度に対する適応性では、試料番号4において貴塩一好塩性種が20%と若干高率に認められるが、最も優占するのは貴塩一不定性種であり55～80%を占めている。pHに関しては、好アルカリ性種が最も高率であり50～65%の産出率を示している。好酸性種は、試料番号5では10%以下であるが、試料番号2および試料番号4では20%程度の産出が認められる。流水に対する適応性では、流水不定性種が高率であり、全体の約80%を占めている。好流水性種および好止水性種は、両者とも10%前後あるいはそれ以下と低率である。また、好気的な環境に生育するとされる陸生珪藻（小杉、1986）の産出率が高い傾向が認められる。

多産種は、流水不定性種の *Rhopalodia gibberula*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys* 等である。

##### • 4 地点

分析を行った3試料は、いずれも珪藻化石の産出量が少なく20個体以下である。

##### • 5 地点

分析試料とした5試料の内、試料番号1からは多くの珪藻化石の産出するが、他の4試料については極めて少ない。試料番号1の珪藻化石群集は、以下の傾向が認められる。塩分に対しては、貴塩一不定性種が高率であり全体の80%程度を占めている。貴塩一好塩性種および貴塩一嫌塩性種は、両者とも低率で10%前後である。pHに対する適応性では、好アルカリ性

種が45%、pH不定性種が40%でありこれらの種群で大半を占めている。好酸性種は、低率であり10%以下である。流水に対しては、流水不定性種が約80%を占めており、好流水性種および好止水性種は两者とも低率にしか認められない。以上のほか、陸生珪藻の産出率が高い傾向がある。

多産種は、流水不定性種の*Cymbella silesiaca*、陸生珪藻の*Pinnularia subcapitata*、*Pinnularia molaris*等である。

- 7 地点

珪藻化石はその産出量が極めて少なく、産出個体数が最高で24個体である。

- 9 地点

珪藻化石の産出量は極めて少ないので、3試料すべて10個体以下である。

- 10 地点

試料番号4では、33個体の珪藻化石が認められたものの試料番号6では皆無である。

- 11 地点

珪藻化石の産出量は少なく、3個体しか認められない。

## (2) 花粉分析およびイネ属同定結果

結果は、第5表・第20図に示す。花粉・胞子化石は全体的に保存状態が悪い。特に第5地点試料番号2および第9地点試料番号2を除く24試料では花粉化石の検出個体数が少なく、シダ類胞子が多産する。次に各地点毎の結果を述べる。

- 1 地点

8試料とも花粉化石は、ほとんど検出されない。また、種類数も少なく、木本花粉7種類、草本花粉4種類、シダ類胞子の合計12種類である。

- 4 地点

3試料とも花粉化石は、ほとんど検出されない。また、種類数も少なく、木本花粉1種類、シダ類胞子の合計2種類である。

- 5 地点

花粉化石は全体的に保存状態が悪く、しかも試料番号5~13の4試料では検出個体数が少ない。試料番号1の花粉化石群集は、木本花粉ではマツ属が多産し、スギ属・ブナ属・コナラ属・コナラア属・ニレ属・ケヤキ属を伴う。一方、草本花粉はイネ科が多産する。このイネ科の中にはイネ属が含まれるが、花粉化石の保存状態が悪いため、イネ科の中でイネ属が占める割合（イネ属比率）を求めるこことを控える。

- 7 地点

4試料とも花粉化石は、ほとんど検出されない。また、種類数も少なく、木本花粉3種類、草本花粉4種類、シダ類胞子の合計8種類である。

第4表 珪藻分析結果(1)

第4章 珍藏分类整理(2)





第19図 各地点の主要珪藻化石群集

海水一汽水-淡水生種産出率：各種産出率・光形設置率は全体基數、淡水生種の生産性の比率は淡水生種の合計を基數として算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示した。なお、●は1%未満の産出、○は100個体未満の試料における産出を示す。

環境指標種 [0]：沼澤地付着生種 #：好汚濁性種 ##：好清水性種（渡辺ほか、1986による）

[+]: 陸生珪藻 ([+ A]): A群、 [+ B]: B群、 伊藤・堀内、 1991による)

・ 9 地点

花粉化石は全体的に保存状態が悪く、しかも試料番号4・6の2試料では検出個体数が少ない。試料番号2の花粉化石群集は第5地点試料番号1と類似しており、木本花粉ではマツ属が多産し、スギ属・ブナ属・コナラ属・コナラ亜属・ニレ属一ケヤキ属を伴う。一方、草本花粉はイネ科が多産する。このイネ科の中にはイネ属が含まれるが、花粉化石の保存状態が悪いため、イネ科の中でイネ属が占める割合（イネ属比率）を求めるこことを控えた。

・ 10 地点

2試料とも花粉化石は、ほとんど検出されない。また、種類数も少なく、木本花粉2種類、シダ類胞子の合計3種類である。

・ 11 地点

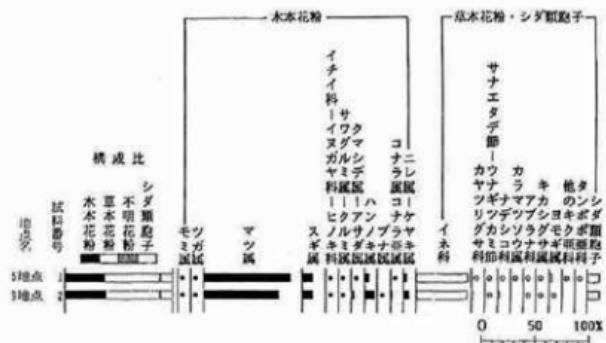
花粉化石はほとんど検出されず、草本花粉のイネ科が1個体検出されるだけである。

種類 (Taxa)	試料番号	1地点					4地点			5地点					7地点			9地点			10地点			11地点					
		2	4	5	7	8	10	11	12	14	7	9	10	1	5	9	11	13	1	3	5	7	2	4	6	8	10	11	
木本花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
モクシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アガベ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
マツ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
スギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ科-イグサ科-ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サリダム属-アカルイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
タマシキ属-チャガ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ハシバミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
バンノウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ブナ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ツチジク属-セリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
コナラ属-カガシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
タリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
シダ類-ケヤク属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
草本花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ科	10	1	1	1	-	11	-	-	-	-	-	-	-	-	205	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
カマツリダム科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6
ナシムダム科-ウナギワカク節	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヨシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ナデシコ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6
カラマツソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アブリナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
ヤクシダム属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
ヨモギ属	13	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
他のヤシモ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
タツボクモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不育花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
シダ類胞子	231	102	114	89	226	234	140	489	185	38	39	82	142	118	88	96	1155	1071	1628	1400	46	14	32	19	36	143	-	-	-
合計	9	2	2	2	2	2	1	0	0	0	1	207	2	1	0	0	5	3	4	2	222	2	1	2	0	1	-	-	-
木本花粉	22	2	3	1	1	11	2	0	0	0	0	277	3	1	3	1	1	1	2	2	235	4	0	0	0	0	-	-	-
草木花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	143
不育花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シダ類胞子	231	102	114	89	226	234	140	489	185	38	39	82	142	118	88	96	1155	1071	1628	1400	46	14	32	19	36	143	-	-	-
地花粉・孢子	253	0	119	36	224	337	152	499	185	38	21	738	150	115	91	97	1165	1065	1639	1406	587	33	31	21	36	144	-	-	-

第5表 花粉分析結果

(3) 植物珪酸体分析

結果を第6表と第21図に示す。イネ科植物起源の植物珪酸体は、全体的に保存状態が悪く、1地点～11地点の試料を通じて短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とともに表面に多くの小孔（溶食痕）が認められる。以下各地点ごとに産状を述べる。



第20図 各地点の花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉・シダ類胞子は絶花粉・胞子数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

#### • 1 地点

植物珪酸体組成は大きな変化が認められない。ヨシ属が多産し、栽培植物とされるイネ属やタケ亞科・キビ族・ウシクサ族・イチゴツナギ亞科などを伴う。

#### • 2 地点

植物珪酸体組成は大きな変化が認められず、1地点と同様な出現傾向を示す。すなわち、ヨシ属が多産し、イネ属・タケ亞科・キビ族・ウシクサ族・イチゴツナギ亞科などを伴う。

#### • 3 地点

植物珪酸体組成はイネ属が多産し、タケ亞科・ヨシ属・キビ族・ウシクサ族・イチゴツナギ亞科などを伴う。

#### • 4 地点

植物珪酸体組成は、試料番号10～8と試料番号7で異なる。試料番号10～試料番号8では、ヨシ属・タケ亞科が多産し、イネ属・キビ族・ウシクサ族・イチゴツナギ亞科などを伴う。試料番号7ではイネ属・ウシクサ族・イチゴツナギ亞科が増加する。

#### • 5 地点

植物珪酸体組成は、試料番号14・13、試料番号11～5、試料番号1で異なる。試料番号14・13ではタケ亞科が多い。試料番号11～5ではヨシ属が増加し、多産する。また、イネ属も増加傾向を示す。試料番号1ではタケ亞科・ヨシ属が減少し、イネ属が多産する。

#### • 7 地点

植物珪酸体組成は、試料番号7～5と試料番号3～1で異なる。試料番号7～試料番号5では、ヨシ属・タケ亞科が多い。試料番号3～試料番号1ではヨシ属が増加し多産する。イネ属

機動細胞珪酸体が上位に向かい減少傾向を示す。

・9地点

植物珪酸体組成は、試料番号6、試料番号4、試料番号2で異なる。試料番号6でタケ亜科が多産する。試料番号4では、タケ亜科・ヨシ属・ウシクサ族が多い。上位の試料番号2では、イネ属が検出され、イチゴツナギ亜科が増加する。

・10地点

植物珪酸体組成は変化が認められない。ヨシ属・タケ亜科・ウシクサ族が多産し、イネ属・キビ族・イチゴツナギ亜科を伴う。

・11地点

植物珪酸体組成はタケ亜科機動細胞珪酸体が多産し、ウシクサ族・ヨシ属・キビ族を伴う。

#### 4. 遺跡周辺と遺構内部の水域環境

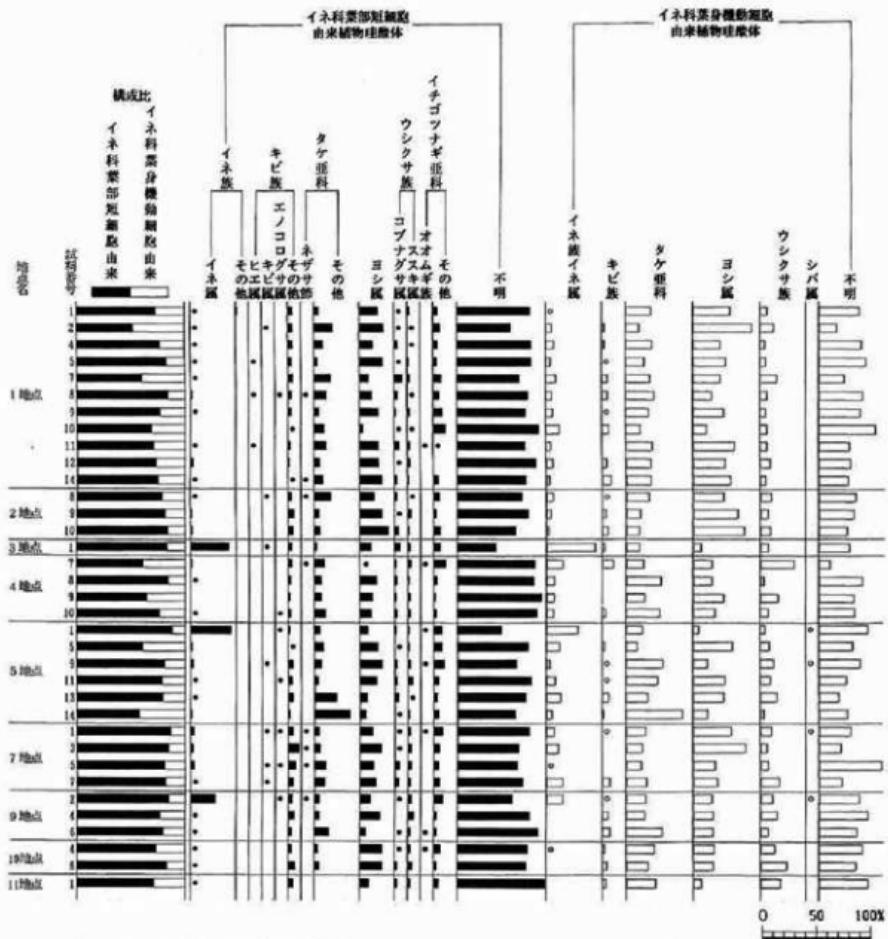
珪藻は、単細胞の藻類で温度・塩分などには強い適応性を備えており、あらゆる環境に生育している。珪藻は、一般に水中に繁茂し、種毎に細かな枝分けを行っている。しかし、生育の場はいちがいには水中ばかりとも限らず、ある一群は苔・土壌表層・木の幹の表面などに付着生育している。これらは陸生珪藻（小杉、1986）と呼ばれている。すなわち珪藻は、植物が生育できるような場所はもちろんのこと、光の届く所であれば高等植物以上に生育範囲は広い、と言ってもよい。また、生育時の個体の数が多いため、現在の表層土壤中や地層中（火山岩・火成岩を除く堆積岩のみ）から珪藻の殻が化石として認められる場合が多い。最近では、地層中から多くの珪藻化石が見いだされることと各種類が様々な環境で枝分けを行っていることに着目して、地層の時代および堆積環境の解析に応用されるようになってきた。

今回、1地点試料番号2～5と5地点試料番号1を除く試料では、珪藻化石がほとんど検出されなかった。珪藻化石の産出量が100個体に満たない場合、堆積当時の攪乱の影響を受けている可能性、あるいは堆積後に殻の強度によって選択的に溶解・消失した可能性がある。そのため、当時の堆積環境をそのまま反映していないと考えられ、無理に解析を行ってもその信頼性が低い。したがって、具体的な堆積環境の推定を差し控える。なお、今回のような珪藻化石群集の組成については、沖積低地の遺跡においてしばしば認められる傾向であり、その原因は以下のように考えられる。

化石の産出量の少なかった試料は、ほとんどが黄褐色～暗灰色のシルトあるいは粘土質シルトで構成される。また、少ないながら産出した珪藻化石群集は、わずかに海水または汽水生種を含むが、大半は淡水生種で構成される。淡水生種の組成は、流水不定性種、陸生珪藻、好アルカリ性種が卓越している傾向は認められるものの、多産種は認められない。また、産出個体数が少ないにもかかわらず、種類数が多い。このような傾向は、現水域、例えば湖沼、池、河

第6表 植物珪酸体分析結果

地點名	地點番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	2地点	3地点	4地点	5地点	7地点	9地点	10地点	11地点		
<b>イネ科葉面網胞壁珪酸体</b>																									
イネ葉イネ属	1	1	4	5	1	8	3	-	2	7	2	4	5	8	175	3	6	-	3	310	3	8	2		
イネ葉(その他)	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
キビ葉(その他)	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
キビ葉キビ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
キビ葉ノコロガサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
キビ葉(その他)	11	8	15	14	8	15	13	2	6	4	3	12	22	22	15	7	10	3	6	9	21	11	17		
タケ葉(その他)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
タケ葉(その他)	13	36	32	35	15	25	22	17	24	23	20	66	20	13	38	16	29	13	32	65	32	30	47	24	
ウシタカ族コブナグサ属	50	48	48	48	114	19	61	65	64	53	59	94	140	49	1	94	25	37	61	34	101	59	24	14	
ウシタカ族スズカ属	1	1	11	1	16	16	4	2	11	2	6	8	3	18	25	3	13	6	9	1	11	9	13	5	
ウシタカ族スズカ属	5	1	4	6	4	5	8	1	4	7	4	13	7	11	6	9	5	7	11	3	13	15	11	16	
イチゴナガヤ面オムギ属	13	14	15	16	17	30	29	26	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
イチゴナガヤ面(その他)	145	44	183	276	78	263	175	51	106	163	130	176	190	157	118	107	282	123	198	222	105	202	186	146	
不明キビ属	39	41	51	61	21	76	37	89	23	34	60	70	60	34	30	105	40	47	75	14	29	84	66	42	
不明シダツバ属	16	21	39	33	30	36	23	35	20	22	21	44	64	22	28	55	15	31	28	17	33	35	39	20	
<b>イネ科葉身網胞壁珪酸体</b>																									
イネ葉イネ属	1	10	8	4	13	6	7	12	4	7	3	7	4	2	47	22	9	9	7	32	16	3	8	13	
キビ葉	-	3	2	1	8	6	1	6	-	4	8	1	3	5	2	15	-	4	-	3	1	6	2	1	
タケ葉(その他)	25	24	28	19	33	29	23	13	25	26	23	24	13	12	12	24	39	23	38	17	14	40	30	21	
ヨシ属	37	105	30	33	37	19	31	12	39	32	35	31	42	49	7	25	21	37	25	6	48	15	30	29	
ウシクサ属	7	23	5	6	23	7	6	6	6	10	5	11	7	9	7	45	4	21	8	4	11	14	9	16	
シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
不明	40	31	46	48	35	44	42	54	29	33	28	38	33	27	29	15	49	42	40	30	42	45	26	19	
全計	296	216	402	542	228	578	372	234	249	306	301	433	470	534	494	234	634	230	382	828	210	502	403	409	266
イネ科葉身網胞壁珪酸体	110	196	119	111	149	111	110	103	108	112	102	104	104	146	122	132	122	111	134	119	104	164	159	105	106
抽出割合	408	412	521	653	377	689	482	337	572	420	403	545	572	638	598	380	756	362	504	938	344	621	507	513	356
粗 粒 片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
イネ葉頭部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
イネ葉尾部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
イネ葉側面	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
キビ葉頭部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
キビ葉尾部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
キビ葉側面	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		



第21図 各地点の植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体とイネ科茎身機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

川、沼沢地、または湿地におけるいずれの水域の珪藻群集ともかけ離れている。すなわち、各水域に生育する珪藻群集は、おのおの採取地点の水域の状態を反映したものであり、その種数はそれほど多くなく1種～数種が優占する。すなわち今回のような結果は、生育場所の異なる群集が一つになった混合型の群集組成であると解釈される。このような組成は、現在の水域で調査した場合に湿地等の比較的安定していると思われる水域でも、周囲からの水の流れ込みの多い場所において認められる。ただし、この場合でも、その場所に生育する種群が優占的に認められる。また、今回の結果のように堆積物中の絶対量そのものが少ない場合というには、別の原因も想定される。その原因を考えるために、東京都の東京低地で行われた分析結果が参考になる。葛飾区に位置する遺跡の例（葛飾区遺跡調査会、1991）であるが、遺跡が下町の低地部に位置し、標高が0m近く、付近には江戸川等の大河川が存在し、度重なる洪水の影響を受けてきた地域である。調査時の堆積層の観察結果は、場所によっては稼を含んでいたりラミナの認められるような層も存在するが、全体に砂質のシルトで構成され、その間に塊状の砂、シルト、粘土層を挟在しており、各層の層厚は数cmから数十cmであり厚い層は認められない。テフラの分析も行われているが、その産状は純層で認められず、大抵の場合は堆積物から洗い出しによって検出されることが多い。したがって、ほとんどが再堆積土壌であり、そのため地層の時代判定については、遺物の年代によるところが大きい。珪藻分析の結果は、絶対量が少ない場合が多く、種数が多いだけでなく個々の種の産出個体数が少ないと優占種が認めにくく、また適応性にばらつきが認められる。そのため、古環境解析を行っても環境を絞ることが困難な状況にある。以上のように、珪藻化石、テフラの産状、層相の観察結果等を総合的に判断すれば、ほとんどが安定した水域（または陸域）であったとは考えにくく、洪水による一過性の堆積物によって構成されるものであるという結論に達した。今回分析を行った試料も、遺跡の立地と珪藻化石群集からみれば、上記の東京低地の結果と一致する点が多く認められることから、河川の増水等に伴う一過性の堆積物である可能性もある。

なお、珪藻化石が良好に検出された1地点（SX502）の遺構埋積物（試料番号2・4・5）では、流水不定性種および好アルカリ性種を主体とした群集であり、またそれらの多くは陸生珪藻であった。このうち、本試料から産出した陸生珪藻は、離水した場所の中で乾燥に耐えうことのできる群集とされる（伊藤・堀内、1989；伊藤・堀内、1991）。流水不定性種および好アルカリ性種の多くは、湿地、沼沢地、河川等のあらゆる水域から普通に認められる種群である。一方、試料番号2・4では、好酸性種が比較的高率に認められた。試料番号2・4で高率であった好酸性種は、*Eunotia*・*Pinnularia*等に代表される種群で湿地や沼沢地の水の流れの少ない水域に認められる。以上のような種群の特徴を基にして堆積環境を推定すると、3試料すべて水の影響を受けるような環境であったと考えられるが、基本的には半乾半湿の状況であった可能性が高い。なお、試料番号2は、凹地遺構B類であるSX502に接続する溝（SD501）である。したがって、同溝内には湿地のように流れの少ない水域が存在し、時々干し上がっていたものと

考えられる。また、試料番号4はこの溝直下のSX502覆土であるところから、溝によって運ばれた水の影響下にあったものと考えられる。しかし、その周囲の覆土試料でもわずかながらも同様の種類が見られ、このような水域がSX502全域に広がっていたことを示唆する。また、他の遺構でも同様の種類がみられることから、同様の環境下にあったことが示唆される。

一方、5地点試料番号1すなわち基本土層のI層の珪藻化石群集は、大略1地点試料番号5と同様であり、流水不定性種、好アルカリ性種および陸生珪藻主体の群集である。したがって、推定される堆積環境は、水の影響はあるものの常時冠水するような場所であったとは考えにくく、半乾半湿の状況にあったことが推定される。

## 5. 遺跡周辺の古植生

### (1) 森林植生

花粉は頸花植物の花の薬内で形成される小さな細胞であるが、受精のために雄核を運ぶという種族維持に関する重要な役目を持っている。したがって、花粉は空気中に大量に散布され、花粉を守る一番外側の膜（花粉外膜）も非常に頑丈にできている。花粉は、本来の目的を果たせず池沼や湖などに落下した場合、堆積物中で長期間保存される。また、花粉は種類により形態や模様がそれぞれ異なる。花粉分析とは、このような特徴を利用し、堆積層中に残存している花粉化石を化学的・物理的な処理を施して抽出し、花粉の種類や量を調査することである。この結果から過去の植物集団（古植生）や時代について検討することができる。しかしながら、今回の分析調査の結果、II層以深における花粉化石は保存状態が悪く、しかも花粉化石の検出個体数が少ない。このことから、花粉化石は何らかの要因により分解していると推定される。花粉が分解する度合いは、落葉広葉樹の花粉に比べ、針葉樹の花粉やシダ類胞子の方が分解しにくいなど、種類により異なるとされている（中村、1967）。したがって、これらの試料で検出された花粉化石は、当時遺跡周辺に生育していた可能性があるが、当時の植生を充分に反映しているとは判断できない。したがって、これらII層以深における遺跡周辺の森林植生について検討することは控える。

なお、I層ではマツ属が多産する。繩文海進最盛期以降にマツ属の花粉化石が急増・多産する現象は日本各地で認められており、これが人間の直接的あるいは間接的な植生干渉に起因するとされている（塚田、1981）。このマツ属の多産も、本層が現水田耕作土であることを考えると、現在の調査地点の周辺植生を反映していると考えられる。

### (2) 低地の植生

植物珪酸体（プラント・オパールとも呼ばれている）は、高等植物の植物体内に吸収された珪酸分を特定の細胞組織に蓄積させ、形成された珪質（ガラス質）のものである。そのため、植物珪酸体は、植物体が枯れて分解されたのちも、微化石となって土壤中に永く残留する。特

にイネ科植物では、植物の種類により形態が異なる。のことから、植物珪酸体は、過去のイネ科植生の復元、特に稻作の推定に応用されている。最近では、イネ科に限らず、カヤツリグサ科・ツユクサ科・ムラサキ科などの草本類、さらに樹木類にも特徴的な形態の植物珪酸体も報告されている(近藤・ビアスン, 1981)。今回の調査では、イネ科植物に由来する植物珪酸体が比較的良好に検出された。そこで、ここでは植物珪酸体の産状に注目して、遺跡周辺低地に生育していたイネ科植物について検討を行う。

本遺跡は、阿賀野川の氾濫原上に位置することから、阿賀野川が上流より運搬してきた堆積物が度重なる氾濫によって堆積しているものと思われる。また、珪藻化石の産状からも、河川の氾濫等による一過性の堆積物である可能性が高いと推定された。したがって、ここで検出された植物珪酸体の中には、上流域から運搬・堆積したものも含まれていると推定される。これらのこと注意して、古植生の変遷について検討を進める。

今回の植物珪酸体分析の結果から、平安時代以前のIV層が堆積した時代は、タケ亞科が多く検出され、ヨシ属を伴う。のことから、調査地点の周辺にはタケ亞科やヨシ属が生育していたと推定される。このうち、ヨシ属は現在河道周辺の湿った場所に生育している場合が多いことから、本遺跡周辺低地の湿った場所に生育していたと推定される。

その上位の平安時代遺物包含層(III層)と、さらにその上位のII層ではヨシ属が増加する。したがって、平安時代以降、調査地点の周辺低地の湿った場所には、ヨシ属が多く生育していたと推定される。この他に、タケ亞科・キビ族・ウシクサ族・イチゴツナギ亞科なども生育していたと考えられる。また、5地点でイネ属が検出されることから、少なくとも平安時代以降調査地点の周辺あるいはその上流域で稻作が営まれていた可能性がある。

## 6. 遺構の用途

稻作の検証を行う場合、その基礎資料として現耕作土におけるイネ属化石の出現傾向が重要となる。現耕作土層における微化石の調査例としては、次のような調査が実施されている。現在の水田耕土で花粉の動態研究を行った結果、イネ科花粉の中でイネ属が占める割合(イネ属比率)が30%以上である場合、現在に近い集約度で稻作が営まれていたとみなしてよいとされている(鈴木・中村, 1977)。また、イナワラ堆肥適用(8年間, 500kg/10a/年)の現耕作土ではイネ属機動細胞珪酸体の出現率が16%を示すとされている(近藤, 1988)。今回の場合、花粉分析では花粉化石の保存状態が悪いためイネ属比率を求めることができず、現耕作土における研究成果との比較検討ができない。一方、I層におけるイネ属機動細胞珪酸体の出現率は、3地点・5地点・9地点では近藤(1988)と比較してほぼ同率か、それよりも高い比率を示す。また、短細胞珪酸体も検出され、短細胞列や網に形成される頸珪酸体も検出される。これらのこと考慮して、平安時代以降とされる凹地遺構における稻作の検証を行うことにする。

遺構埋積物中のイネ属の出現傾向は、1地点～7地点と10地点・11地点で異なる。1地点～7地点ではイネ属が検出されるが、10地点・11地点ではイネ属が検出されない。ところで、新潟県柏崎平野北東部の別山川中流域東岸に位置する西谷遺跡では、弥生時代後期の水田層とされている層位について、平面的に自然科学分析調査が実施されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1992）。これによると、稲作の継続期間や耕作土層の流出などの影響により水田層でありながらイネ属の微化石が検出されない部分がみとめられ、花粉化石や植物珪酸体化石は空間的に偏りをもって遺存していることが明らかにされている。また、本遺跡の遺構埋積物は周囲あるいは上流域の堆積物が混入している可能性があること、および基本土層の植物珪酸体組成と遺構埋積物のそれが類似していること、さらに現在の耕作土層と比較するとイネ属機動細胞珪酸体の出現率が低率であることから、本遺構は水田として利用されていたと断定することはできない。他の用途として利用されていた可能性もある。

## 7.まとめ

凹地遺構B類内部の水域環境については、1地点をはじめ基本的に半乾半湿の状況であった可能性が高い。特に、これらの遺構を持続する溝内に、流れが緩くしばしば乾燥するような水域が存在したことが明らかになった。遺跡周辺の古植生は、IV層が堆積した頃、主にタケ亞科やヨシ属が生育していたと推定される。その後III層～II層が堆積する頃になると、調査地点の周辺は主にヨシ属が生育していたのであろう。この他にもタケ亞科・キビ族・ウシクサ族・イチゴクナギ亞科なども生育していたと考えられる。また、平安時代以降とされる凹地遺構B類は、今回の分析結果からみる限り、水田として利用されていたかどうかを断定することができず、それ以外の用途として利用されていた可能性も指摘した。

今回の自然科学分析調査結果では、珪藻化石や花粉化石の産状が悪く、また遺構埋積物が周囲あるいは上流域の堆積物が混入している可能性があり、遺跡周辺の古環境や溝状遺構の用途については、充分に検討することができなかった。したがって、今後、より低湿地な場所や台地を刻む小支谷などで自然科学分析調査を実施し、周辺地域の標準的な古環境変遷を明らかにすることが必要である。この結果を基にして遺跡の基本層序および同一遺構の埋積物を対象とした平面的な自然科学的な調査、遺跡周辺の地形発達過程・遺物の出土状況・農業技術・古文書等の調査など、多角的な検討を重ねていく必要がある。

## 引用文献

- 伊藤良永・堀内誠示（1989）古環境解析からみた陸生珪藻の検討—陸生珪藻の細分—。  
日本珪藻学会第10回大会講演要旨集、p.17.  
伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。日本珪藻学

- 誌, 6, p.23-44.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望—.  
植生史研究, 1, p.9-44.
- 葛飾区遺跡調査会 (1991) 前津遺跡、葛飾区龜有2丁目都営住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書. 葛飾区遺跡調査会調査報告, 第16集, 85p.
- 近藤鍊三 (1988) 十二遺跡の植物珪酸体分析. 鈎師屋遺跡群十二遺跡—長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書, 御代田町教育委員会, p.377-383.
- 近藤鍊三・ピアスン友子 (1981) 樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報), 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について, 帯広畜産大学研究報告, 12, p.217-229.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- Krammer, K., and H. Lange-Bertalot. (1986) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa, 2(1):p.1-876.
- Krammer, K., and H. Lange-Bertalot. (1988) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2(2):p.1-596.
- Krammer, K., and H. Lange-Bertalot. (1990) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2(3):p.1-596.
- Krammer, K., and H. Lange-Bertalot. (1991) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2(4):p.1-596.
- Lowe, R. L. (1974) Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. In Environmental Monitoring Ser. EPA-670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center office of Res. Develop., U. S. Environ. Protect. Agency. Cincinnati. p.1-344.
- 中村 純 (1967) 花粉分析. 古今書院, 232p..
- 新潟古砂丘グループ (1974) 新潟砂丘と人類遺跡—新潟砂丘の形成史 I—. 第四紀研究, 17, p. 25-38.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1992) 西谷遺跡における弥生時代後期以降の古環境変遷と低地利用. 西谷遺跡発掘調査報告書, p.45-59. 割羽村教育委員会編.
- 齊藤道春・坂井陽一 (1988) 中～上部更新統と完新統 1)新潟平野. 日本の地質4, 中部地方 I, 日本の地質「中部地方 I」編集委員会, p.132-134, 共立出版.
- 鈴木巧夫・中村 純 (1977) 稲科花粉の堆積に関する基礎的研究. 文部省科研費特定研究, 古文化財, 稲作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究—中間報告—, 中村 純編, p.1-10.
- 塙田松雄 (1981) 過去一万二千年間—日本の植生史 II. 新しい花粉帶. 日本生態学会誌, 31, p.201-215.

## 第IX章 ま と め

### 1. 中世の凹地遺構と溝について

#### a) はじめに

細池遺跡・寺道上遺跡は多数の凹地遺構と溝によって構成されており、一部を除けばおおむね中世に造作をなされたものである。計53基の凹地遺構はA類(周溝を伴う不定形のもの)、B類(断面が浅い皿状を呈する溝状のもの)、C類(平面形が方形を呈するもの)の3形態に分類され、細池遺跡ではA類18基、B類14基、C類3基を数える。また、寺道上遺跡の18基はすべてA類に属する。これら凹地遺構については、何らかの圃場、すなわち作物を栽培する田畠の各単位施設であり、一方で多数の溝は凹地遺構の用排水または通水を目的に掘削されたものであろうと推測するものである。しかしながら、この推測を積極的に裏づける直接的な調査結果は得られていない。

近年、新潟県内では中世遺跡の調査例が増し、資料の蓄積は進んでいるが、農業生産に関わる遺構については未だ明確なものの検出を見ていかない。奈良・平安時代までを含めれば、春日・木田地区遺跡群の一之口遺跡(上越市)、今池遺跡群(同市)などに亘と認められる「畝状小溝」が多数検出され、番場遺跡(出雲崎町)の水田跡も中世に跨る可能性を残している。このように、現時点では比較資料に乏しく、植物珪酸体等の分析でも良好な結果が得られていないため、両遺跡が圃場である可能性を意識しながらも断定はせず、形態を示す「凹地遺構」という語彙を用いておくことにとどめる。以下、形態や土層のあり方、配水経路等をまとめる中でその性格を検討したい。

#### b) 細池遺跡の凹地遺構A類について

C区・J区に認められる12基のまとまりは、不定形の遺構群であるにもかかわらず、極めて整然と配置されている。SX007とSD303が同一の凹地遺構であると仮定すると、まとまった空間はSD303とSD302との間が残されるのみである。さらに、遺構群が南北約75m幅の区画を意識していることを見ると、ある一定時期の中で、造作・使用・廃絶が行われたものと考えられる。

12基の遺構のうち、7基が6条の小溝で結ばれている。このほか、C区南縁ではSX306の縁辺が曲折しており、これをSX306との通水溝と見ることができる。また、溝は検出されなかつたが、SX307とSX308との間隔が他に比べて狭く、両遺構の連結は想定できないことではない。このように各遺構は、隣接する遺構の余剰水を受け、一方で余剰水を配るという一連の通

水系統の中で機能しているものと見られる。地山面は東から西へごくわずかに傾斜しており、配水経路はおおむねこの傾斜に沿うであろう。12基の遺構は、3,200m<sup>2</sup>の範囲に広く分布しているが、SX304a・SX304bを除けば、周溝底面の標高は7.90m前後で一定しており、厳密な配水計画に基づいて遺構が造作されたことを意味する。遺構の平面が不定形であることと、遺構の広がりに東西の方向性があることは、微妙な高低差を配水計画に反映させたためであろう。したがって、調査区域の東方にこれらを灌漑する施設の存在が想定される。

このように考えると、遺構の使われ方にいくつかの推測ができる。ひとつは凹地遺構が水を深く湛えることなく、比較的少量の水で使用されるものである可能性である。この場合「周溝」周辺と中央部に大きな通水条件の相違があり、中央部への十分な配水が意識されているとは思えない。溜め池状の遺構(SX615)に付帯するSX613の例を見れば、「周溝」は導水を目的とするもののようにも思われる。通水量が多く、湛水・排水が繰り返されるものであれば、あえて「周溝」を必要としないであろう。他方は、湛水・排水を繰り返しながらも、遺構の管理上、「周溝」に意味がある可能性である。現代の水田では、出穂の頃から春の耕起まで特に導水をしないことから、「周溝」がその期間において排水溝であることや壁面の補修の際に壁ぎわの土が使われ「周溝」状の痕跡が残ったことが考えられる。その場合は「周溝」内側の凹凸面も同様に形成されたことになろう。いずれにせよ、凹地遺構が厳密な配水計画をもつてあれば、その機能のひとつは「水を湛える器」であり、その深さが問題となる。J区・C区で検出された遺構はいたって浅いが、本来の深さはIII層の厚さである約15cmを加算するものである。したがって遺構中央では深さ20cm前後であり、水田として機能しうる深さをもつことになる。凹地遺構が深い湛水を意図するものだとても、その深さよりも、透水性が低く地下水位を規定するIV層に達することや、通水可能なレベルまで掘り下げることに意味があるようと思える。

#### c) 細胞遺跡の凹地遺構B類・C類について

この形態の遺構は、G区・I区・A区・E区・F区の、南北190mの範囲に17基分布しており、SX706を除けばまとまった群をなしている。B類の遺構は、平面的には耕地整理以前の「堀田」によく似ており、この「幅の広い溝状遺構」に大きな示唆をあえたのは、耕地整理に際して作成された現形図であった。この種の遺構は群馬県玉村町柄田添遺跡に類似するものが1基あ

遺構名	調査区	周溝底面標高	検出面積
S X004	J区	7.88~7.95m	399m <sup>2</sup>
S X003	J区	7.86~7.93	145
S X002	J区	7.87~7.95	308
S X007	J区	—	—
S X006	J区	7.84~7.88	75
S X001	J区	7.92	204
S X005	J区	7.85~7.90	15
S X304	C区	7.96~8.04	151
(a・b)			
S X305	C区	7.83~7.98	390
S X307	C区	7.86~7.98	203
S X306	C区	7.87~7.93	125
S X308	C区	7.88~7.95	62
S X911	I区	8.01~8.05	29
S X509	E区	8.18~8.22	—
S X510	E区	8.18~8.22	166
S X613	F区	8.12~8.16	14
S X614	F区	8.00~8.05	36
S X622	F区	8.10	47

第7表 細胞遺跡凹地遺構A類一覧

遺構名	調査区	底面標高	検出面積
S X706	G区	7.67~7.88m	66m <sup>2</sup>
S X917	I区	8.00~8.10	55
S X902	I区	7.85~8.01	73
S X903	I区	7.89~7.94	81
S X912	I区	7.88~7.99	37
S X913	I区	7.89~7.94	86
S X103	A区	7.88~7.93	158
S X107	A区	7.93~7.85	80
S X101	A区	7.93~7.97	95
S X102	A区	7.96	49
S X502	E区	8.01~8.05	46
S X504	E区	7.97~8.05	43
S X511	E区	—	47
S X512	E区	8.06	25
S X505	E区	7.91~8.02	54
S X508	E区	8.06	28
S X617	F区	8.10	49

底面標高欄の単印は覆土が2層構造の遺構をさす。

第8表 細池遺跡凹地遺構  
B類・C類一覧

り、「掘込田（ホリゴメダ）」と仮称され、埋積した浅間山火山灰によって1783年以降の年代を与えられている。ところで、凹地自体を施設と考えるのか、掘り残された場所が使われたと考えるかによって、遺構の評価が全く異なることとなる。後者は排水不良な低湿地を開発する「掘り上げ田」の可能性であるが、微高地の周縁に位置する本遺跡に合致するものとは思われない。発掘調査では暗渠排水などを使用したが、これは周囲の水田から渗出する水や降水に対応するためであり、遺跡はいわゆる低湿地の状況ではない。そのほか、掘り上げられた土が利用された可能性もないではないが、以下で記述するように凹地自体を何らかの施設と見るのが妥当である。

覆土の状況については、黒褐色土あるいは暗褐色土 単層のものと、下部にIV層（地山土）の再堆積がある

2層構造のものの2タイプがある。後者については、遺構底面と同様の土を敷き入れることに「床土」としての目的があるとは思われず、むしろ、底面のレベル調整を意図した埋土であろう。単層のものはその底面が、2層構造のものは下層土の上面が、それぞれ水平に調整されていることはその推測を裏づけている。遺構の記述ではS X901とS X103を一応別の遺構として扱ったが、長大であるがためにS X901の部分に埋土調整がある、ひとつの遺構である可能性が高い。B類の凹地遺構が幅6mを越えない溝状の遺構であるのは、底面レベル調整、ひいては灌水量の管理が容易であるということにひとつの理由があるようと思われる。C類の凹地遺構がさして大きな面積でないことも、このことに関係があろう。このように、B類・C類の凹地遺構が水を湛えることに意味があるのであれば、水の効果的運用を計るためにその形態と構造が規定されているものと考えられる。

民俗例には、田植えに先だって山野の若木や小枝を田に踏み込む「刈敷」の儀礼があり、山の活力を注入するものとする考えがある〔坪井1983〕。これを敷衍すればS X902の錢貨も貨幣のものつ「マジカルな性格」〔網野1990〕を意識した、予祝儀礼の遺物として理解できるのではないかだろうか。S X902の下層堆積土が、上述のように底面調整の埋土とすれば、造作に際する儀礼の遺物ということになろう。

これらの遺構は溝を接続するものが多いが、C区・J区のA類遺構群のような系統的通水経路をもっていない。しかしながら、遺構群に沿うようにSD103(=SD503)が走っており、これが幹線水路となっているようである。これに接続するSD602は溜め池状の遺構であるS X615に結ばれており、S X615が水の運用をコントロールしていると推測される。一方で、S X

903のように通水路をもたず単独で存在している例があり、S X107・S X101・S X912・S X913もその可能性がある。このような遺構がある以上、凹地遺構B類・C類一般が湛排水を容易に繰り返す施設と想定し難い。通水路をもたないものについては、降水や滲出した地下水、あるいは他所から運搬した水によって使用されるのであろう。なお、溝と不可分な関係にある S X511は特異な例であり、それに連続する S X504は、S D503が埋設した後に重複して造作されている。この2遺構の状況から推考すれば、S D602が十分な水量をS D503(=S D103)に供給できなくなった時点での他の多くの遺構が廃絶し、S X511とS X503が造作されたのではないでろうか。A類との関係については、S X502が、周溝の完結していないS X509(A類)と重なる可能性をもつものの、A類とB類およびC類の明確な重複は認められない。S X616はA類と分類することもできるが、これはS X617に付帯する掘り込みと思われる。したがって、A類とB類およびC類の凹地遺構はほぼ同時期に存在したものであり、栽培する作物、あるいは栽培技術等が異なるものと推測する。

ところで、凹地遺構間の空間についてであるが、奈良・平安時代の包含層であるIII層が堆積するのみで、特に変化は認められない。遺構から掘り上げられた土の堆積もみられず、これについては西側の低地域に運搬されたのではないだろうか。空間は、凹地遺構との相対的な関係において「畦畔」であり、また道路であるものと理解する。

#### d) 寺道上遺跡A地点の凹地遺構A類について

細池遺跡の凹地遺構A類が有機的にむすばれた遺構群であったのに対し、寺道上遺跡のそれは散在しており、無秩序な印象を受ける。遺構の規模にも著しい隔たりが見られ、長大なものと狭小なものが混在している。また、南区では溝と凹地遺構が複雑に重複している。細池遺跡のそれと同形態の遺構でありながら、遺構群としては、計画性において大きな差異が認められる。遺構個々の形態に関しては、周溝が壁面を離れたり、周溝が不明瞭な、いわば規格を脱したものが多くみられる。さらに、S X15・S X15bのように付帯部分のある遺構が3組存在する。主体となる部分と付帯部分とは底面レベルが明らかに異なるため、単なる拡張や再造作とは思われず、検証のない憶測ではあるが、付帯部分で別の作物が副次的に栽培されるのではないだろうか。ところで、遺構の平面形態が不定形である理由は細池遺跡の項で前述したが、遺構が散在する寺道上遺跡において、十分に合理性があるわけではない。むしろ大きな疑問を残している。

遺構名	周溝底面標高	検出面積
S X58	7.39~7.46m	46m <sup>2</sup>
S X47	7.36~7.40	13
S X50	7.39~7.40	4
S X46	7.42~7.49	28
S X43	7.40~7.48	36
S X42	7.38~7.45	68
S X53	7.28~7.33	59
S X54	7.49~7.52	67
S X33	7.44~7.51	—
S X6	—	11
S X3	7.45~7.49	22
S X4	7.42~7.55	36
S X8	7.41~7.54	185
(S X8 b)	—	83
S X13	7.44~7.49	114
(S X13 b)	—	11
S X15	7.43~7.48	129
(S X15 b)	7.66~7.72	35
S X16	7.42~7.49	—
S X17	7.44~7.49	78
S X18	7.40~7.47	47

第9表 寺道上遺跡  
凹地遺構A類一覧

通水路については、個別の導水溝をもって比較的規模の大きい溝に連結する遺構がある一方、S X58のように溝に直接結ばれるらしきものが存在する。S X46・S X47・S X50も後者の可能性はあるが、S D40との切り合い関係が確認されておらず、調査の不手際と言わざるをえない。仮にS X46などが完結した遺構であれば、それ自体は蓄水不可能であり、遺構の水位が溝の水位に左右されるか、溝から水を汲み上げ周溝を閉塞させることとなろう。なお、S X8は西半中央をS D5が貫き、さらにS D5と周溝を結ぶ導水溝が存在するという複雑な通水の様態をとっている。なお、S D40の覆土下部に水平堆積層がない（図版96）ことからすれば、當時多量の水が流れていたとは考え難い。底面のレベルが最も低いS D40がこのような状態であれば、他の溝も同様と推測され、別個の通水溝をもつものについては、導水溝の開閉だけで導水・蓄水が可能であるとは思われない。

#### e) 凹地遺構類似の遺構について

凹地遺構3形態のはかに、凹地遺構に類似する性格をもつと考えられる遺構が存在する。細池遺跡S X615b・寺道上遺跡S D10b・S D35bは、溜め池状遺構および溝に付帯する遺構であり、寺道上遺跡の2遺構は「周溝」でないものの、撇状の溝が内部に走っている。ただし、主体となる溝からのオーバーフローがない限り、遺構は深く湛水することなく、撇状の溝に水が少量留まることとなろう。3遺構は通常、主たる溝からの滲出水やそれからの散水によって少量の水が保たれるものと想定する。d)で上述したS X46などは、S D40と同一時期に使用されていたのであれば、このような通水の様態をとるのであろう。

#### f) むすび

以上、推測に推測を重ねた感は否めないが、凹地遺構等が水の取得を必要とする遺構であることは疑い難く、今のところ水田の他に相当するものがないように思われる。しかしながら、形態の異なる凹地遺構が同時期に併存することや、「付帯」部分のある遺構の存在することを考慮すれば、凹地遺構等のすべてを水田とすることはできない。また、上述の検討からは遺構に水が深く湛えられる状況は想定しにくく、この点では自然化学分析との一致をみている。水 자체が最大の栄養素であり、水が温度調節の媒体である水田において、このような状況は高い生産性を期待できないものである。このことは一方で、中世に利水困難な微高地に開発が拡大したことを見出している。また、微高地にあるがために、検出された遺跡であるということができる。寺道上遺跡の凹地遺構A類は、同形態でありながら細池遺跡のそれとは群としての統一性を欠いており、開発組織の違いを感じる。いずれにせよ、このような遺構は他地域でも自然堤防上や微高地の周縁で検出される可能性は十分にあり、比較検討がなされる類例の発見を期待する。

## 2. 出土遺物について

細泡遺跡・寺道上遺跡では奈良・平安時代～近世までの遺物が出土している。しかし、両遺跡では遺物量が少なく、共伴関係を確認し得る一括遺物もきわめて少ないため、各時代の様相について詳細に論じることはできない。ここでは主体を占める奈良・平安時代の遺物を中心にその概略をまとめておく。

### a) 細泡遺跡の土器

須恵器の無台杯は器壁が薄く、身が直線的に開くものが多い。また、有台杯A・Bは、胎土が精良で、径1mm以下の柔らかい白色粒子が含まれる。これは山三賀II遺跡で報告された胎土B群と呼ばれるものと共通することから、9世紀中葉から流通し始める佐渡小泊窯跡群の製品と推定される。ほかに細泡遺跡の14・16・17・20・33・36などもこうした特徴を有し、小泊窯系の製品が相当数含まれるようである。土師器では、SK704・SX705の碗は器壁が薄く、底径は小さめである。長壺58は体部のふくらみが少ない。こうした特徴から、本遺跡の時期は概ね9世紀後半を中心とするものといえよう。金属器を模倣した22やハケ目調整を施した63など一部のものは9世紀初頭まで年代が上がるものと思われる。

特異な例として足長の有台杯25があげられる。新津丘陵窯跡群の製品である可能性が高いが、福島県会津坂下町古館遺跡〔和田・古川1992〕に同様の有台杯がみられる。

### b) 寺道上遺跡の土器・陶器

寺道上遺跡A地点ではSX55で一括資料が出土している。食器類は須恵器より土師器の割合が高いようである。無台杯1・2は、身が直線的に開き、器壁が薄く、ロクロナデの凹凸が目立つ。胎土は上述した佐渡小泊窯跡群の製品に類似することから9世紀後半に位置づけられよう。土師器碗4は底部の切り離しが回転ヘラ切りによるものである。44や細泡遺跡の46～48も回転ヘラ切りの杯であり、稀な例といえる。SX55以外の須恵器も小泊窯系のものが多く含まれ9世紀後半を主体とするものであろう。

38は窯道具であるが、須恵器窯跡以外での出土は稀である。細泡遺跡でも窯壁の破片と思われるものも出土している。本遺跡から西に2km程のところに奈良～平安時代の瀧谷窯跡と草木窯跡が確認されており、これらとの関連性も考えられる。70～73は内筒状土器製品である。底部がないため土管状としたが、破片資料のみで全形を知り得ない。山三賀II遺跡でわずかに類例がみられるが用途は不明である。

珠洲焼片口鉢については、口縁部調整のあり方から、吉岡編年〔吉岡1982〕におけるIV期、14世紀代に相当するものと考えられる。

#### c) 転用研磨具・研削具

76~79は須恵器片や珠洲焼片を研磨具・研削具として転用した例である。細池遺跡で4点、寺道上遺跡A地点で1点が出土している。このように硬質の土器片を研磨具・研削具として転用した例は奈良・平安~中世、近世の遺跡で出土している。県内では、吉川町樋田遺跡〔戸根1990・1991〕、頸城村水久保遺跡・中島古屋敷跡遺跡〔秦1988〕、同村青野南畑遺跡〔小林1989〕、上越市春日山城跡〔小島1978〕、同市四ヶ屋遺跡〔小島1989〕、同市今池遺跡〔坂井1984〕、長岡市藏王堂城址〔大橋1981〕、亀田町荒木前遺跡〔渡辺ますみ1991〕などで出土している。

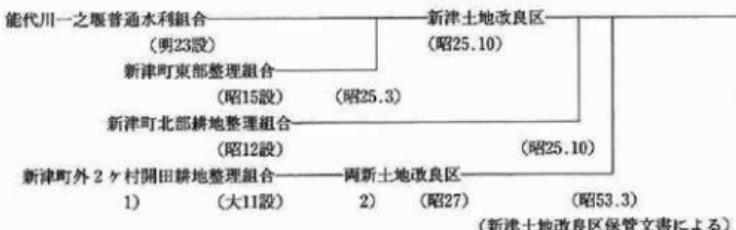
#### d) むすび

細池遺跡・寺道上遺跡とも9世紀後半を主体とするが、食膳具において土師器の量が多いことが注目される。この時期は山三賀II遺跡のIV期に相当するが、山三賀II遺跡では土師器の出土量がきわめて少ない。蒲原平野における他の当該期の遺跡においても食膳具に占める土師器の割合は少ないようである。一方、頸城平野を中心として9世紀後半以降、土師器の食膳具は増加し、越後全体でも同様の傾向にあることが指摘されている〔坂井1990〕。細池遺跡・寺道上遺跡の様相は、こうした流れの中でとらえるべきものであろう。ただし、細池遺跡・寺道上遺跡と山三賀II遺跡の様相の差異が地域差によるものか時期差によるものかまでは言及できない。今後、新津地域の資料増加により明らかにされるであろう。

## 附章 新津市東部阿賀野川左岸の旧景観について

このことについては、すでに第2章2「細池遺跡・寺道上遺跡周辺の旧景観について」で前述しているが、「新津町外二ヶ村開田耕地整理組合現景図」(以下、新津町外二ヶ村現景図)・「新津町東部耕地整理組合現景図」(以下、新津町東部現景図)等は、耕地整理以前の土地利用状況や地形を知る上で特に良好な史料であり、阿賀野川流域の開発のあり方、細池遺跡・寺道上遺跡の理解に欠くことのできないものである。新津土地改良区のご厚意により、ここに一部を掲載させていただく。

現在見ている水田地帯の景観は、近世の新田開発を除けば、長期間にわたる耕地整理事業によって形成されたにはかならない。この事業は現在、新津土地改良区に引き継がれおり、耕地整理組合の設立・合併の概要は以下のとおりである。



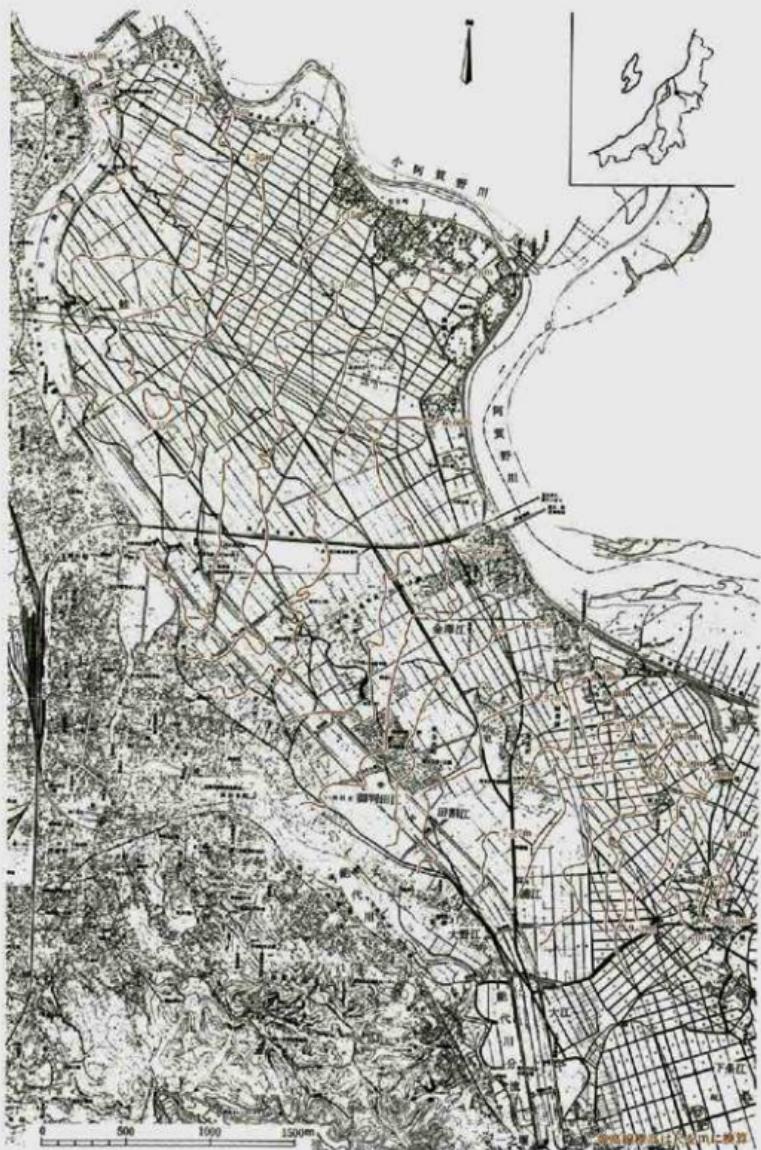
能代川を水源とする水利は、近世中期に一之堰組(能代川・阿賀野川間)・二之堰組(能代川西方、新津・田家・大鹿・善道方面)・三之堰組(能代川西方、北上・川口方面)が組織されており[井野1993]、能代川一之堰普通水利組合は、一之堰組を継承したものと見られる。これは新津町東部耕地整理組合を除く新津土地改良区の事業区域にはほぼ相当するものである。

第22図は「新津町外二ヶ村現景図」と「新津町東部現景図」から水系および等高線を抜き出し、現況に重ねたものである。能代川・阿賀野川間の主たる水系は、能代川一之堰から再び能代川へ落水する経路であり、これに鮭川等の小河川が結びついている。しかし、金屋集落付近には、これと分離した五泉・村松方面からの下条江が通ずる。

地形については、金屋集落から東金沢集落北方に微高地が認められ、細池遺跡・寺道上遺跡A地点はこの微高地西方の緩傾斜地に位置している。また、満願寺集落南方から鮭川河口方向

1) 新津町、阿賀浦村、新闘村をさす。

2) 新津町、新闘村をさす。新津町は大正14年に阿賀浦村・満日村と合併している。



第22図 新津市東部阿賀野川左岸の地形と水系

【新津町外二・村開田耕作整理組合 1922年】・  
【新津町東部耕地整理組合1940年】から作成  
新潟市作成新潟市全図 1:10,000 昭和62年編纂及び修正

にも、帯状の微高地が存在する。これらの微高地は阿賀野川が形成した自然堤防と考えられ、小河川の流れや土地利用のしかたを規定しているものと見られる。能代川・阿賀野川の度重なる氾濫の記録からすれば、遺跡の年代の地形と現景図の地形とにある程度の相違を考慮しなければならないが、細池遺跡が奈良・平安時代の集落の一部であること、後者の微高地には古墳時代から中世にかけての沖ノ羽遺跡が位置することから、二つの微高地が比較的新しい時期に形成されたとは考え難い。

以下、簡略な説明を加えて「新津町外ニケ村現景図」の各部分を示す。原図は彩色されており保存状況も良いが、掲載する各図は原図を縮小複写したものであり、不明瞭さを補うために水路および河川を墨影し、畠はその輪郭をトレースした。また、現景図にしたがって小字名を書き加えた。団名は【鮭川】を除いて中心となる大字を、水利の名称は「中蒲原郡史」の記述を用いている。

〔東金沢（1）〕 図右下空白部分は「新津町東部現景図」の図域である。浦江の西方はこれに長軸を平行させる田畠混在域であり、典型的な「堀田」の景観を呈している。図域の西方は急激に畠の比率が低下しており、能代川の旧氾濫原と思われる。西家浦・東家浦は東金沢集落であり、宅地が集中する。

〔東金沢（2）〕 東側は阿賀野川の自然堤防上にあり、畠・宅地が多くを占めるものの、西側は油橋から水田専業域となっている。図右上は中新田集落にあたる。

〔古田〕 能代川沿いの自然堤防上に畠・宅地が散在するが、その他は水田専業域である。水田区画は、規格化された方形ではなく、強い方向性が認められない。東方は長池など池のついた小字が連続する。

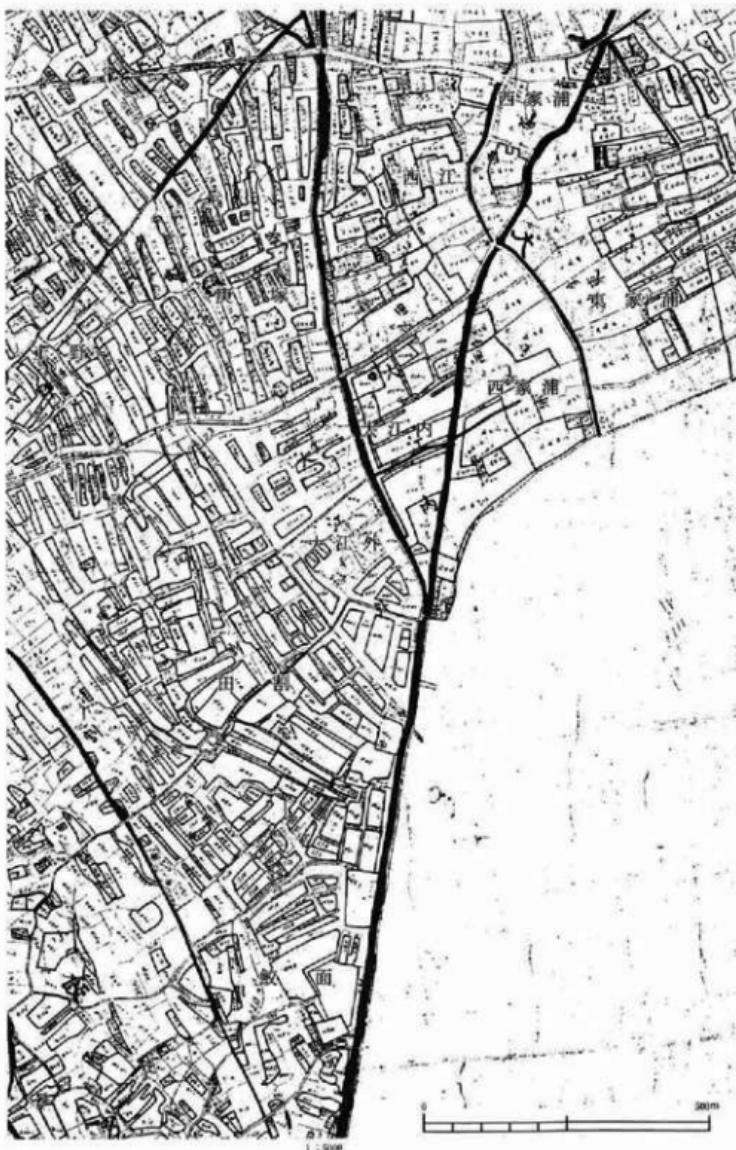
〔鮭川〕 大字満願寺に属するが、周辺一帯を指す通称名を用いた。鮭川西側は自然堤防が発達し、西又、山王浦にかけて畠が連続するが、上山王浦から櫻舟向はごく一部を除いて水田で占められる。この区域は能代川自然堤防の発達が小さいようである。

〔満願寺〕 北東部は水田と畠が混在し、「堀田」が編目状に展開する。そのほかは、対照的に方形区画の水田が水路に整然と区画されている。図東方は畠および満願寺集落であるが、際立った自然堤防の区画をなしていない。

〔七日町〕 島嶼状に分岐する水路にそって、水田の割合が低い田畠混在域が認められ、東南方の阿賀野川まで連続している。おそらく旧流路の痕跡であろう。この水路の内側、新潟県農事試験場園芸部周辺は水田を挟まない畠地が帶状に広がる。



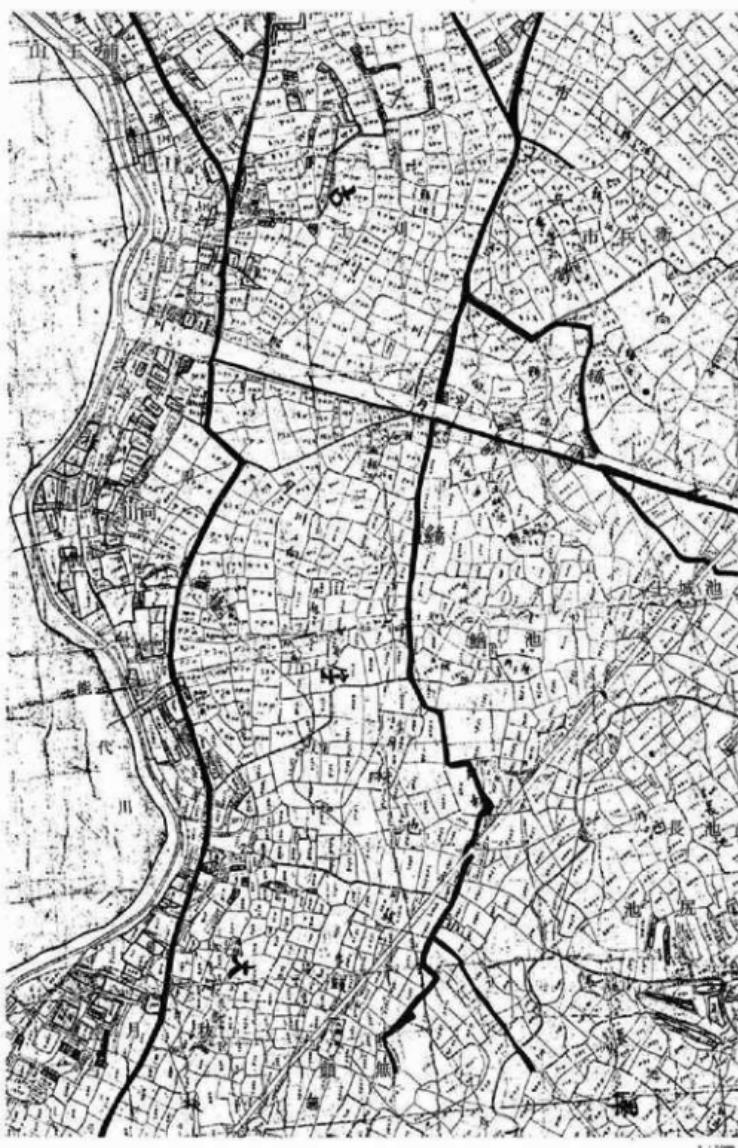
第23図 「新津町外二ヶ村開田耕地整理組合現景図」部分位置図



第24図 東金沢(1)



第25図 東金沢(2)



第26図 古田



第27図 鶴川



1:5000

第28図 滅願寺



第29図 七日町

## 要 約

1. 細池遺跡・寺道上遺跡は、新潟県北部の新津市大字坂柳および大字東金沢に所在する。遺跡は阿賀野川左岸の微高地またはその周縁に位置する。
2. 調査は磐越自動車道の建設に伴って、平成3年度・4年度に実施した。実質的な調査面積は細池遺跡が19,960m<sup>2</sup>、寺道上遺跡が14,660m<sup>2</sup>である。遺跡は周辺の微高地に及ぶ広い範囲を有すると見られる。
3. 調査の結果、奈良・平安時代と中世の遺構・遺物が検出された。奈良・平安時代は集落跡の一部であり、中世は広範囲な圃場と考えられる。
4. 奈良・平安時代の遺構には、建物跡1棟、炉跡2基、土坑5基のほか、溝等がある。
5. 奈良・平安時代の遺物は9世紀代が主であり、新津丘陵窯跡群や佐渡小泊窯跡群の製品が含まれている。
6. 中世の遺構には、圃場の各単位施設と考えられる凹地遺構53基のほか多数の溝等があり、凹地遺構は3形態に分けられる。凹地遺構には水田が含まれると考えられるが、これを裏づける遺物は出土していない。なお、細池遺跡においては、凹地遺構のA類とB類は使用目的の異なる同時期の施設である可能性が強い。
7. 自然科学的分析については、植物珪酸体や花粉化石の検出個体数が少なく、遺構が置かれた環境やその性格を検討する十分な結果が得られていない。したがって、遺構の具体的な検証は類似資料の増加に俟ちたい。
8. 中世の遺構は、これに直接関係する遺物が少ないため時期は明確でないが、14世紀頃から近世初期までの可能性がある。
10. SX901出土銭貨6点は、遺構造作時における予祝儀礼の遺物と考えられ、興味深い事例である。
11. 細池遺跡・寺道上遺跡は微小な地形差を反映して形成されたものであり、附章において耕地整理以前の地形および土地利用状況を示した。

## 引用・参考文献

- ア部洋輔・田村 裕ほか 1987 「中世の舞台」・「鎌倉武士と庄园」『新潟県史』通史編2 中世 新潟県  
甘粕 健・荒木勇次ほか 1989 「保内三王山古墳」 三条市教育委員会  
甘粕 健・川村浩司ほか 1992 「古津八幡山古墳！」 新津市教育委員会  
イ井野 進 1993 「水利と新田開発」『新津市史』通史編・上巻 新津市  
ウ上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会  
オ太田昭夫ほか 1991 「仙台市文化財調査報告書第149集 富沢遺跡 第30次調査報告書I (細文~近世編)」仙台市教育委員会  
大橋康二ほか 1981 「藏王堂城址発掘調査報告書」 長岡市教育委員会  
岡本都栄 1986 「序章 自然環境」『新潟県史』通史編1 原始・古代  
小田澤佳之 1992 「柄田派遺跡(第一次)」「第4回東日本の水田を考える会ー資料集」 東日本の水田を考える会  
カ風間俊人 1992 「新小谷遺跡」 (財)長生都市文化財センター  
金子 連 1986 「こうや(興野・脚屋)のつく地名の語る歴史」『研究集録』第16号 吉田商業高等学校  
川上貞雄 1989 「第二編 考古」『新津市史』資料編第一巻 原始・古代・中世 新津市  
川上貞雄ほか 1981 「山崎須恵窯址」 五泉市教育委員会  
川上貞雄・遠藤孝司ほか 1983 「馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書」 白根市教育委員会  
キ北村 亮 1991 「上浦遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査だより」 新潟県教育庁文化行政課  
木村宗文 1986 「越後国延喜式内社の所在をめぐって」「政治社会史論叢」 山田英雄先生退官記念会編 近藤出版社  
木村宗文 1988 「古代蒲原郡の郷と式内社」「新潟中央高等学校研究年報」35 新潟中央高等学校  
木村宗文・竹田和夫・田村裕 1989 「文献」『新津市史』資料編第一巻 原始・古代・中世 新津市  
木村宗文 1989 「城館跡」「新津市史」資料編第一巻 原始・古代・中世 新津市  
ク工楽善行 1991 「水田の考古学」UP考古学選書12 東京大学出版会  
コ小島幸雄ほか 1978 「春日山城跡発掘調査概報！」 上越市教育委員会  
小島幸雄ほか 1989 「四ツ屋遺跡発掘調査報告書」 上越市教育委員会  
小畠弘己・池崎謙二ほか 1984 「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV 博多」 福岡市教育委員会  
小林義弘ほか 1989 「青野南畠・源訪北畠B遺跡」 頸城村教育委員会  
小村 弘 1983 「新田開発」「幕藩体制の基礎的研究」 吉川弘文館  
サ坂井秀弥 1984 「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡」 新潟県教育委員会  
坂井秀弥 1986 「平安時代中期の土器」「新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第40集 一之口遺跡西地区」 新潟県教育委員会  
坂井秀弥・高橋 保・田辺早苗ほか 1986 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集 一之口遺跡西地区」 新潟県教育委員会  
坂井秀弥・金沢道篤・田辺早苗 1987 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集 三島郡出雲崎町番場遺跡」 新潟県教育委員会

- 坂井秀弥 1988 a 「越後・佐渡における古代土器の生産と流通－8～10世紀を中心として－」『シンボジウム北陸の古代土器の現状と課題』報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 坂井秀弥 1988 b 「新潟県における中世考古学の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』第1号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥 1989 a 「奈良・平安時代の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀II遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989 b 「越後・佐渡における古代手工業生産の展開」『北陸の古代手工業生産』 北陸古代手工業生産史研究会
- 坂井秀弥 1990 「越後平安期土器編年素描－西南部頃域地方を中心にして－」『東国土器研究』 第3号 特集黒色土器－展開と終焉－ 東国土器研究会
- 坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実 1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 物新潟県埋蔵文化財調査事業団 1993 「沖ノ羽遺跡」新潟県埋蔵文化財調査事業団年報
- ス鈴木郁夫 1975 「地形分類図」『下越開発地域土地分類基本調査 新津』 新潟県農地部農地建設課
- 鈴木公雄 1993 「渡来銭から古寛永通宝へ出土六道銭からみた近世前期銭貨幣流通史の復元」『論苑考古学』 坪井清足さんの古稀を祝う会 天山舎
- 七関 雅之・澤田秀実ほか 1989 「新五兵衛山遺跡！」 豊栄市教育委員会
- タ滝沢見則 1992 「西谷遺跡の水田跡について」『西谷遺跡発掘調査報告書』 刈羽村教育委員会
- 田中義昭 1986 「弥生時代以降の食料生産」『岩波講座日本考古学』3 生産と流通 岩波書店
- 田村 裕 1988 「中世越後国の地城構造」『北日本中世史の総合的研究』 昭和61～62年度科学研究所補助金研究成果報告書 東北大学文学部
- ツ坪井洋文 1983 「日本人の再生觀一稻作農耕民と畑作農耕民の再生原理－」『日本民俗文化大系』 第二巻太陽と月＝古代人の宇宙觀と死生觀＝ 小学館
- ト戸根与八郎 1990ほか 「稲田遺跡 第二次発掘調査概報」 吉川町教育委員会
- 戸根与八郎 1991ほか 「稲田遺跡 第三次発掘調査概報」 吉川町教育委員会
- 外山秀一 1991 「ブラント・オパール分析と水田址の発掘」『研究所報』第14号 帝京大学山梨文化財研究所
- ナ中瀬原郡役所 1915～1918 1986復刊 「中瀬原郡誌」新津市編 臨川書店
- ニ新潟県 1983 「新潟県史」資料編4 中世二 文書編II
- 新潟県 1986 「新潟県史」通史編I 原始・古代
- 新潟県 1986 「[新潟県史]資料編中世補遺(1)」『新潟県史研究』第19号
- ハ八賀晋 1988 「水田土壤と立地」『弥生文化の研究』2 生業 雄山閣
- 秦 繁治 1988ほか 「永久保・中島古屋敷遺跡」 頸城村教育委員会
- フ藤岡謙二郎編 1985 「講座考古地理学」第4巻 村落と開発 学生社
- 藤巻正信 1988 「新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第27 西田・鶴巻田遺跡群」 新潟県教育委員会
- 藤巻正信 1989 「土器片円盤について」『新潟考古学談話会会報』第3号 新潟考古学談話会
- マ前山精明・小林義広・山口栄一 1985 「城願寺跡・坊ヶ入墳墓－東北電力原子力発電所建設計画用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－」 卷町教育委員会
- モ森田 勉 1981 「鎌倉出土の中国陶磁器に関する」『貿易陶磁研究』No. 1 日本貿易陶磁研究会
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
- ヤ山田英雄 1981 「延喜式の弥彦神社について」『かみくひむし』第43号 かみくひむしの会

- 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 吉岡康暢 1982 「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」『庄内考古学』18 庄内考古学会
- 吉岡康暢 1987 「中世陶器の生産經營形態—能登・珠洲窯を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第12集 国立歴史民俗博物館
- ワ 渡邊朋和 1991 「長沼遺跡発掘調査報告書」 新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1992 「上浦遺跡発掘調査報告書」 新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1993 「上浦B遺跡」「埋文にいがた」特集号(No.2) (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 渡辺ますみ 1991 「荒木前遺跡」亀田町教育委員会
- 和田 聰・古川利意 1992 「古館遺跡」「会津坂下町文化財調査報告書第27集 福島県営園場整備事業 阿賀川II来地区遺跡発掘調査報告書」 会津坂下町教育委員会

凡例

黒：黒母

金：金黄母

黄：石英

長：長石

別表1 烟池遺跡出土土器観察表

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存率	手法	備考
1	SK704	土器	無台輪	口13.7 高3.8 底6.2	黒、黄	褐色	至	口縁2/5	ロクロナデ、底部回 転糸切り	口端内面ふくらむ。胎 土精良
2	#	#	#	口13.2 高3.7 底5.3	黒、黄、 長	淡褐色	普	4/5	ロクロナデ、底部回 転糸切り	口端ふくらむ。外表面 摩滅
3	#	#	#	口13.0 高4.2 底5.3	黄	浅黃褐色	普	4/5	ロクロナデ、底部回 転糸切り	口端ふくらむ。内外面 摩滅。径4mmの複合む
4	#	#	鍋	口38.0 高、 長	黒、黄、 長	褐色	普	口縁1/8	内面～口縁部ロクロ ナデ、体部カキ目	
5	SX705	#	無台輪	口17.8 高5.2 底7.3	金、黒、 黄、長、 角閃石	淡黃褐色	普	ほぼ完全	ロクロナデ、底部外 面糸外り	径1mm以下の石英多 い。径2mmの縫をわず かに含む
6	#	#	#	口13.2 高3.7 底5.2	黄、長	#	至	3/4	ロクロナデ、底部外 面糸切り	径3mmの長石・研磨む
7	#	#	#	口13.2 高4.0 底5.2	黒、黄	黃褐色	普	4/5	ロクロナデ、底部回 転糸外り	径3mmの研磨む
8	#	#	#	口13.3 高3.8 底7.0	黄、長	褐色	普	一部欠	ロクロナデ、底部外 面糸切り	内外面摩滅
9	SK707	#	#	口12.6 高3.9 底6.7	黄、長、 海綿骨針	淡褐色	普	2/5	ロクロナデ、底部外 面糸切り	内外面摩滅。径1～2 mmの砂礫多い。
10	#	#	長胴窓		黒、黄、 長	淡褐色	普	底部一帯欠	外表面タキ、内面に 指痕痕状のくぼみあ り	径1～2mmの砂礫多 い。外表面灰化物
11	#	#	鍋	口40.0	黒、長	にぶい・黄褐色	普	口縁1/24	内外面ともカキ目の あと口縁部ロクロナ デ	体部外表面沈積二重。 緻密な砂礫多数
12	SX808	#	鍋	口42.0	黄、長	淡褐色	普	口縁7/16	内外面カキ目のあと タキ	緻密な砂礫多数、外表面 灰化物
13	#	#	長胴窓		黄、長、	褐色	普	底部欠	タキ	径1～2mmの長石多い。
14	32D-8	須恵	無台杯	口12.4 高3.9 底8.0	黄、長	灰白色	歎	1/4	ロクロナデ、底部回 転ヘラ切り	
15	32D-5	#	#	口12.0 高3.4 底8.1	長	灰白色	普	2/5	ロクロナデ、底部回 転ヘラ切り	ロクロ右回り、口縁部 内面に一層灰化物。径 1～4mmの白色粒子多 い。

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存率	手法	備考
16	27D-22	須恵	無台杯	底9.8	英、長	灰白色	軟	底部1/13	ロクロナデ、底部回転ヘラ切りのあと中央部一方向ナデ	
17	SX001 33D-25	*	*	底10.2	英、長	青灰色	普	底部2/5	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	1~3mmの白色粒子多い
18	32D-3	*	*	口12.6 高3.1 底8.6	英、長	灰色	堅	1/4	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロ右回り、径1~2mmの白色粒子含む
19	31D-9	*	*	口12.8 高3.5 底8.0	長	灰色	普	口縁1/24	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	微細な白色粒子含む
20	22B	*	*	口13.7	長	灰色	堅	口縁一部欠	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロ右回り、微細な白色粒子含む
21	32D-11	*	*	口13.8 高2.7 底8.0	長	青灰色	堅	口縁1/8	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	微細な白色粒子含む
22	24C-7	*	有台杯	台9.8	英、長	青灰色	堅	底部1/2	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	体部に沈縛二本
23	32D-10	*	*	口14.2 高7.3 底8.7	長	青灰色	普	底部3/5	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	体部外面自然釉、ロクロ左回り、微細な白色粒子多く含む
24	32D-4	*	*	台9.0	雪、長	灰色	普	底部一部欠	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロ左回り、微細な白色粒子多く含む
25	31C-4	*	有台碗	台9.8	長	灰色	普	底部1/32	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	直の可能性も有り
26	12C-19	*	*	口11.0	長	灰白色	普	口縁1/5	ロクロナデ	微細な白色粒子含む
27	32D-12	*	*	口13.8	英、長	にぶい黄緑色	堅	口縁1/5	ロクロナデ	微細な白色粒子多い
28	41C-24	*	*	口14.2	雪、長	暗オーラープ色	普	口縁1/10	ロクロナデ	外面自然釉
29	23D-18	*	無台杯 ?	口18.0	雪、長	綠褐色	普	口縁一部	ロクロナデ	器形不明、外面自然釉
30	23D-18	*	杯蓋	口12.0 高3.0	長	暗青灰色	堅	1/2	ロクロナデ、天井部外面回転ヘラ切り後ロクロケズリ	外面自然釉。器形はかなり歪む、ロクロ右回り、白色粒子含む
31	27D-18	*	*	口14.8 高2.9	英、長	灰白色	普	2/3	ロクロナデ、天井部外面回転ヘラ切り後ロクロケズリ	ロクロ右回り、白色粒子含む
32	32D-10	*	*	口13.8	英、長	灰色	普	口縁1/4	ロクロナデ、天井部外面回転ヘラ切り後ロクロケズリ	径1~4mmの白色粒子含む
33	18D-21	*	*	口15.4	英、長	灰色	普	口縁一部	ロクロナデ、天井部外面回転ヘラ切り後ロクロケズリ	ロクロ左回り、径8mmの横含む
34	21C-25	*	壺	口17.4 底12.4	英、長	灰色	堅	口縁1/4	体部はタタキ後一部ロクロナデ	口縁内面と外面自然釉
35	21C-26	*	*	口17.0	英、長	褐灰色	普	底部1/4	体部はタタキ後ロクロナデ	内面と口縁~肩の外面自然釉

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存率	手法	備考
36	22B-18	病原	甕	口17.0	金、長	鐵灰褐色	堅	口縁2/3	口縁部クロナデ、 体部タタキ	口縁内面と外面自然釉
37	32D-8	*	鉢	口28.2 底14.4	英、長	時褐灰色	堅	口縁1/4 底部1/5	体部外面・内面底部 近くカモ目、他はロ クロナデ	径2~3mmの白色粒子 含む
38	31D-15	*	長颈瓶	口10.0	雲、長	灰色	堅	口縁一部	ロクロナデ	ロ縁内外面自然釉
39	21D-22	*	*		長	灰色	堅	頭部1/6	ロクロナデ	頭部に沈線
40	19C-9	*	甕		英、長	灰色	堅	体部一部	体部外側カモ目、内 面ロクロナデ	径1mmの白色粒子
41	32D-6	*	長颈瓶	底10.8	雲、長	灰色	堅	底部1/2	ロクロナデ	
42	32D-12	*	甕	口50.0	英、長	青褐色	普	口縁1/6	ロクロナデ、体部外 面タタキ、内面は上 位が同心円文、下位 が平行文のあて具張 を残す	頭部に沈線二条
43	*	*	*		英、長	*	普	体部一部	外面タタキ、内面平 行文あて具張	44と同一個体
44	4E-7	*	不明		英、長	灰白色	軟	底部一部	外面タタキ、最下は ロクロナデ、内面に ハケ目	底部は円形でなく方形 か。因は推定
45	SD40 12C-10	*	*		英、長	灰色	堅	体部一部	外面タタキ、内面放 射状あて具張	径3~7mm長石含む
46	32D-3	土師	無台輪	口13.6 高3.3 底9.6	雲、英、 長	灰白色	普	口縁1/3	ロクロナデ、底部回 転ヘラ切り	ロタリ右回り
47	33D-1	*	*	底8.8	英、長	にぶい黄褐色	堅	底部1/2	ロクロナデ、底部回 転ヘラ切り	ロタリ左回り
48	*	*	*	口12.0 底9.4	英、長	淡黃褐色	堅	口縁1/6	ロクロナデ、底部回 転ヘラ切り	径8mmの白色粒子含む
49	32D-5	*	*	口12.8 高4.4 底5.2	雲、英	淡黃褐色	普	1/3	ロクロナデ、底部回 転糸切り	器面調整丁寧、胎土精 良
50	32C-25	*	*	口13.4 高3.1 底6.6	雲、英、 長	にぶい黄褐色	堅	1/3	ロクロナデ、外面底 部近くロクロケズ リ、底部回転糸切り	内面沈線一条
51	21C	*	*	口12.0 高3.2 底5.3	雲、長	淡黃褐色	普	1/3	ロクロナデ、底部回 転糸切り	内面摩擦
52	21D	*	*	口13.0 高3.5 底5.4	雲、長	淡黃褐色	軟	1/4	ロクロナデ、底部回 転糸切り	内面摩擦、径1mmの 白色粒子
53	SD702 22B-24	*	*	口11.4	雲、長 表面骨針	にぶい褐色	軟	口縁一部	ロクロナデ	
54	32C-25	*	有台輪	底8.0	雲、英、 長	にぶい黄褐色	普	高台一部欠	ロクロナデ、底部回 転ヘラ切り	ロタリ右回り、白色粒 子含む

番号	地点	種別	器種	液量	胎土	色調	焼成	遺存率	手法	備考
55	17D-22	土器	無台輪	口17.8	雲、長、 縫面骨針	赤褐色	堅	口縁1/8	ロクロナデ、外側 ミガキ	ミガキ痕明瞭
56	32D-3	々	々	口19.0 高6.6 底7.0	雲、灰、 長	淡黄褐色	普	口縁1/8	ロクロナデ、内面・ 口縁部外側ミガキ、 内面黒色処理	黒色土器器、ミガキ痕 明瞭
57	22C-9	々	々	口19.0 高7.2 底6.2	雲、灰	淡黄褐色	普	1/2	ロクロナデ、内面黒 色処理	黒色土器器、口縁部外 側にも墨色付着
58	SX410	々	長脚瓶	口20.0	雲、灰、 長	にぶい黄褐色	普	2/5	ロクロナデ、内面外 上半カキ目、体部下 半タタキ、あて具痕	内面摩滅のためカキ 目見えず、1~5mmの砂 礫多い
59	16C-21	々	々	口20.2	灰、長	にぶい褐色	軟	口縁一部	ロクロナデ	内面摩滅、径1~2 mmの長石多い
60	SX004 37D-20	々	々	口20.8	長、角閃 石	橙色	普	口縁1/8	ロクロナデ	内面摩滅、微細な砂 礫多い
61	23B	々	々	口22.8	雲、灰、 長	淡黄色	普	口縁1/10	ロクロナデ、外側カ キ目	微細な砂礫多い
62	SB715 Pit19	々	々	口16.8	雲、灰、 角閃石	淡黄色	堅	口縁1/6	ロクロナデ、内面カ キ目	内面摩滅のためカキ目 見えにくい
63	SX809	々	々	口26.0 高36.0	灰、長	にぶい黄褐色	普	1/3	ハケ目	内面摩滅、径1~2 mmの砂礫多い
64	32D-5	々	小甕	口12.0	雲、灰、 長	にぶい褐色	堅	口縁1/6	ロクロナデ	径1~4mmの砂礫含む
65	32D-8	々	々	口12.8	長	にぶい黄褐色	軟	口縁1/6	ロクロナデ	内面摩滅、微細な長 石多い
66	32D-5	々	々	口13.0	雲、灰、 長、角閃 石	にぶい黄褐色	普	口縁一部	ロクロナデ	砂礫多い
67	32D-18	々	々	口14.6	雲、長	にぶい黄褐色	軟	口縁1/6	ロクロナデ	口縁部内面灰化物
68	SX321 32D-8	々	々	底5.2	灰、角閃 石	淡黄褐色	普	底部1/2	底部ヘラ切り	ロクロ右回り、胎土精 良、白色粒子含む
69	32D-2	々	鍋	口24.2	灰、長	褐色	普	口縁1/12	ロクロナデ、体部外 面カキ目	内面摩滅、微細な長 石多い
70	SX708	々	々	口35.0	雲、灰、 長	にぶい褐色	堅	口縁一部	ロクロナデ、内外面 カキ目、体部外側一 部ケズリ	体部外面灰化物、微細 な砂礫多い
71	32D-3	々	々	口35.0	雲、灰、 長、角閃 石	淡黄褐色	普	口縁1/4	ロクロナデ、体部外 面上半カキ目、下半 タタキ、内面一部ハ ケ目	体部外面灰化物、径2 ~4mmの長石・白色粒 子・礫を含む
72	SD701	青磁	碗	口16.0	精良	緑灰褐色	堅	口縁一部		
73	10C-10	白磁	々	底6.9	精良、灰	灰白色	堅	底部一部		
74	35D-7	陶器	皿	底12.6	精良	にぶい黄褐色	堅	底部一部	ロクロナデ、体部・ 底部外面ロクロケズ リ	
75	SD303 33E-11	陶器	粗鉢	口37.4	長	明赤褐色	堅	口縁一部	口縁内外面に花紋二 条、口縁下ケズリ	備前焼に近似

別表2 寺道上遺跡A地点出土土器観察表

番号	地點	種別	器種	法量	基土	色調	施成	遺存率	手法	備考
1	SX55 11E-2	須恵	無台杯	口12.4 高3.4 底7.8		褐灰色	普通	完形	ロクロナゲ、底部回転ヘラ切り	底部外面に条線状正規 ロタリ左回り、胎土精良、白色粒子含む
2	"	"	"	口12.6 高3.1 底8.2	長	灰白色	普通	1/3	ロクロナゲ、底部回転ヘラ切り	底部外面に条線状正規 白色粒子含む
3	"	"	"	口11.0 高4.7 底7.5	長	褐灰色	普通	1/3	ロクロナゲ、底部回転ヘラ切り	白色粒子含む
4	"	土師	碗	口13.6 高3.7 底7.0	長	にぶい黄褐色	普通	1/4	ロクロナゲ、底部回転ヘラ切り	ロタリ右回り
5	"	"	"	口13.8 高3.8 底6.7	圓、英、 長	にぶい黄褐色	普通	底部1/2	ロクロナゲ、底部回転ヘラ切り	ロタリ右回り
6	"	"	"	口13.2 高4.6 底5.8	英、雲	にぶい黄褐色	普通	1/3	ロクロナゲ、底部回転糸切り	白色粒子含む
7	"	"	"	口16.0 高4.6 底8.4	英、長	淡黃褐色	普通	1/2	ロクロナゲ	
8	"	"	"	口17.8 底6.8	英、雲	にぶい褐色	普通	2/5	ロクロナゲ、底部回転糸切り	内面ミガキ、径3mmの 石英含む
9	"	"	"	底6.8	英、雲	淡褐色	普通	底部一部欠 く	ロクロナゲ、底部回転糸切り	ロタリ右回り
10	"	"	長縹	口24.6	圓、英、 長、チャート	灰黄色	普通	口縁1/6	ロクロナゲ	径1~2mmの長石多い
11	"	"	"	底8.6	圓、英、 長、チャート	にぶい黄褐色	普通	底部完形	ロクロナゲ、底部回転糸切り	ロタリ左回り、砂粒含む
12	"	"	鍋	口37.8	英、長、 チャート	淡黃褐色	普通	口縁一部	ロクロナゲ、体内部 外側カキ目	径2mmの石英・長石・ 他の砂粒を含む
13	SD35b 16D-20	須恵	無台杯	口13.0 高2.7 底8.8	圓、英	灰白色	普通	1/3	ロクロナゲ、底部回転ヘラ切り	径2mmの石英含む、白 色粒子含む
14	SD44 13C-11	"	"	口12.0 高3.4 底9.0	圓、チャート	灰褐色	普通	1/6	ロクロナゲ、底部回転ヘラ切り	白色粒子含む
15	11C-10	"	"	口12.0 高3.4 底6.0	圓、長	褐褐色	普通	1/8	ロクロナゲ、底部回転ヘラ切り	
16	13C-6	"	"	口14.0 高3.5 底7.0	圓、英、 長	灰白色	普通	1/4	ロクロナゲ、底部回転ヘラ切り	ロタリ右回り、径4mm の白色粒子を若干含む

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存率	手法	備考
17	13C-6	瓶	無台杯	口12.8 高3.4 底8.6	英、長	オーラープ灰褐色	普	1/4	ロクロナダ、底部回転ヘラ切り	白色粒子をわずかに含む
18	SX8b 9C-7	*	*	口15.0 高3.5 底11.2	震、英	灰白色	普	1/10	ロクロナダ、底部回転ヘラ切り	白色粒子含む
19	SD40 13B-23	*	*	口12.6 高3.2 底7.8	震	褐褐色	堅	底部1/2	ロクロナダ、底部回転ヘラ切り	ロクロ右回り、白色粒子含む
20	11E-3	*	*	口12.2 高3.2 底8.2	震	褐灰色	堅	1/3	ロクロナダ、底部回転ヘラ切り	底部外面に板状斑痕、胎土精良、白色粒子含む
21	11D-23	*	有台杯	底6.2	震	褐灰色	普	口唇部欠く	ロクロナダ、底部回転ヘラ切り後ロクロケメリ	ロクロ右回り、胎土精良、白色粒子含む
22	SX8 8C-4	*	*	底8.4		灰色	普	底部1/2	ロクロナダ、底部回転ヘラ切り	ロクロ右回り、白色粒子含む
23	8B-22	*	*	口14.7 高5.1 底9.0		青灰褐色	普	1/5	ロクロナダ、底部回転ヘラ切り	白色粒子含む
24	SX8 8C-5	*	*	口14.2 高6.8 底9.0		青灰色	普	1/5	ロクロナダ、底部回転ヘラ切り	胎土精良
25	SX42 11D-22	*	*	口13.7 高6.6 底9.4	英、長	灰色	堅	4/5	ロクロナダ、底部回転ヘラ切り	ロクロ右回り、径2~3mmの石英+長石含む、白色粒子多い
26	SD40 12B-5	*	*	口13.8	長	綠灰色	普	口縁1/8	ロクロナダ	口縁部に沈線一条、白色粒子含む
27	8B-20	*	*	底8.0	長	青灰色	普	底部1/3	ロクロナダ、底部回転ヘラ切り後ロクロケメリ	ロクロ右回り、白色粒子含む
28	SD40 12C16	*	*	口13.0 高5.7 底7.0	長	暗青灰褐色	堅	1/3	ロクロナダ、底部回転ヘラ切り	器形歪む
29	10D-10	*	*	底7.6	英、長	オーラープ灰褐色	軟	底部1/3	ロクロナダ	径2~3mmの長石・若干の白色粒子を含む
30	SD40 11D-21	*	*	底7.1	英	白灰色	軟	底部完形	ロクロナダ、底部回転ヘラ切り	径2mmの石英含む
31	SX58	*	*	底5.4	長	青灰色	堅	底部2/3	ロクロナダ、底部回転ヘラ切り	折損焼の可能性有り
32	SX6 10B-20	*	*	底8.8	長	綠灰色	普	高台1/10	ロクロナダ	白色粒子含む
33	不明	*	*	口12.8	長	暗青灰褐色	普	口縁1/8	ロクロナダ	体部外面沈線一条、白色粒子含む
34	SX42 11D-22	*	杯蓋	口12.4 高2.9	震、長	灰白色	普	1/2	ロクロナダ、天井部回転ヘラ切り後ナダ	天井部内面摩滅（転用視か）

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	直存率	手法	備考
35	11D-7	須恵	杯蓋	口16.0		オリーブ灰色	普通	口縁1/8	ロクロナデ	径1mm以下の白色粒子含む
36	10C-25	ク	ク	口15.4 高3.4 底10.2	長	オリーブ灰色	普通	1/2	ロクロナデ、天井部 回転ヘラ切り後ロクロ ナデ	白色粒子・径1~4mm の長石を含む
37	11D-7	ク	ク	口15.8 底12.4	長	青灰色	普通	1/10	ロクロナデ、天井部 回転ヘラ切り後ロクロ ナデ	ロクロ左回り、白色粒 子含む
38	10B-11	ク	漆道具	底6.8	長、チャ ート	暗緑灰色	堅	底部1/4	ロクロナデ、底部回 転ヘラ切り	体部に径5mmの穿孔二 箇所、ロクロ右回り、 径1~4mmの長石多い 、白色粒子含む
39	11B-16	ク	小瓶蓋	口5.0	雲、長	緑灰色	堅	口縁1/4	ロクロナデ	ロ谷・ロ緑部内面に自 然釉、白色粒子含む
40	11C-20	ク	長頸瓶	口11.0	雲、長	オリーブ灰色	普通	口縁1/3	ロクロナデ	白色粒子含む
41	8B-25	ク	甕	口21.4	長	緑灰色	普通	口縁1/10	ロクロナデ	径1~3mmの長石多い
42	SD9 C8-1	ク	ク	口25.2	長	暗灰色	普通	口縁一部	ロクロナデ、頭部外 面タタキ模様あり、 内面は同心円文あて 具底	ロ谷・ロ緑部内面に一部 自然釉、径2~4mmの 長石多い
43	SD40 12D-1	ク	ク	口30.0	英、長	明青灰色	普通	口縁一部	ロ緑部内外面ロクロ ナデ、頭部外面タタ キ、内面は同心円文 あて具底	径2mmの石英・径1~ 4mmの長石多い
44	10D-15	土師	無台杯	底8.0	雲	灰黄褐色	普通	1/4	ロクロナデ、底部回 転ヘラ切り	
45	10D-13	ク	無台碗	口12.6 高3.8 底5.4	英	にぶい橙色	普通	2/3	ロクロナデ、底部回 転糸切り	白色粒子含む
46	SXgb 8C17	ク	ク	口13.5 高4.3 底6.0	英、長	にぶい橙色	普通	1/2	ロクロナデ、底部回 転糸切り	調整丁寧、底面に「×」 のヘラ記号
47	SX54 9D-19	ク	ク	口18.0 高6.0 底7.2	雲、長	灰白色	普通	1/3	ロクロナデ、底部回 転糸切り	体部外面摩滅
48	SXgb 8C-19	ク	ク	口15.8 高5.1 底7.0	雲、英、 長	にぶい橙色	普通	4/5	ロクロナデ、底部回 転糸切り。外面底部 近くロクロケズリ	外面摩滅、径1~5 mmの石英、長石多い
49	SXgb 8C-19	ク	ク	口16.6 高5.6 底6.4	雲、英、	にぶい黄橙色	普通	7/8	ロクロナデ、外表面底 部近くロクロケズ リ、底部ロクロケズ リ、内面黑色處理	黒色土開闢、ロ緑部外 面にも黒色付着、白色 粒子含む
50	SXgb 8C15	ク	ク	底5.6	雲、英、	灰白色	普通	底部1/4	ロクロナデ、内面黑 色處理	黒色土開闢、内外面摩 滅、径3mmの石英含む

番号	地点	種別	岩種	法量	鉱土	色調	塊成	遺存率	手法	備考
51	8B-16	土師	小形甕	口14.0	英、長、チート	淡黄褐色	普	口縁1/10	ロクロナデ	口縁部に炭化物付着、径2mmの石英・砂粒含む
52	10D-13	*	大形甕	口19.0	雲、英、長、角閃石	淡黄褐色	普	口縁1/8	ロクロナデ	外縁・口縁部内面に炭化物付着、石英・長石多い、砂粒含む
53	11D-4	*	中形甕	口15.0	英、長	にぶい褐色	堅	口縁1/10	ロクロナデ	径2-3mmの長石、白色粒子含む
54	11C-11	*	大形甕	口18.0	英、長	灰白色	普	口縁1/5	ロクロナデ、外面カキ目	鉱土精良
55	7C-7	*	*	口18.2	雲、英、長	にぶい黃褐色	普	口縁1/8	ロクロナデ	内外面摩擦痕らしい
56	8C-19	*	中形甕	底6.0	雲、英、長	にぶい黃褐色	普	底部全面		体表面に炭化物、径2mmの長石含む
57	SD5 8B-20	*	*	底7.4	英、長	にぶい褐色	堅	底部1/5	ロクロナデ、底部面糸切り	径1-2mmの石英・その他砂粒を含む
58	10D-9	*	大形甕	口25.0	雲、英、長	にぶい黃褐色	普	口縁1/10	ロクロナデ、外面カキ目	摩擦痕らしい、径2mmの石英・径1-4mmの砂粒を多量に含む
59	7C-7	*	*	口25.0	雲、英、長	淡黄褐色	普	口縁1/6	ロクロナデ	
60	8C-19	*	*	口22.0	雲、英、長、角閃石	にぶい黃褐色	普	口縁1/4	ロクロナデ、外面カキ目	径2mmの石英・長石・雲母多い、その他の砂粒多く
61	SX8 8C-8	*	*	口25.0	雲、英、長	淡黄褐色	普	口縁1/10	ロクロナデ、外面カキ目	径2-3mmの石英含む
62	7C-7	*	*	口19.0	雲、英	淡黄色	堅	口縁1/8	ロクロナデ、口縁内面カキ目	
63	10C-25	*	滿	口35.6	英、長	淡黄褐色	普	口縁1/10	ロクロナデ、内外面カキ目	径1-4mmの石英・径1-3mmの長石を含む
64	SD28 7C-21	*	*	口36.0	雲、英	淡黄色	堅	口縁1/10	ロクロナデ、内外面カキ目	白色粒子含む
65	7C-7	*	*	口44.0	雲、英、長、角閃石	淡黄色	軟	口縁1/6	ロクロナデ、体部外面カキ目	白色粒子・砂粒を含む
66	8C	*	把手	横合部 径5.7	雲、英、長、角閃石	淡黄褐色	普	把手部分のみ	手づくね、端部にタキ打痕	指痕、白色粒子含む
67	SD35 11D-6	*	不明	底13.0	雲、英、長	淡黄色	普	底部1/5	内面ロクロナデ	砂粒含む
68	SD44 13C-11	深淵	片口鉢			灰白色	普	体部一部	ロクロナデ	標目10本
69	SD38 12D-10	*	甕			青灰色	普	体部一部	外側タキ	

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存率	手法	備考
70	11C-12	陶器	不明		雲、英、長、チャート	にぶい・黄褐色	普通		外面タタキ	径3mmの石英・径2mmの長石・他の砂粒を含む
71	12E-1	*	不明		チャート	灰白色	普通	底部一部	外側タタキ	熱上部の接合痕明瞭
72	SX53 10C-14	*	不明	底11.1	英、長	黄褐色	普通	底部一部		整形が複、径2~3mmの石英・長石を含む
73	11C-12	*	不明		チャート	にぶい・黄褐色	普通	底部一部?	外側タタキ	
74	8C-21	*	不明	径3.5	雲、英、長	浅黄褐色	普通	1/2		表面に指擦痕

別表3 寺道上遺跡B地点出土土器観察表

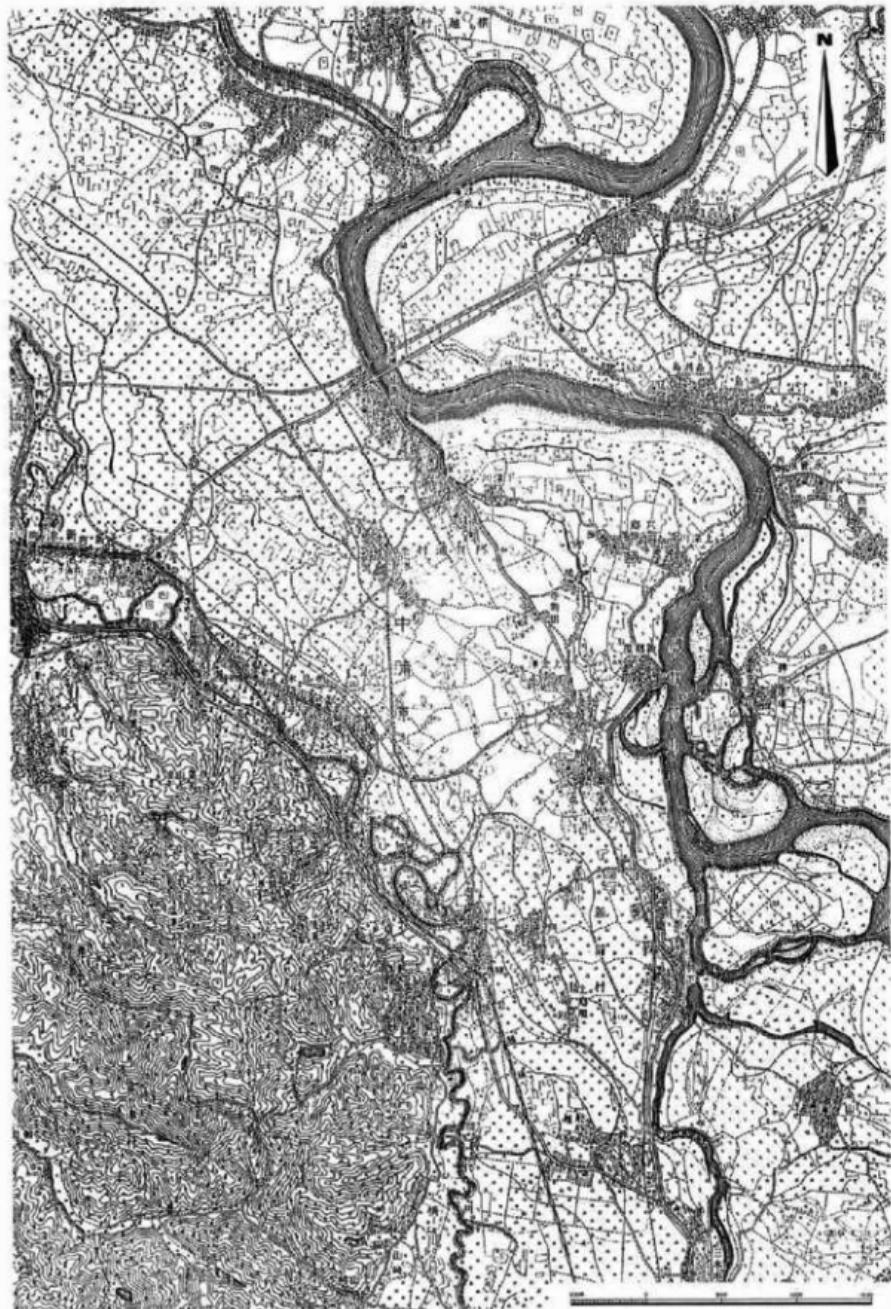
番号	地点	種別	器種	径量	胎土	色調	構成	遺存率	手法	備考
1	12B-24	須恵	無台杯	口13.6 高3.3 底8.0	英	褐灰色	普	1/8	コタロナデ、底部回転ヘラ切り	胎土精良、白色粒子含む
2	11B-21	々	々	口12.4 高3.0 底6.8		褐灰色	普	1/4	コタロナデ、底部回転ヘラ切り	コタロ左回り、胎土精良、白色粒子含む
3	13B-17	々	々	底8.2	英	褐灰色	普	底部1/4	コタロナデ、底部回転ヘラ切り	白色粒子含む
4	13B-11	々	々	底7.2	雲	褐灰色	普	底部1/4	コタロナデ、底部回転ヘラ切り	器面に小さい吹き出しあり、コタロ左回り、胎土精良、白色粒子含む
5	10C-5	々	々	底8.0	英	褐灰色	普	底部1/4	コタロナデ、底部回転ヘラ切り	コタロ右回り、胎土精良
6	12B-15	々	々	口12.4 高2.8 底6.8		褐灰色	普	1/4	コタロナデ、底部回転ヘラ切り	胎土精良、白色粒子含む
7	9B-23	々	有台杯	底7.8		オリーブ灰色	普	底部1/4	コタロナデ	胎土精良、白色粒子含む
8	4E	々	々	底7.0	長	灰色	普	底部1/4	コタロナデ、底部回転ヘラ切り	白色粒子含む
9	9B-23	々	々	口13.0		オリーブ灰色	普	口縁1/6	コタロナデ	胎土精良、白色粒子含む
10	12B-15	々	々	口14.0		褐灰色	堅	口縁1/8	コタロナデ	少量の白色粒子含む
11	9C-4	々	々	口15.2	長	暗緑灰色	普	口縁1/4	コタロナデ	胎土精良、白色粒子含む
12	8D-8	々	杯蓋	口16.0		灰白色	普	1/6	コタロナデ、天井削 コタロケズリ	器面に小さい吹き出しあり、胎土精良
13	9B-2	々	壺蓋	口12.0	雲、長	暗緑灰色	普	1/10	コタロナデ	口器内摩滅
14	11B-9	々	長颈瓶	口7.0	雲	灰色	堅	底部1/2	コタロナデ、底部回転ヘラ切り	コタロ左回り
15	8B-21	々	短颈壺	底9.4		褐灰色	堅	底部1/4	コタロナデ	胎土精良、白色粒子含む
16	13B-6	土器	純	底5.0	雲、英	にぶい黄褐色	普	底部1/2	コタロナデ、底部回転系切り	コタロ右回り
17	12B-24	々	々	底7.0	雲	浅黄褐色	普	底部1/2	コタロナデ、コタロケズリ、内面黒色焼 付	黑色土器
18	9B-23	々	不明	底14.0	英、長、 表面骨針	にぶい黄褐色	普	底部1/5		砂粒含む
19	12B-14	々	小甕	口15.0	雲、英、 チャート	灰白色	普	口縁1/4	コタロナデ	器面摩滅、砂粒含む
20	12B-15	々	長颈瓶	口23.0	英、長、 チャート	淡黄色	普	口縁1/8	コタロナデ	径2mmの長石・砂粒を含む

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存率	手法	備考
21	廢乱	中世 陶器	壺		長	青灰色	堅	口縁一部	外面タタキ、内面あ て具模	淡糞系陶器、胎土精良
22	表土	青磁	碗			明綠灰色	堅	体部一部		内面画花文、胎土精良
23	SK 5	中世 陶器	壺		長、裏面 骨針	青灰色	堅	体部一部	外面タタキ、内面あ て具模、ロクロナデ	径1mmの長石含む、胎 土精良
24	11B-9	中世 陶器	片口鉢	口28.0	黒、長	暗青灰色	堅	口縁1/8	ロクロナデ	内面に下ろし目11~12 本、胎土精良、白色粒子含む
25	10C-13	中世 陶器	片口鉢		黒	暗青灰色	堅	体部一部	ロクロナデ	内面に下ろし目12本、 白色粒子含む
26	SK 1	中世 陶器	片口鉢	口32.8 高11.9 底13.0		暗灰色	堅	2/3	ロクロナデ	内面に下ろし目9本、 胎土精良、白色粒子含 む

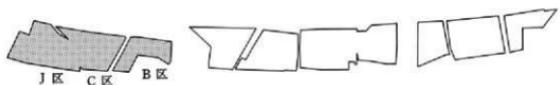
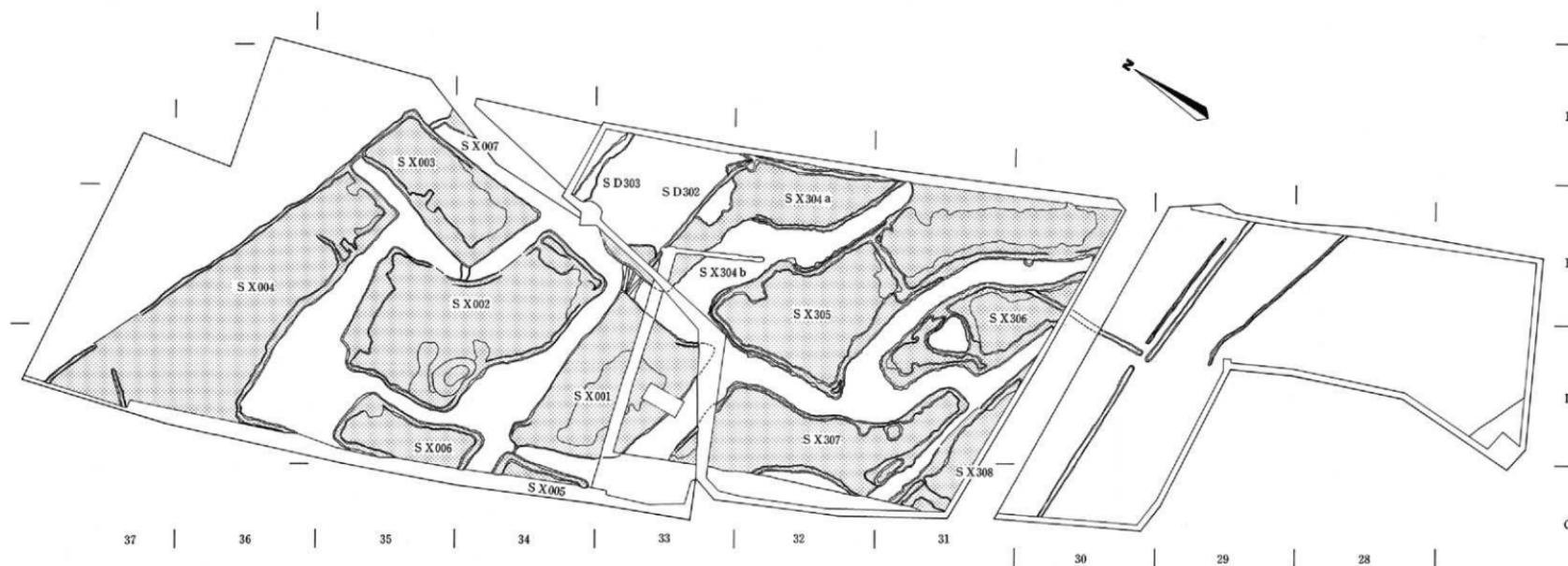
## 図 版

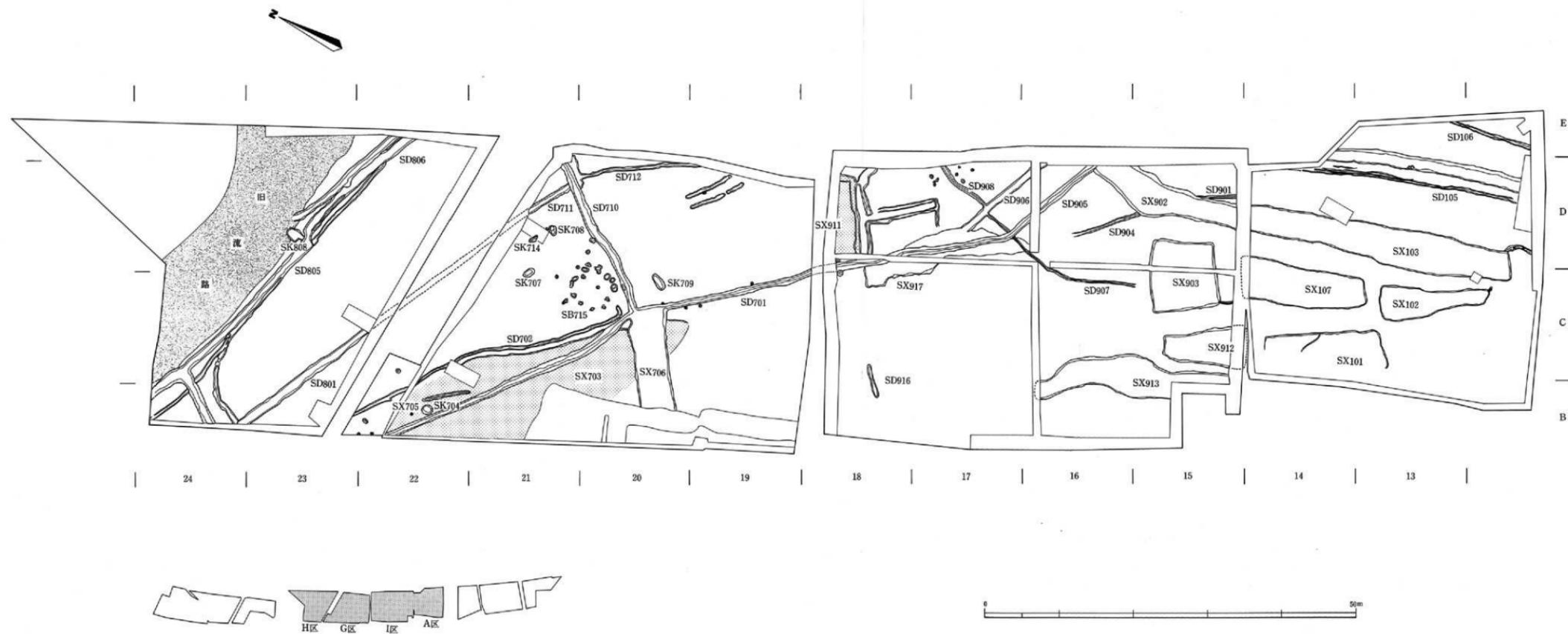
### 凡 例

1. 遺構は、溝 (SD)・土坑 (SK)・建物 (SB)・凹地遺構・その他 (SX) で分類した。細胞遺跡については、調査地区ごとに、寺道上遺跡は地点ごとに一連番号を付している。
2. 図版 2 ~ 5 については、凹地遺構A類など遺構範囲の判別が困難と思われる遺構について、網目をかけた。
3. 遺構実測図については、右頁掲載の遺構に関連する断面図等を、左頁に掲載した。
4. 遺物は遺跡ごとに一連番号を付し、写真もこれにしたがった。須恵器は断面を黒ぬりとし、黒色処理土師器はその処理範囲に網目をかけた。
5. 口径復元が困難なものについては、中心線と外形線を離して表現した。

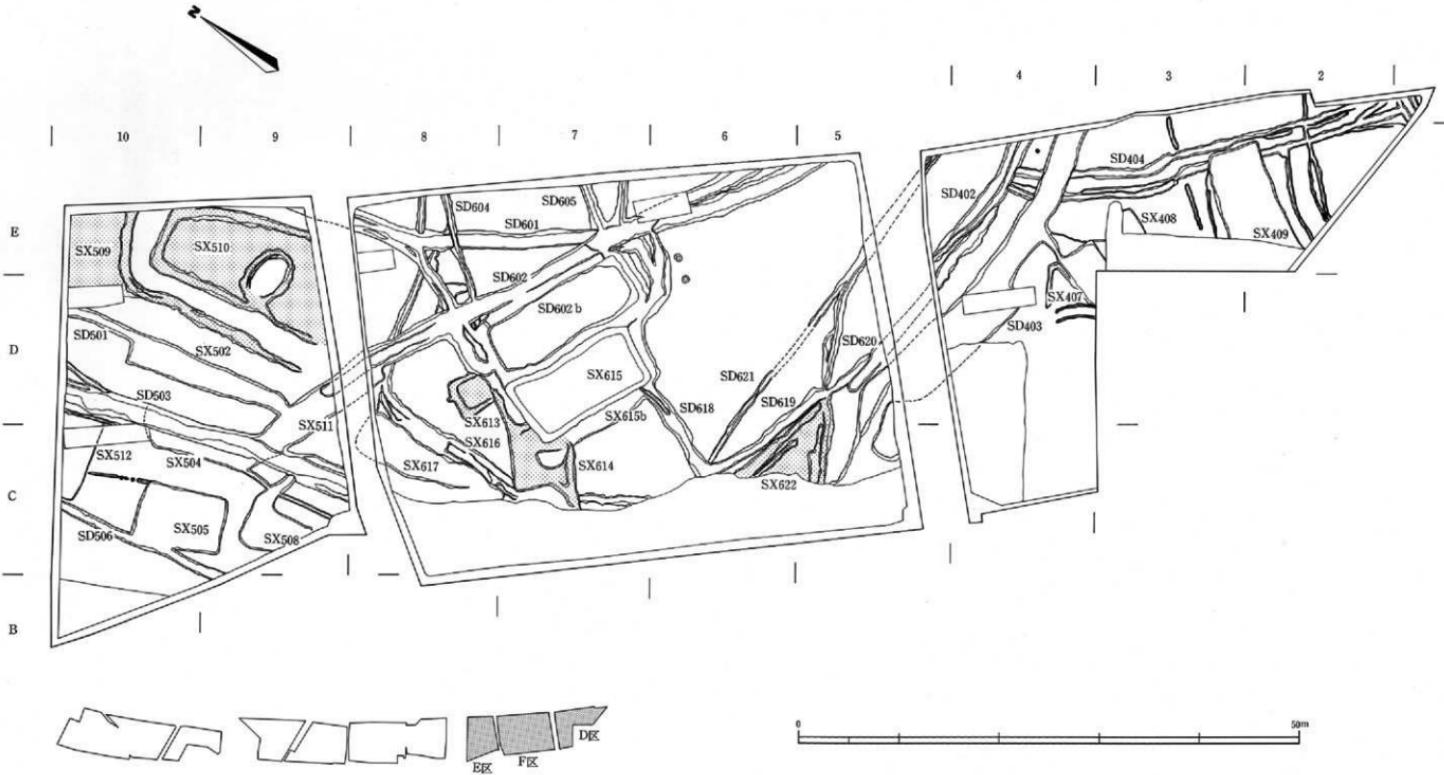


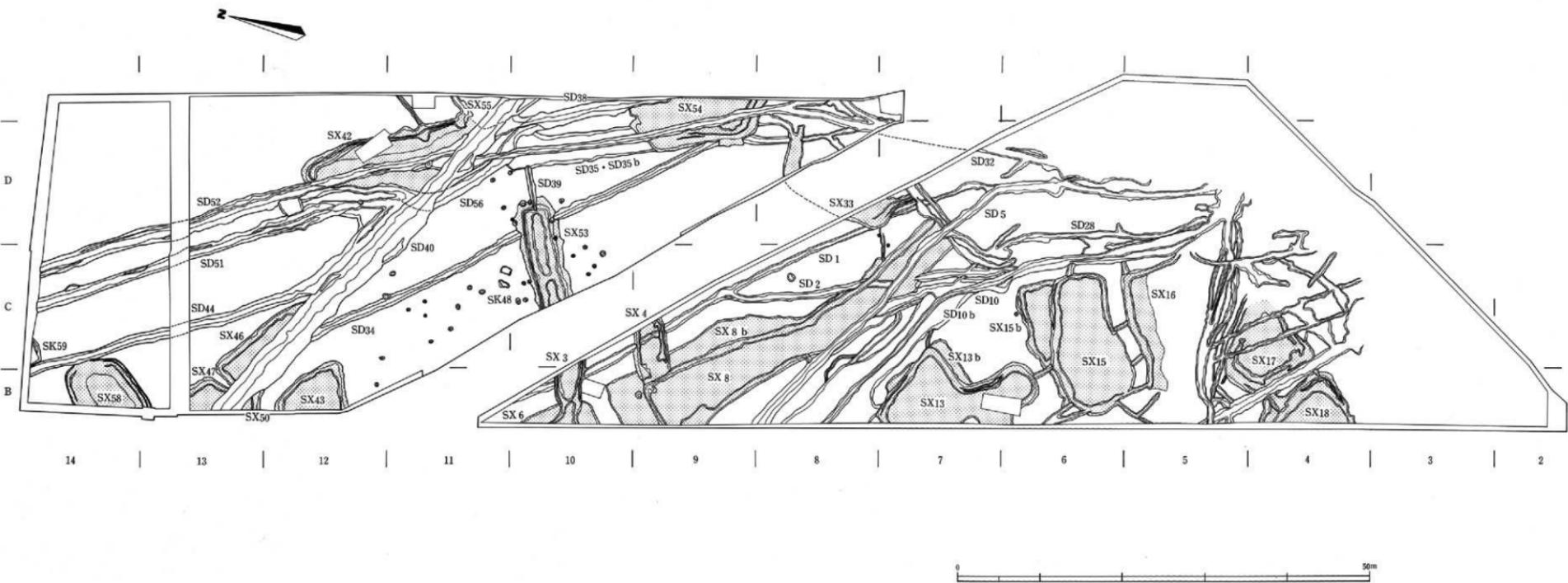
大日本帝国陸地測量部  
1 : 25,000 明治四十四年測図



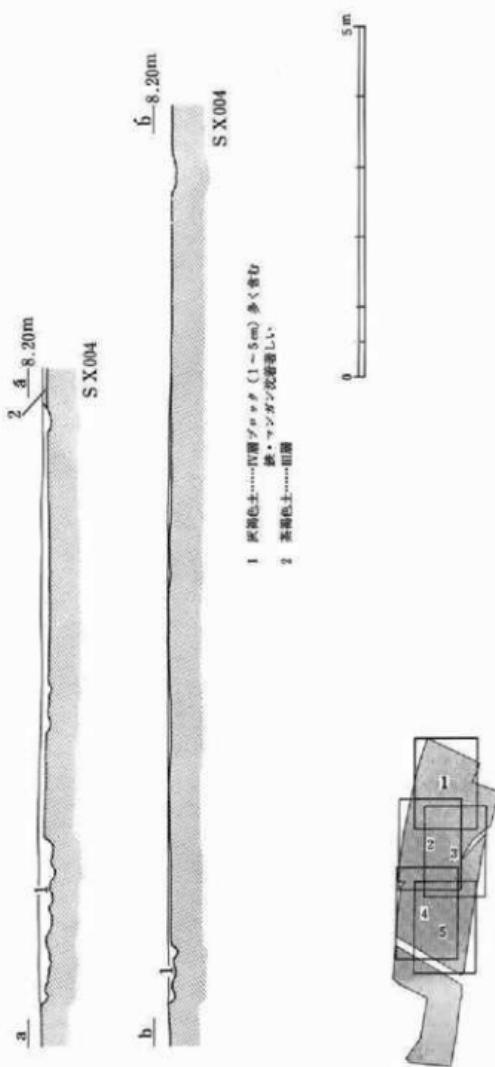


図版4 横浜遺跡全体図(3) E区・F区・D区  
1:400

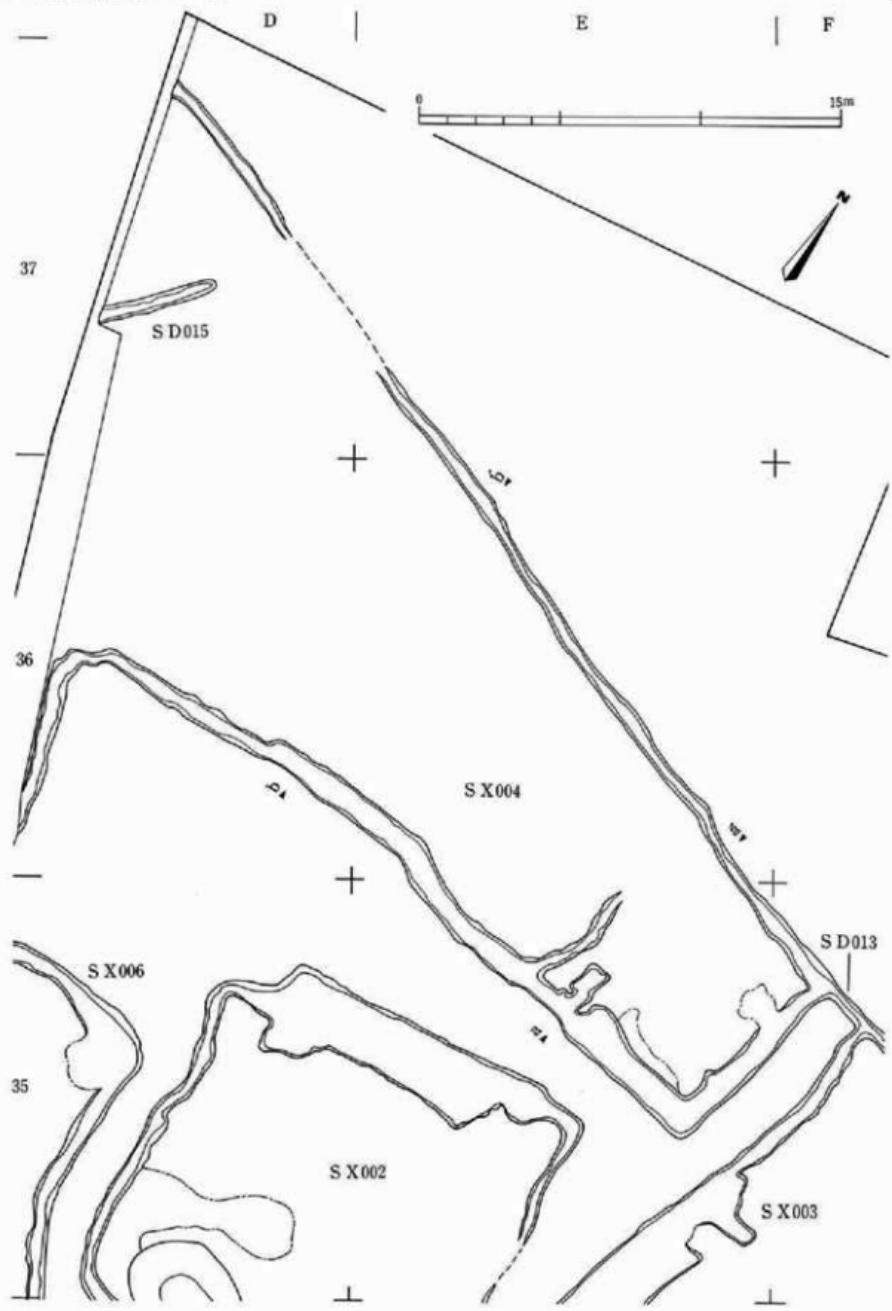


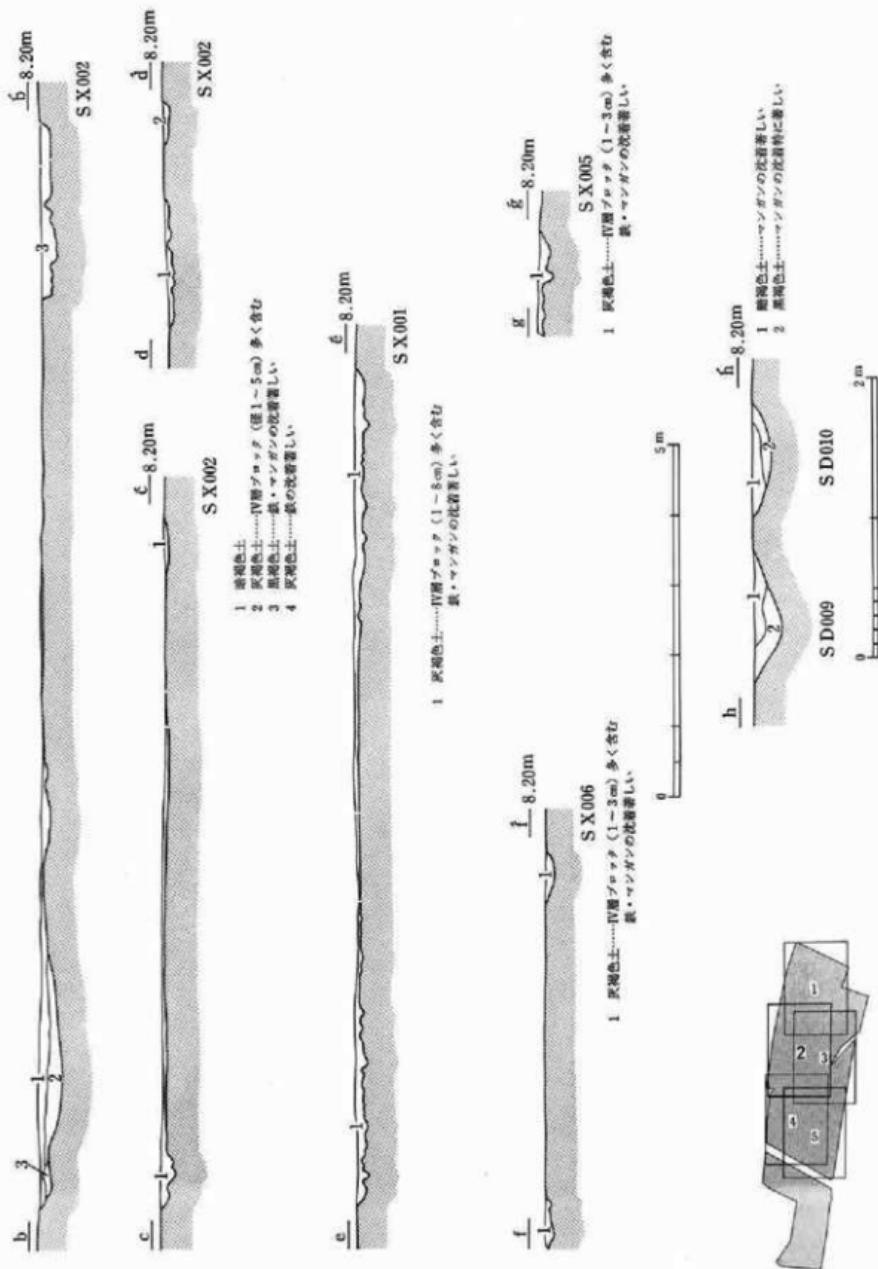


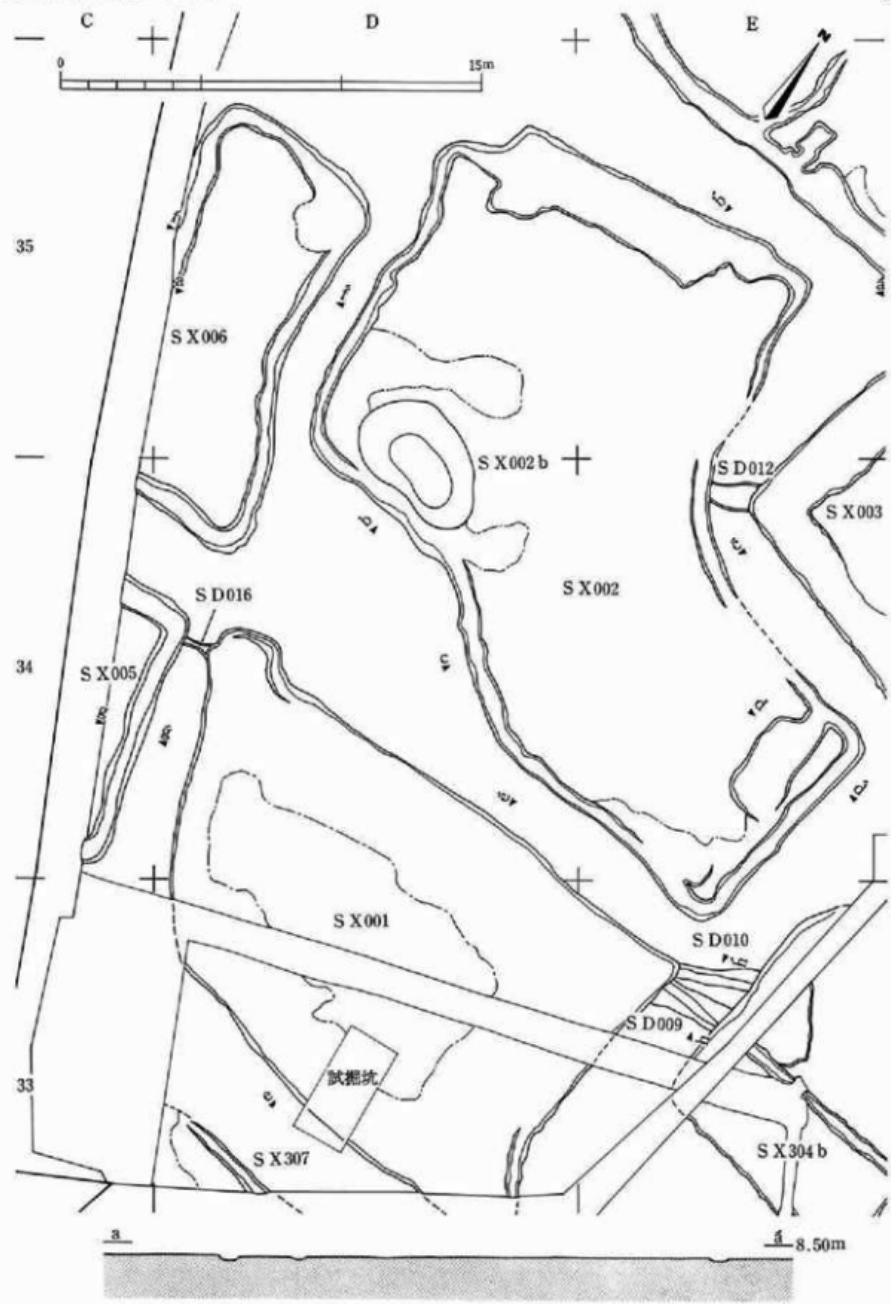




細池遺跡遺構実測図 1 1 : 200

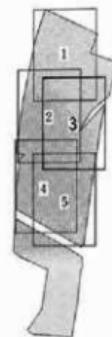
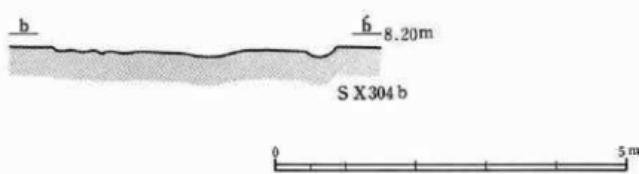


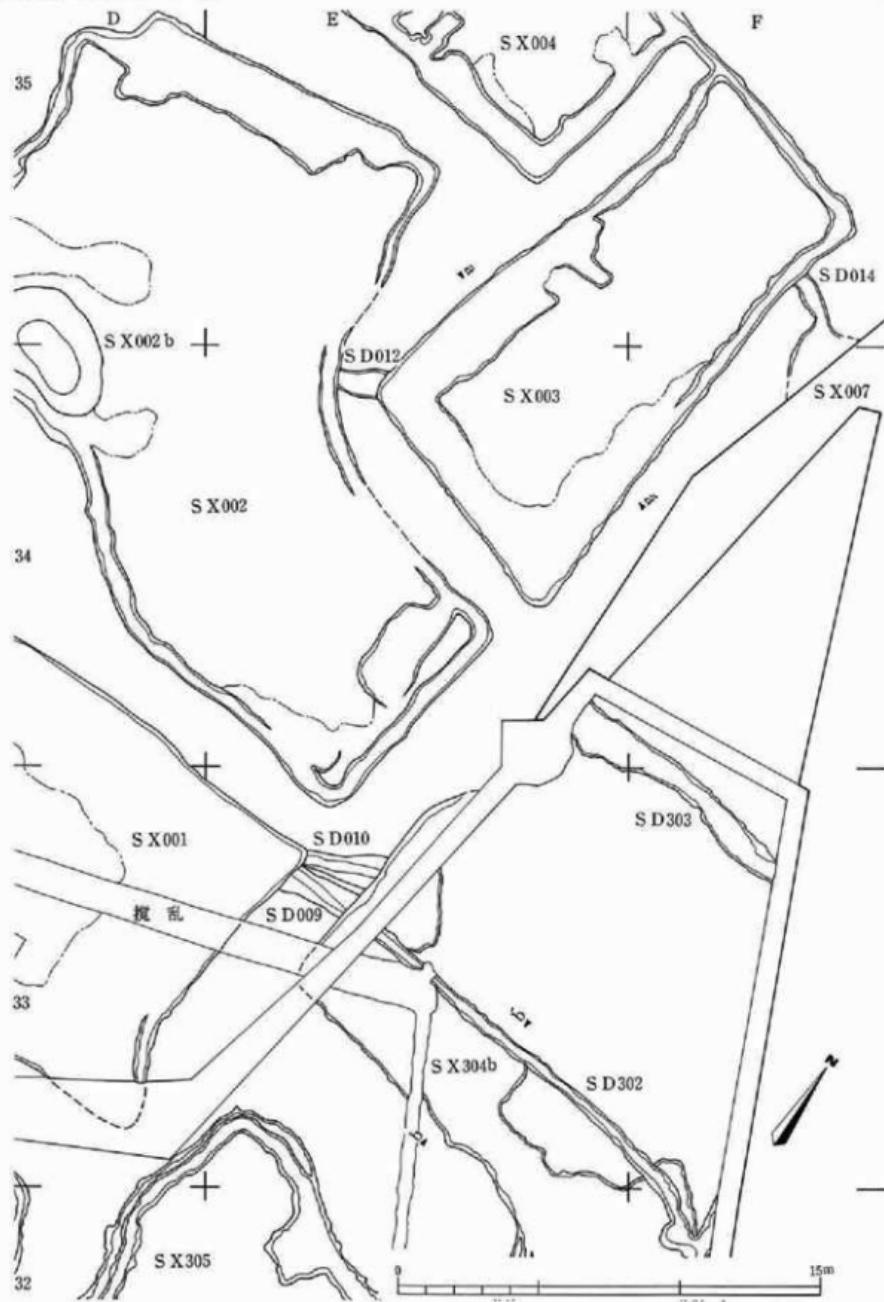


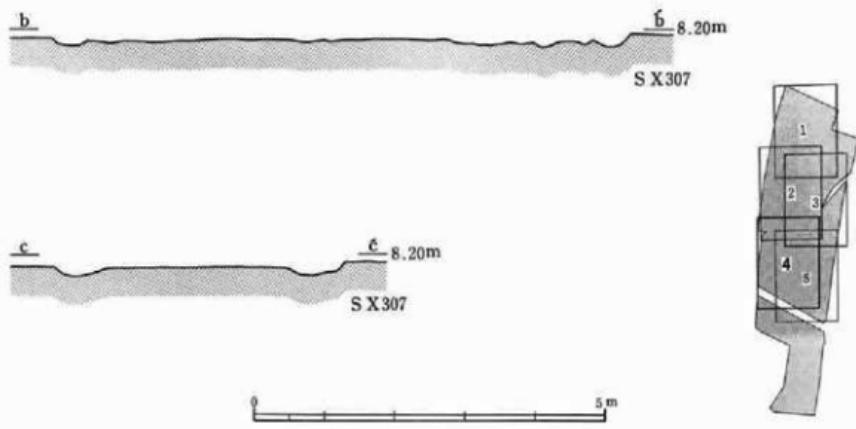


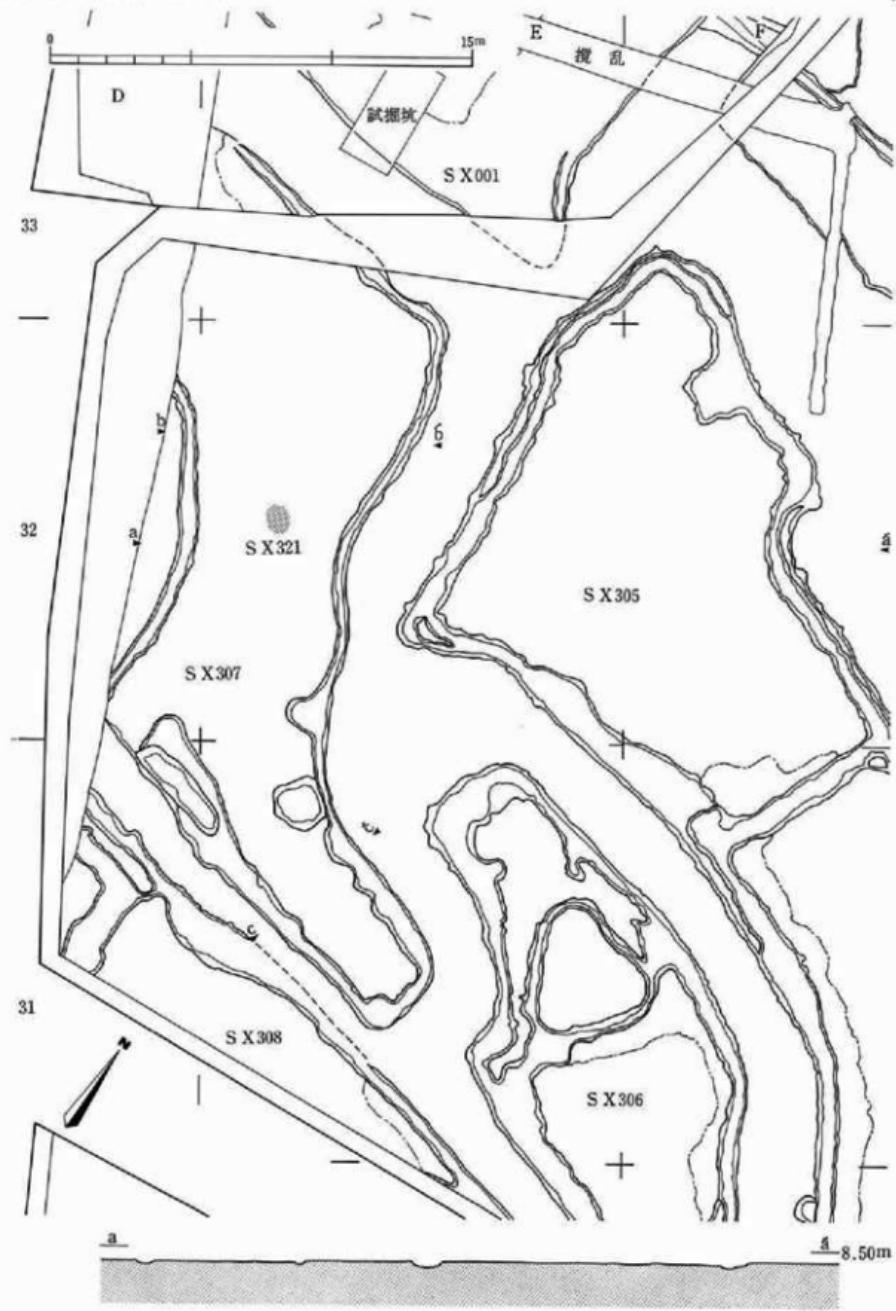


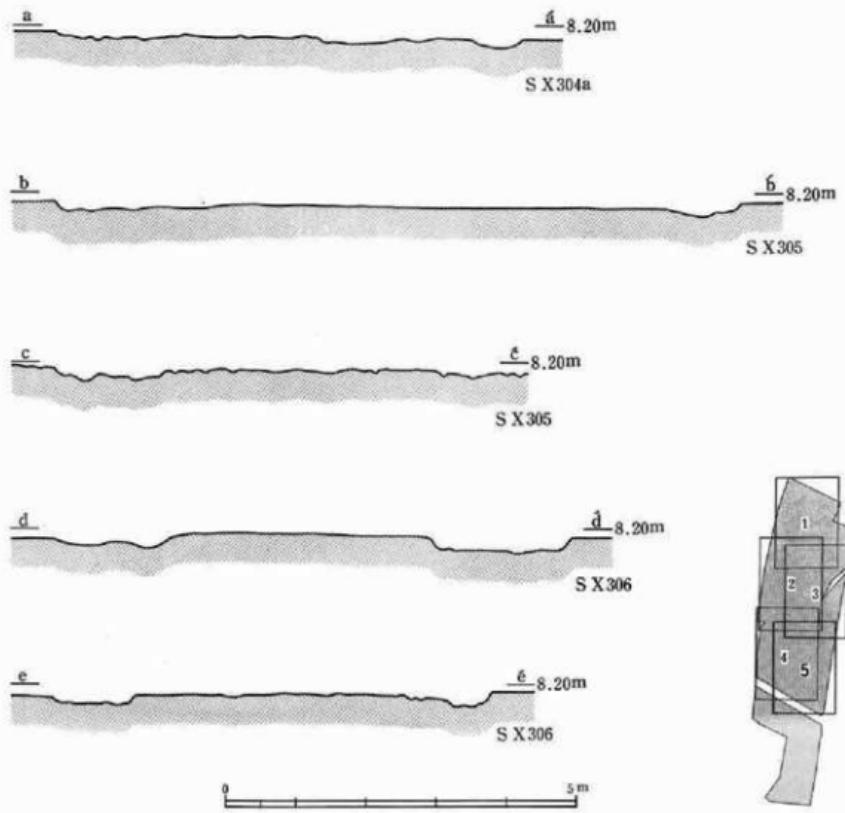
1 黒褐色土……IV層ブロック（1～8cm）多く含む  
鉄・マンガンの沈着著しい

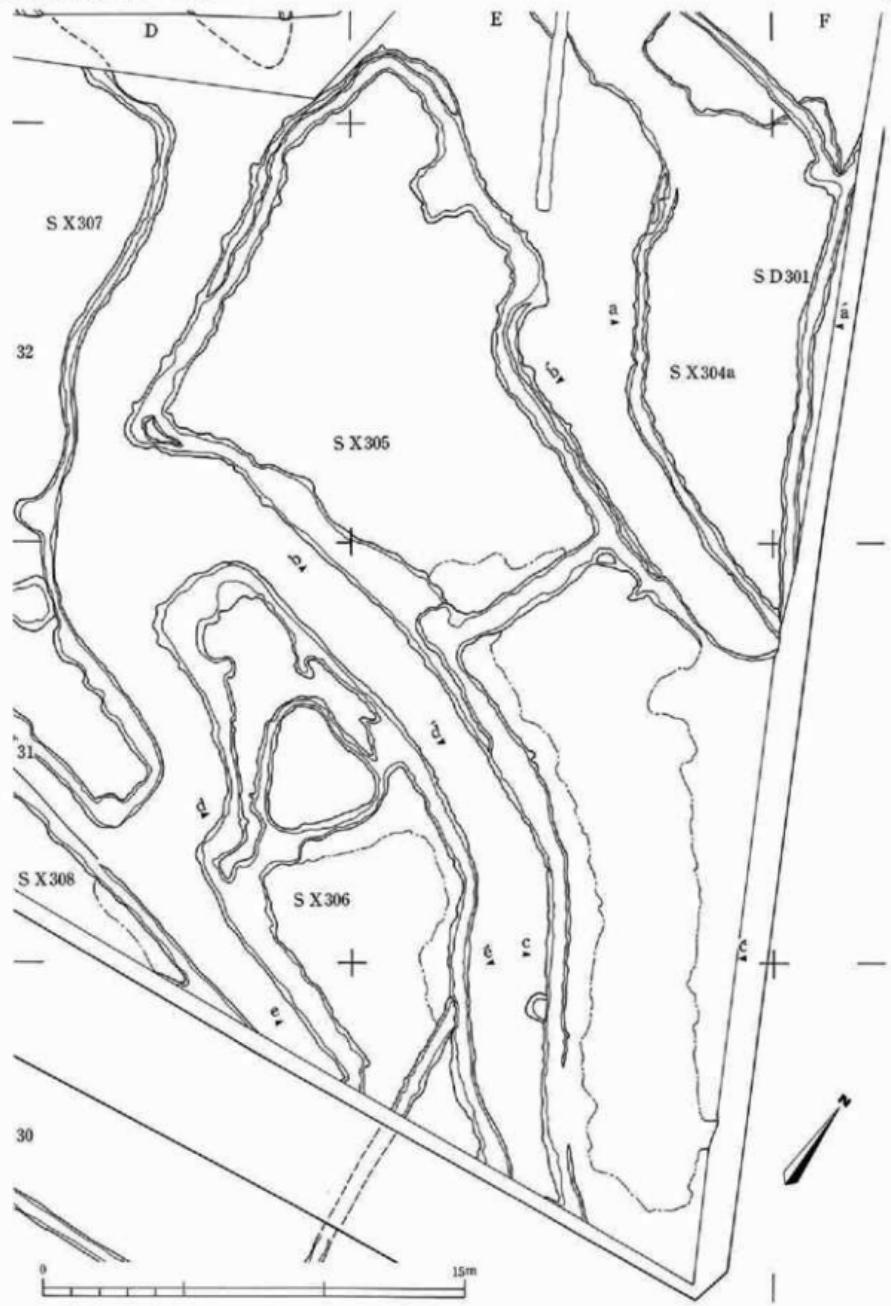


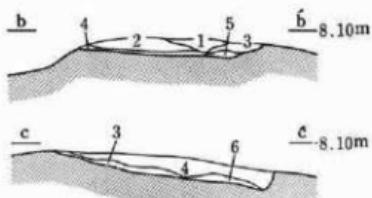
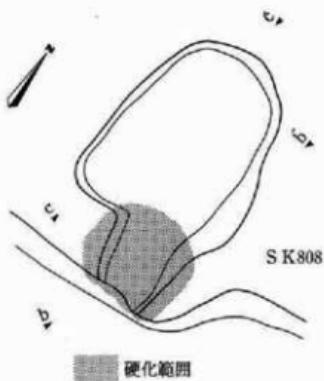






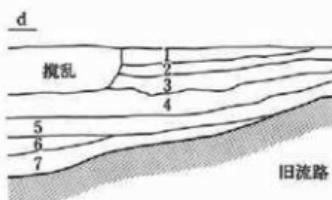






- 1 黄褐色土……IV層土が主で、暗褐色土が混じる  
無土粒・炭化粒少量含む
- 2 緑色土……灰土塊が主で、炭化粒多量に含む
- 3 暗灰色土……IV層土が主で、灰土粒・炭化粒多量に含む
- 4 黄褐色土……" "
- 5 暗褐色土……" "
- 6 黒色土……炭化粒が主で、灰土粒少量含む

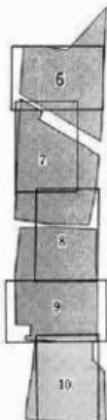
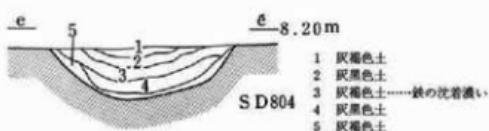
0 2 m



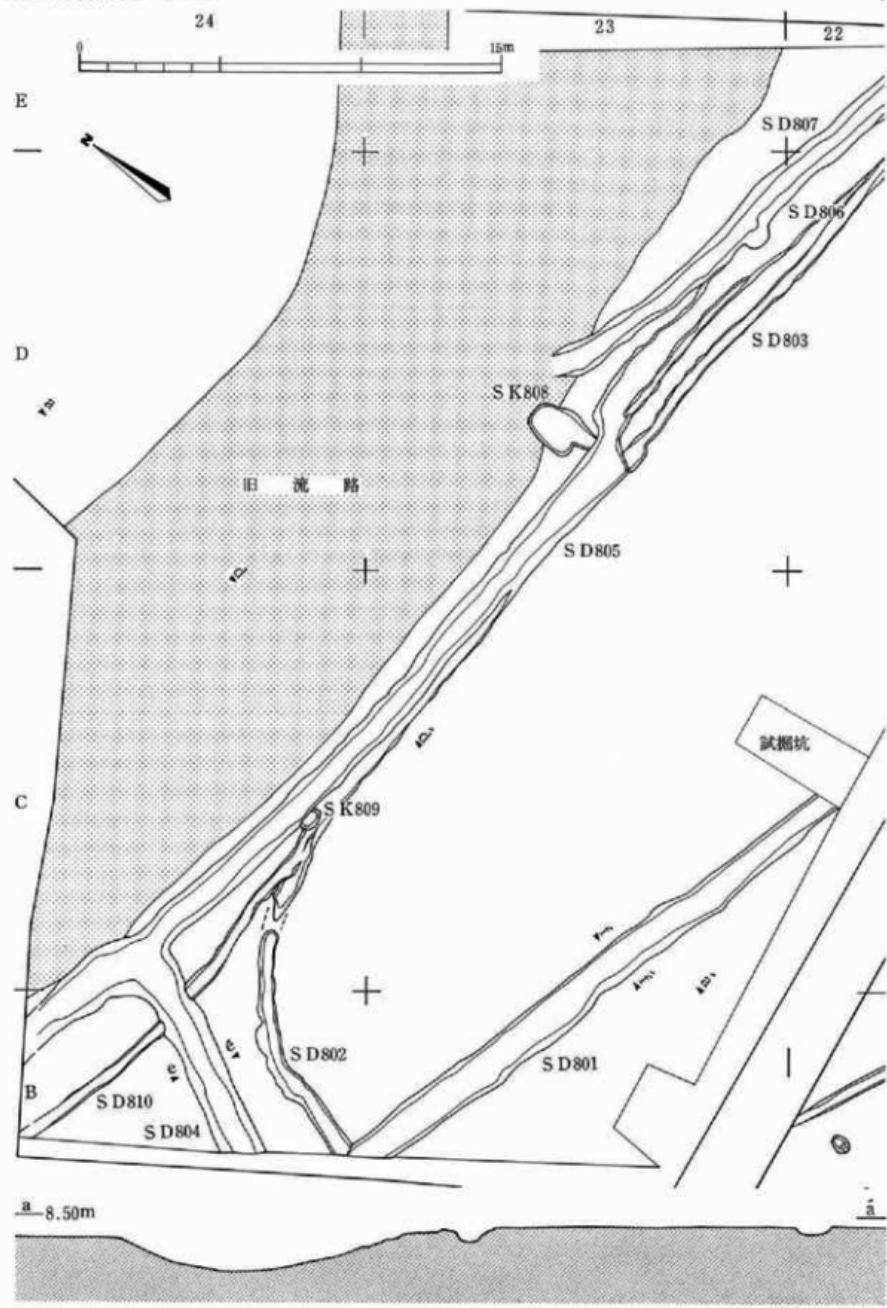
- 1 灰褐色土……鉄の沈着濃い
- 2 暗灰褐色土……"
- 3 灰褐色土……"
- 4 灰褐色土
- 5 灰黑色土……褐鉄を主とする
- 6 褐青灰粘土……褐鉄多く含む  
黄褐色シルトが縦状に混じる
- 7 黑灰色粘土……褐鉄多く含む

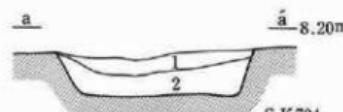
- 1 灰灰褐色土
  - 2 灰黒色土
  - 3 灰褐色土……鉄の沈着濃い,
  - 4 灰灰褐色土……IV層ブロック多く含む
  - 5 哈褐色土……S D 802
- ) S D 805

0 4 m

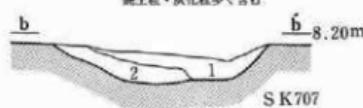


0 2 m

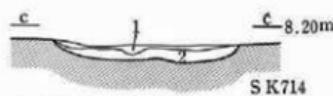




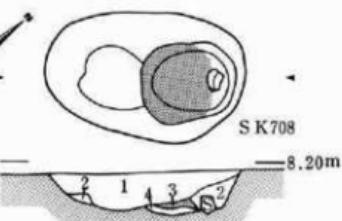
- 1 黒色土……粘土質・砂土質・炭化粒特に多く含む  
2 黄灰色土……IV層土と灰色土の混土  
　　粘土質・炭化粒多く含む



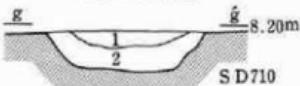
- 1 明褐色土……炭化粒・焼土粒少量含む  
2 黄褐色土……炭化粒・焼土粒多量に含む



- 1 棕灰色土……焼土粒(5~10mm)多く含む  
2 黄灰色土……IV層土を主とする。炭化粒(5mm)少量含む



- 1 粘褐色土……黑色土とIV層土の混土  
　　粘土質・炭化粒少量含む  
2 黄灰色土……IV層土を主とする  
　　炭化粒少額含む  
3 棕色土……燒土からなる  
4 黄灰色土……炭化粒・炭化材を主とする  
　　IV層土が多く混じる

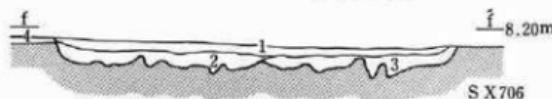


- 1 褐色土……マンガン結核多く含む  
2 明褐色土……\*



- 1 棕褐色土  
2 黑褐色土  
3 褐色土  
4 黄灰色土……IV層土と灰色粘土の混土  
5 黑褐色土……田畠。マンガン結核多量に含む  
6 黑褐色土……鉄の沈着濃い  
7 黑褐色土……\*  
8 棕褐色土……IV層土と灰色粘土の混土  
　　鉄の沈着特に濃い

0 2 m

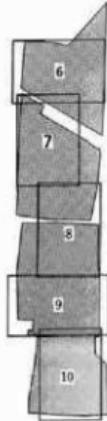


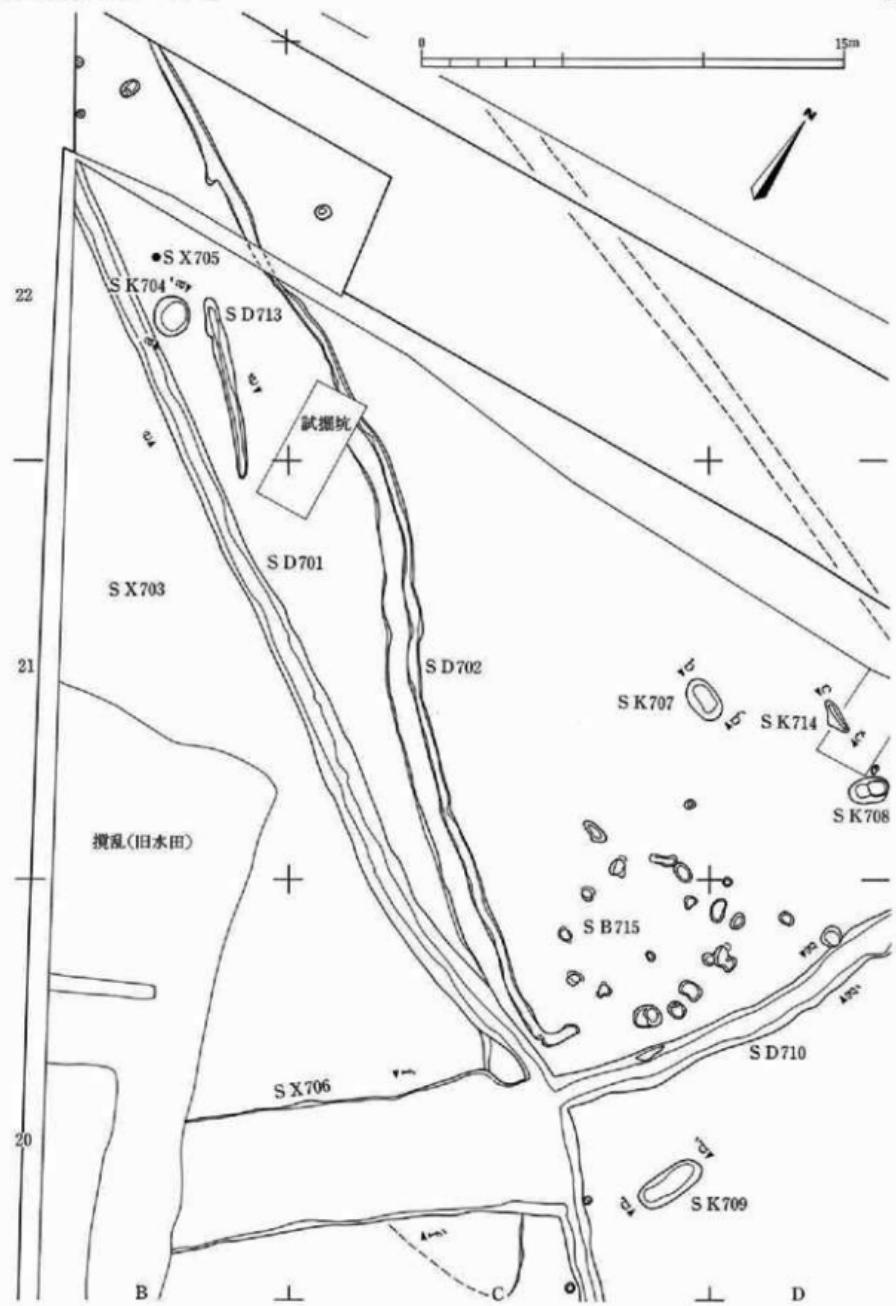
- 1 黄褐色土  
2 黄褐色土……黄褐色土が主で、IV層土が混じる  
3 明黄褐色土……黄褐色土が主で、IV層土が多く混じる  
4 黑褐色土……田畠

0 4 m



0 1 m



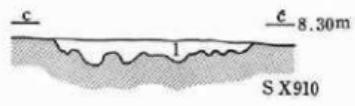




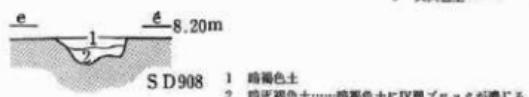
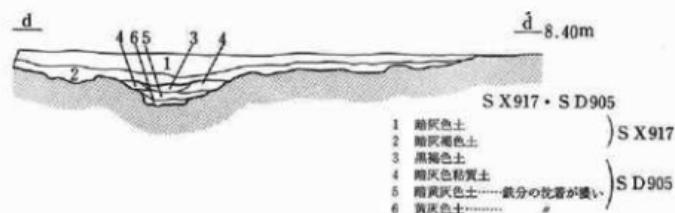
1 褐色土……暗褐色土にIV層ブロックが混じる



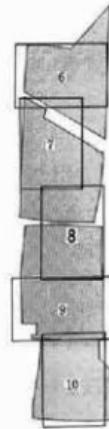
1 暗褐色土……黒褐色土にIV層ブロックが混じる  
2 黑褐色土

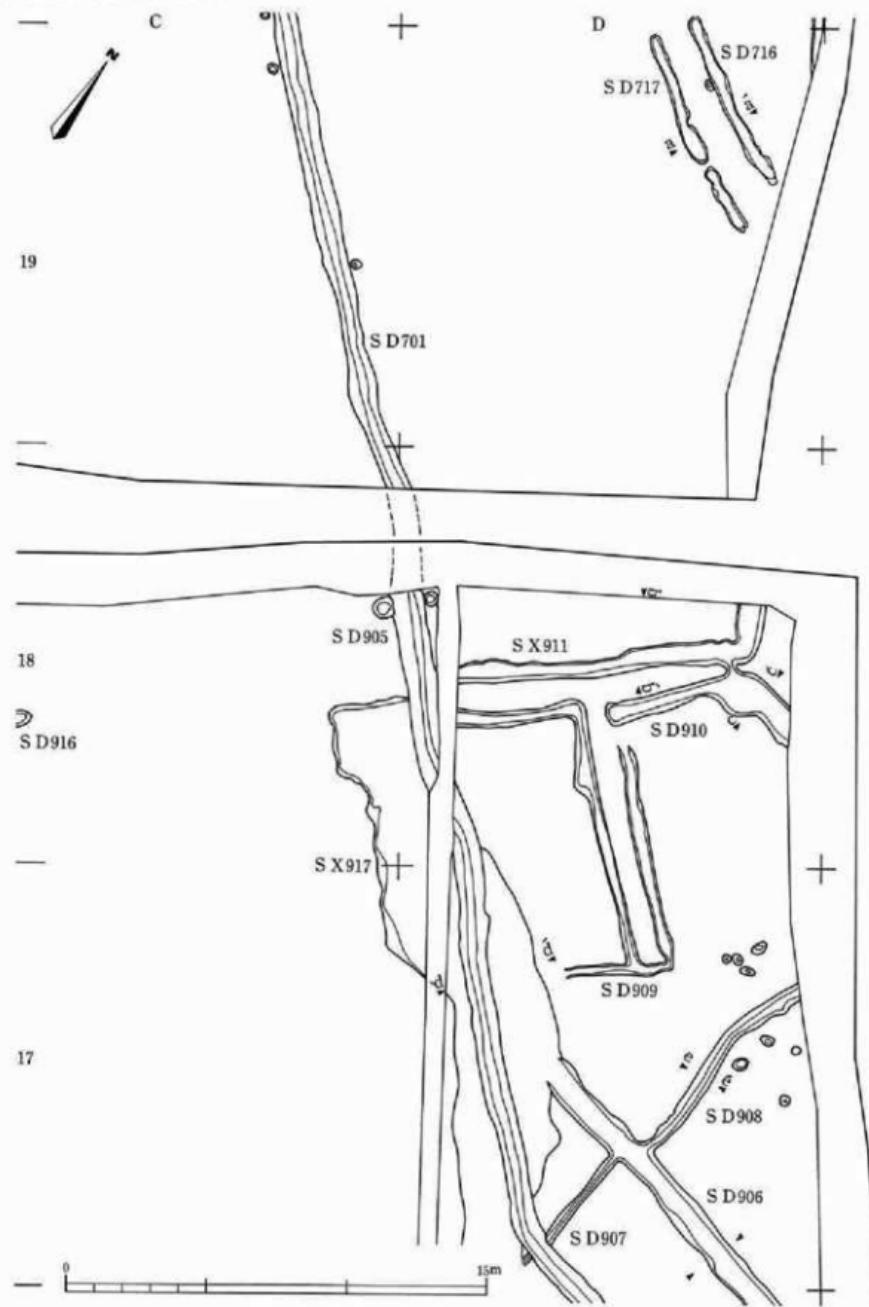


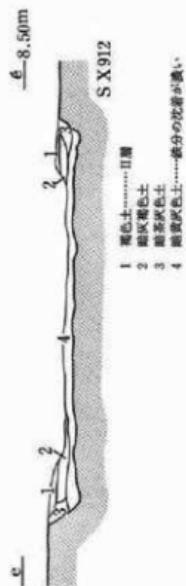
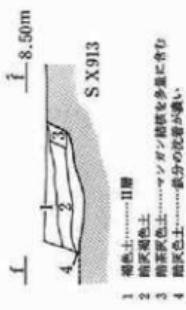
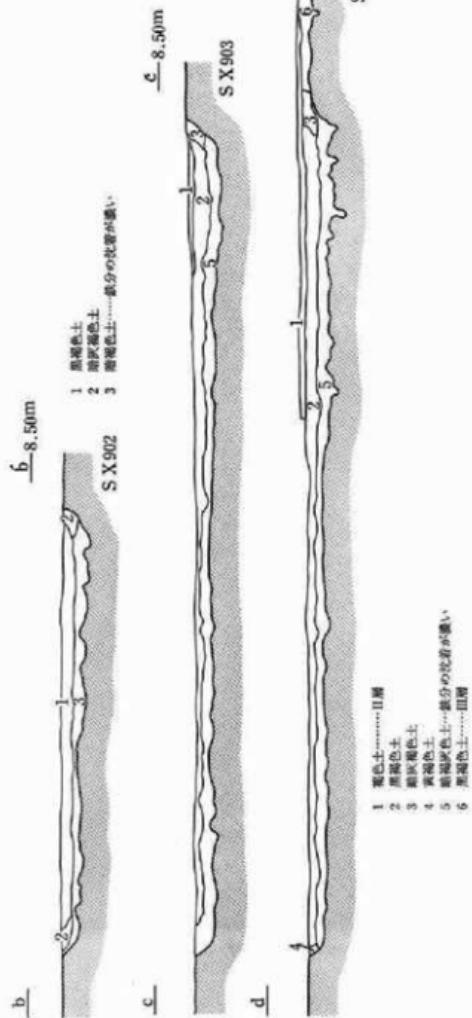
1 黑褐色土

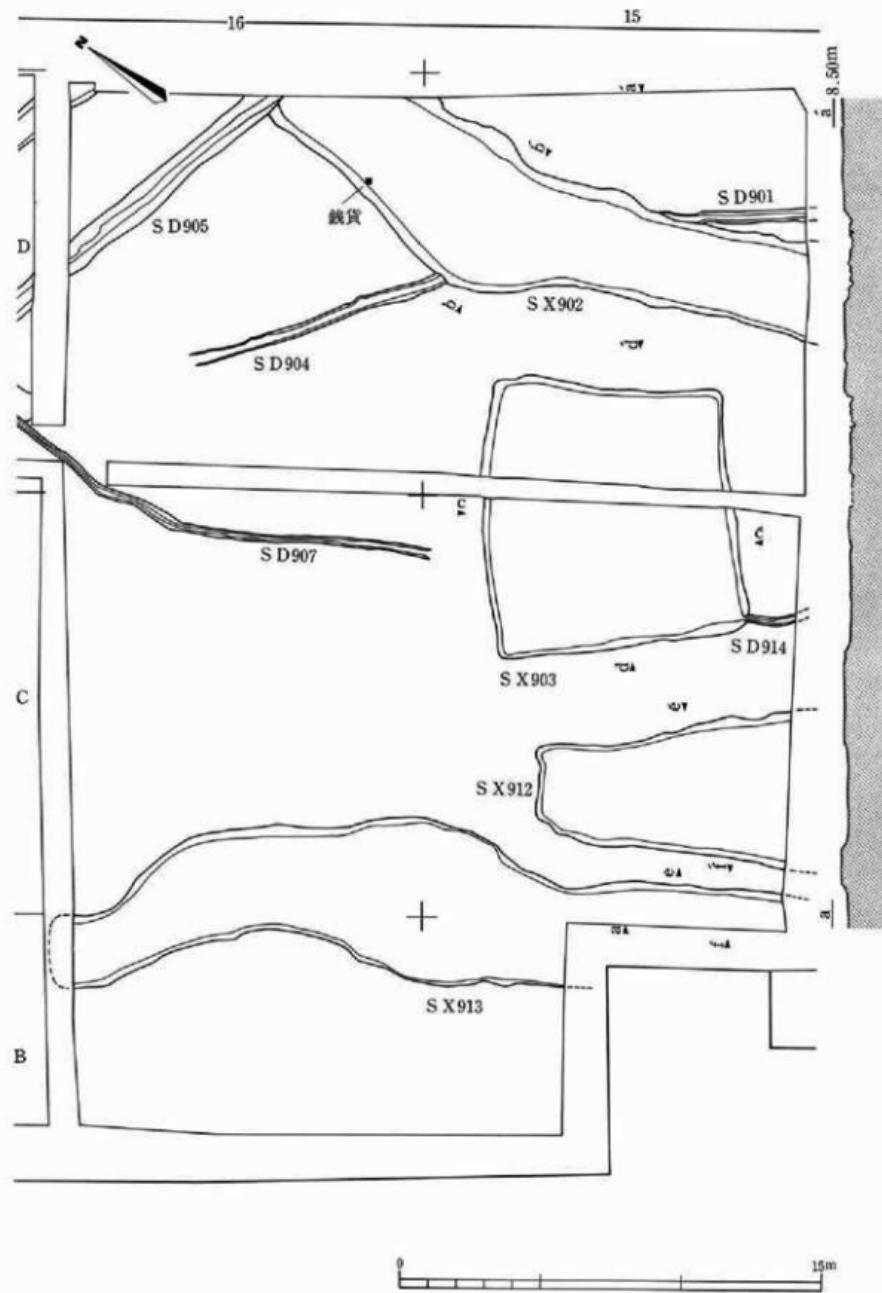


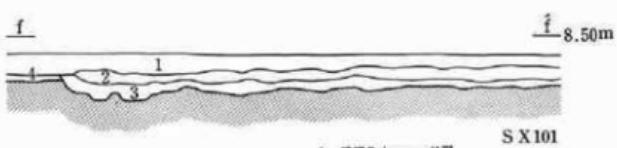
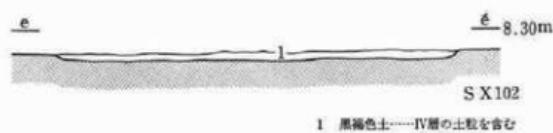
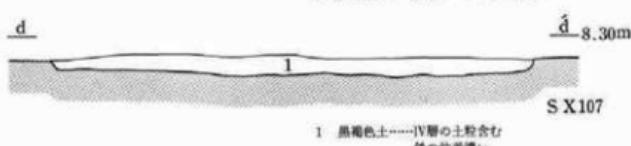
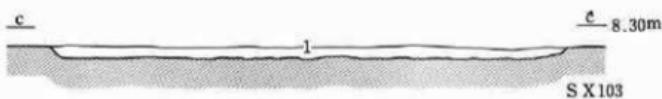
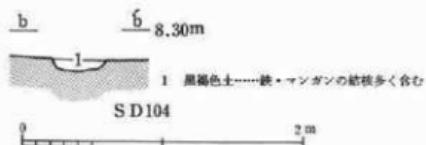
0                    2 m



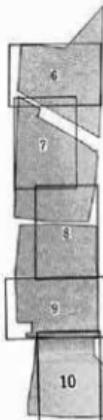


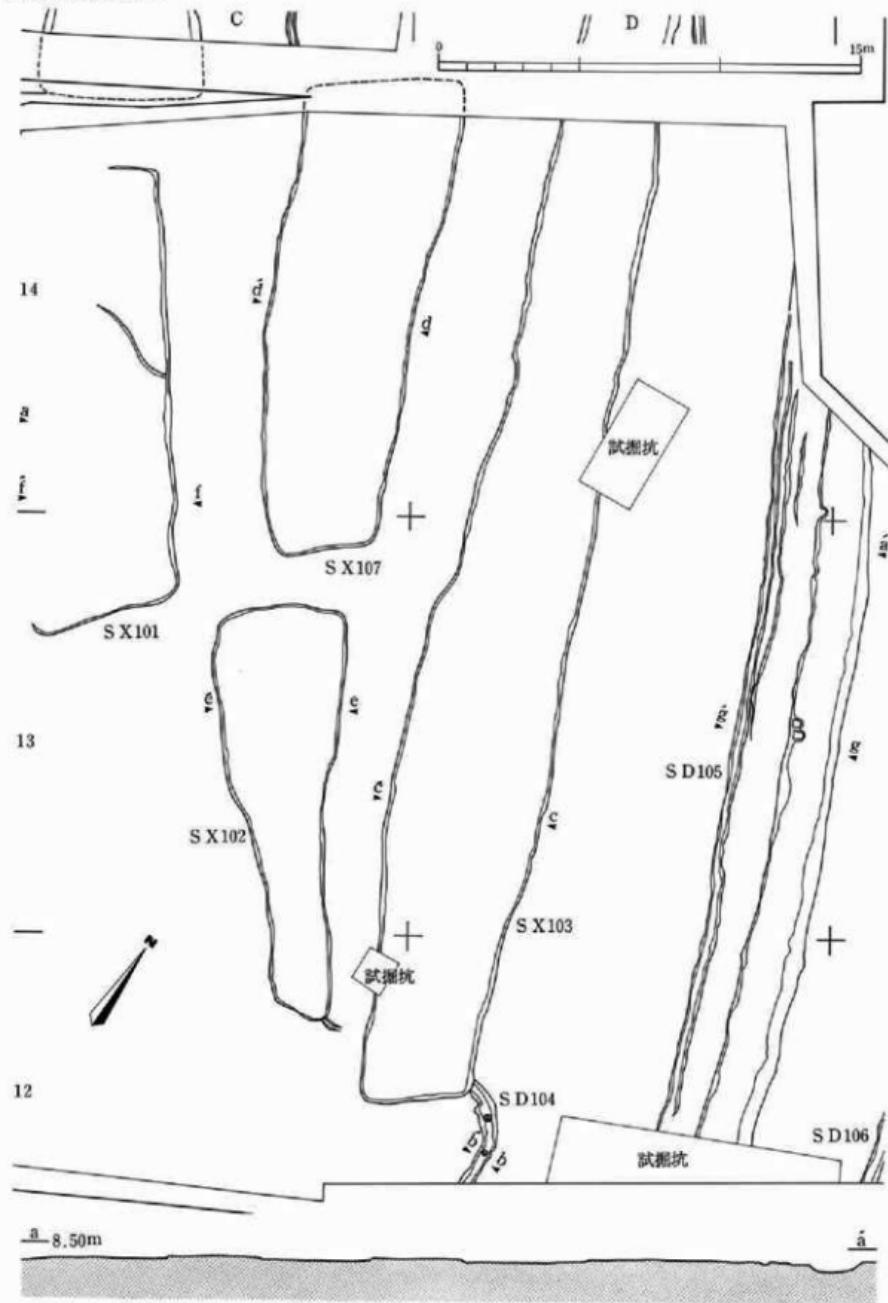


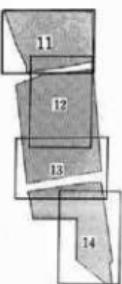
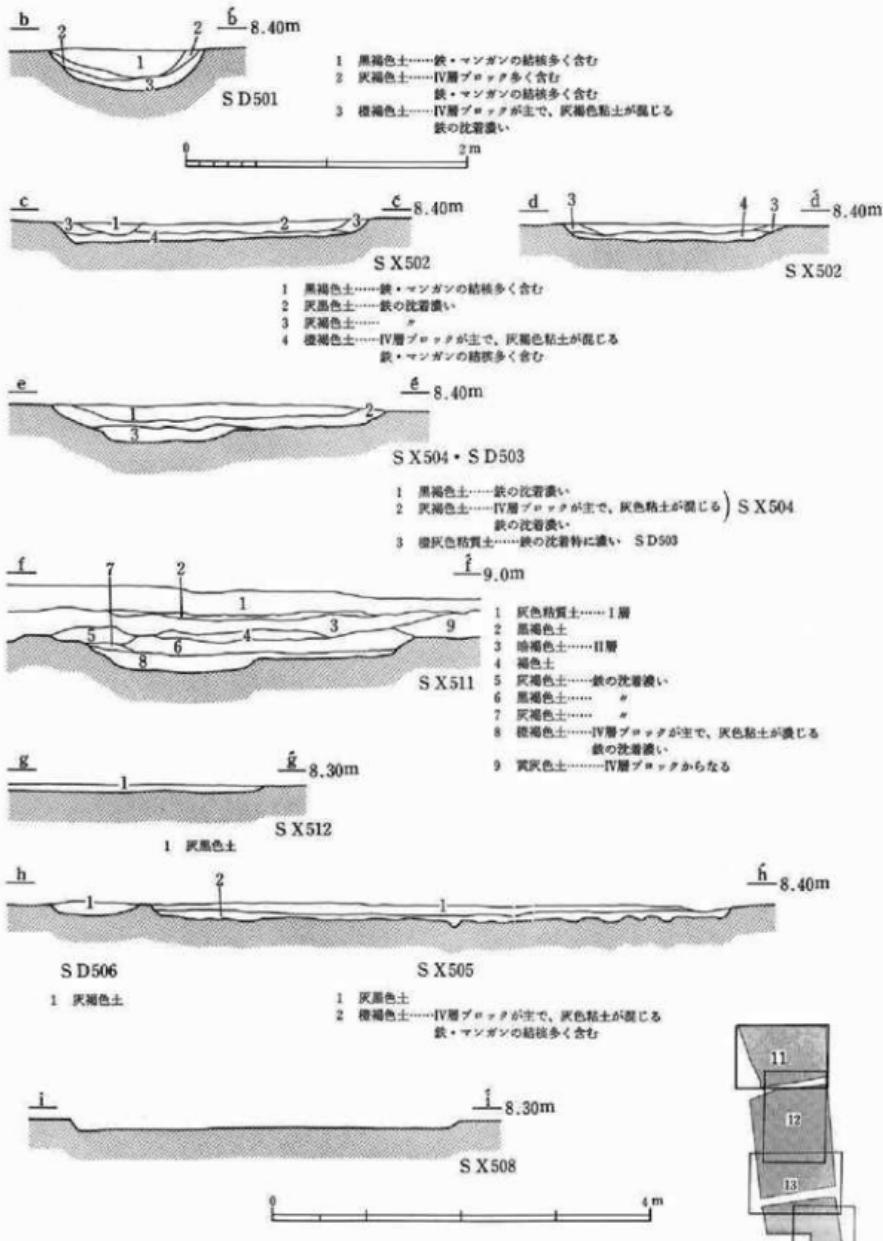


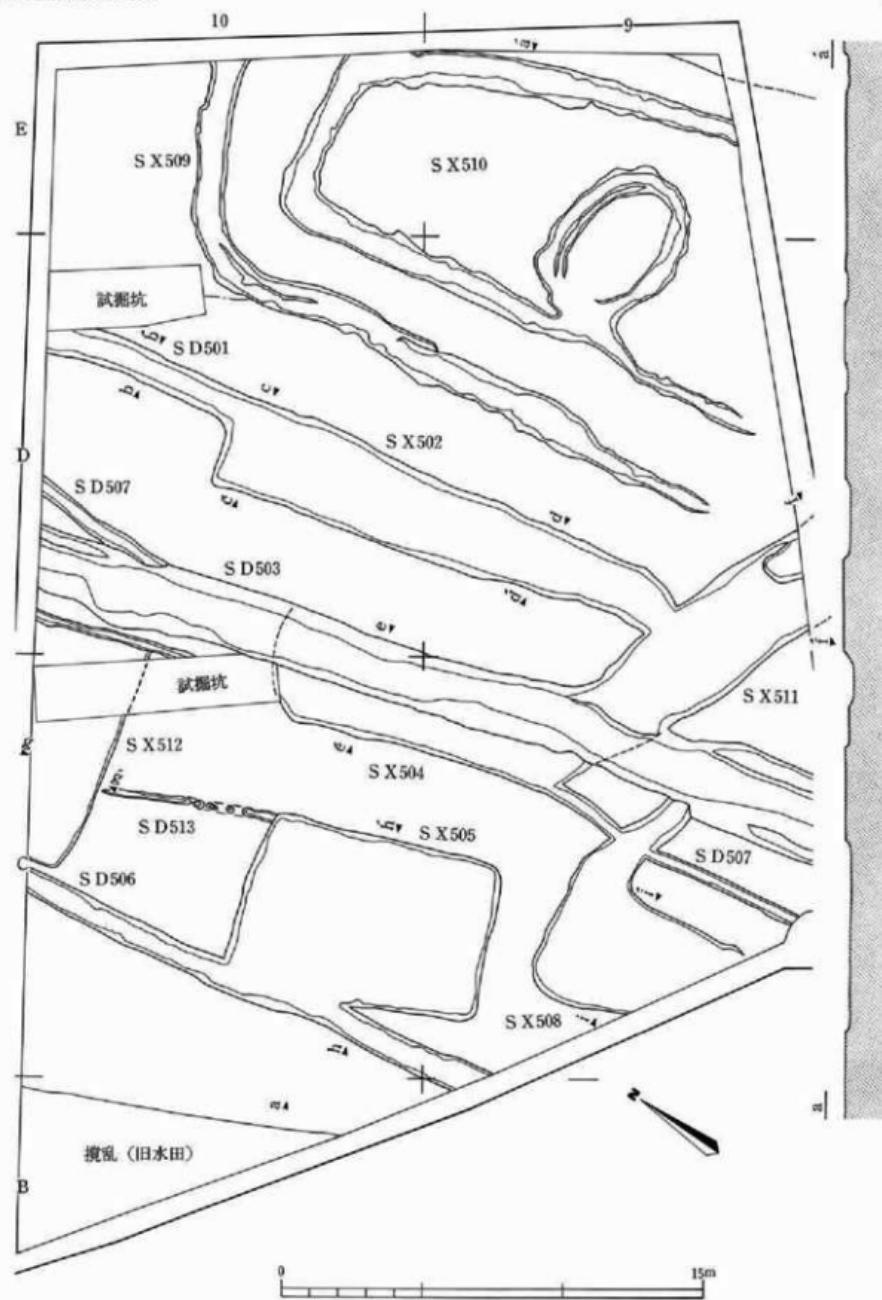


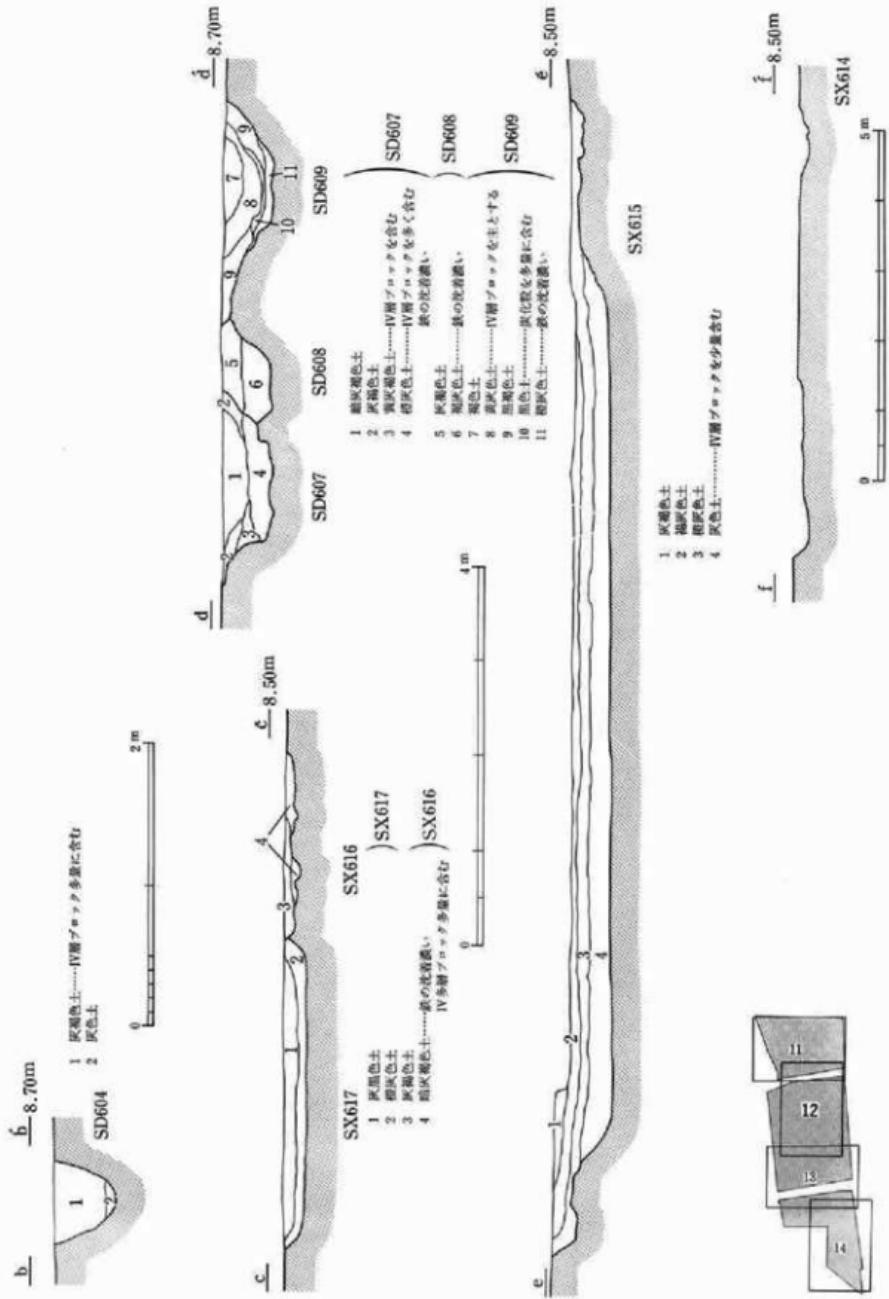
0 4 m





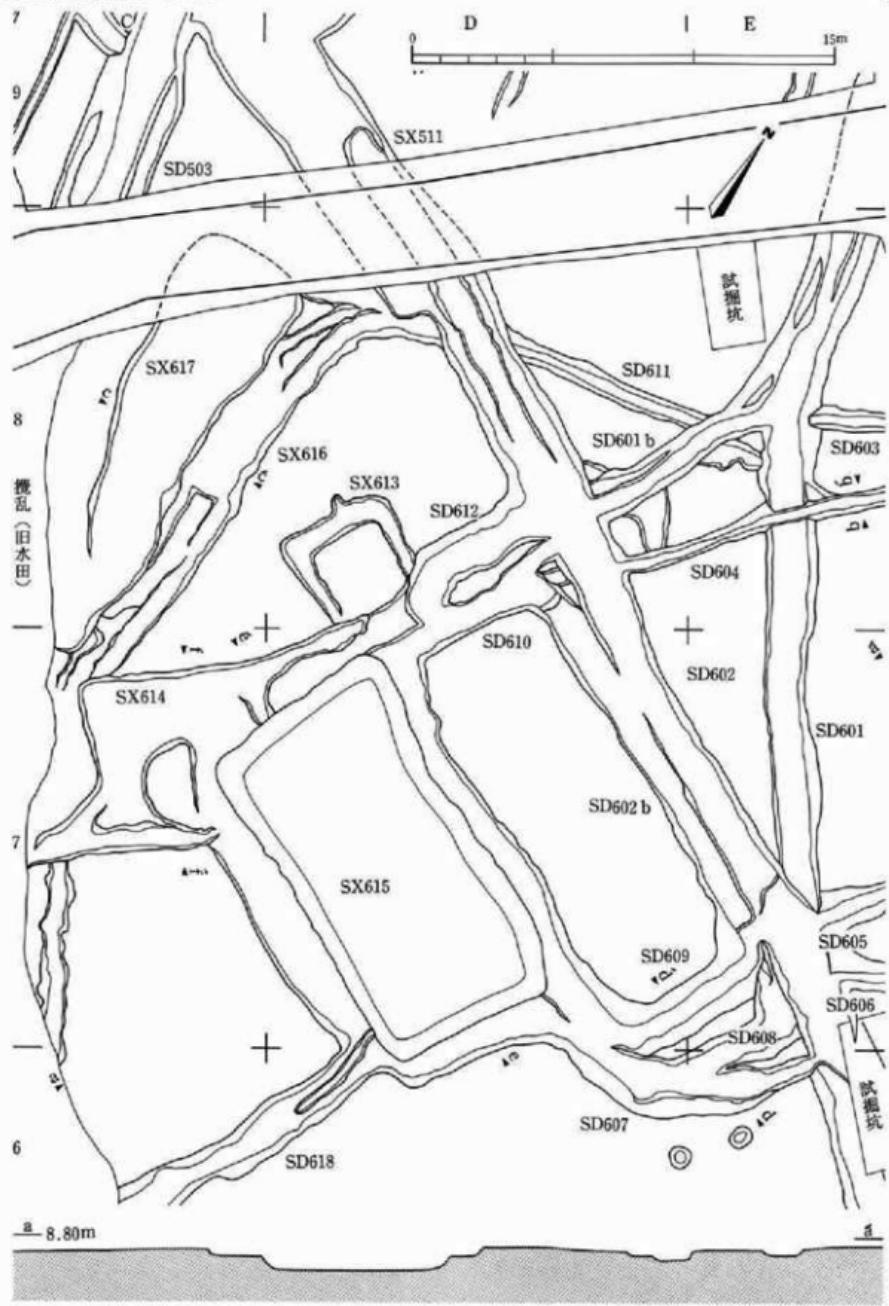


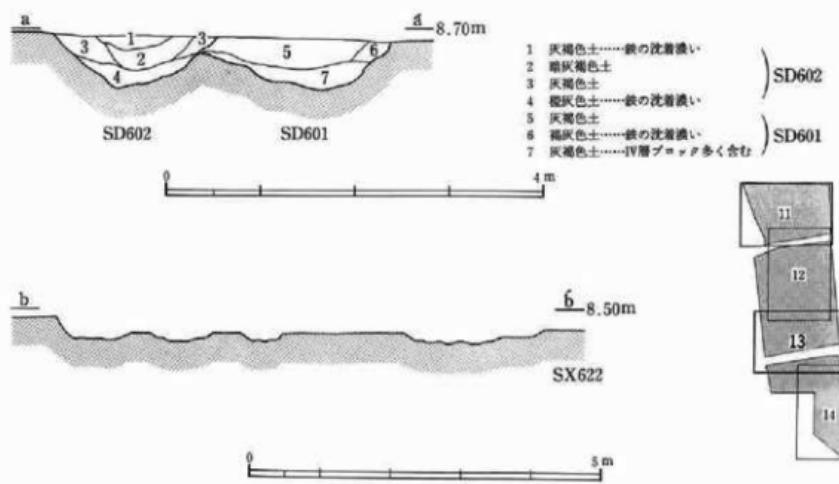


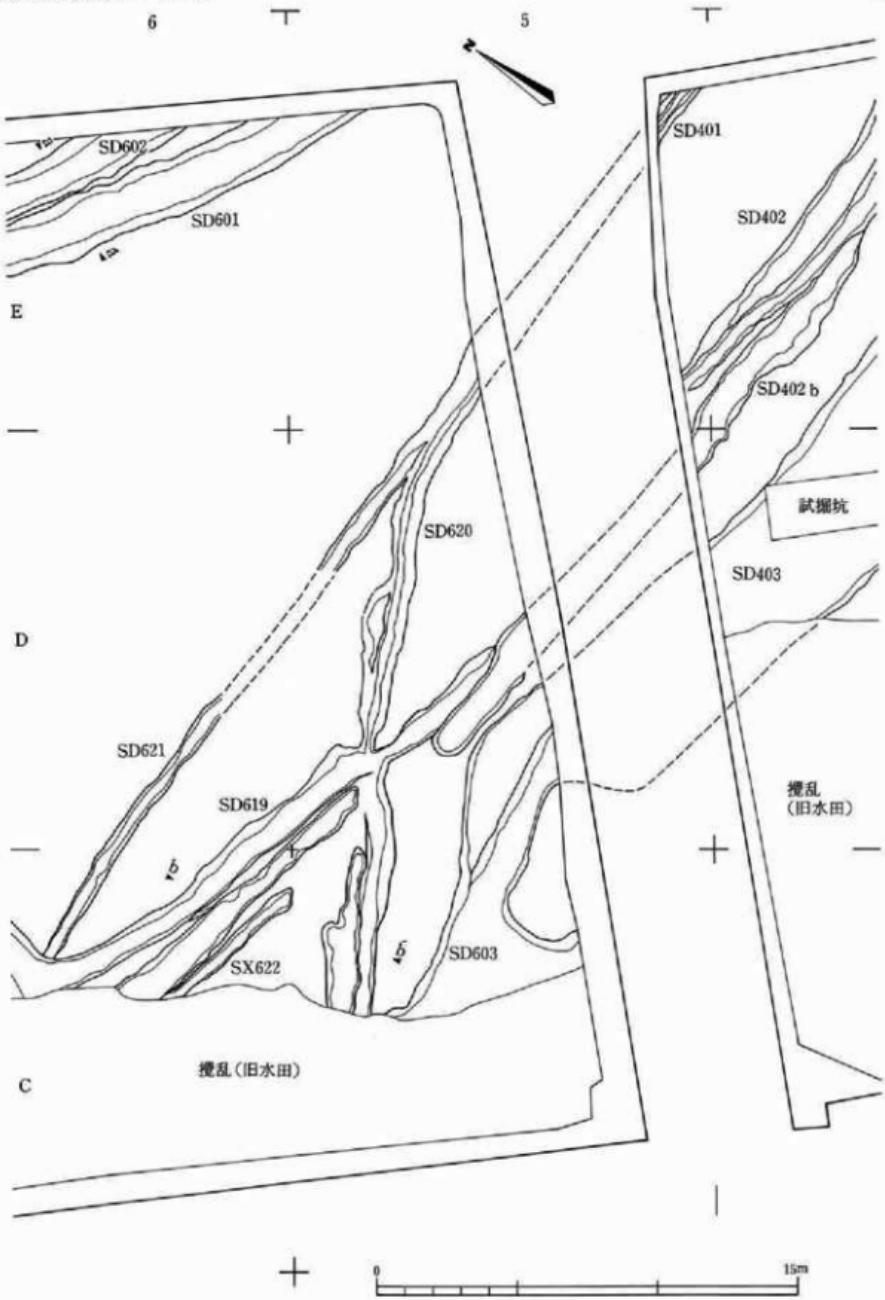


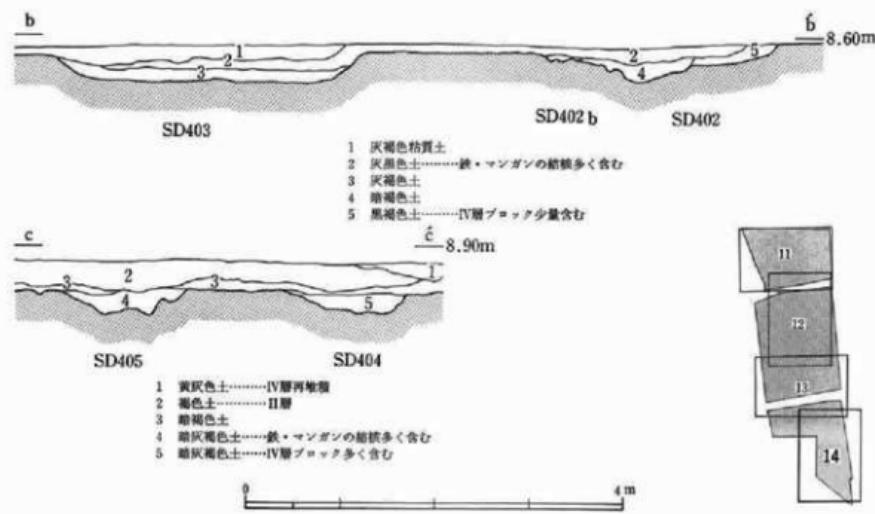
瓶池遺跡遺構実測図 12-1 : 200

圖版 30

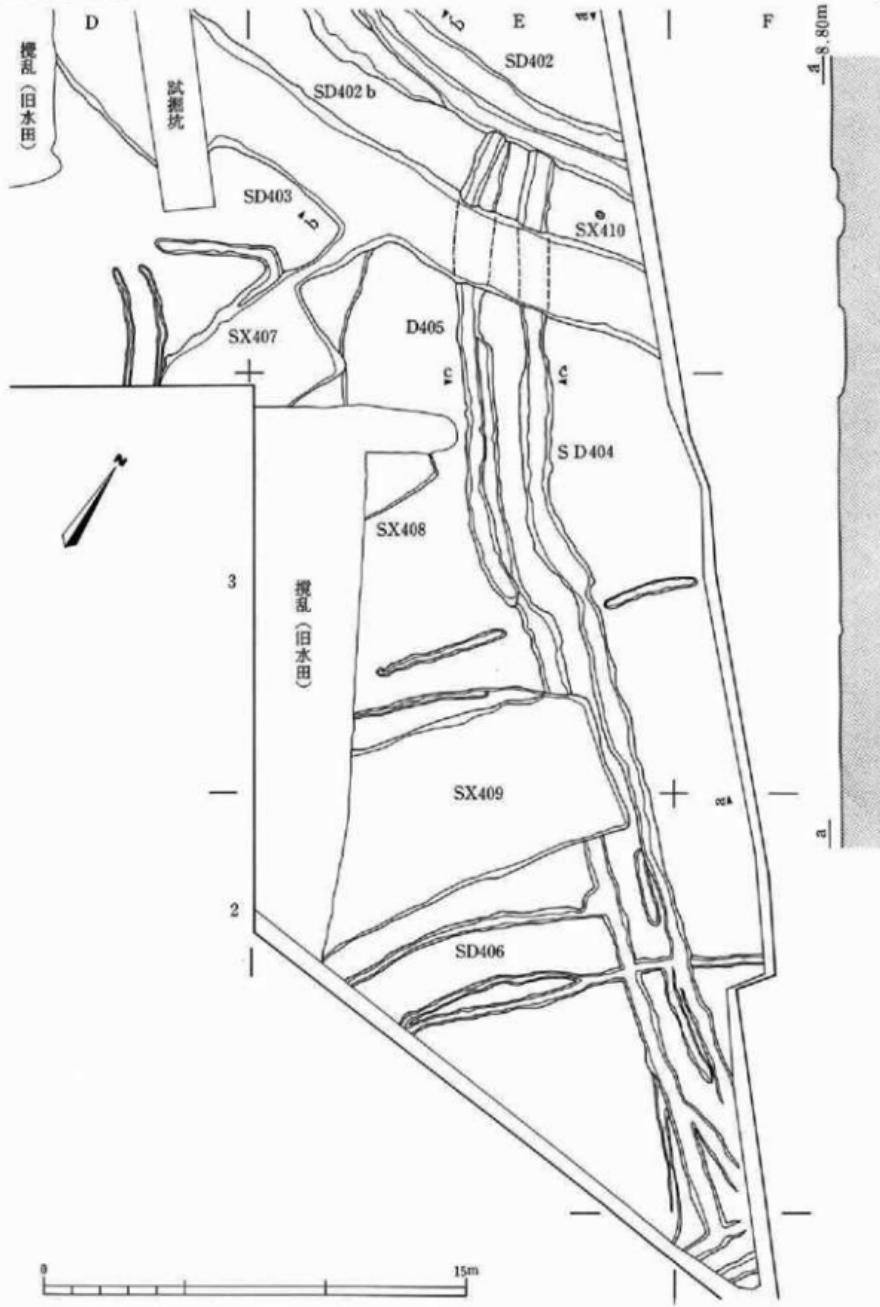


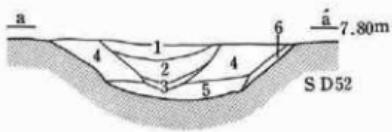




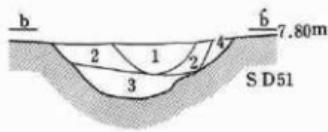


細池遺跡遺構実測図 14

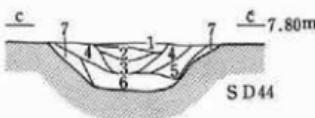




- 1 沢褐色土  
2 広褐色粘質土  
3 黒色粘質土  
4 広褐色粘質土……マンガン結核多く含む  
5 沢色粘質土……鉄の沈着濃い  
6 黄灰色土……IV層ブロック多く含む



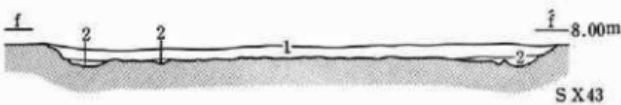
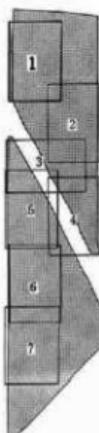
- 1 沢褐色土  
2 広褐色土……マンガン結核多く含む  
3 沈灰色土  
4 黄灰色土



- 1 沈灰色土  
2 黒灰色土  
3 沈灰色土  
4 広褐色土  
5 広褐色土……マンガン結核多く含む  
6 沢色土……鉄の沈着濃い  
7 黄灰色土……IV層ブロック少量化む

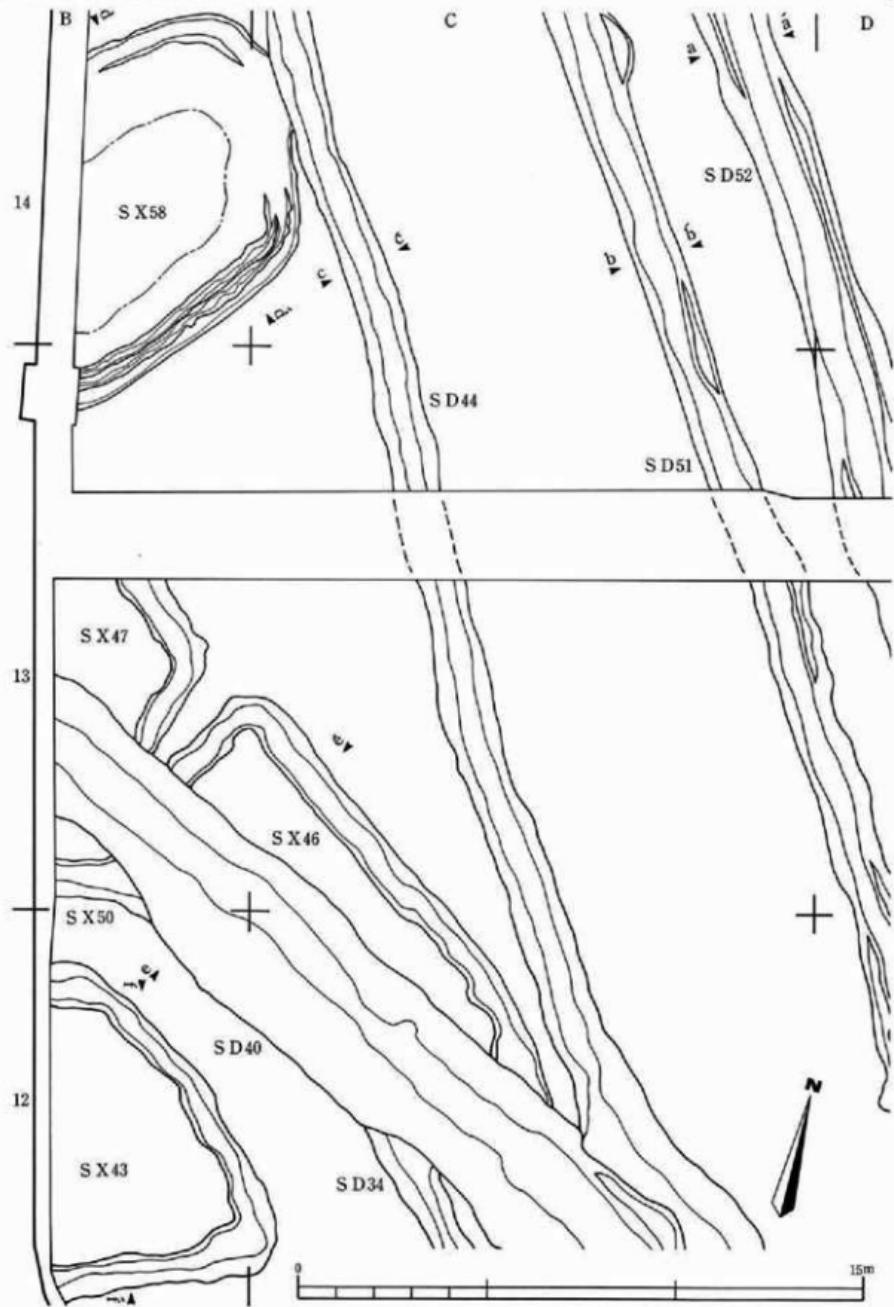


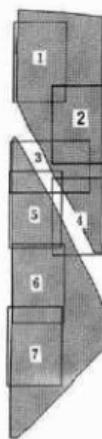
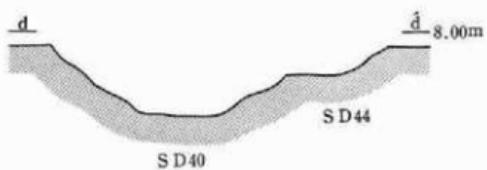
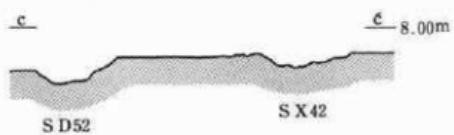
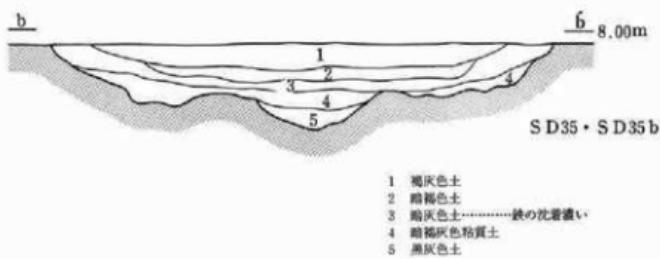
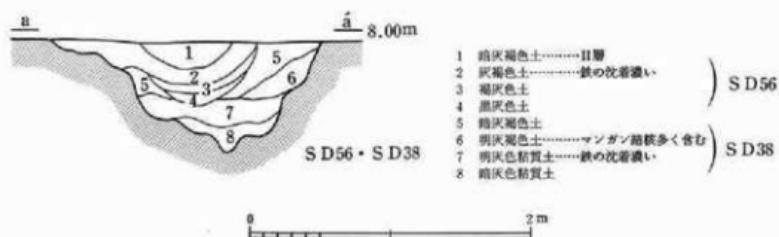
- 1 黒褐色土  
2 広褐色粘質土……鉄の沈着濃い  
3 沈灰色粘質土……IV層ブロック多く含む



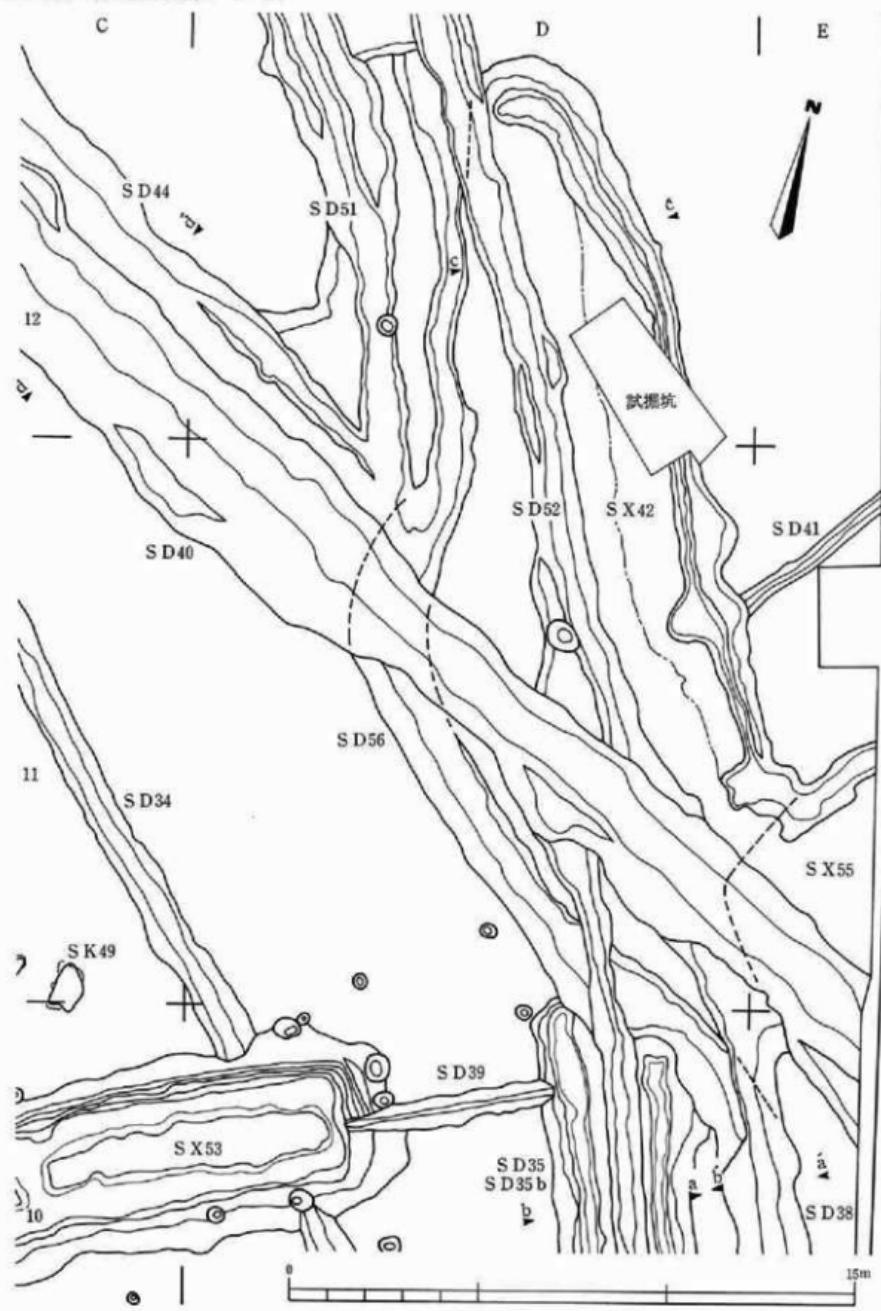
- 1 沈灰色粘質  
2 黒灰色土

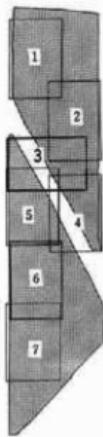
5 m

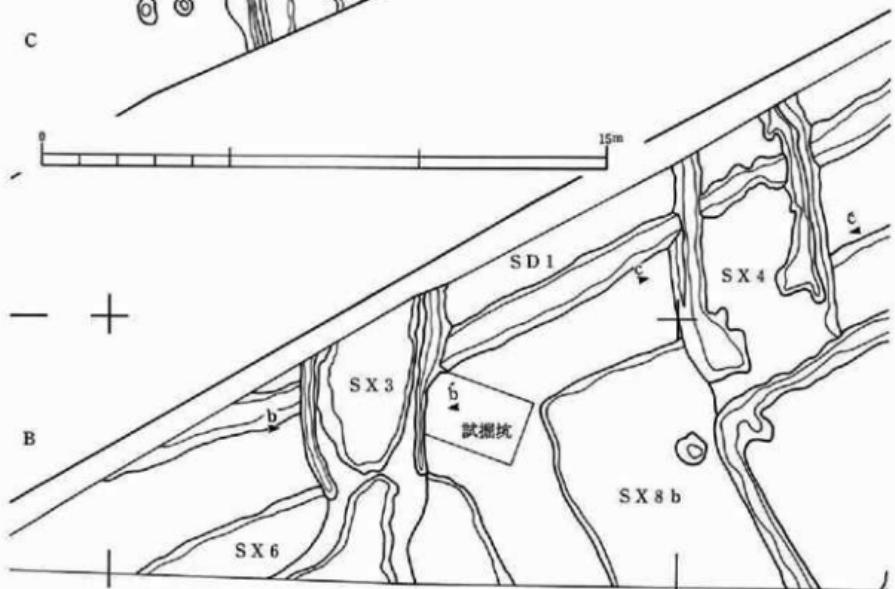
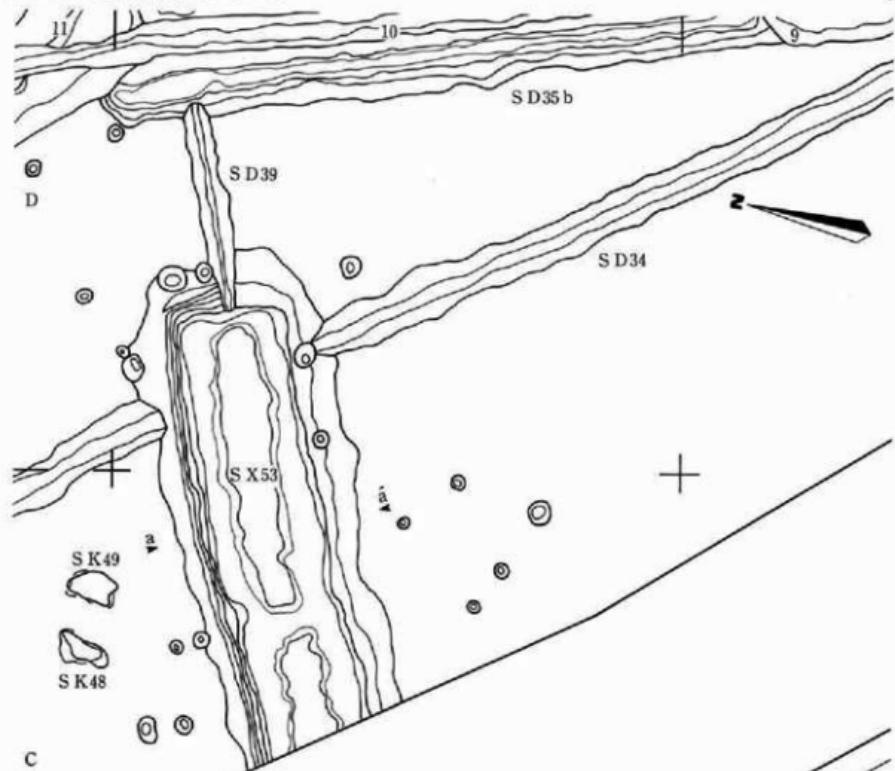


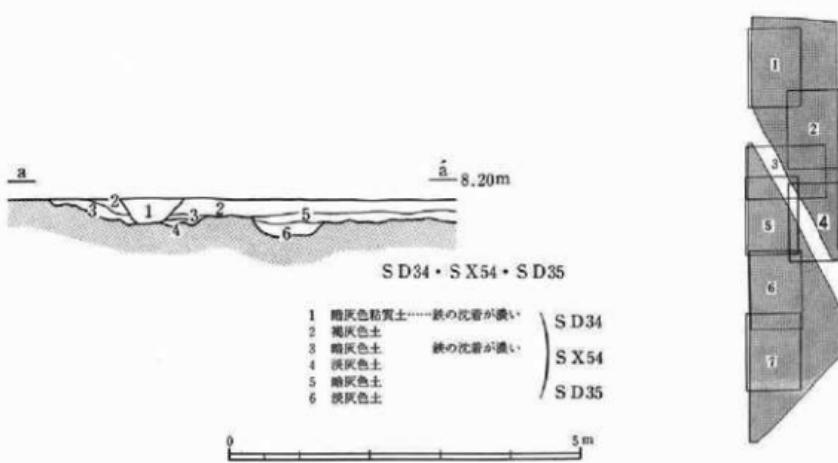


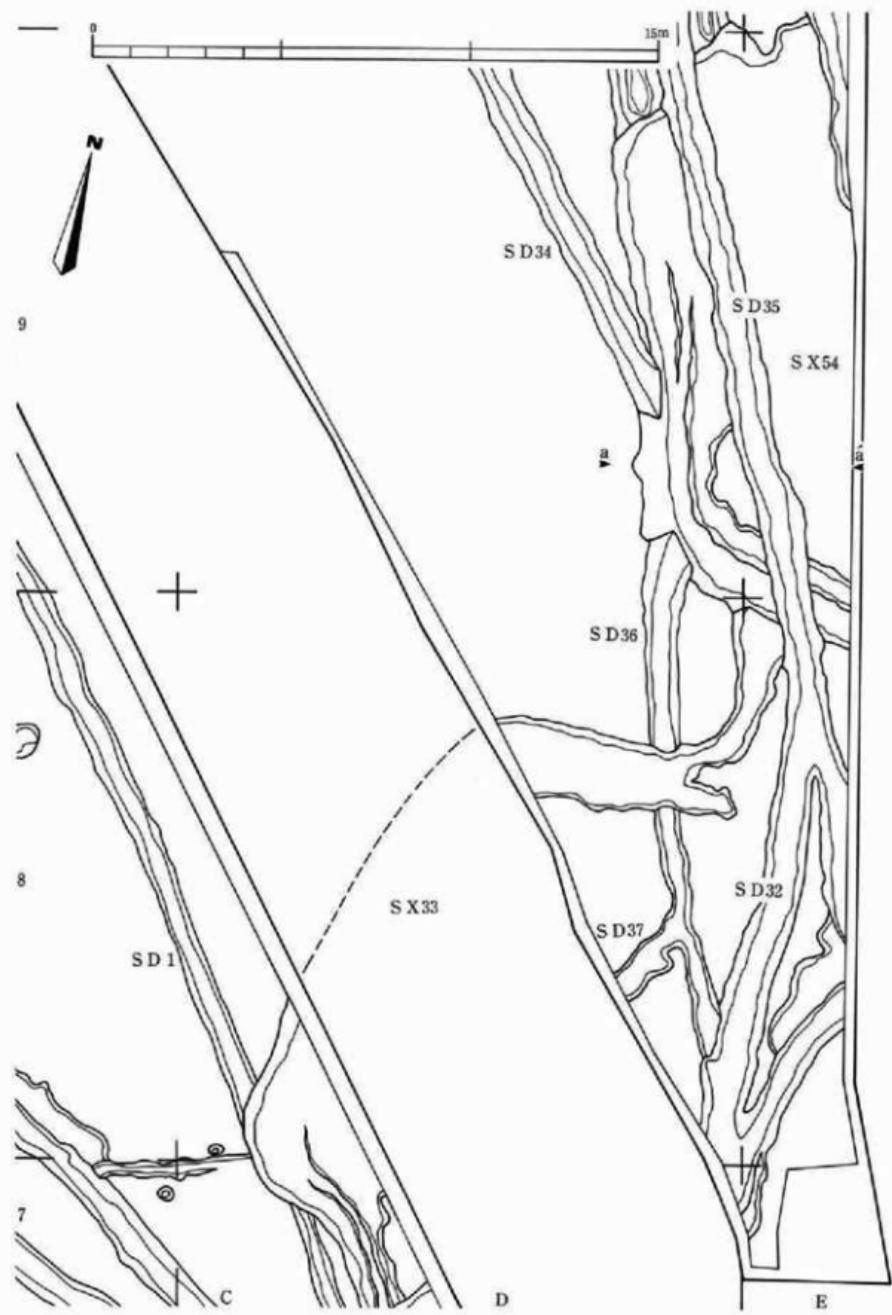
0 5m

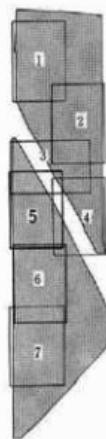


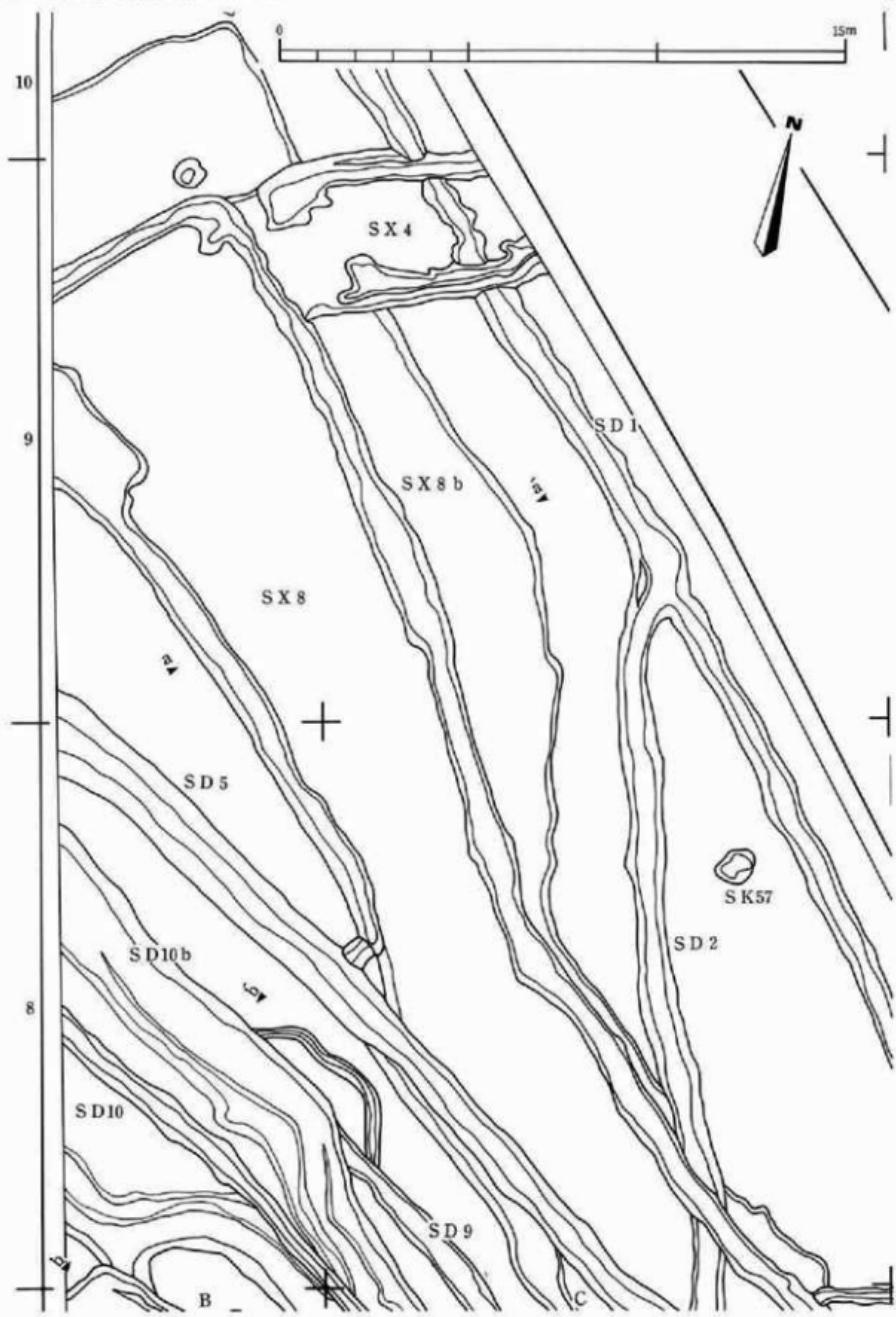


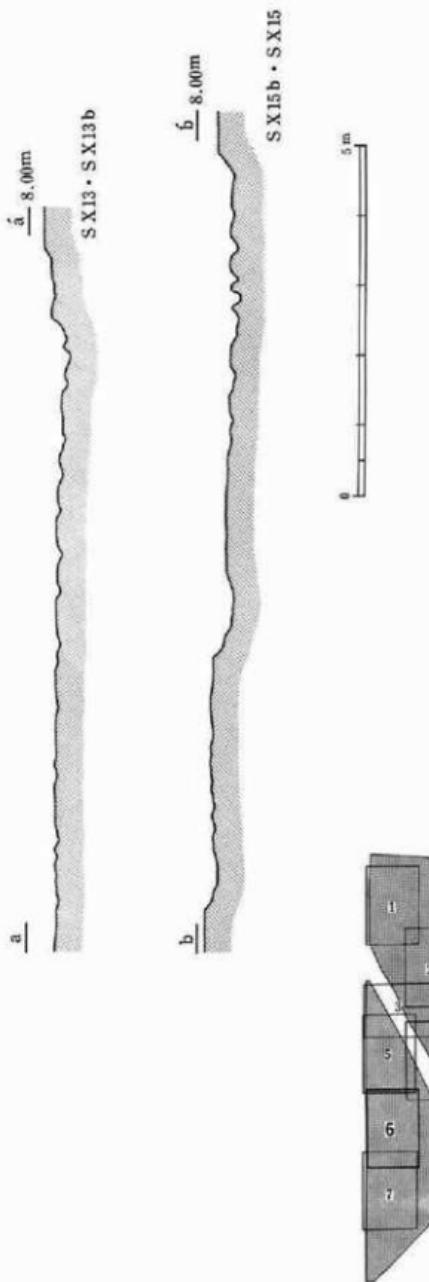


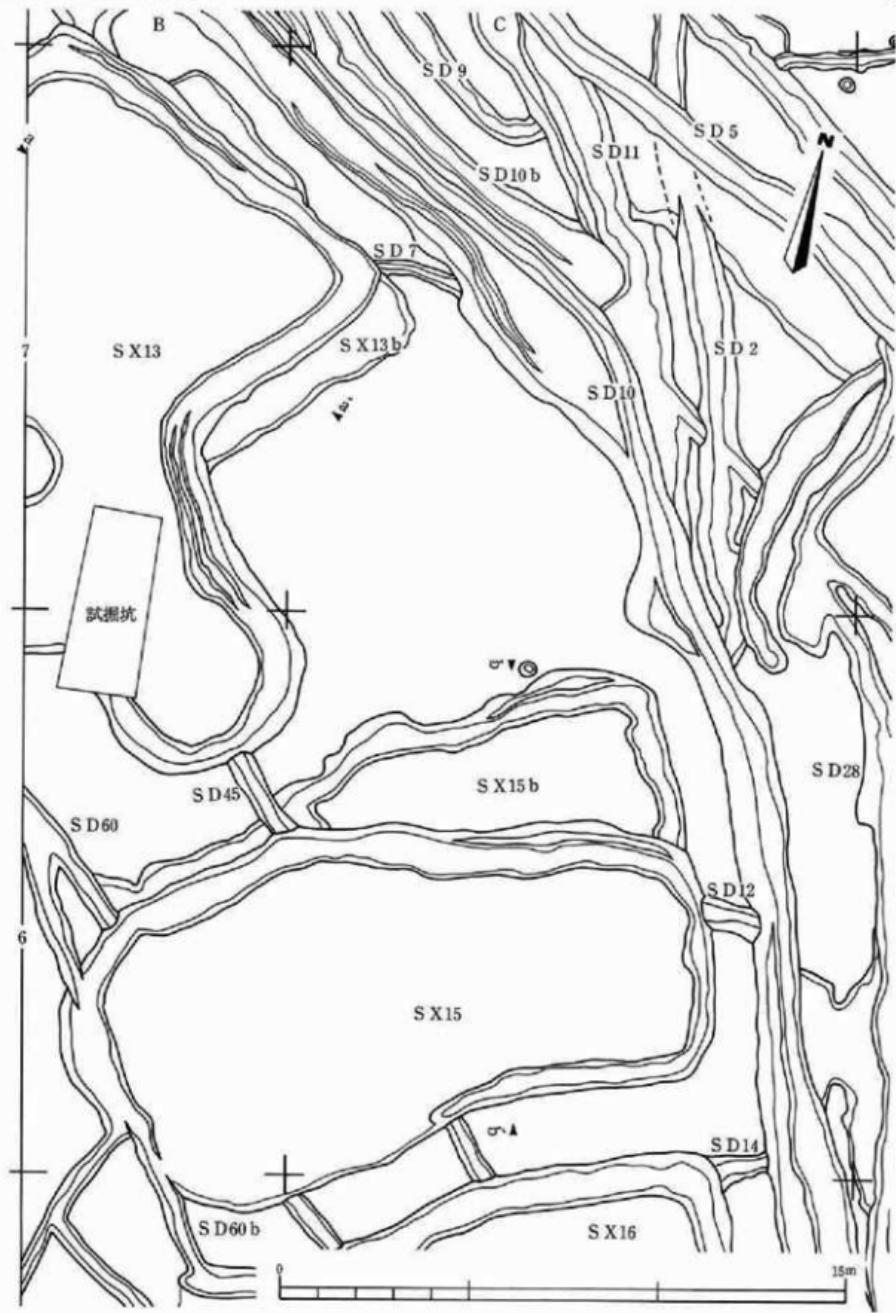


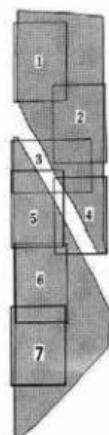
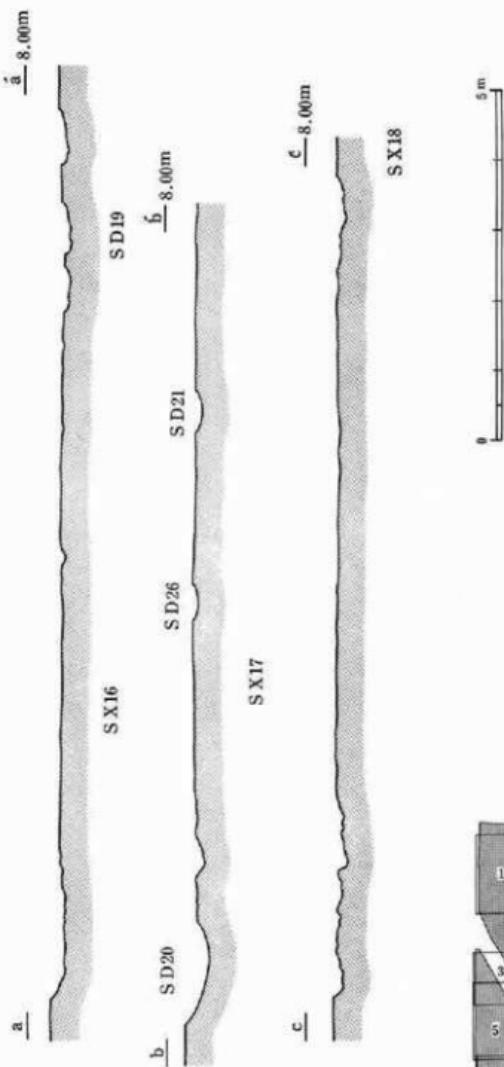


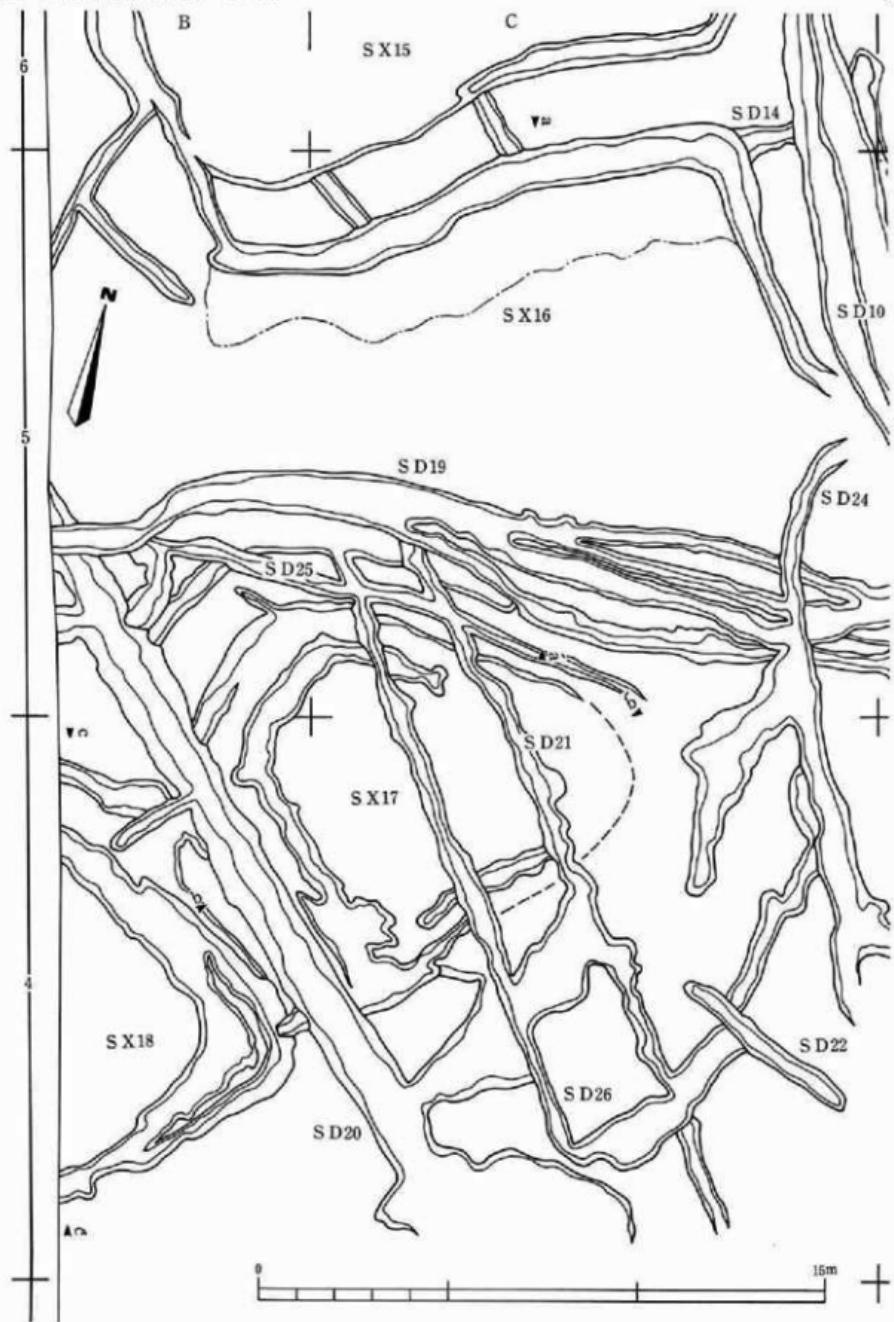


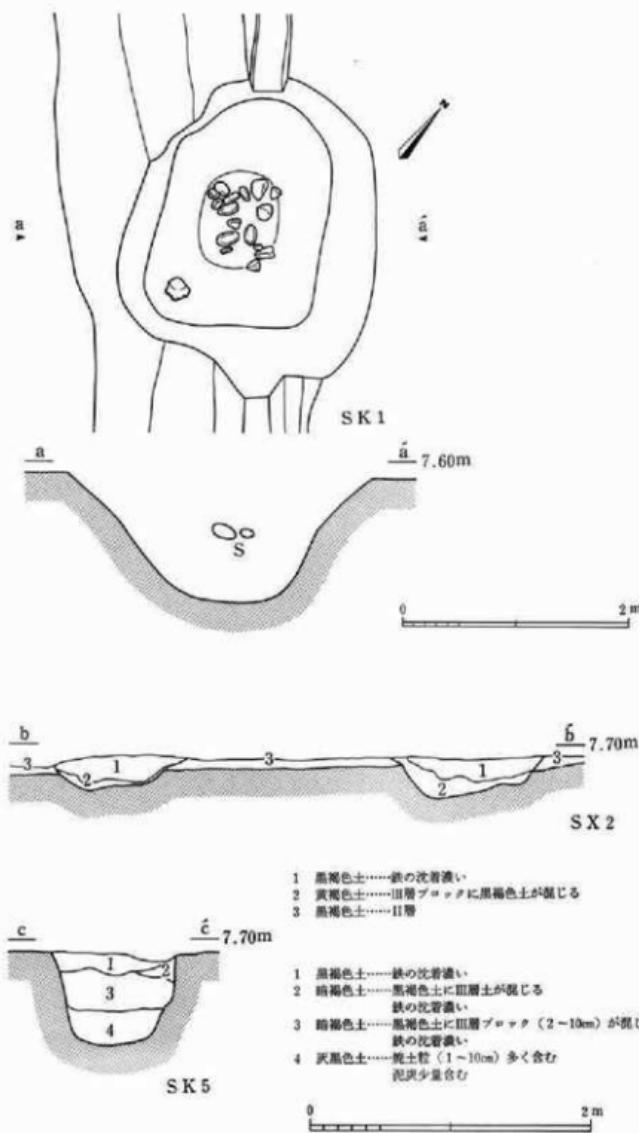


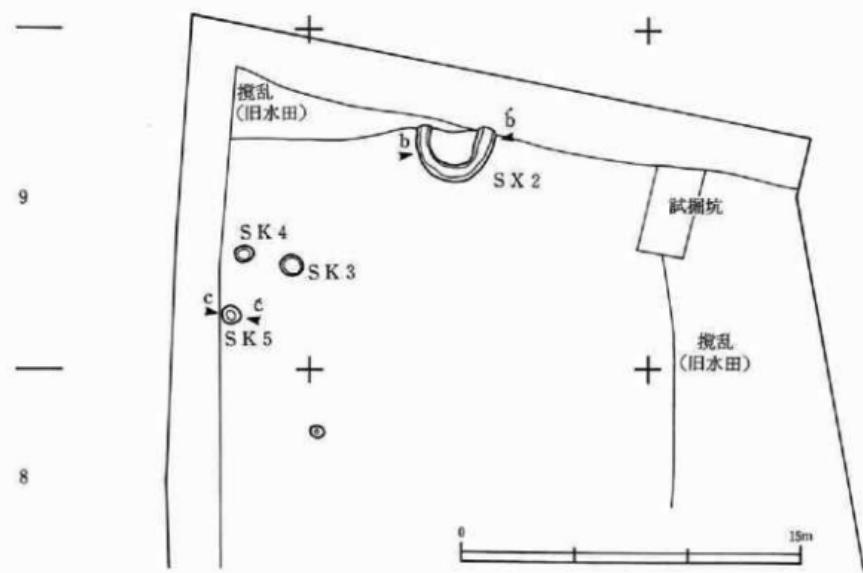
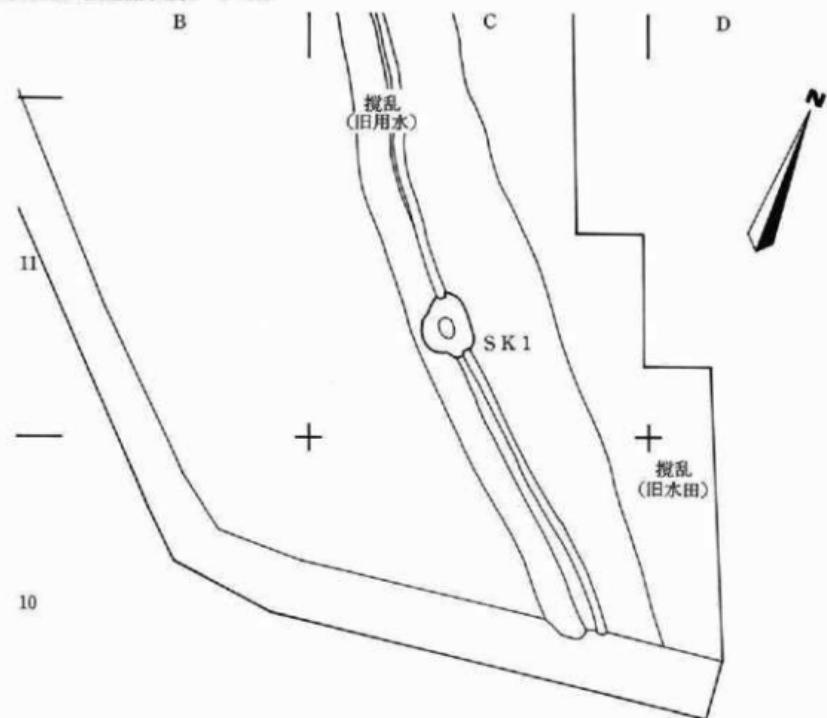




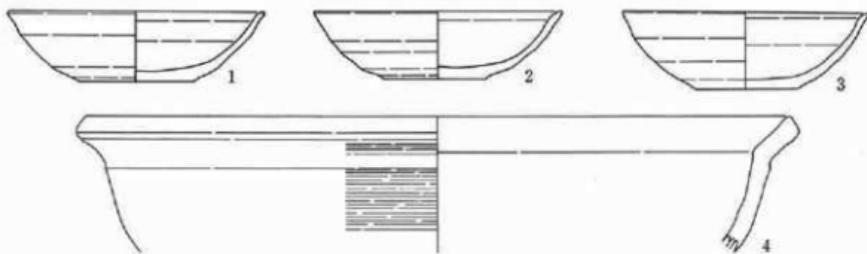




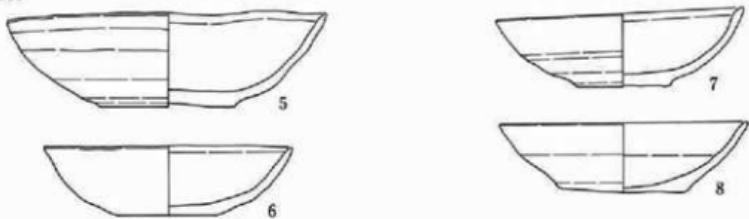




S K704



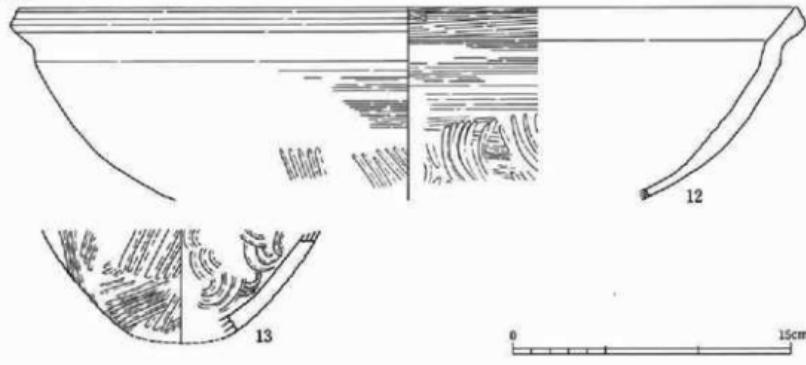
S X705

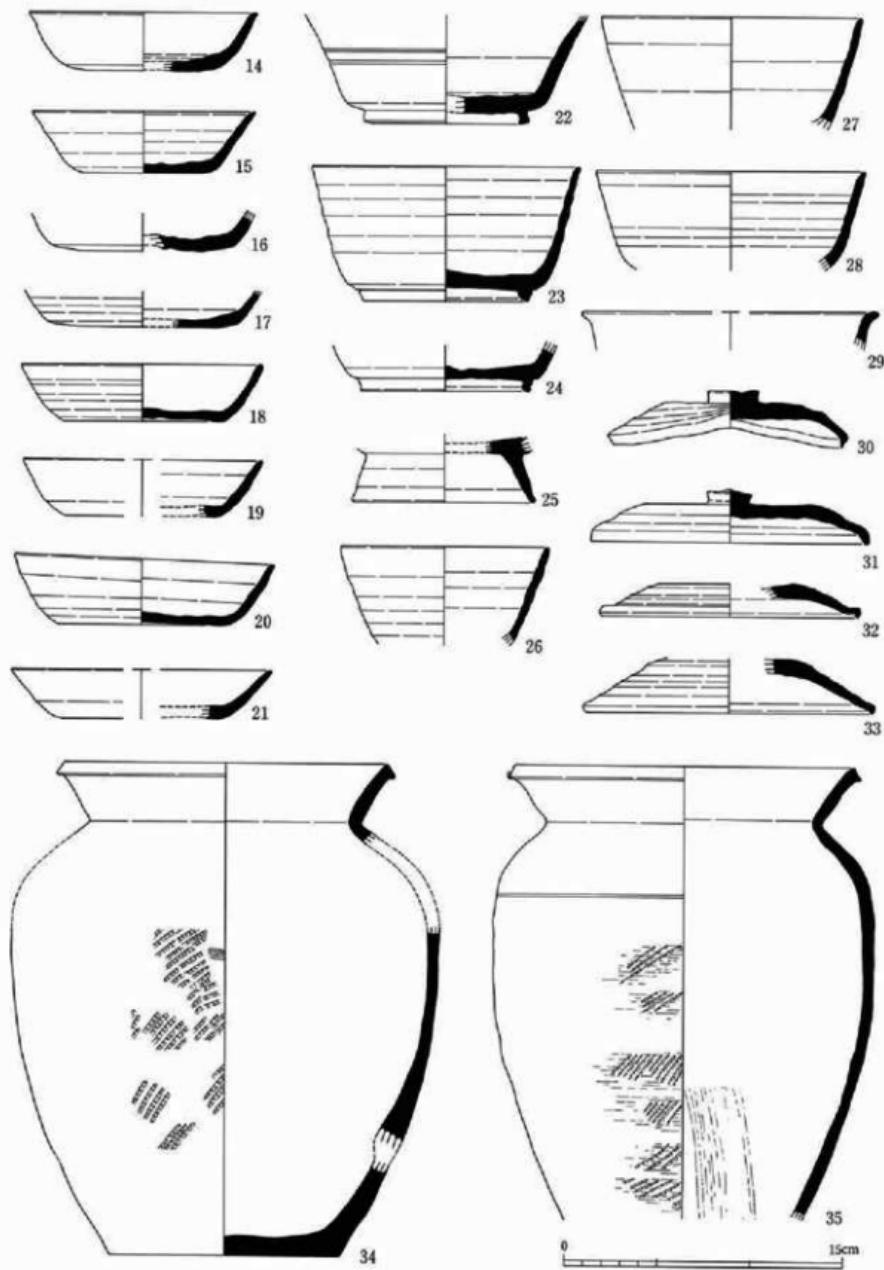


S K707

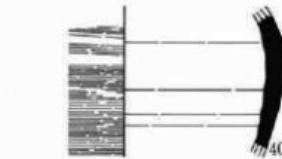
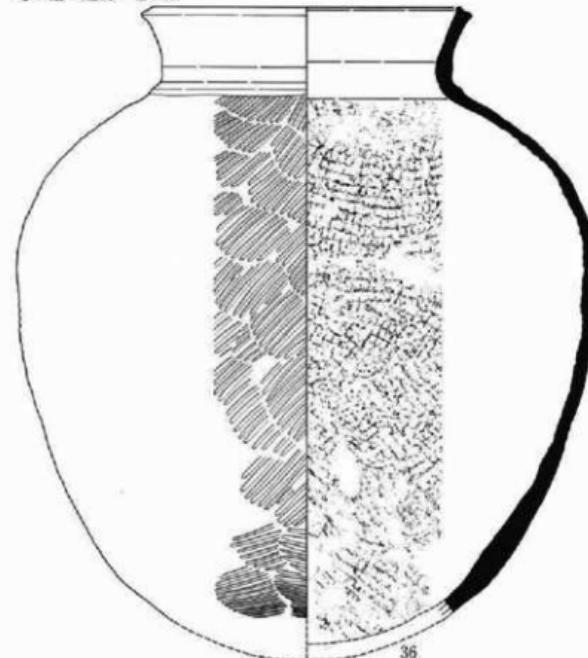


S X808



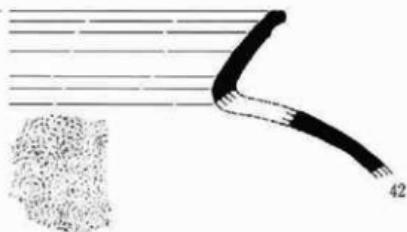
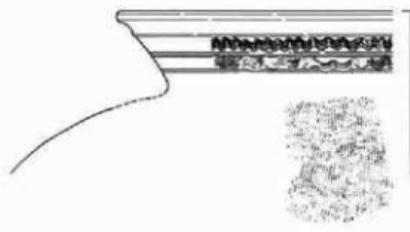


## その他の遺構・包含層

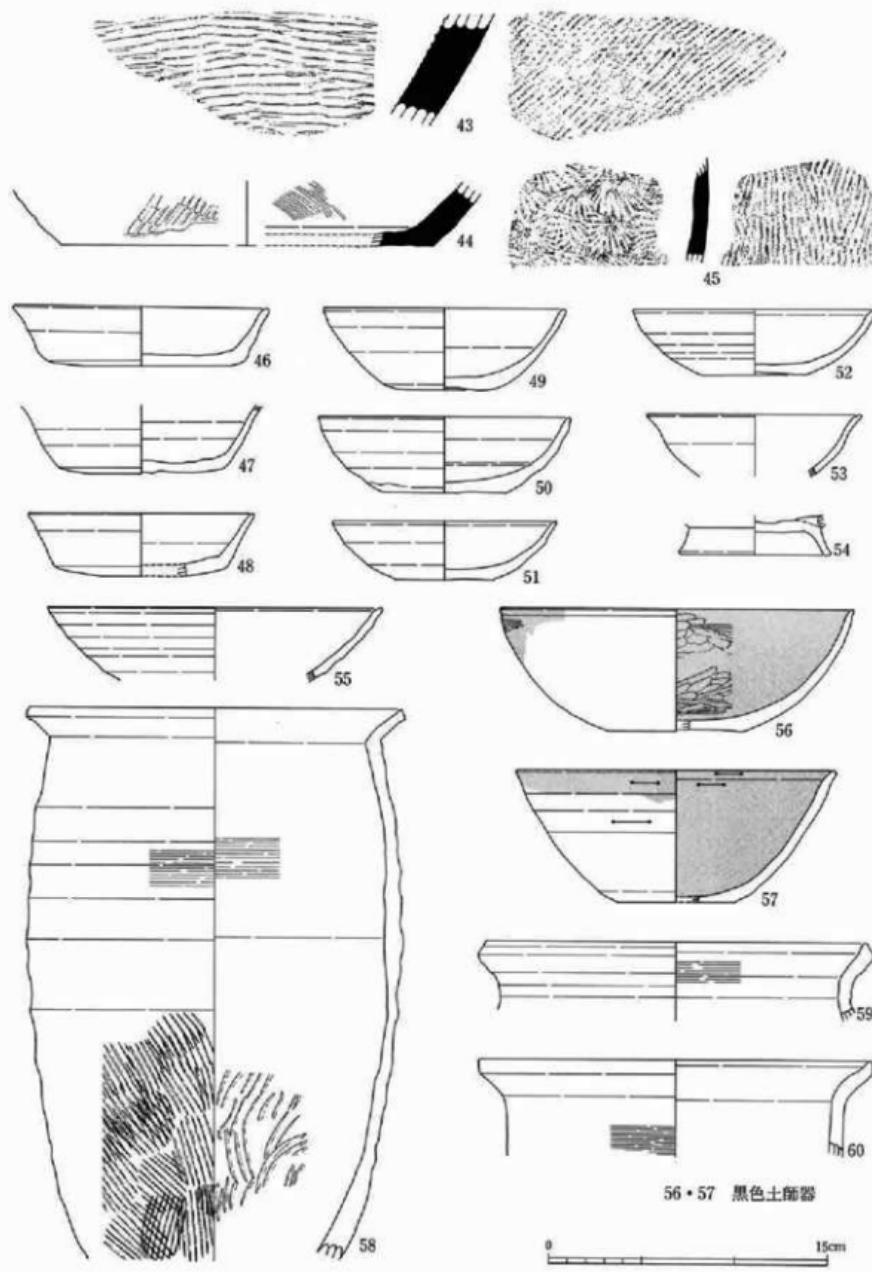


36-41 0  
(1 : 3) 15cm

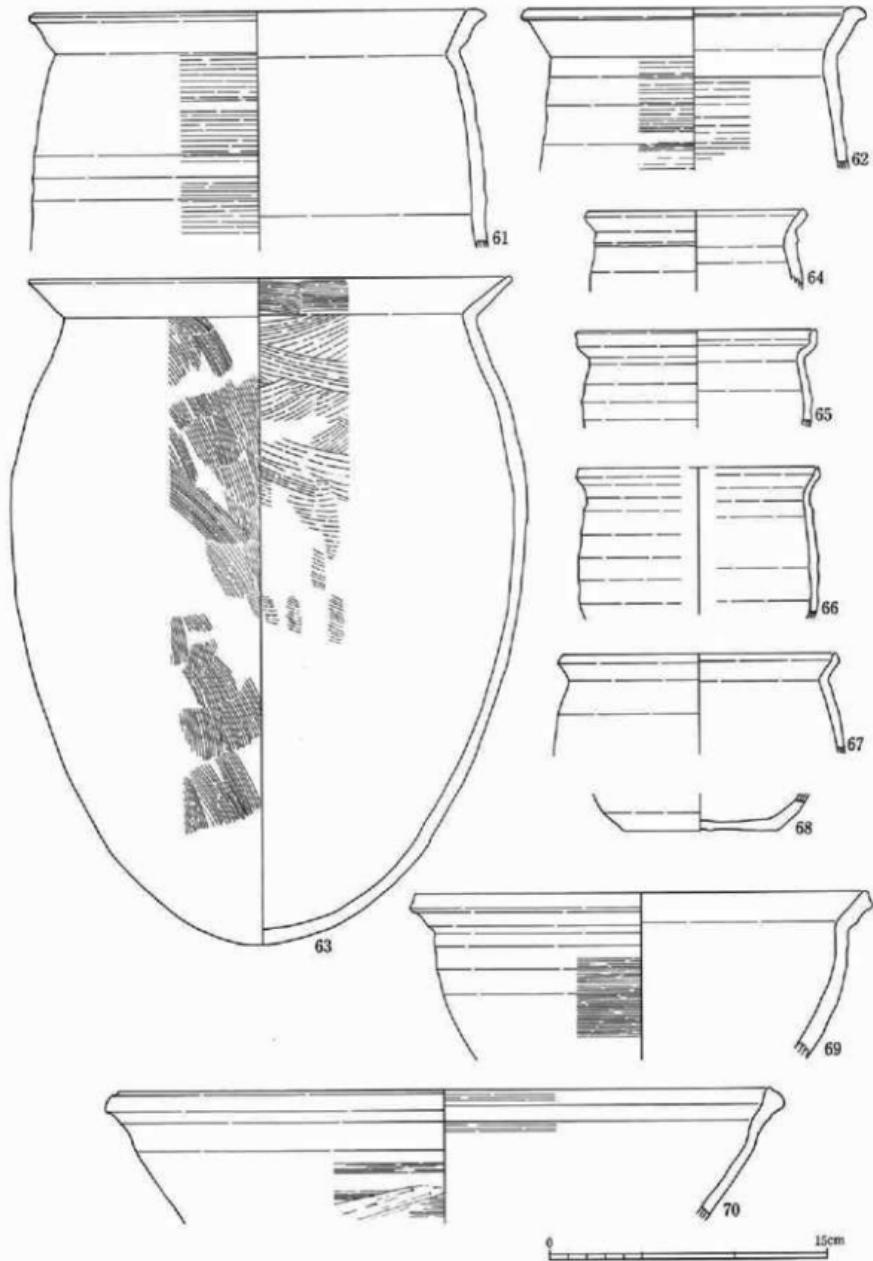
42 (1 : 6) 0  
30cm



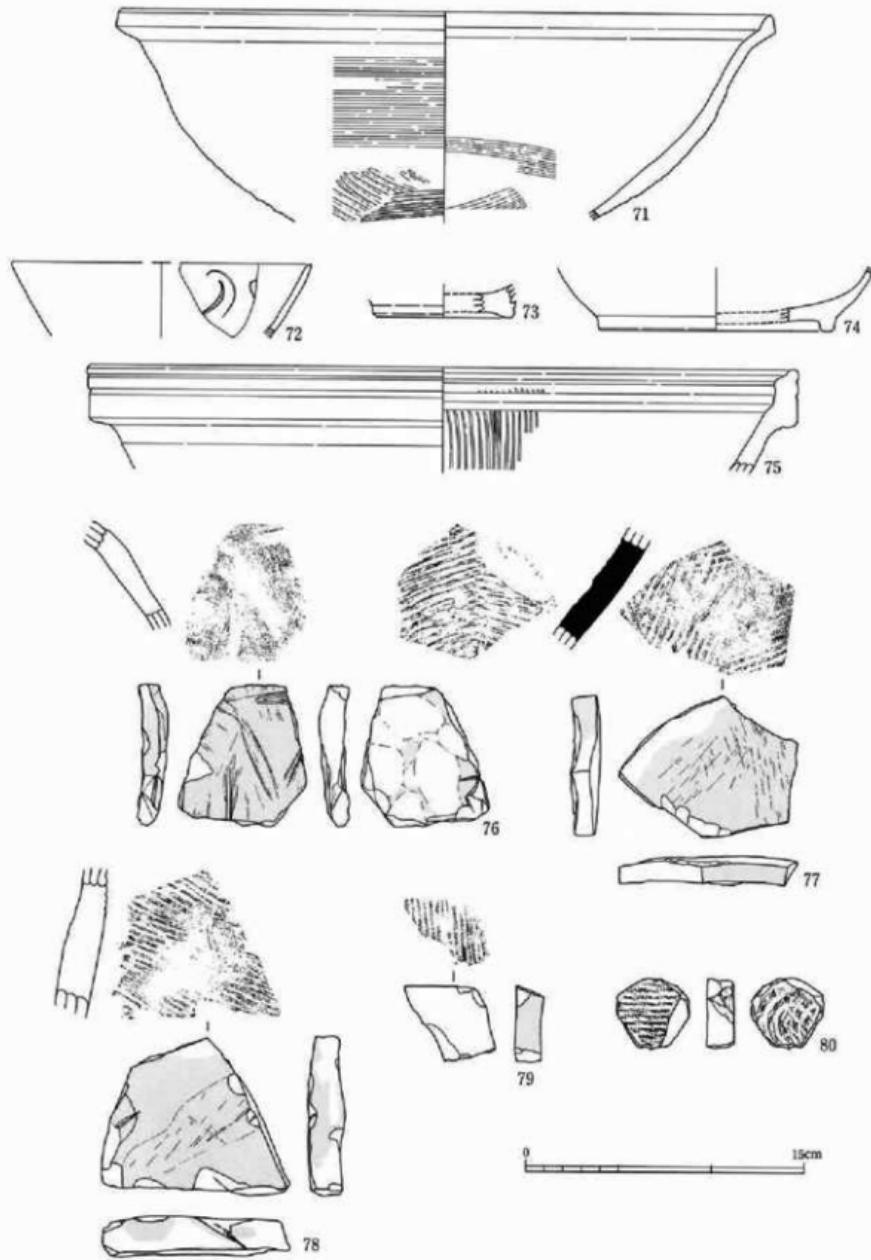
## その他の遺構・包含層



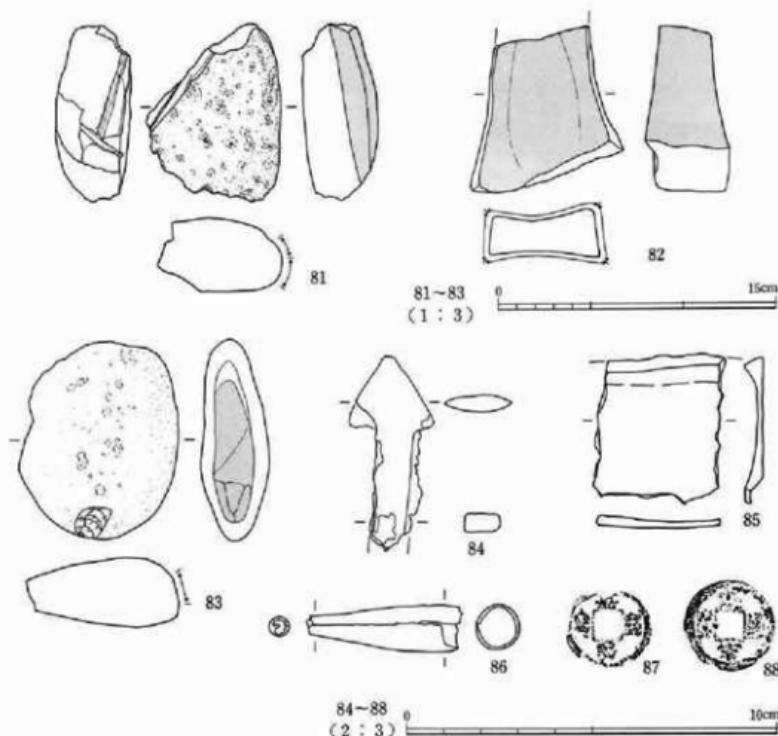
## その他の遺構・包含層



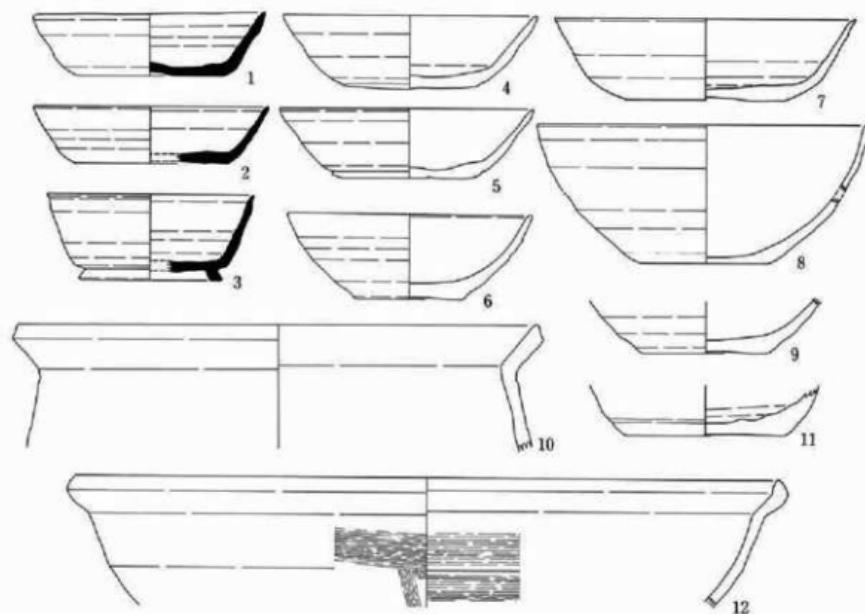
## その他の遺構・包含層



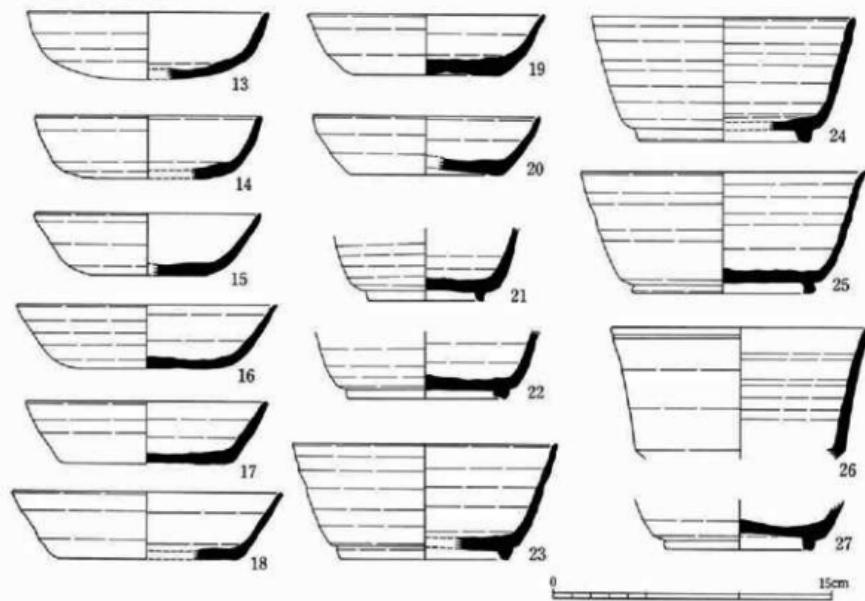
## その他の遺構・包含層



S X55

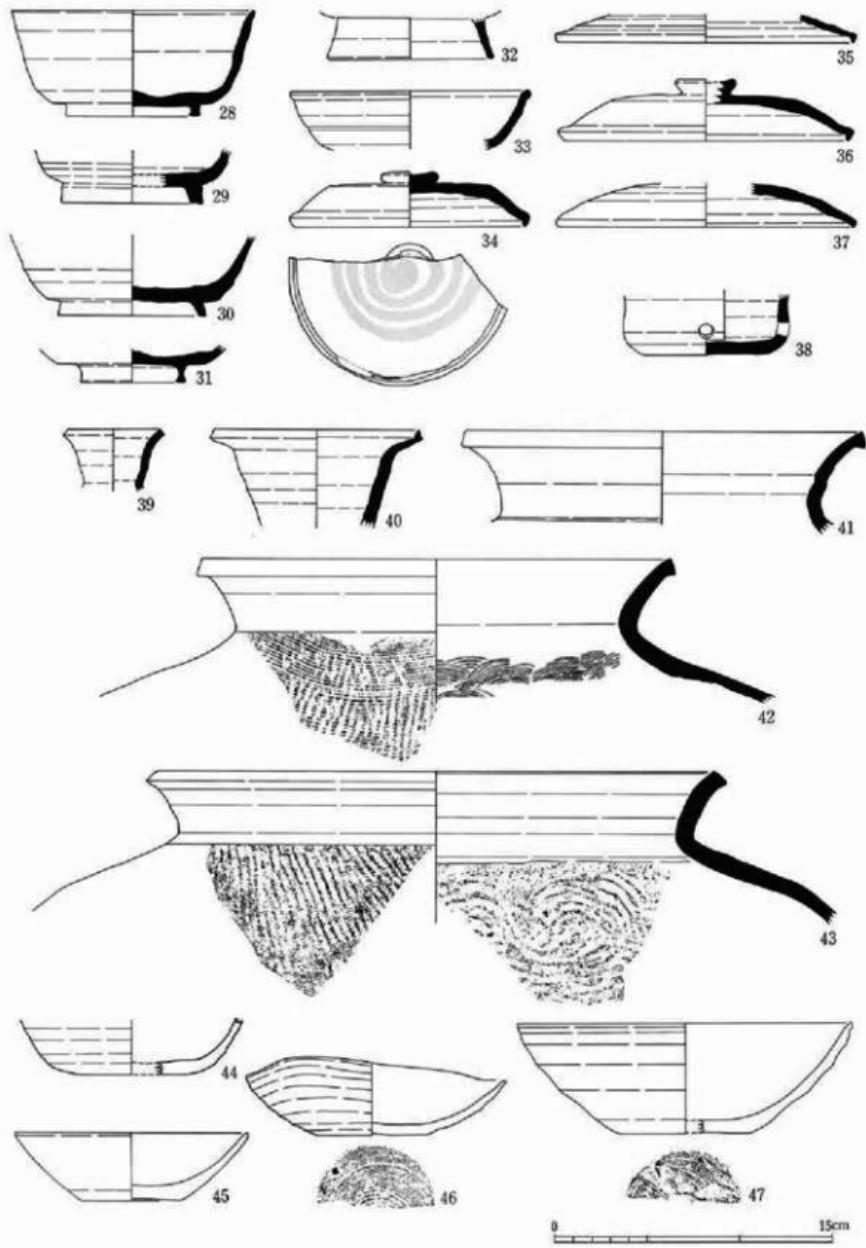


## その他の遺構・包含層

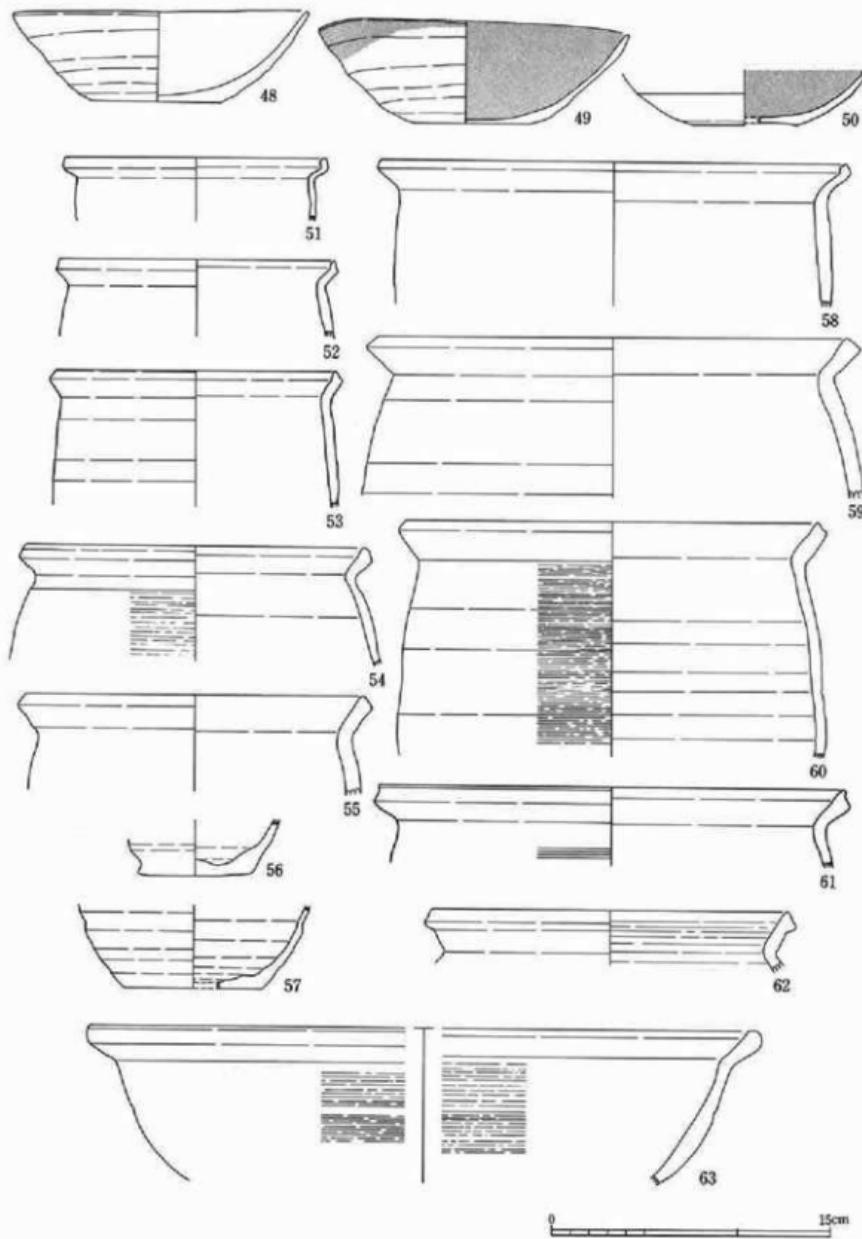


0 15cm

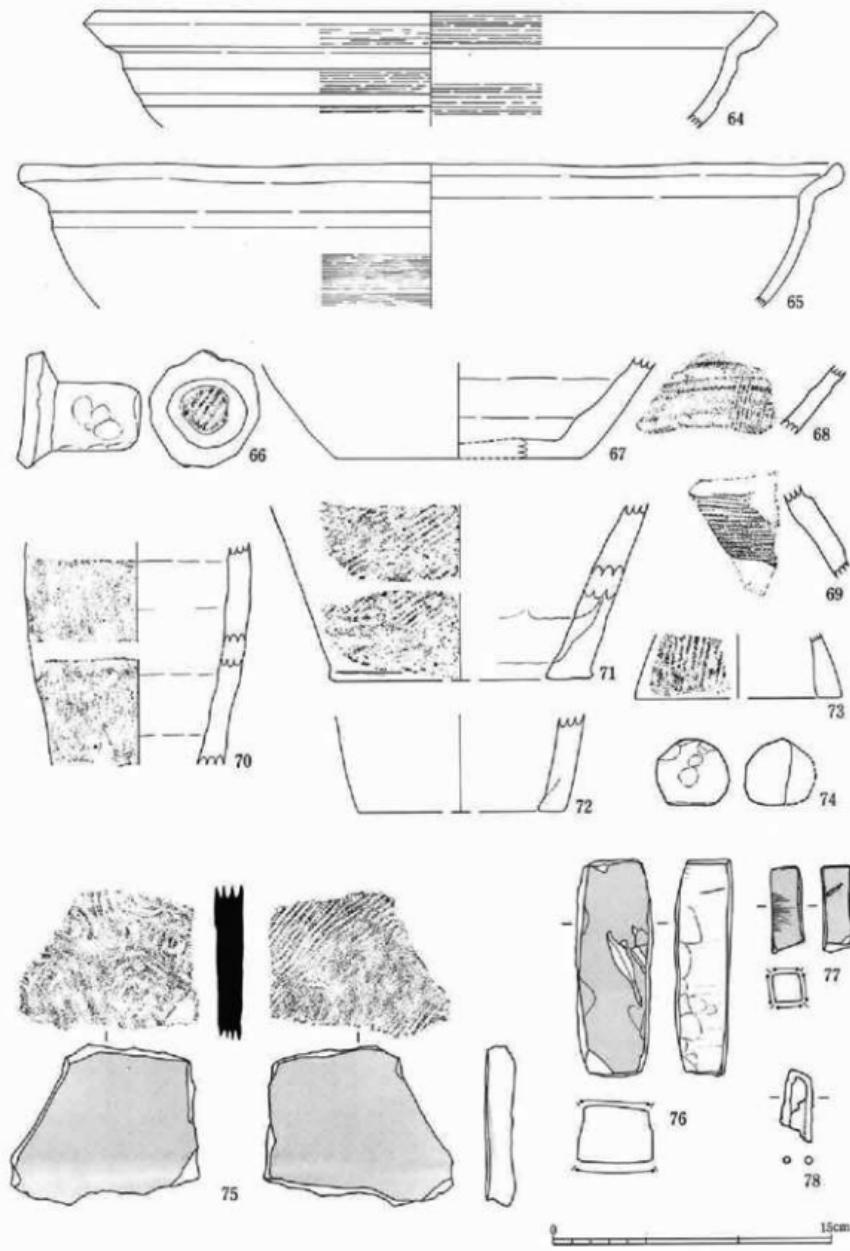
## その他の遺構・包含層

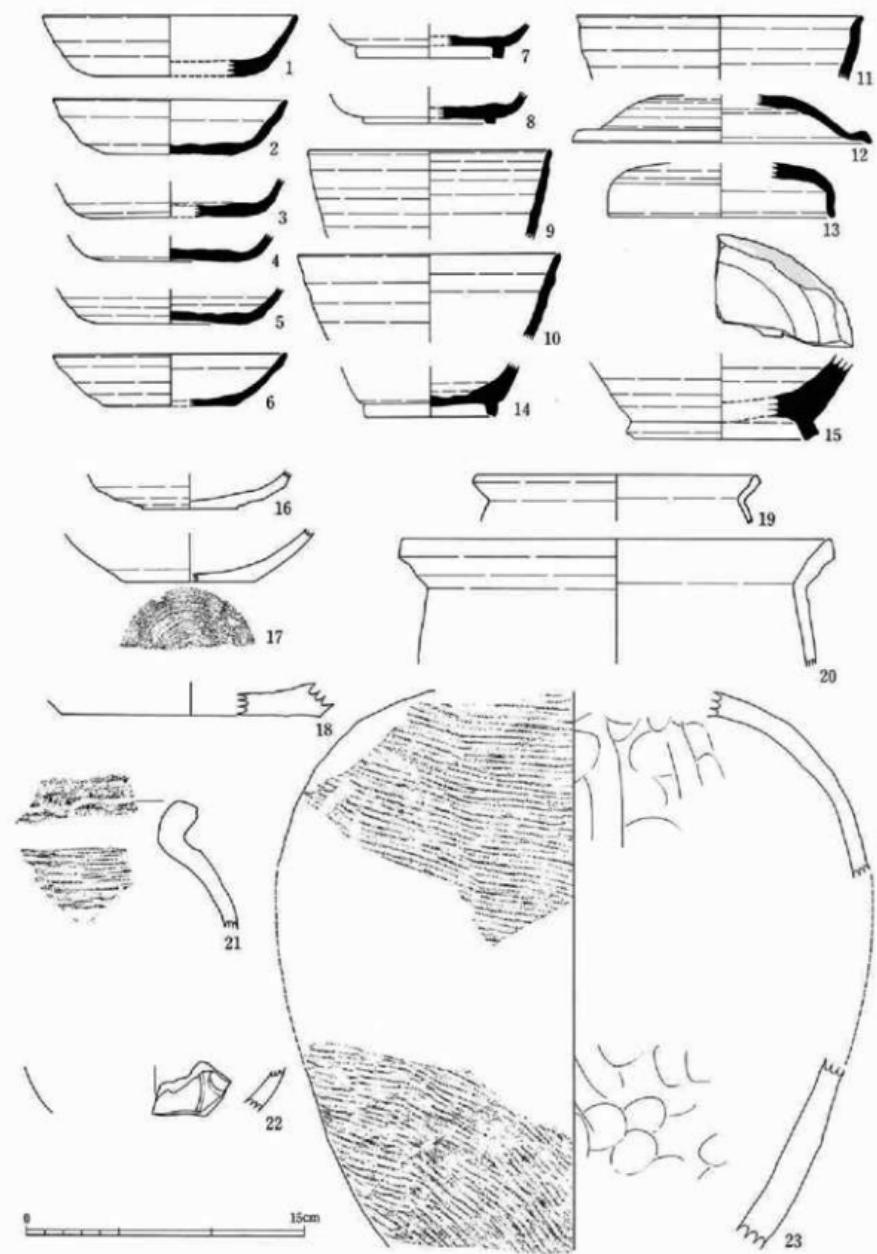


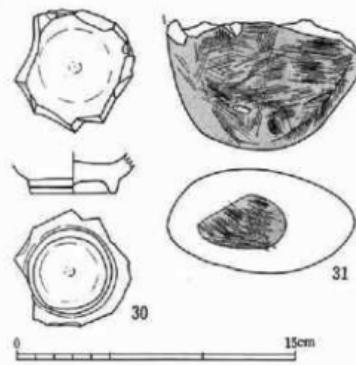
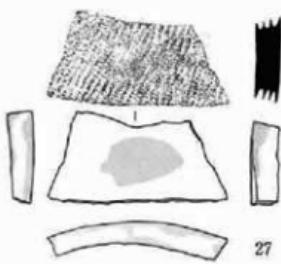
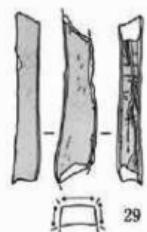
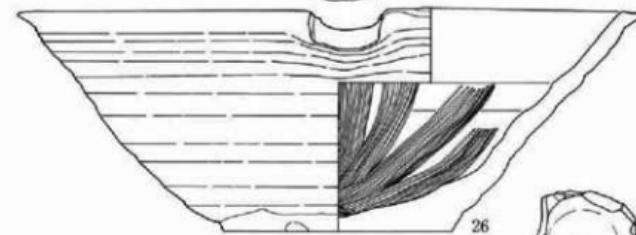
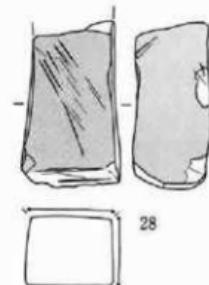
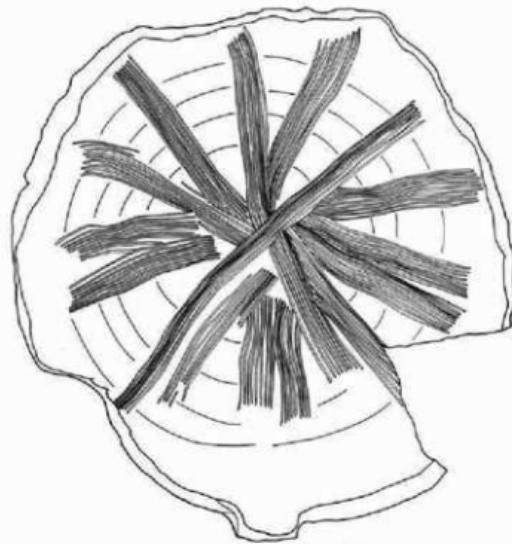
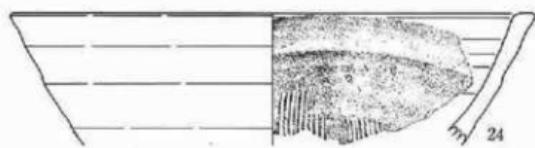
その他の造構・包含層



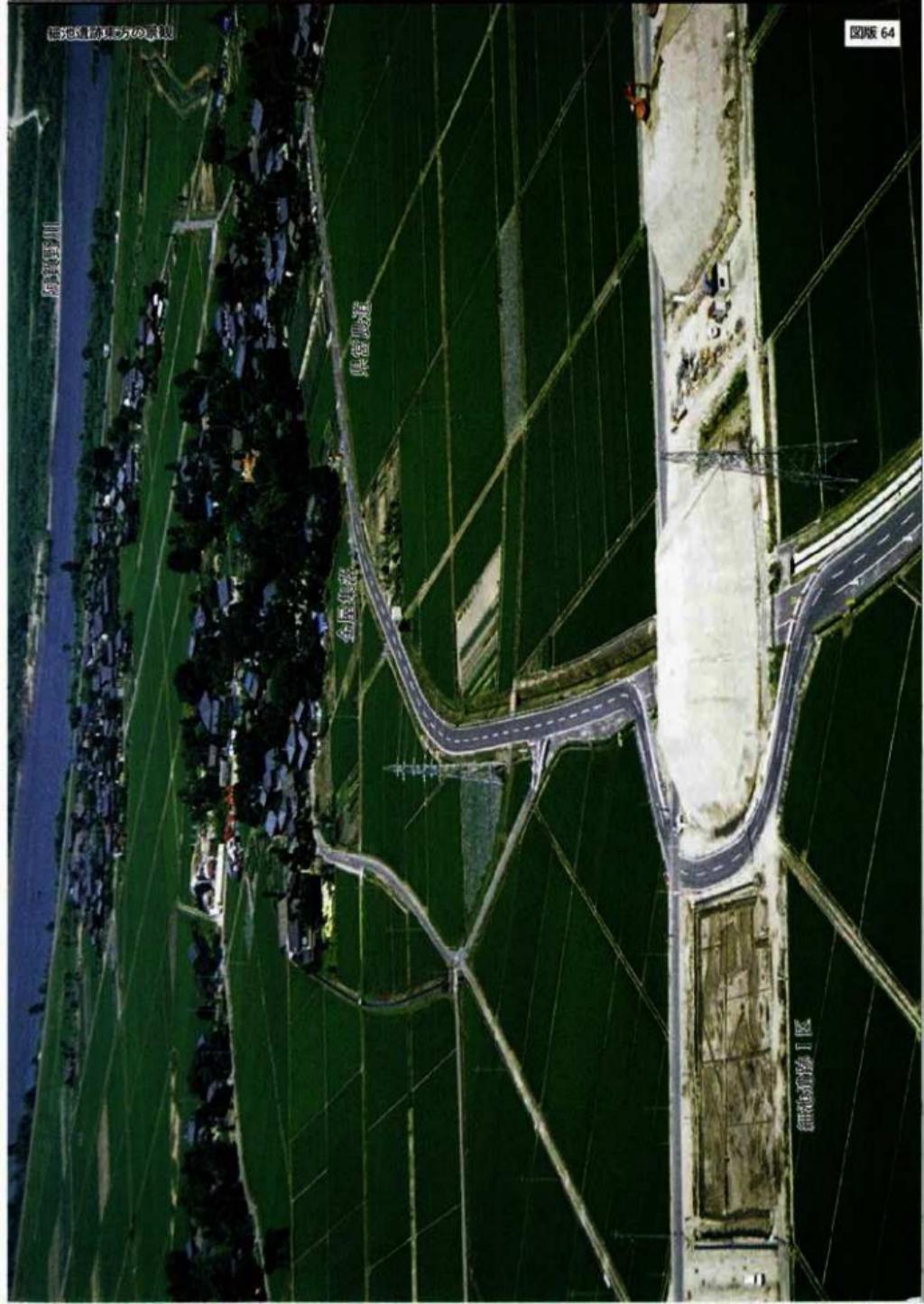
## その他の遺構・包含層







15cm





細池遺跡・寺道上遺跡遠景  
西（秋葉山）から



細池遺跡 I 区全景  
南東から



細池遺跡 J 区全景  
南東から





S X 006 完掘

南から



S X 005 完掘

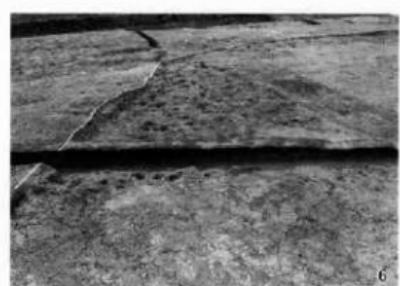
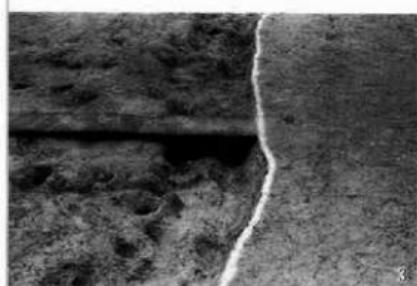
南西から



S X 001 完掘

東から





1 S X 307北東隅  
東から

3 S X 006土層断面  
南から

5 S D 016  
東から

7 S D 009・S D 010  
土層断面 東から

2 S D 012  
西から

4 S X 005土層断面  
南から

6 S X 001土層断面  
東から

8 J区作業風景  
南から



C 区全景

西から



S X306 + S X305 完掘

東から



S X304 a + S X304 b 完掘

西から



S X 304 a 完掘  
東から



31~33・D~E 付近  
北西から



S X 307完掘  
北から

H区全景  
東から



H区全景  
西から



S K 808遺跡出土状況  
北から





1 SK 808遺物出土状況  
西から

3 SK 808土層断面  
西から

5 SK 809遺物出土状況  
北から

7 SD 805・SD 802  
土層断面 西から

2 SK 808遺構確認状況  
西から

4 旧流路土層断面  
西から

6 SD 804土層断面  
西から

8 SD 801土層断面  
西から

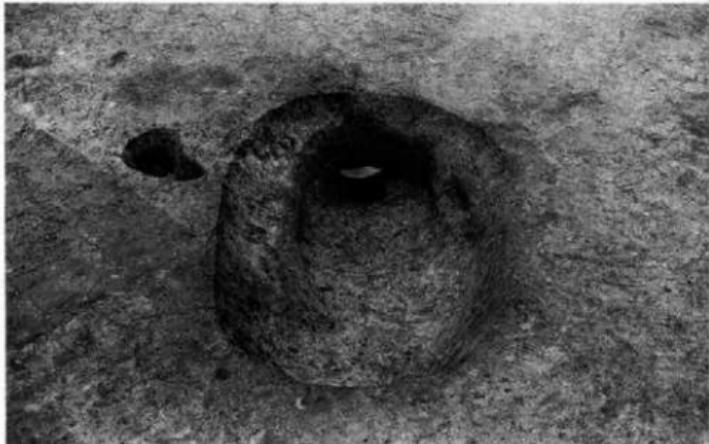
G 区全景  
南東から



B～C・19～22付近  
南東から



S K 708完掘  
南西から





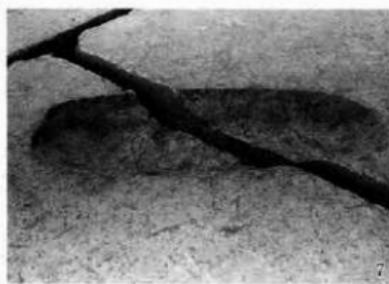
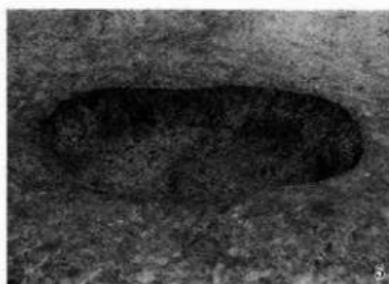
S B 715 完掘  
南東から



S X 706 土層断面  
南西から



S X 705  
北西から



1 SK 708完掘  
南東から

3 SK 704完掘  
東から

5 SK 707完掘  
南から

7 SK 709完掘  
東から

2 SK 708土層断面  
南東から

4 SK 704土層断面  
東から

6 SK 707土層断面  
南から

8 SK 709土層断面  
東から



1 SK 714 土層断面  
南から  
3 SD 701 + SD 713 土層断面  
南東から  
5 SD 710 完掘  
南西から  
7 SD 712 完掘  
南東から

2 SD 713 完掘  
南東から  
4 SD 711 完掘  
東から  
6 SD 710 土層断面  
南西から  
8 SD 717 + SD 716  
完掘 南東から

I 区全景  
南東から



S X911完掘  
南西から



S X911土層断面  
南西から





S X 903穴掘  
南東から



S X 903土層断面  
南東から



S X 903土層断面  
南西から





S X912完掘

南東から



S X912土層断面

南東から



S X913完掘

南東から

S X 913 土層断面  
(16・B~C) 南西から



S X 913 土層断面  
(15C) 南西から



S D 907 完掘  
南から





S D 905 + S D 906 突端  
東から



C ~ E • 15~18付近  
北東から



S D 902  
銭貨出土状況

A区全景

北から



S D 105土層断面

北から



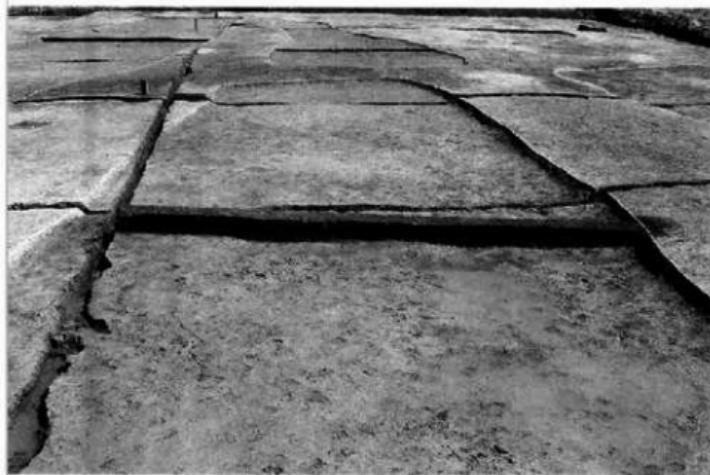
S X 103土層断面

北から





S X 103南端・S D 104  
北から



S X 107土層断面  
北西から

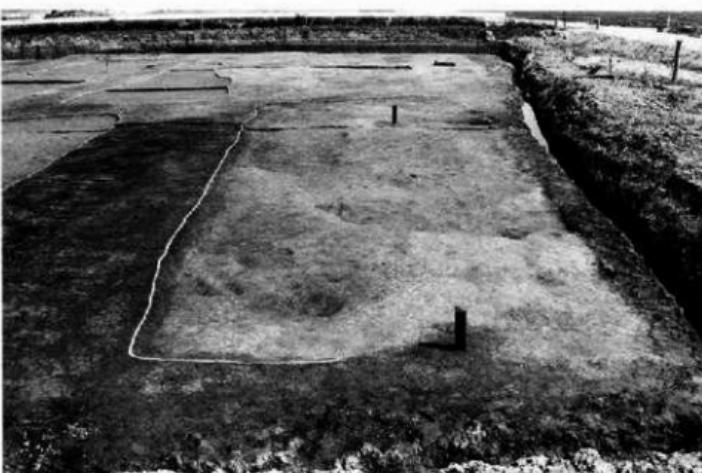


S X 102発掘  
北西から

S X 102 南端  
北から



S X 101 完掘  
北西から



S X 101 土層断面  
北西から





E 区全景  
北から



D～E・9～10付近  
南から



B～D・9～10付近  
南西から

土層 (10D)  
南から



S D501 土層断面  
北から



S X 502 土層断面  
(10D) 北から





S X 502 土層断面 (9 D)  
北から



S X 504 土層断面  
北から



S X 505 完成  
南から



F 区全景  
北西から



D~E・5~8付近  
北西から



D~E・5~8付近  
西から



7 E付近  
北から



S X616・S X617完掘  
北から



S X617・S X616  
土層断面 南から

S X615完掘  
北から



C～D・8付近  
東から



S X622完掘  
西から





D 区全景  
北西から



D 区全景  
南東から



土層 (4 E)  
南西から

南区全景  
南東から



北区全景  
南東から



S D 40完掘  
西から





北区  
平成 4 年度調査区域全景  
北から



S X 58発掘  
西から



S X 43発掘  
西から

S X53完掘  
南西から



S D40土層断面  
(12C) 東から



S D35・S D35b 土層断面  
北西から





S X 3 + S X 6 完掘  
北西から



S X 4 完掘  
南西から



S X 8 + S X 8 b 完掘  
西から

S D 5 完掘  
西から



S X13・S X13 b  
完掘 北西から



S X15・S X15 b  
完掘 南西から





S X 16完掘  
南西から



S X 17完掘  
西から



S X 18完掘  
西から

遺跡全景

南から



土層 (11B)

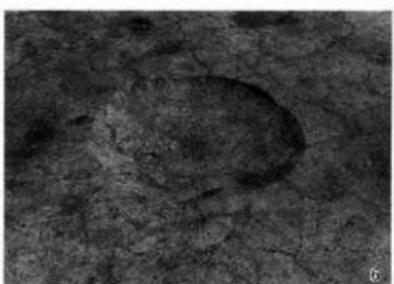
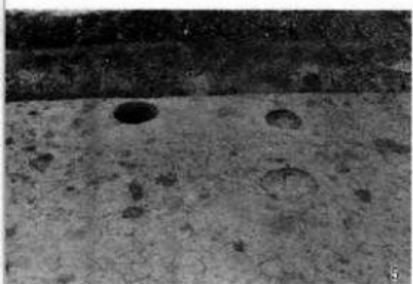
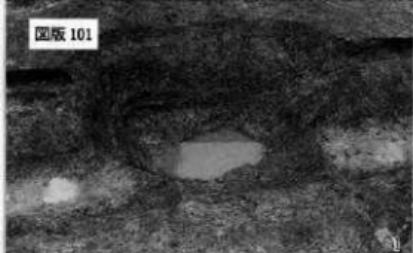
南から



S K 1 遺物出土状況

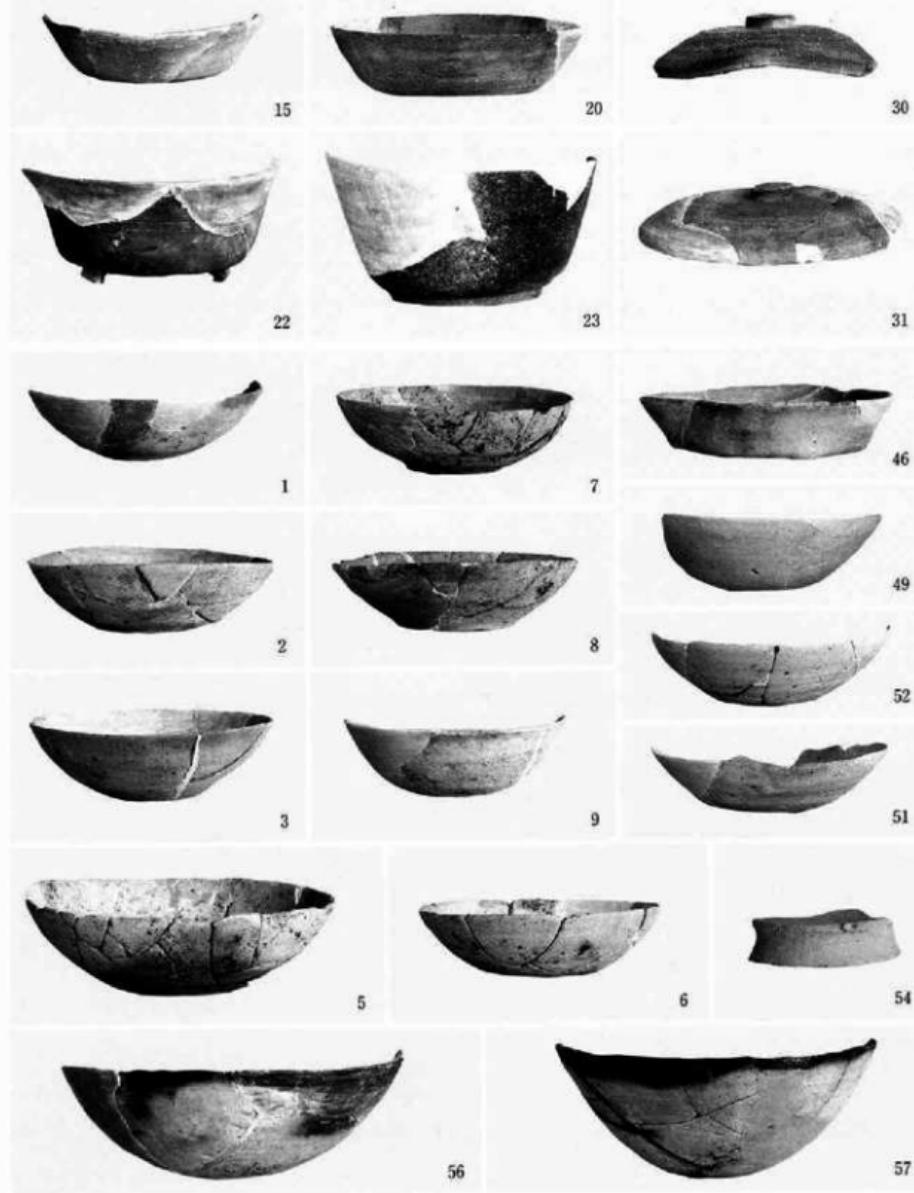
南西から



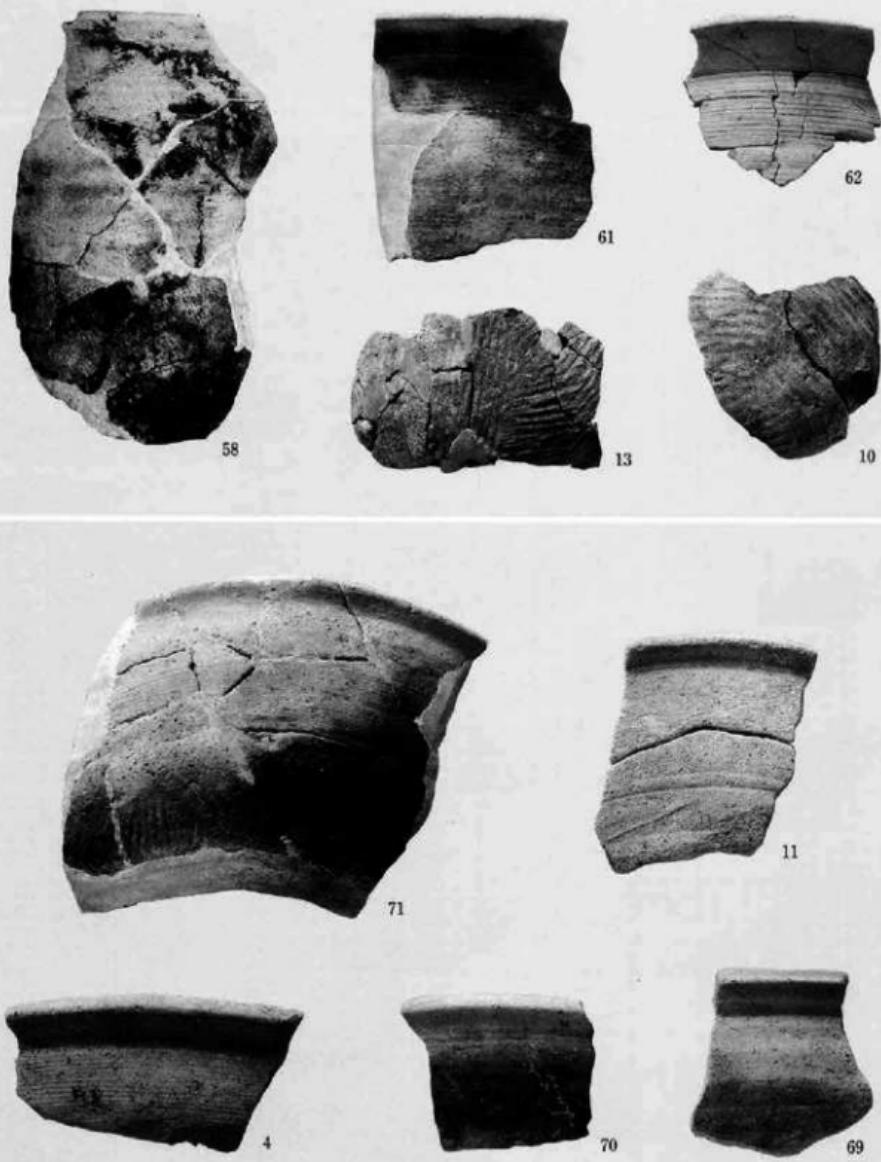


1 SK 1 完掘  
 南西から  
 3 SX 2 完掘  
 南から  
 5 SK 5・SK 4・SK 3  
 完掘 東から  
 7 SK 5 完掘  
 南東から

2 遺物出土状況  
 (11B21) 南から  
 4 SX 2 土層断面  
 南東から  
 6 SK 3 完掘  
 南から  
 8 SK 5 土層断面  
 南から



須恵器 土師器  
(1 : 3)



土師器

(1 : 3 • 58 = 1 : 4)



34



35



42 a



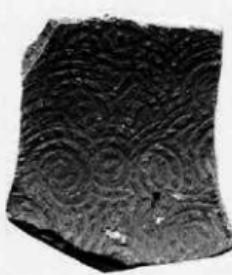
43 外



43 内



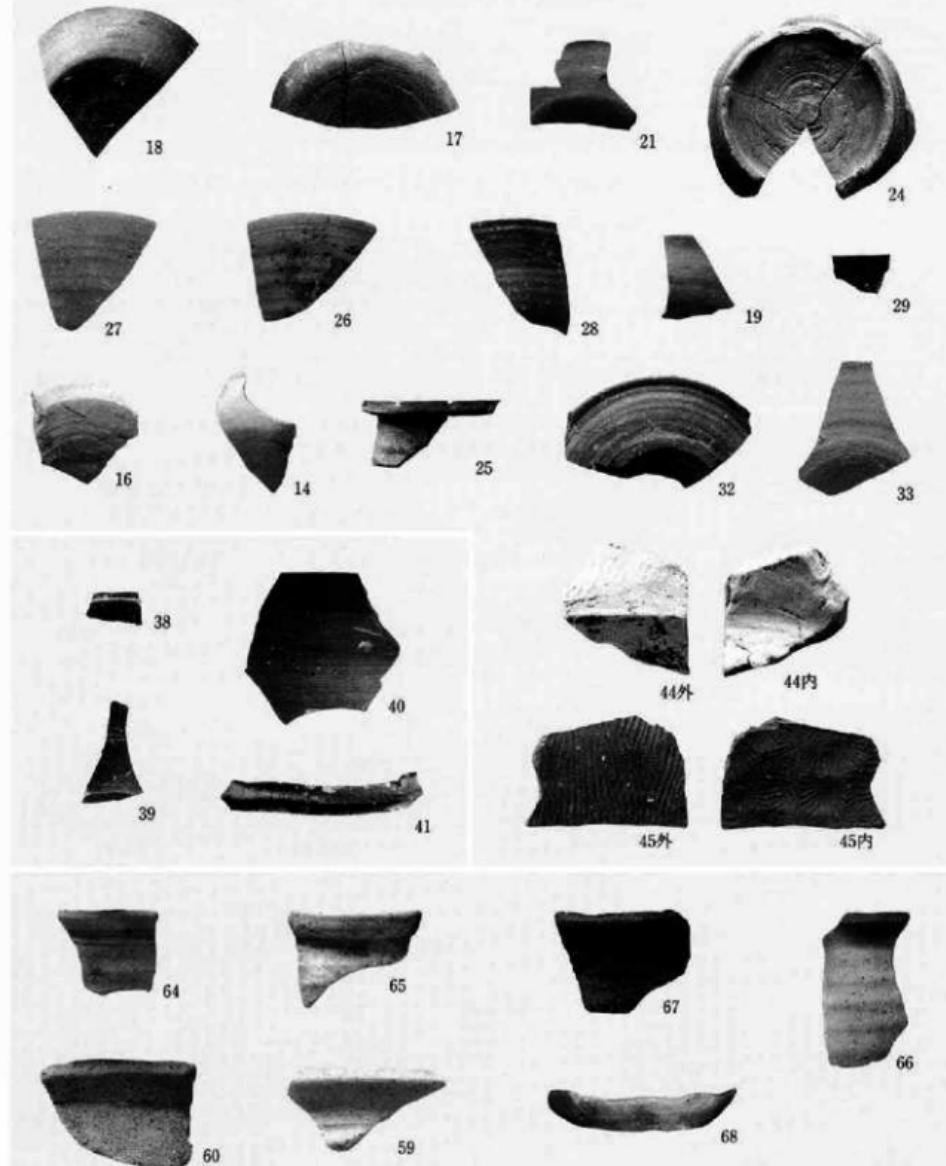
42 b 外



42 b 内



須惠器 土師器  
(1 : 4)

須恵器 土師器  
(1 : 3)



土師器 青磁・自磁

近世陶器 土器品

(1:3)



81外



81内



82外



82内



83外



83内



85外



85内



90



84外



84内



86



87



88



89

石製品 その他

(1 : 3)

金属製品 錢貨

(2 : 3)



1



3



24



2



21



16



30



19



28



20



23



34



36



29



38



4



45



46



5



6



7



48



47



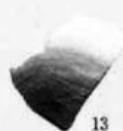
47



42



43



13



14



15



33



17



18



26



31



35



37



22



27



32



39



41



40

土師器 須恵器

(1 : 3)



土師器  
(1 : 3)



63



65



64



67



66



68



69



70 a



71 a



72



73



74



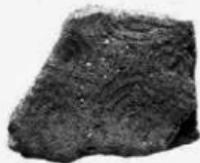
70 b



71 b



75 外



75 内



77



78



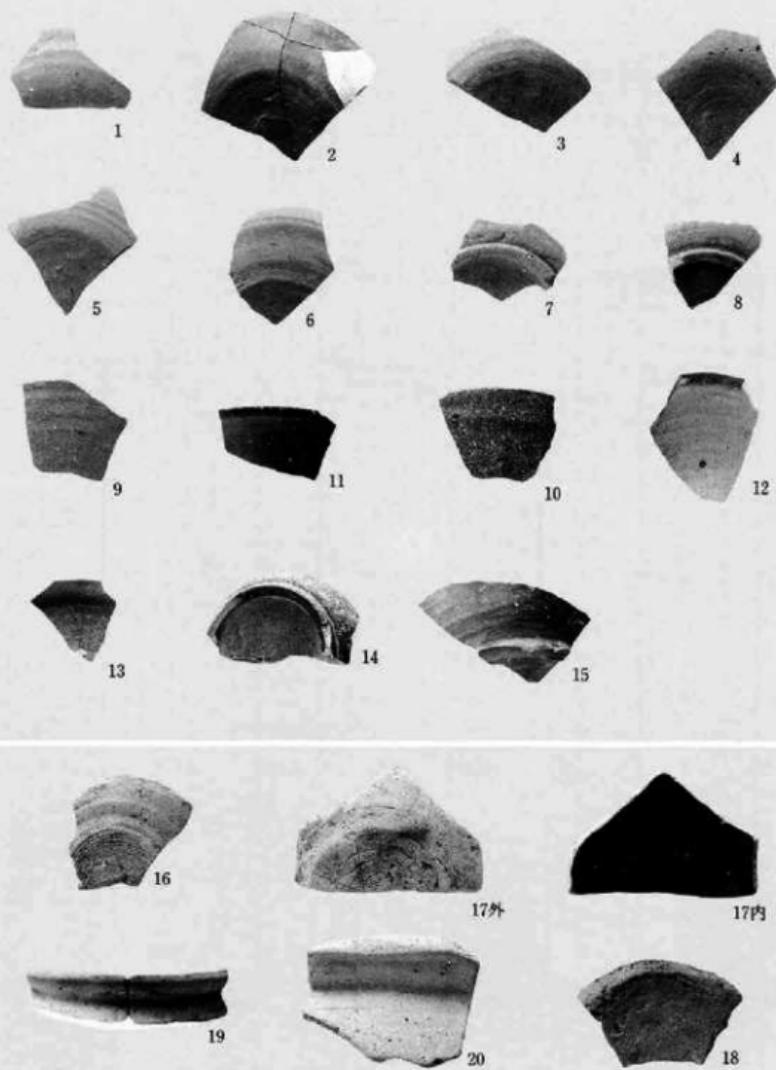
76

土師器 珠洲焼 土製品

(1 : 3)

石製品 鉄製品

(1 : 2)



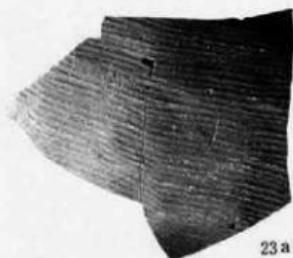
須恵器 土師器  
(1 : 3)



26



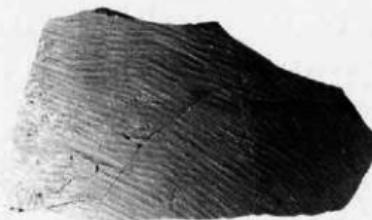
24外



23a



24内



23b



25外



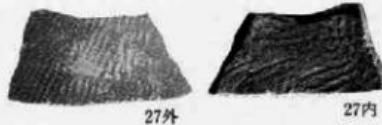
21



25内



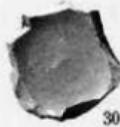
22



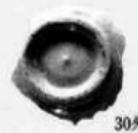
27外



27内



30内



30外



29



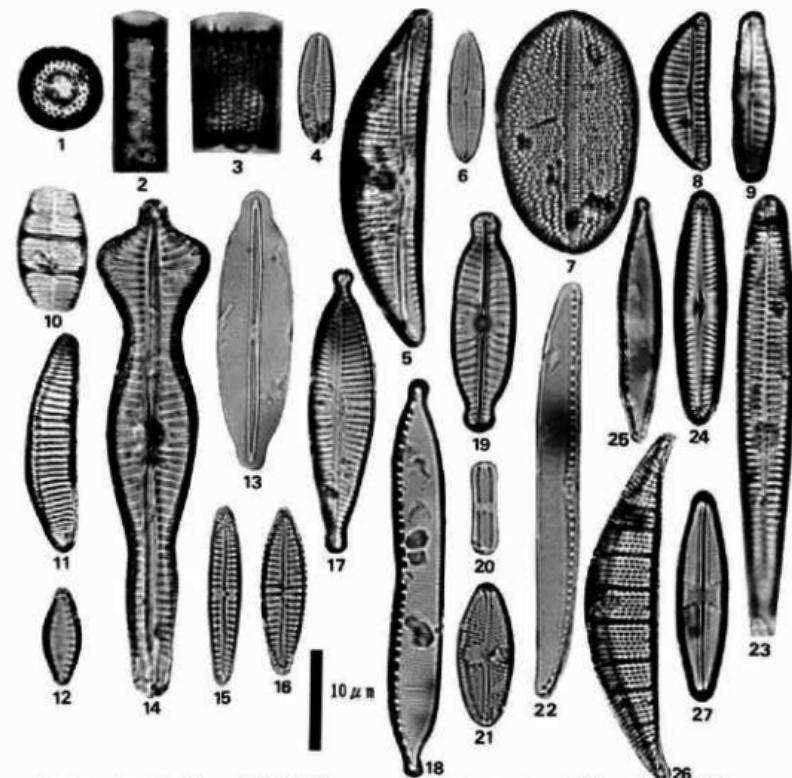
28



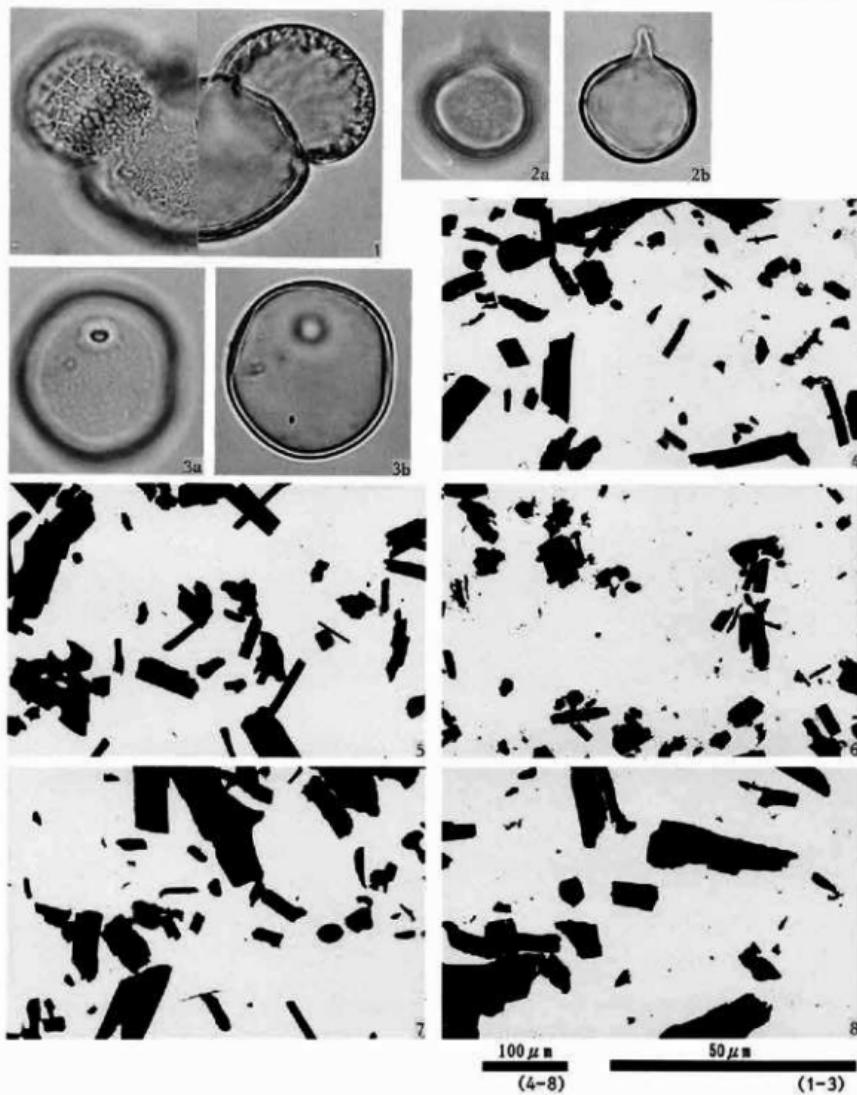
31

中世陶器・磁器  
土製品 石製品

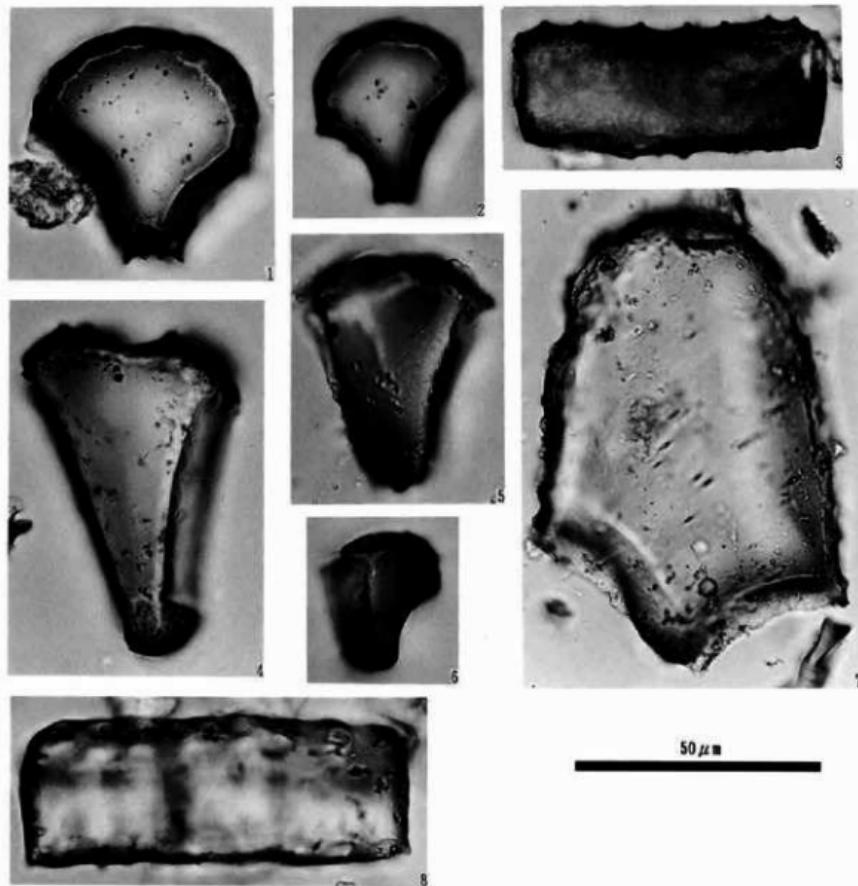
(1 : 3, 26 = 1 : 4)



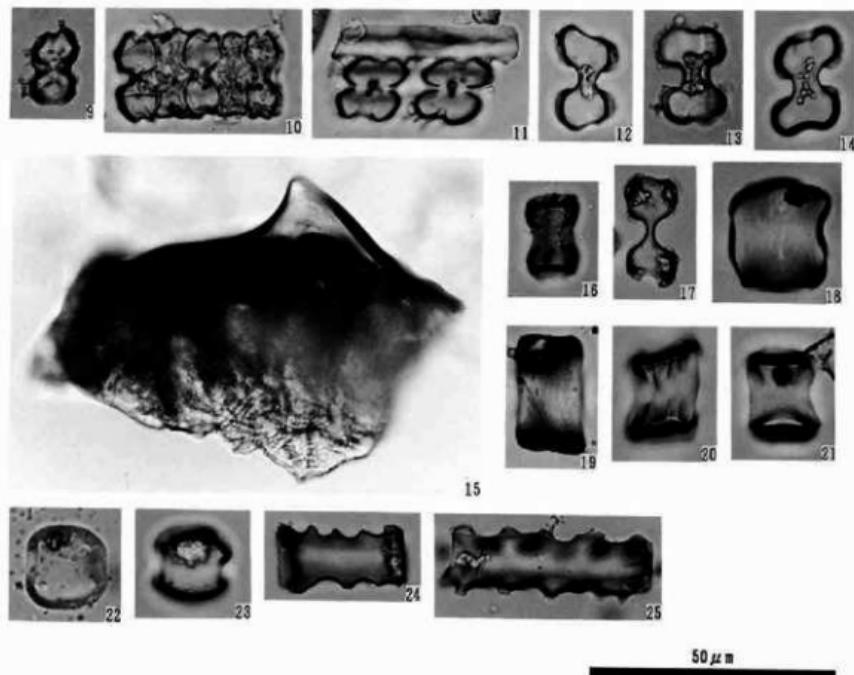
1. *Antecocystis distans* (Br.) Simonsen (地化試験番号4)
2. *Antecocystis italica* (Br.) Simonsen (地化試験番号5)
3. *Amblochrysis ovalis* var. *affinis* (Bleitz.) V. Heuck (地化試験番号4)
4. *Cocconeis placentaria* var. *euglypta* (Br.) Cleve (地化試験番号5)
5. *Oxybelia strobliana* Gregory (地化試験番号5)
6. *Calymene annulata* Bock (地化試験番号5)
7. *Calymene annulata* Bock (地化試験番号4)
8. *Calymene annulata* Bock (地化試験番号4)
9. *Calymene annulata* Bock (地化試験番号4)
10. *Calymene annulata* var. *annulata* (Br.) Grunow (地化試験番号5)
11. *Brevitria pectinata* var. *anomala* (Kutz.) Rubesch (地化試験番号4)
12. *Fragilaria levistriata* Grunow (地化試験番号5)
13. *Frustularia rhomboides* var. *saracina* (Beb.) De Toni (地化試験番号5)
14. *Gyrodinium acuminatum* Ehrenberg (地化試験番号4)
15. *Gyrodinium angustum* Agardh (地化試験番号4)
16. *Gyrodinium parvum* Netting (地化試験番号4)
17. *Gyrodinium subcapitulum* Ehrenberg (地化試験番号5)
18. *Avicularia clypealis* (Eng.) Ralfs (地化試験番号5)
19. *Avicularia contenta* Grunow (地化試験番号4)
20. *Nitzschia obtusa* var. *scapulifera* Grunow (地化試験番号4)
21. *Nitzschia obtusa* Netting (地化試験番号5)
22. *Nitzschia obtusa* var. *scapulifera* Grunow (地化試験番号4)
23. *Rhoicosphenia abbreviata* (Ag.) Lange-Bertalot (地化試験番号5)
24. *Pinnularia solatrix* Grunow (地化試験番号4)
25. *Rhopioidia gibbernia* (Br.) O. Müller (地化試験番号4)
26. *Stauroneis ovata* Lagerst. (地化試験番号5)
27. *Stauroneis ovata* Lagerst. (地化試験番号5)



1. マツ属 (9地点; 試料番号2)
2. スギ属 (9地点; 試料番号2)
3. イネ科 (9地点; 試料番号2)
4. 状況写真 (1地点; 試料番号11)
5. 状況写真 (4地点; 試料番号9)
6. 状況写真 (5地点; 試料番号11)
7. 状況写真 (9地点; 試料番号4)
8. 状況写真 (10地点; 試料番号4)



- |                                |                                 |
|--------------------------------|---------------------------------|
| 1. イネ属:機動細胞珪酸体由来 (1地点; 試料番号5)  | 2. イネ属:短細胞珪酸体由来 (7地点; 試料番号3)    |
| 3. キビ族:機動細胞珪酸体由来 (9地点; 試料番号4)  | 4. ウシクサ族:機動細胞珪酸体由来 (9地点; 試料番号6) |
| 5. タケ亜科:機動細胞珪酸体由来 (4地点; 試料番号7) | 6. ウシクサ族:機動細胞珪酸体由来 (7地点; 試料番号1) |
| 7. ヨシ属:機動細胞珪酸体由来 (1地点; 試料番号2)  | 8. キビ族:機動細胞珪酸体由来 (9地点; 試料番号1)   |



9. イネ属: 短細胞珪酸体由来 (4地点; 試料番号?)  
 11. イネ属: 短細胞珪酸体列由来 (5地点; 試料番号1)  
 13. ハビ族: 短細胞珪酸体由来 (1地点; 試料番号7)  
 15. イネ属: 頸珪酸体由来 (9地点; 試料番号2)  
 17. ススキ属: 短細胞珪酸体由来 (9地点; 試料番号4)  
 19. タケ亜科: 短細胞珪酸体由来 (1地点; 試料番号?)  
 21. タケ亜科: 機動細胞珪酸体由来 (1地点; 試料番号11)  
 23. ヨシ属: 短細胞珪酸体由来 (9地点; 試料番号4)  
 25. イチゴツナギ亜科: 短細胞珪酸体由来 (1地点; 試料番号2)  
 10. イネ属: 短細胞珪酸体列由来 (5地点; 試料番号1)  
 12. エノコログサ属: 短細胞珪酸体由来 (5地点; 試料番号1)  
 14. ハビ族: 短細胞珪酸体由来 (7地点; 試料番号2)  
 16. コブナグサ属: 短細胞珪酸体由来 (1地点; 試料番号?)  
 18. タケ亜科: 短細胞珪酸体由来 (7地点; 試料番号5)  
 20. タケ亜科: 短細胞珪酸体由来 (9地点; 試料番号6)  
 22. ヨシ属: 短細胞珪酸体由来 (1地点; 試料番号2)  
 24. イチゴツナギ亜科: 短細胞珪酸体由来 (5地点; 試料番号1)

## 報告書抄録

書名	細池遺跡・寺道上遺跡 磐越自動車道関係発掘調査報告書 新潟県埋蔵文化財調査報告書 第59集						
副書名	磐越自動車道関係発掘調査報告書						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第59集						
編・著者名	小池義人・須藤高志・荒川隆史・塙路真澄 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団						
編集機関	〒951 新潟県新潟市一番堀通町5423-46 TEL. 025-223-5642						
発行年月日	1994年3月15日						
所取遺跡	所在地	コード 市町村・ 道路番号	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
細池遺跡	新潟県新潟市大字飯朝字細池	15-207 68	37°47'30"	139°9'90"	1990.1.1~ 1990.10.8 1991.4.15~ 1991.11.20.7 1992.4.6.8~ 1992.9.6.7	19,960m <sup>2</sup>	磐越自動 車道建設
寺道上遺跡	新潟県新潟市大字金沢字寺道上	15-207 28	37°47'40"	139°9'80"	1990.1.1~ 1990.10.8 1991.7.8~ 1991.11.20.7 1992.4.24~ 1992.9.28	14,660m <sup>2</sup>	磐越自動 車道建設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項		
細池遺跡	生産遺跡	奈良・平安時代、中世	凹地遺構35基・溝40条 建物跡1棟	土器器・須恵器18箱 鐵貨 6点			
寺道上遺跡	生産遺跡	奈良・平安時代、中世	凹地遺構18基・溝30条	土器器・須恵器20箱			

## 新潟県埋蔵文化財調査報告書 第59集

## 磐越自動車道関係発掘調査報告書

ほそいけ てらみちうえ  
細池遺跡・寺道上遺跡平成6年3月7日印刷  
平成6年3月15日発行新潟県教育委員会  
新潟市新光町4番地1  
電話 (025) 285-5511  
磐越自動車道関係  
調査事業団  
新潟市一番堀通町5923-46  
電話 (025) 233-5642  
印刷 第一印刷所  
新潟市和合町2丁目4番18号  
電話 (025) 285-7161

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第59集『細池遺跡 寺道上遺跡』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄錄	編著者名		木村康裕を追加
抄錄	細池遺跡 北緯	37度47分30秒	37度47分08秒
抄錄	細池遺跡 東経	139度09分90秒	139度09分50秒
抄錄	寺道上遺跡 北緯	37度47分40秒	37度47分27秒
抄錄	寺道上遺跡 東経	139度09分80秒	139度09分42秒